東京大学埋蔵文化財調査室報告書６

東京大学本郷構内の遺跡

工学部１号館地点

2005

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室報告書６
東京大学本郷構内の遺跡
工学部１号館地点
二〇〇五
東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室報告書 6

東京大学本郷構内の遺跡

工学部 1 号館地点

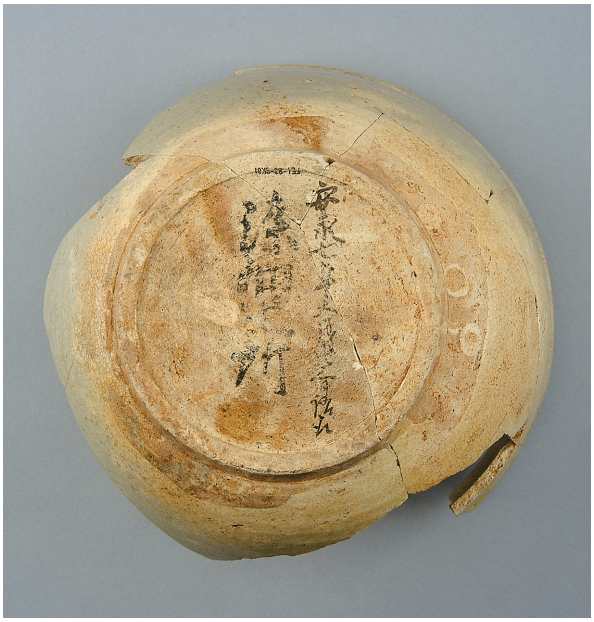
2005

東京大学埋蔵文化財調査室

調査区全景　西　　側

調査区全景　東　　側

SK01　出土遺物（源内焼）（陶器 98）



SK01　出土遺物墨書

SK01　出土遺物墨書

凡　　例

1. 本文中に記載した遺構の略号は、以下の通りである。
   SD：溝　　SK：土坑　　SP：ピット　　SE：井戸
2. 本報告の実測図の縮尺は、それぞれの図版に記した。遺構図版の縮尺は基本的に１／50である。遺物図版の縮尺は基本的に１／４である。
3. 遺物番号は本文、挿図、観察表、CD-ROMの写真で共通の番号を使用した。
4. 遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。
   ・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
   ・⊢⊣は、口唇部の口銹を表している。
   ・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
   ・－ －は、断面を表している。
   ・擂鉢の ↤↦ は、体部擂目の範囲を表している。
   ・ ↤↦ は、敲打痕、擦痕、使用痕、二次的な加工痕を表している。
5. スクリーントーン▒は青磁を表している。
6. 本文中に記載した陶磁器･土器の分類は、『東京大学構内遺跡調査研究年報２　別冊　東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類（1)』に準拠している。

例　　言

1. 本報告は、東京大学大学院工学系研究科･工学部１号館の増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本地点は、既刊の『東京大学構内遺跡調査研究年報』等の中で、「本郷 17 工学部校舎（1 号館）（略称 FE1）」と掲載されている調査地点である。
3. 本地点は、東京都文京区 7-3-1 東京大学本郷構内に所在している。
4. 本地点は、東京都遺跡地図「文京区 47 本郷台遺跡群 （本郷七丁目･弥生二丁目、台地、集落･貝塚･大名屋敷、［平］住居･［近］礎石･土坑･地下式土坑･庭園･井戸･溝･杭･石垣 ［旧］［縄］［弥］［古］［平］［近］）」内に位置している。
5. 調査面積は、616m² である。
6. 調査･整理期間は以下の通りである。

   試 掘 調 査　　1993 年 5 月 25 日
   事 前 調 査　　1993 年 12 月 6 日～ 1994 年 2 月 10 日
   整 理 作 業　　1999 年 5 月 6 日～ 2003 年 7 月 18 日
   報告書編集　　2003 年 7 月 22 日～ 2005 年 1 月 31 日

7. 発掘調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、調査担当者は武藤康弘である。
8. 本報告の編集は、大貫浩子、堀内秀樹が行った。
9. 自然遺物については名古屋大学博物館新美倫子氏に玉稿をいただいた。
10. 墨書などの文字資料については東京大学史料編纂所宮崎勝美氏に読んでいただき又、ご教示いただいた。
11. 本地点出土の漆器は、事実記載のみ記載した。分析に関しては、くらしき作陽大学北野信彦氏より「東京大学本郷構内遺跡（工学部１号館地点）出土漆器資料の材質と製作技法」と題した玉稿を既にいただいている。1999 年刊行の『東京大学構内遺跡調査研究年報２　第Ⅳ部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要２』に掲載しているので参考にされたい。
12. 執筆担当は以下の通りである

Ⅰ章－1･2 節	堀内　秀樹
－3 節	香取　祐一
Ⅱ章	香取　祐一
Ⅲ章－1 節	大貫　浩子･原　祐一･寺島　孝一･安芸　毬子
－2 節	大貫　浩子
－3 節	堀内　秀樹･大貫　浩子
－4 節	香取　祐一
Ⅳ章	大貫　浩子
Ⅴ章－1 節	堀内　秀樹
－2 節	大貫　浩子
－3 節	新美　倫子

13. 遺物写真は青山正昭が撮影した。
14. 発掘調査に伴う図面、写真、出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス、茨城県新治郡八郷町柿岡 414 東京大学柿岡教育研究施設内において、運用、保存、管理している。
15. 遺構、遺物の写真は、基本的に添付した CD-ROM に JPEG 形式に圧縮して記録した。陶磁器･土器の観察表は、添付した CD-ROM に xls 形式（エクセル形式）にて記録した。
16. 発掘調査及び報告書の作成にあたり、下記の方々からご教示を得た。記して感謝を表したい。（敬称略）

    今村　啓爾　　岩淵　令治　　大橋　康二　　小川　　望　　大塚　達朗　　北野　信彦　　鈴木　裕子
    中野　高久　　仲野　泰裕　　新美　倫子　　藤沢　良裕　　松尾　信裕　　宮崎　勝美　　村上　伸之
    東京大学人文社会系研究科文学部考古学研究室　　東京大学施設部　　（株）三浦工業

17. 発掘調査･整理作業参加者

    青山　正昭　　安芸　毬子　　池田奈津代　　今井　雅子　　大貫　浩子　　香取　祐一　　川原　良子
    坂野　貞子　　野村　　遊　　宮本　直子　　柳　　絢子（東京大学埋蔵文化財調査室）　　（株）三浦工業

工学部１号館地点発掘調査報告書

例　　言
凡　　例
目　　次

報　告　編

第Ⅰ章　調査の経過と概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の方法と経過 …… 1
　第３節　遺跡の位置と環境 …… 2
第Ⅱ章　遺　　構 …… 6
第Ⅲ章　遺　　物 …… 23
　第１節　SK01 …… 23
　　（1）磁器･陶器･土器･墨書 …… 23
　　磁　　器 …… 23
　　陶　　器 …… 36
　　土　　器 …… 66
　　墨　　書 …… 77
　　（2）木製品･漆器椀 …… 93
　　（3）石　製　品 …… 117
　　（4）金 属 製 品 …… 122
　　（5）人形･ミニチュア･遊戯具 …… 129
　　（6）ガラス製品 …… 133
　　（7）瓦 …… 133
　第２節　その他の遺構 …… 134
　第３節　出土陶磁器･土器類の数量分析 …… 137
　第４節　縄 文 時 代 …… 140
第Ⅳ章　ま　と　め …… 142

研　究　編

１　加賀藩本郷邸における廃棄物処理に関する考察 …… 堀内　秀樹 …… 149
２　加賀藩邸内における陶磁器消費の諸相
　－ SK01 出土の遺物からみた 19 世紀前葉の様相－ …… 大貫　浩子 …… 162
３　工学部１号館地点出土の動物遺体 …… 新美　倫子 …… 182

報　告　編

第Ⅰ章　調査の経過と概要

第１節　調査に至る経緯

平成５(1993) 年度に東京大学施設部から同埋蔵文化財調査室に大学院工学系研究科校舎(1号館) 増築に伴い、埋蔵文化財の調査に関する照会があった。増築予定地は東京都遺跡地図によると文京区47本郷台遺跡群(本郷七丁目･弥生二丁目、台地、集落･貝塚･大名屋敷、[平] 住居、[近] 礎石･土坑･地下式土坑･庭園･井戸･溝･杭･石垣 [旧] [縄] [弥] [古] [平] [近]) (東京都教育委員会 1996) 内に位置しており、周知の遺跡として認知されている。当該地区においても遺跡の遺存状態を事前に確認する必要があった。

増築予定地南半は工学部１号館の既設ドライエリアがあり、これにより遺跡が壊されていることが想定された。したがって確認調査は増築北半部分に存在した道路及び植栽部分について行われた。1993年５月25日に試掘トレンチを合計16m^{2}入れ、確認調査を行った結果、江戸時代の加賀藩上屋敷に関連すると推定される遺構･遺物がほぼ全面にわたって遺存していることが確認された。以上の経緯より、ドライエリア部分を除く増築部分全域に埋蔵文化財の発掘調査を行うことが確認された。

第２節　調査の方法と経過

(1)　調 査 の 方 法

増築予定地域のうち、遺跡の遺存していると推定される北側部分616m^{2}全域にわたり、考古学的発掘調査対象とした。発掘調査区は調査区の形状に合わせ4m×4mのグリッドを設定し、北西角をグリッドの基準点とし、西から東へアラビア数字、北から南へアルファベットを降順に呼称した。

(2)　調 査 の 経 過

発掘調査は埋蔵文化財調査室の指導のもとで行われることになり､現地調査は武藤康弘が担当した。1993年12月６日より重機による表土掘削作業が開始された。作業は北西角から、遺構の確認面である関東ローム上面までの掘削を行った。開始直後から近代以降の配管や建物基礎などの攪乱が密に検出され、困難を伴ったが、12月13日には終了した。表土は調査区全域でほぼ1mの厚さで堆積していた。

機械掘削と並行して遺構確認が行われ、機械掘削終了に西側で19世紀の大型廃棄土坑が、東側で17世紀の小土坑群が良好な状態で遺存していることが確認された。調査区西側では機械掘削開始当初から遺物が多量に含まれる大型土坑SK01が確認され、12月９日から調査を開始した。上層からは陶磁器･土器類が下層からは木製品漆器類が出土し、最終的には本地点の調査終了間際まで調査が継続された。調査区の中央部から東側では江戸時代前期に遡る土坑、溝、ピットなどが比較的密に確認され、12月21日より調査を行った。また、中央部東側の一部には縄文土器が包含する黒色土層が遺存しており､江戸時代の遺構の調査終了後1996年１月27日から31日まで包含層の調査を行った。

現地調査は2月3日トラバース測量及び全体写真の撮影を行い、終了した。

第3節　遺跡の位置と環境

東京大学本郷構内は武蔵野台地の東端、本郷台地M2面上に位置する。構内には20mから22mの標高を持つ上位面と15mから17mの標高を持つ下位面が存在し、本地点は上位面に位置する。

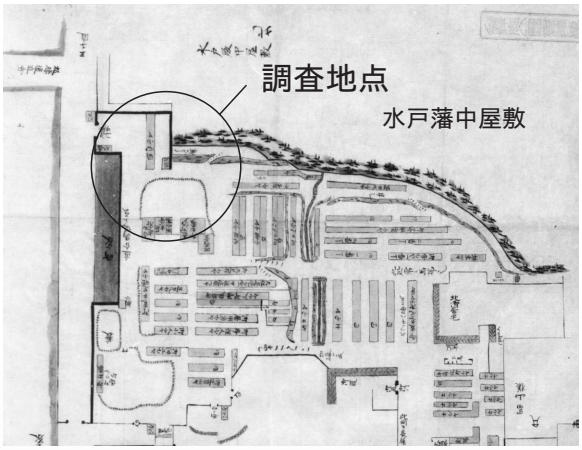
本郷構内は現在までに事前調査･試掘調査･立ち会い調査を含め70地点の調査が行われ、「本郷台遺跡群」（文京区No.47）に指定されており、旧石器時代の遺物から江戸時代まで遺構･遺物が検出される複合遺跡として認識されている。過去の調査で検出された遺構･遺物については既出の報告書に詳しいのでここでは新たに述べないが、今回の調査で検出された遺構は大部分が江戸時代に属していると考えられるため、本地点が江戸時代どのような位置にあったかを述べてみたい。

農学部･浅野地区を除く本郷構内は江戸時代初期に加賀藩に拝領され、天和2年（1682）の大火を契機に、江戸時代を通じ加賀藩邸の上屋敷内に属している。農学部･浅野地区は同じく江戸時代を通し、水戸藩中屋敷が存在し加賀藩邸に接していたと考えられ、本地点は北側の水戸藩中屋敷との地境に近接していたと思われる。Ⅰ-4図は「江戸御上屋敷絵図」（金沢市図書館所蔵清水文庫　特18.6-27-1）と明治16年測量参謀本部陸軍部測量局作成「五千分ノ一」（以下「五千分ノ一図」）に記載された等高線図に現在の本郷構内の調査地点を合成したものである。

Ⅰ-4図「江戸御上屋敷絵図」は1840～1850年代作成とされ、藩邸内を精緻に描写しており、数値的な確度も高い絵図であることが判明している（細川 1990）。一方、参謀本部による「五千分ノ一図」の図も現在の地図と比較してみると非常に正確であることが確認できており、加賀藩邸最終期の屋敷内の標高差に近い様相を呈していると考えられる。この「五千分ノ一図」の等高線から調査地点の東側に谷が存在する様子が看取でき、さらに三四郎池から北側に向かい低くなっている状況が読み取れる。Ⅰ-4図「江戸御上屋敷絵図」にも同位置付近が黒く塗られていることから、絵図における黒く見える部分は段差などを表していると思われ、この部分が「五千分ノ一図」の等高線に見られる谷の部分に相当するのではないかと考えられる。したがい谷の北側に記載される地境部分は谷の尾根筋部分に設けられていたのではないか推測される。この尾根筋を通る調査地点に「本郷構内遺跡59共同溝地点KKB地区」が存在するが攪乱が著しいため、加賀藩邸と水戸藩邸の地境は現時点では検出されていない。本地点西側に位置する「工学部14号館地点」では調査区東端に加賀藩邸と御先手組屋敷の地境と考えられる南北に延びる柱穴列が検出されており、合成した図とも概ね一致がみられる（東京大学埋蔵文化財調査室 1997）。さらに1796～1802年作成とされる、Ⅰ-2図「東都御館諸士等小屋割図」における本地点付近は、Ⅰ-4図「江戸御上屋敷絵図」同様に黒く塗られる部分が存在し、階段状の描写が見受けられ、北側の水戸藩中屋敷との地境から南に下っている様子が看取でき、「江戸御上屋敷絵図」と一致が見られる。Ⅰ-3図「江戸本郷御屋敷絵図」は1802～1825年作成とされ調査地点付近には黒く塗られた部分が存在し、この部分に「竹藪」と記載があり、Ⅰ-4図「江戸御上屋敷絵図」における調査地点付近の記載と類似点が認められる。これらの3枚の絵図面から18世紀末から19世紀中葉にかけての同地点は、水戸藩と地境部分に近接し、建物などが希薄な空間であったことが類推される。

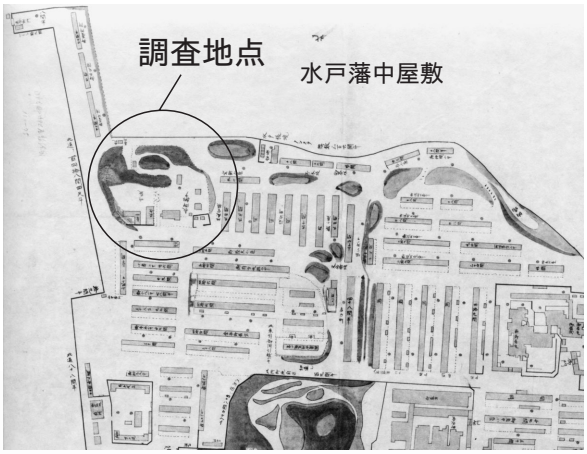
※試掘・立ち会い調査を除く

Ⅰ-1図　調査地点



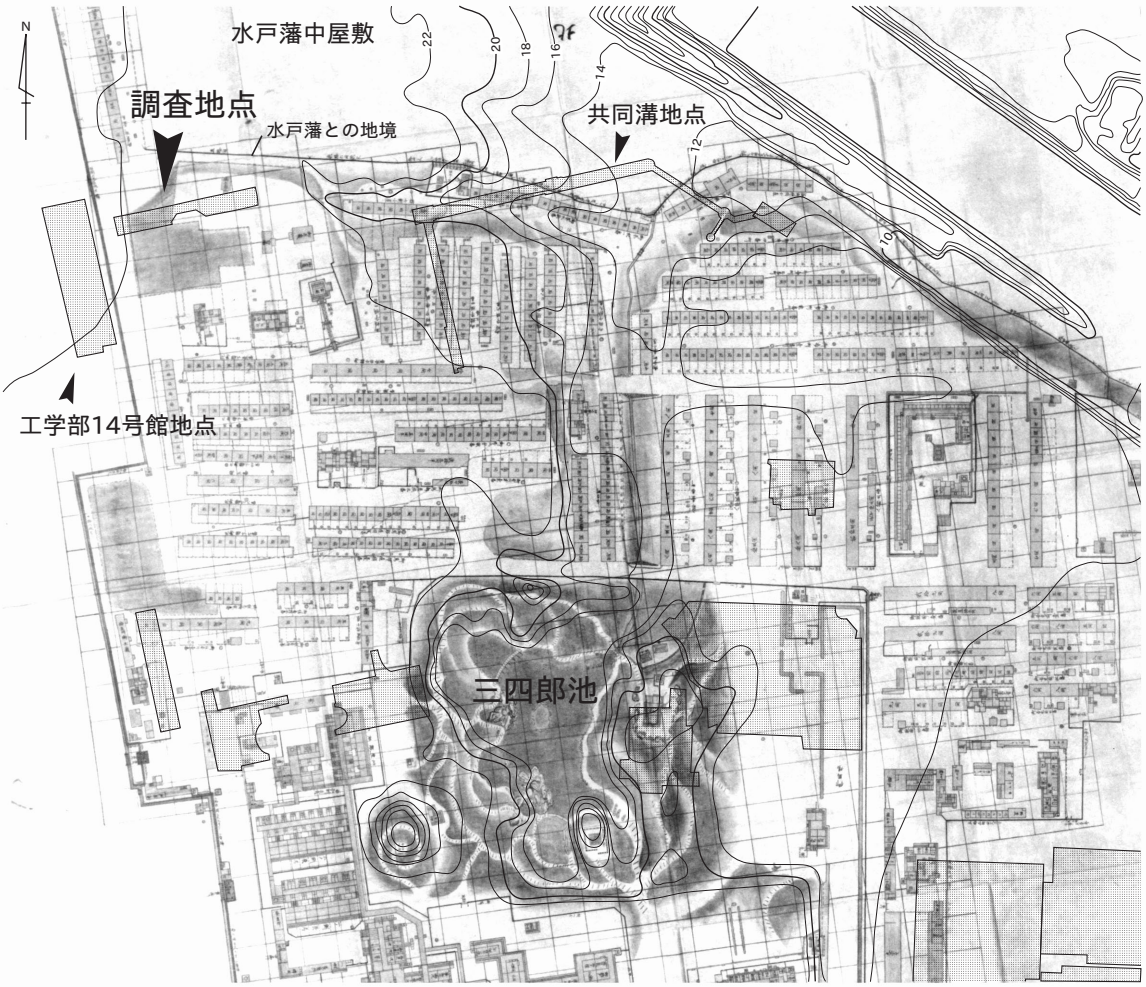
（金沢市立玉川図書館所蔵後藤文庫、19.9-169）

Ⅰ-2 図　東都御館諸士等小屋割図



（金沢市立玉川図書館所蔵氏家文庫、特13.0-75-2-1）

Ⅰ-3 図　江戸本郷御上屋敷絵図



（金沢市立玉川図書館所蔵清水文庫、特18.6-27-1）に修正、加筆

Ⅰ-4 図　江戸御上屋敷絵図

No.	年度	調査地点名（略称）	遺構･遺物の年代
1	1984	山上会館（U）	江戸時代
2	1984	法学部４号館･文学部３号館（文）（法）	旧石器時代、縄文時代、江戸時代
3	1985	御殿下記念館（G）	江戸時代
4	1984	医学部附属病院（病中）（エネセン）（給水）（共同溝）	旧石器時代、縄文時代、江戸時代
5	1984	理学部７号館（理D）	縄文時代、江戸時代
9	1989	農学部家畜病院（VMC）	江戸時代
10	1990	医学部附属病院外来診療棟（HG）	旧石器時代、江戸時代
12	1992	農学部図書館（FAL）	江戸時代
13	1992	農学部校舎（７号館）Ⅰ期（FA792）	江戸時代
14	1992	工学部校舎（14号館）（工14）	江戸時代
15	1992	薬学部新館（YS）	江戸時代
16	1993	農学部校舎（７号館）Ⅱ期（FA793）	江戸時代
17	1993	工学部校舎（１号館）（FE1）	江戸時代
18	1993	総合研究棟（SK）	江戸時代
19	1993	医学部附属病院看護婦宿舎（HN）	縄文時代、古墳時代、江戸時代
20	1993	総合研究資料館（TUM）	江戸時代
21	1993	医学部附属病院MRI-CT棟（MRI）	古墳時代、江戸時代
22	1994	本郷福利施設（HF）	江戸時代
23	1994	医学部附属病院病棟Ⅰ期（HWI）	旧石器時代、縄文時代、古墳時代、中世、江戸時代
23	1994	医学部附属病院病棟Ⅱ期（HWII）	縄文時代、古墳時代、中世、江戸時代
24	1994	医学部教育研究棟１次（医研）	江戸時代
24	1996	医学部教育研究棟２次（医研２）	縄文時代、江戸時代
24	1998	医学部教育研究棟３次（医研３）	江戸時代
24	2002	医学部教育研究棟４次（医研４）	江戸時代
25	1994	医学部附属病院看護婦宿舎ゴミ置き場（HND）	縄文時代、古墳時代、江戸時代
28	1995	薬学部資料館（FPS）	旧石器時代、縄文時代、江戸時代
29	1995	大型計算機センター電気電機室設備（ACC）	江戸時代、近代
30	1995	工学部全径間風洞実験室支障ケーブル移設その他（AFC）	縄文時代、弥生時代、江戸時代
33	1996	地震研テレメタリング地震観測施設（EQL）	江戸時代
40	1996	工学部全径間風洞実験室（AFL）	縄文時代、弥生時代、明治時代
41	1996	ベンチャー･ビジネス･ラボラトリー（ベンチャー）	旧石器時代、江戸時代
43	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等（HWK1）	江戸時代
44	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等（HWK2）	江戸時代
45	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等（HWK3）	江戸時代
47	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等（HWK4）	江戸時代
48	1996	医学部附属病院看護婦宿舎Ⅱ期（HNII）	縄文時代、古墳時代、江戸時代
53	1998	工学部強風シミュレーション風洞実験室（AFIV）	江戸時代、近代時代
54	1998	総合研究棟（文･経･教･社研）	江戸時代
55	1999	医学部附属病院第２中央診療棟Ⅰ期（２中Ⅰ）	江戸時代
55	2001	医学部附属病院第２中央診療棟Ⅱ期（２中II）	江戸時代、中世、古代時代、縄文時代
58	1999	医学部附属病院受変電設備棟（II期）（YM）	近代、江戸時代
59	2000	共同溝（KK）	江戸時代
60	2000	医学部附属病院基幹整備共同溝等（HWK6）	江戸時代
61	2001	武田先端知ビル	明治時代、江戸時代、弥生時代
62	2001	農学部総合研究棟	江戸時代
65	2002	法学部総合研究棟（法03）	江戸時代
66	2002	薬学部総合研究棟	江戸時代、近代
68	2002	インキュベーション施設（INC）	江戸時代、縄文時代

試掘･立ち会い調査を除く

東京大学本郷構内事前調査一覧

第Ⅱ章　遺　　構

今回の調査では土坑状遺構11基、溝状遺構７基、井戸１基、小穴23基、性格不明遺構１基が検出された。調査区が南北に8m程度と狭いため、17世紀代に属すると思われる小穴の配列及び溝状遺構の軸などについては言及できないが、ピットに礎石が伴う遺構が存在しなかったことから大規模な建物などが存在していた様子は看取できない。さらに調査区西側の19世紀代に属する大型土坑SK01がこの調査地点の特徴といえるであろう。以下各遺構ついて詳述する。

SK01（図：Ⅱ-2･3）

B-1、B-2、B-3、B-4、C-1、C-2、C-3グリッドに位置する。全体の規模は判明していない。東西は15m程度と考えられる。西側はテラスを有する不整形を呈し、最大深度は確認面より2.8mである。18世紀後半から19世紀の陶磁器･土器類が多量出土している。さらに下位の層である４層は水分を多く含んでおり、遺存状態の良好な自然遺物が多量検出された。採土坑及び転用した廃棄坑の可能性が考えられる。

SK02（図：Ⅱ-4）

B-5、B-6、C-5、C-6グリッドに位置する。東西3.7m南側は調査区外に拡がっていると思われる。遺構全体の規模、形状は判別していない。底面はテラスを有し、不整形である。遺物は出土していない。

SE03（図：Ⅱ-4）

B-4グリッドに位置する。直径約1.5mの井戸である。19世紀前半の遺物が出土している。

SK04（図：Ⅱ-2）

C-2グリッドに位置する。東西1.2mで南側は調査区外で検出できていないため全体の形状は判明していない。遺物は出土していない。

SP05（図：Ⅱ-5）

B-6グリッドに位置する。直径0.5mの円形を呈する。遺物は出土していない。

SK06（図：Ⅱ-5）

B-6グリッドに位置する。南北1.5m、東西1mの不整形を呈する。確認面からの深度0.1mほどの浅い遺構である。遺物は出土していない。

SK07（図：Ⅱ-5）

B-5、B-6グリッドに位置する。東側･西側ともに攪乱されている。やや南北方向に長い円形を呈すると考えられる。底部はフラットではない。遺物は出土していない。

SP08（図：Ⅱ-5）

B-6グリッドに位置する。南北0.8m、東西0.5mの南北方向にやや長い隅丸方形状のピットである。遺物は出土していない。

SP09（図：Ⅱ-6）

B-10グリッドに位置する。南北方向にやや長いピットである。遺物は出土していない。

SP10（図：Ⅱ-7）

B-10グリッドに位置する。南北0.6m、東西0.45mの歪んだ隅丸方形を呈する。確認面からの深度は0.2mである。17世紀代の陶磁器が出土している。

SP11（図：Ⅱ-7）

B-10グリッドに位置する。南北0.4m、東西0.65mの東西に長い隅丸方形を呈する。確認面からの深度は0.6mである。遺物は出土していない。

SP12（図：Ⅱ-7）

B-10グリッドに位置する。南北0.7m、東西0.35mの規模をもつ。双底形の底面を呈している。深度は0.55mと遺構の規模に比してやや深めになっている。17世紀中葉から後半の陶磁器が出土している。

SP13（図：Ⅱ-7）

B-11グリッドに位置する。南北0.6m、東西0.8mの東西に長い隅丸方形を呈する。遺物は出土していない。

SP14（図：Ⅱ-7）

B-11グリッドに位置する。南北0.6m、東西0.8mのやや東西軸に長い円形を呈す。底部形状はフラットである。遺物は出土していない。

SP15（図：Ⅱ-7）

B-11グリッドに位置する。南北0.6m、東西0.4mの東西に長い歪んだ隅丸方形状を呈す。壁面は垂直に近く立ち上がっている。底面形状はフラットである。陶磁器類が出土しているが数量が少ないため遺構の帰属時期については不明である。

SP16（図：Ⅱ-7）

B-11グリッドに位置する。遺構の北側、東側ともに他の遺構と切り合うため全体の規模はわかっていない。SD17に切られている。陶磁器が検出されているが遺構の帰属時期は不明である。

SD17（図：Ⅱ-7･8）

B-11、B-12、C-11グリッドに位置する。幅約0.4m、深度は0.2mと浅めの溝状遺構である。ほぼ90度のクランク部分を有している。

SK18（図：Ⅱ-8）

B-10、B-11グリッドに位置する。直径２～2.1mの円形を呈する。底部は中央部に盛り上がっており、断面形状は逆凹字になっている。植栽痕と考えられる。遺物は出土していない。

SK19（図：Ⅱ-8）

B-11グリッドに位置する。南北1m、東西0.65mの隅丸方形を呈する。陶磁器が出土しているが数量が少ないため遺構の帰属時期については不明である。

SP20（図：Ⅱ-6）

A-8、A-9、B-8、B-9グリッドに位置する。南北0.5m、東西0.65mの東西に長い隅丸方形を呈する。壁面は垂直に近く立ち上がり、底面形状はフラットである。遺物は出土していない。

SP21（図：Ⅱ-6）

B-10グリッドに位置する。南側は攪乱されている。全体の形状は判別できない。遺物は出土していない。

SD22（図：Ⅱ-6）

A-9、B-9グリッドに位置する。幅0.9m深度は中心部で0.3mの溝状遺構である。遺構軸はほぼ南北軸に平行する。遺物は出土していない。

SP23（図：Ⅱ-8）

B-10、C-10グリッドに位置する。南北0.7m、東西0.4mの不整形を呈する。底部は南側が北側

に比べ低くなっている。陶磁器が出土しているが遺構の帰属時期については不明である。

SP24（図：Ⅱ-6）

B-10、C-10グリッドに位置する。西側に直径0.5mの円形と東側に歪んだ円形の二つが重なり合うような状態で検出されている。遺物は出土していない。

SP25（図：Ⅱ-6）

B-10グリッドに位置する。南北0.8m東西0.65mの不整形を呈する。陶磁器が出土しているが遺構の帰属時期については判明していない。

SP26（図：Ⅱ-6）

B-10グリッドに位置する。直径0.55mの円形を呈する。断面形状は北側が低くなっており、フラットではない。陶磁器が出土しているが数量が少なく時期は判別できない。

SP27（図：Ⅱ-6）

B-10グリッドに位置する。南北0.7m東西0.65mとやや南北に長い隅丸方形を呈する。底部形状は中心部分が低くなっており、U字状である。遺物は出土していない。

SP28（図：Ⅱ-8）

B-10グリッドに位置する。東西0.6mの不整形を呈す。確認面からの深度は0.15mと浅めの遺構である。17世紀中葉から後半の陶磁器が出土している。

SP29（図：Ⅱ-8）

B-11グリッドに位置する。南側が攪乱され全体の形状は判別していない。確認面からの深度は0.4mである。17世紀前半から中葉の遺物が出土している。

SP30（図：Ⅱ-7）

A-11、B-11グリッドに位置する。南北1m東西0.25mと南北に長い形状を呈している。遺物は出土していない。

SP31（図：Ⅱ-7）

B-11グリッドに位置する。南北0.65m東西0.35mの隅丸方形を呈する。断面形状は中心部が深くU字状になっている。陶磁器が出土しているが遺構の帰属時期については不明である。

SK32（図：Ⅱ-7）

A-11グリッドに位置する。北側が調査区外のため全体の規模は判明していない。遺構の深度0.4mで坑底はほぼフラットである。遺物は出土していない。

SD33（図：Ⅱ-7）

A-11グリッドに位置する。幅0.7～0.8mの溝状遺構であるが、北側が調査区外のため南北方向の規模は不明である。17世紀前半、19世紀前葉の陶磁器が出土している。

SD34（図：Ⅱ-7）

A-11、A-12グリッドに位置する。幅0.45～0.55mの溝状遺構である。西側はSD33に接し、東側が攪乱されるため南北方向の規模は不明である。ほぼ東西に遺構軸を有する。遺物は出土していない。

SP35（図：Ⅱ-8）

B-11グリッドに位置する。東側が攪乱されるため全体の規模、形状は判別できない。深度は0.2mと一定であり、底部は水平である。遺物は出土していない。

SP36（図：Ⅱ-8）

C-11グリッドに位置する。直径0.6mの円形を呈する。深度は0.1mと浅めの遺構である。遺物は

出土していない。

SP37（図：Ⅱ-8）

C-10、C-11 グリッドに位置する。南側が調査区外のため全体の規模、形状については不明である。遺物は出土していない。

SK38（図：Ⅱ-9）

B-15、B-16 グリッドに位置する。南北 2.3m 東西 1.6m の不整形を呈する。確認面からの深度は 0.6m である。17 世紀後半の陶磁器が出土している。

SK39（図：Ⅱ-10）

A-14、A-15、B-14 グリッドに位置する。北側が一部調査区外に拡がる。不整形を呈している。遺物は出土していない。

SD40（図：Ⅱ-10）

B-14、B-15、C-15 グリッドに位置する。幅 0.9 ～ 1.5m の溝状遺構である。遺物は出土していない。

SK41（図：Ⅱ-10）

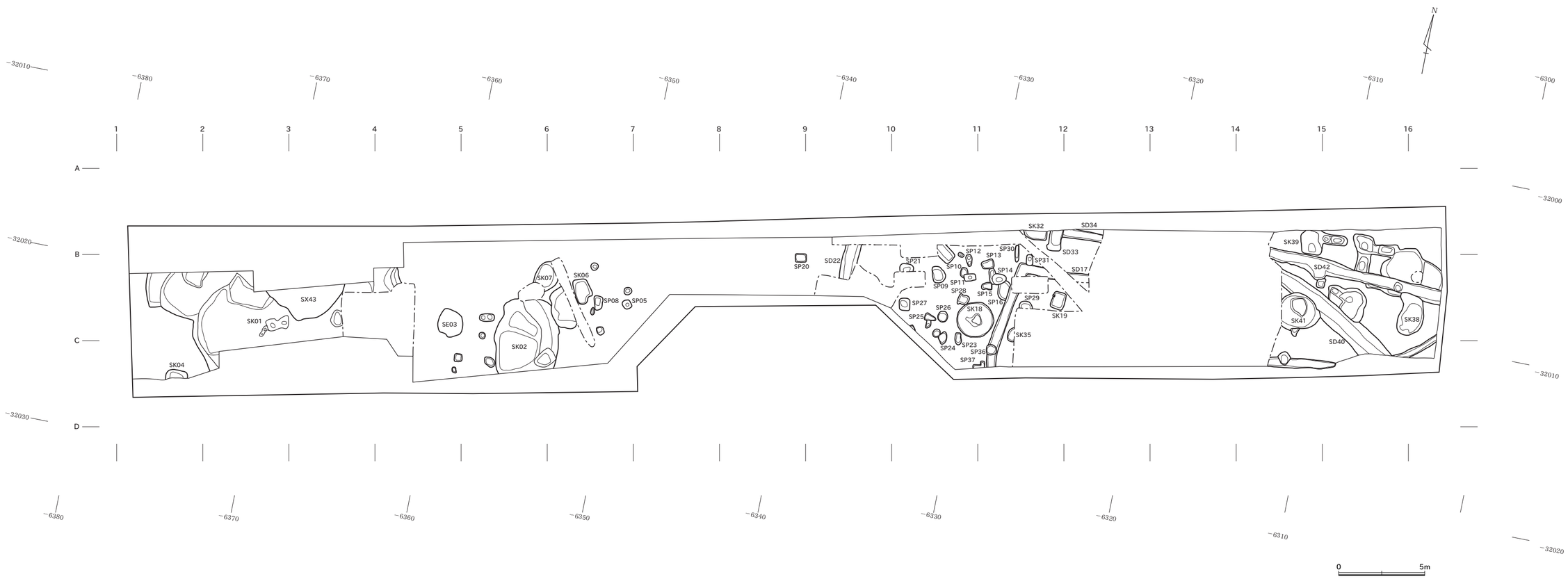
B-14 グリッドに位置する。西側が攪乱されているが直径 2.1m ほどの円形を呈すると思われる。底面は中央部が高くなっている。植栽痕と思われる。遺物は出土していない。

SD42（図：Ⅱ-9･10）

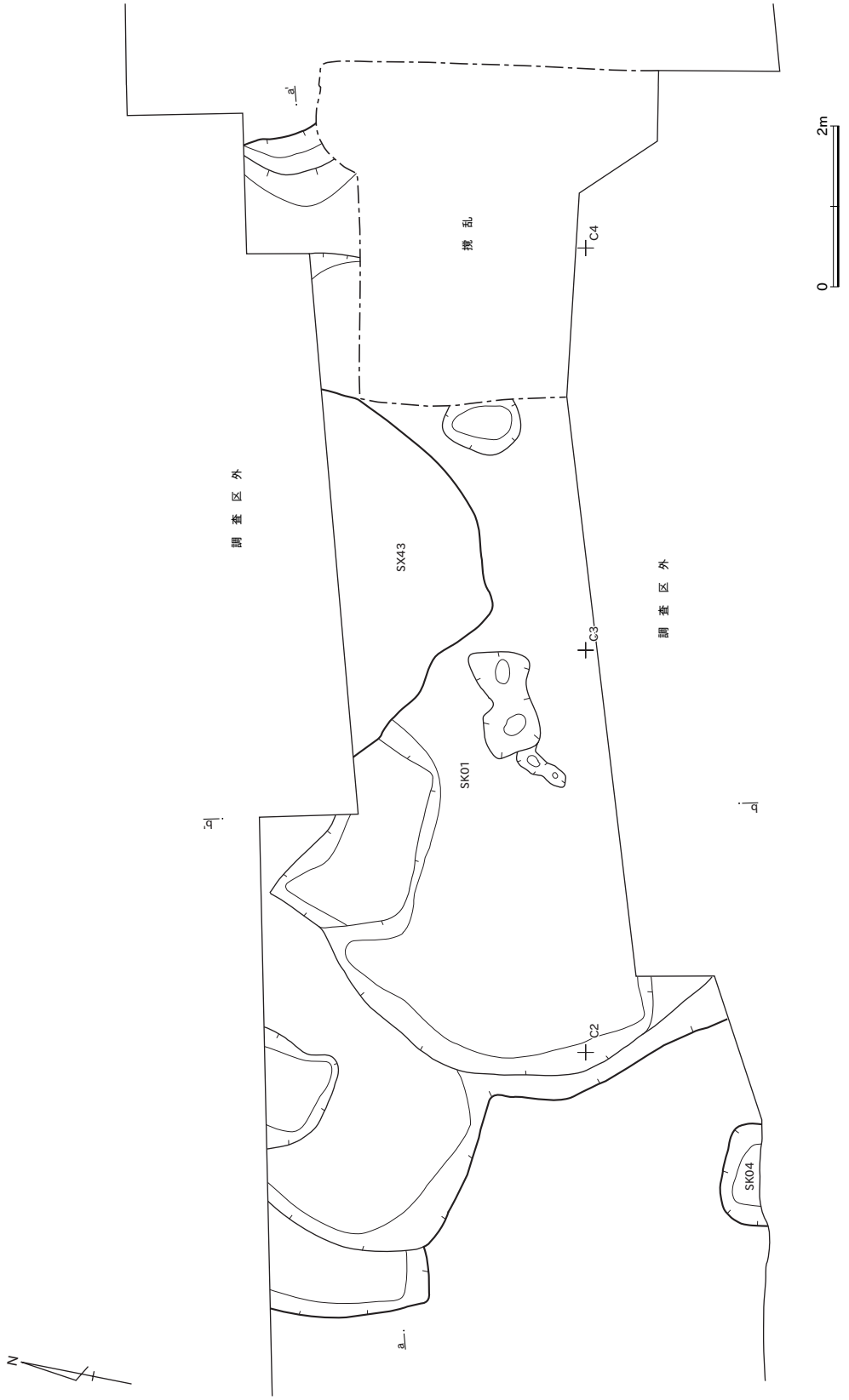
A-14、B-14、B-15、B-16 グリッドに位置する。幅 0.6m ～ 1.3m の溝状遺構である。溝底はフラットである。遺物は出土していない。

SX43（図：Ⅱ-2･3）

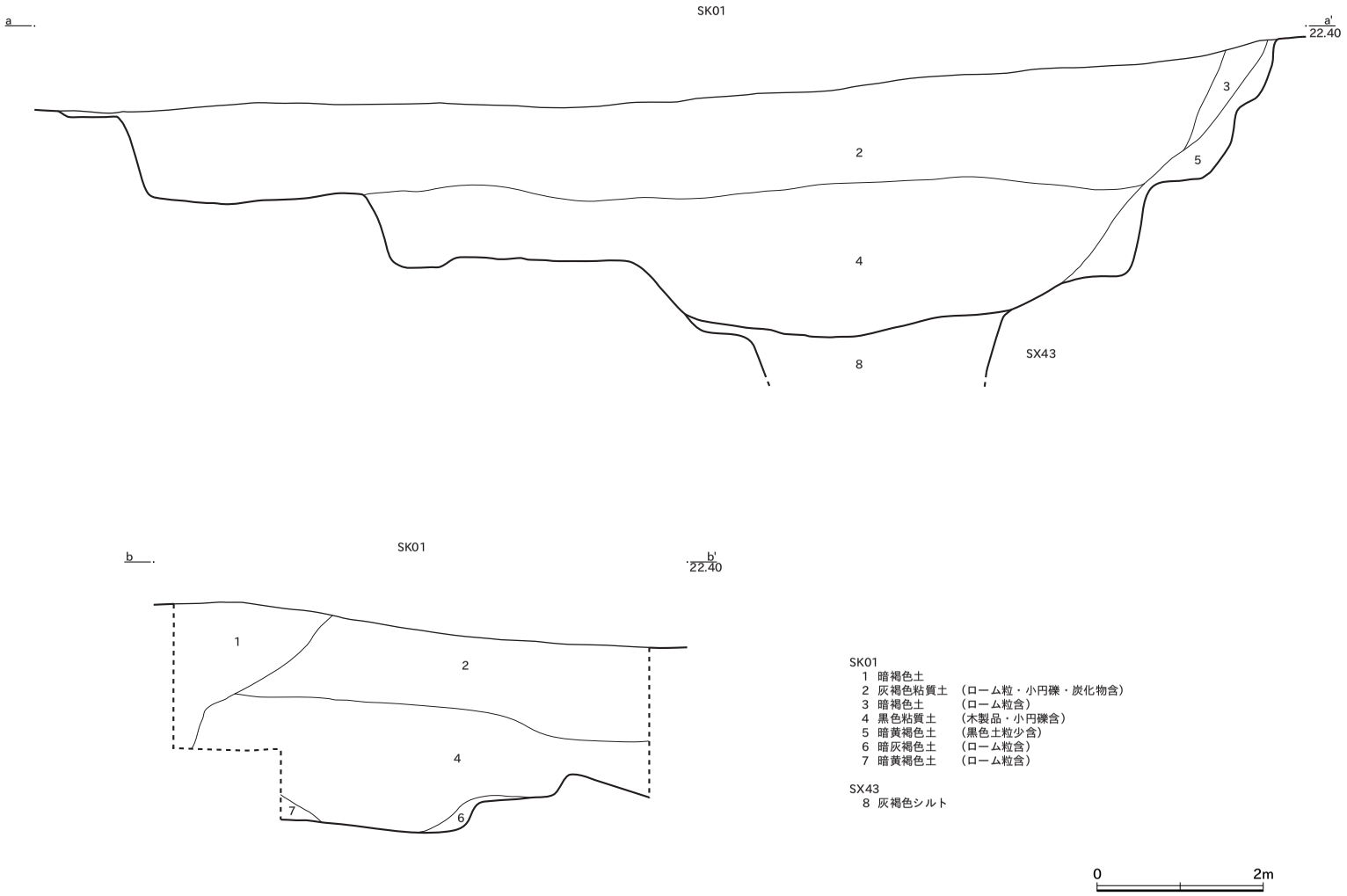
B-2、B-3 グリッドに位置する。SK01 の下部に検出された。遺構の全体の規模については判明していない。調査区の北側に拡がっていると思われる。遺構の性格などについては不明である。遺物は出土していない。


N
32010
6380
6370
6360
6350
6340
6330
6320
6310
6300
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
A
B
C
D
32020
32030
32000
SK01
SX43
SK04
SE03
SK07
SK06
SP08
SP05
SK02
SP20
SD22
SP21
SP10
SP12
SP13
SP30
SK32
SD34
SD33
SP31
SD17
SP09
SP11
SP28
SP14
SP15
SP16
SP29
SP27
SP26
SK18
SK19
SP25
SP24
SP23
SP36
SP37
SK35
SK39
SD42
SK41
SK38
SD40
0
5m

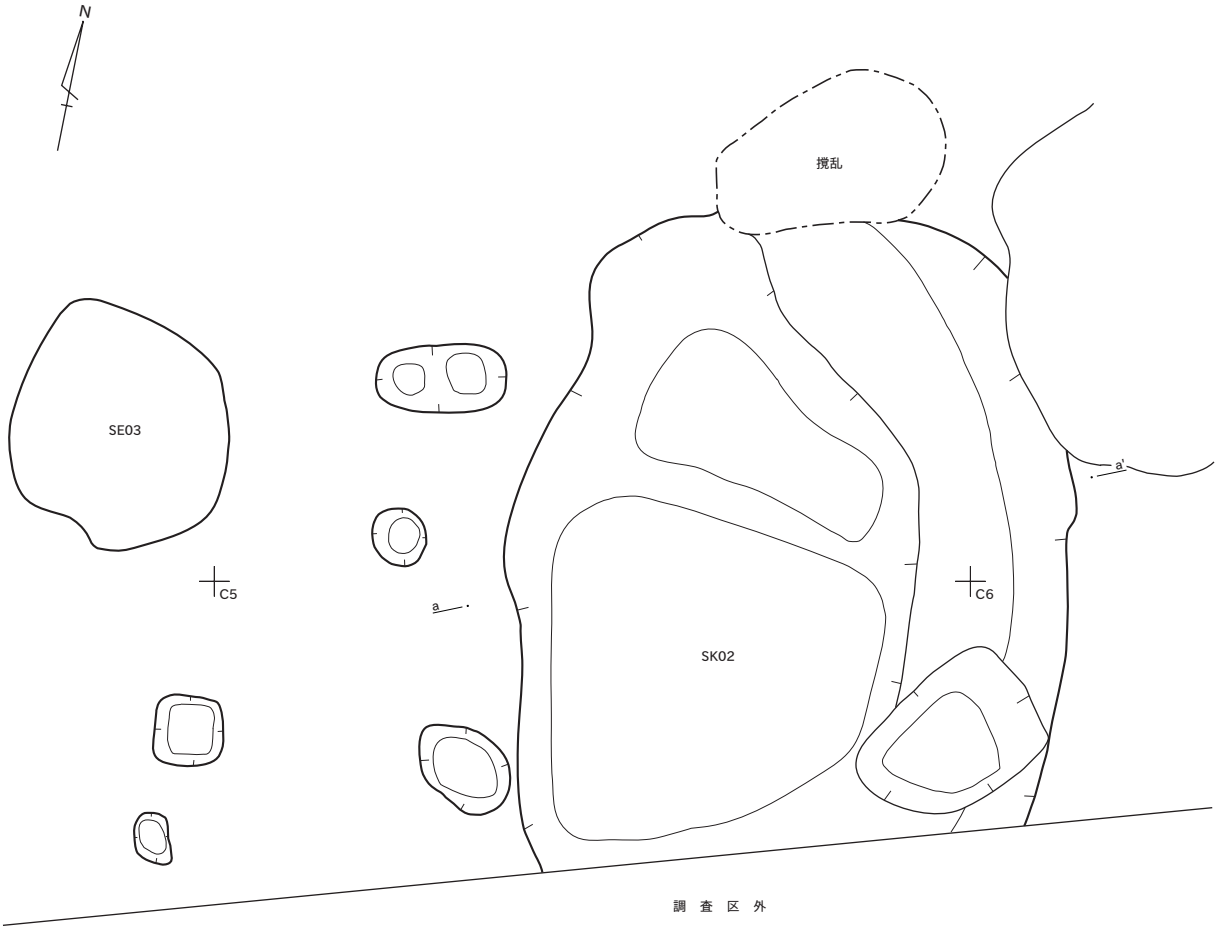
Ⅱ-1図　遺跡全体図

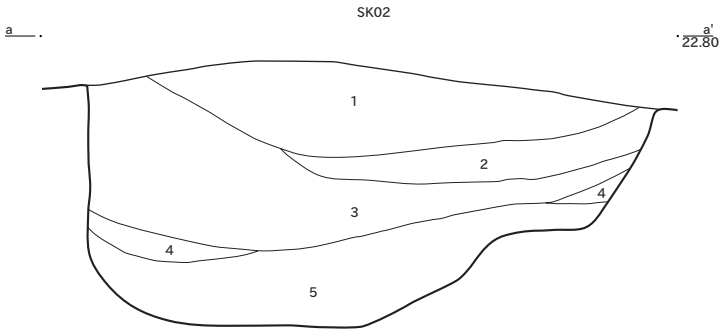


Ⅱ-2図　SK01（1）・SK04・SX43（1）



Ⅱ-3図　SK01（2）・SX43（2）

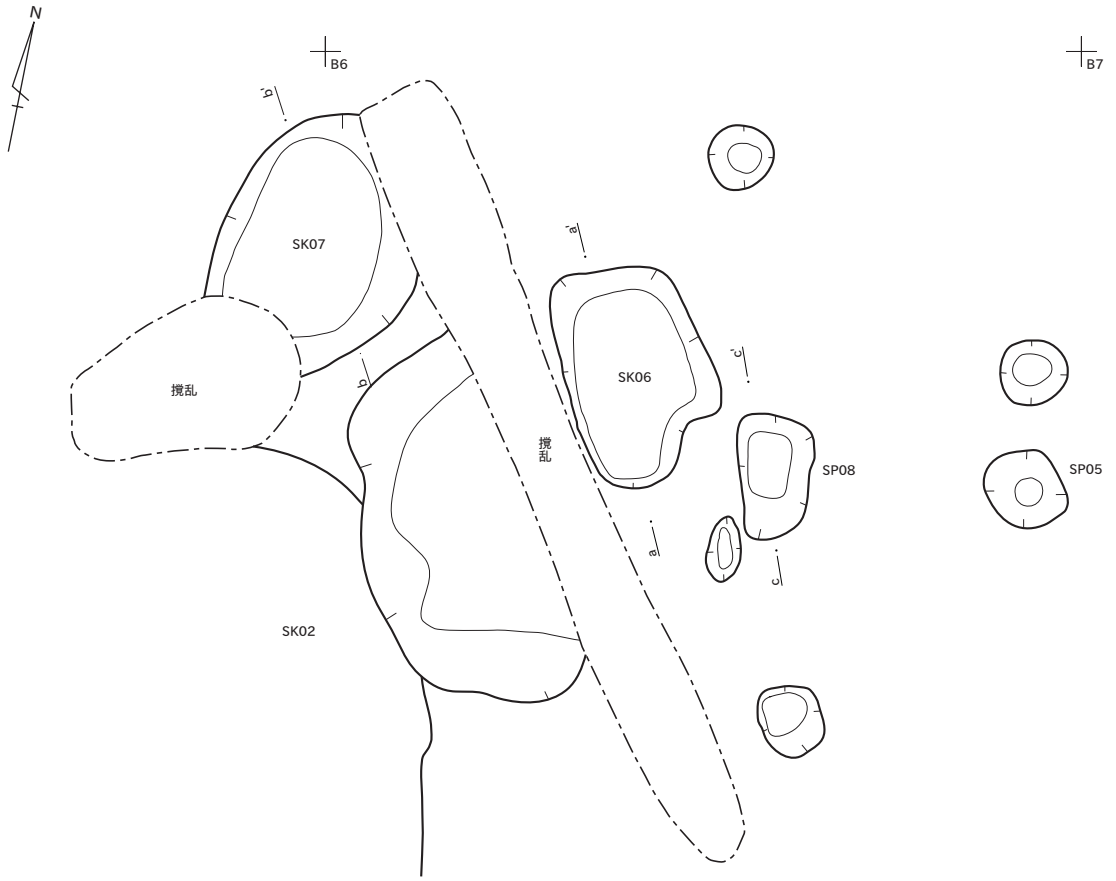


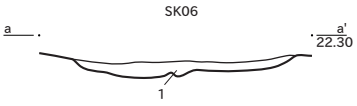


SK02
1　暗黄褐色土　（ローム粒・灰褐色粘土粒含）
2　暗褐色土　（ローム粒少含）
3　灰褐色土粒と瓦の互層
4　暗褐色土　（ローム粒中含）
5　暗黄褐色土　（ロームブロック含）

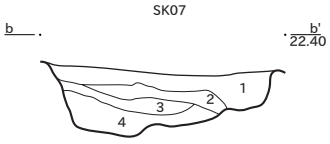
0　1m

Ⅱ-4図　SK02･SE03

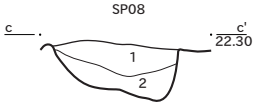




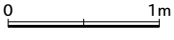
SK06
1　暗褐色土　（炭化物・小円礫・灰褐色土粒含）



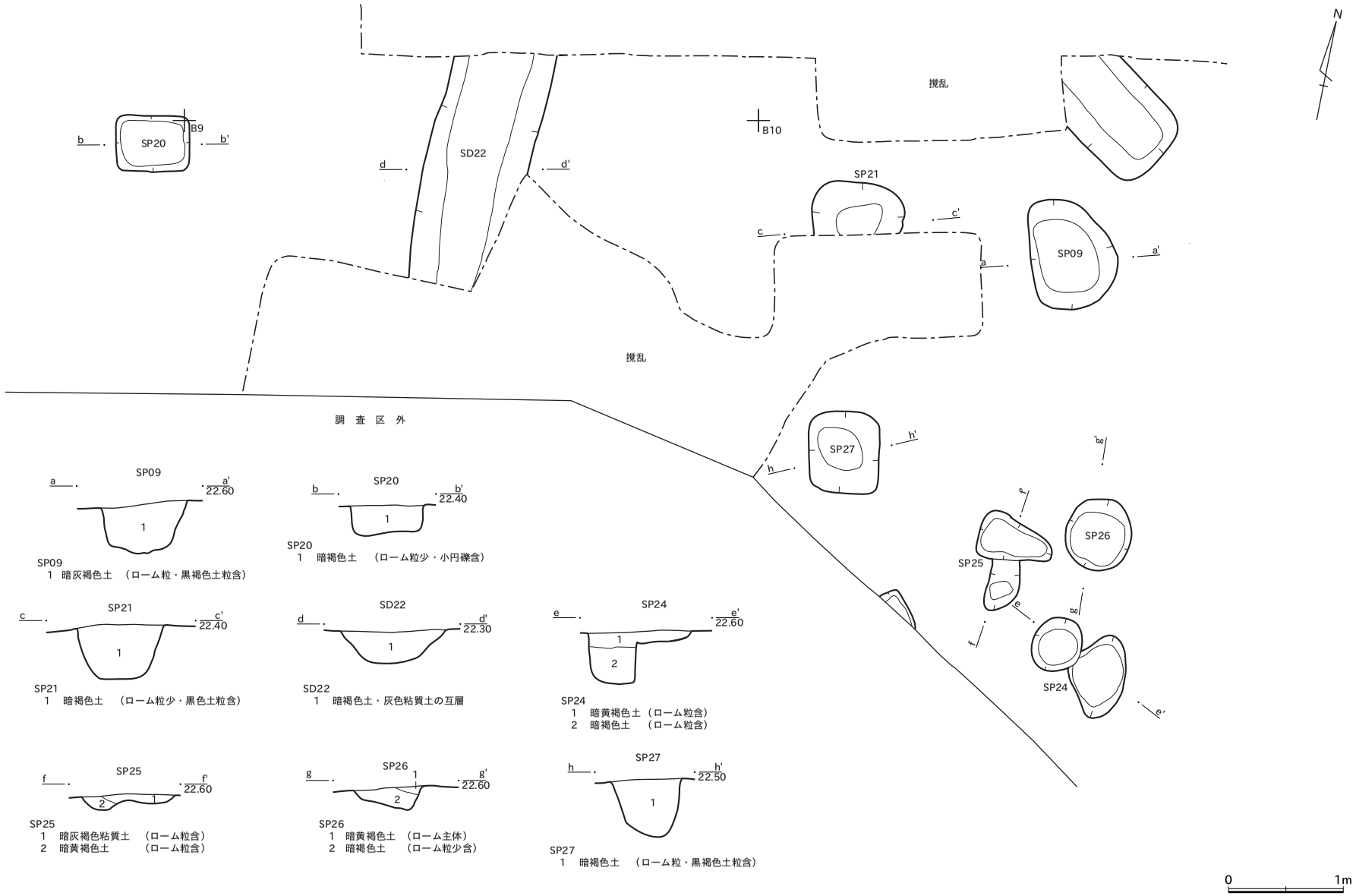
SK07
1　暗灰褐色土　（ローム粒・小円礫含）
2　暗黄褐色土　（ローム粒含）
3　黒褐色土　（ローム粒・褐色土粒含）
4　暗褐色土　（ローム粒・褐色土粒含）



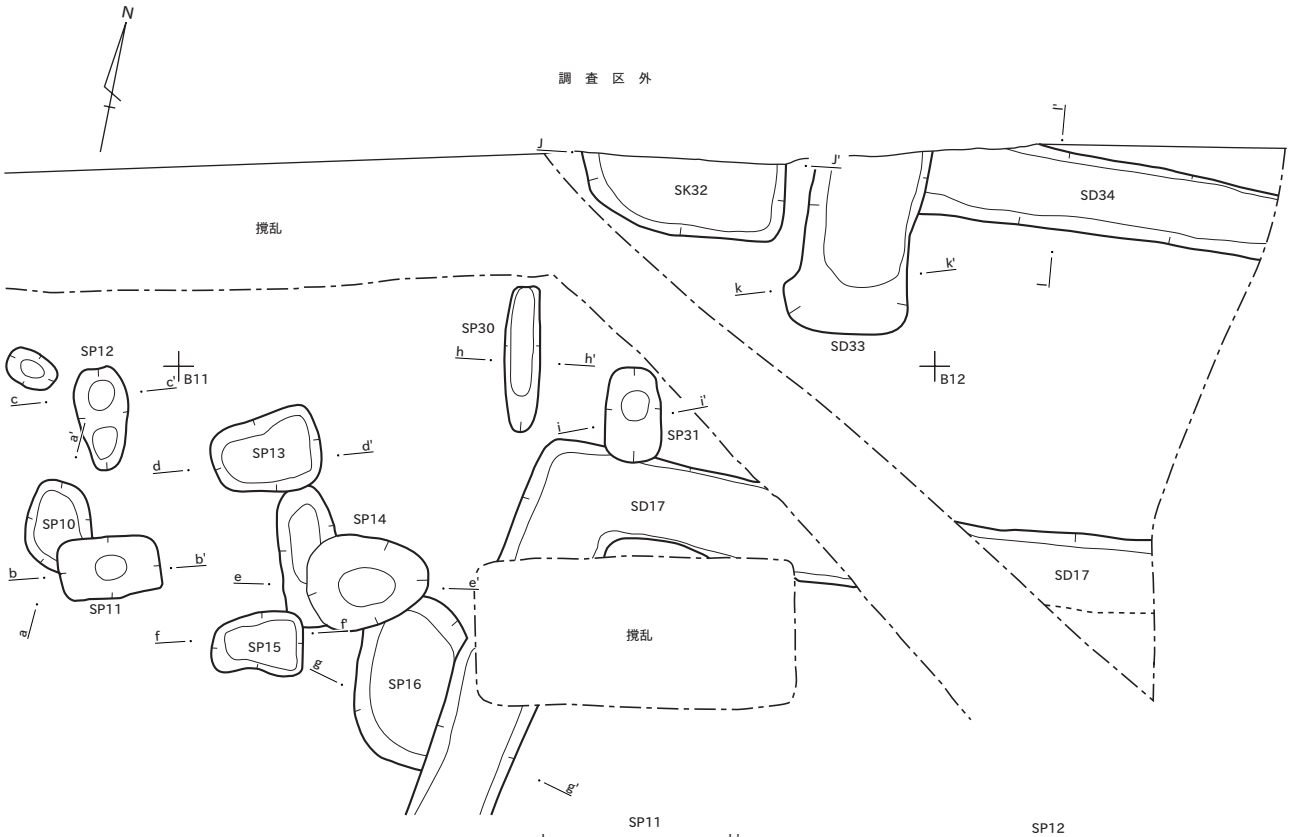
SP08
1　暗褐色土　（ローム粒含）
2　暗黄褐色土　（ローム粒含）

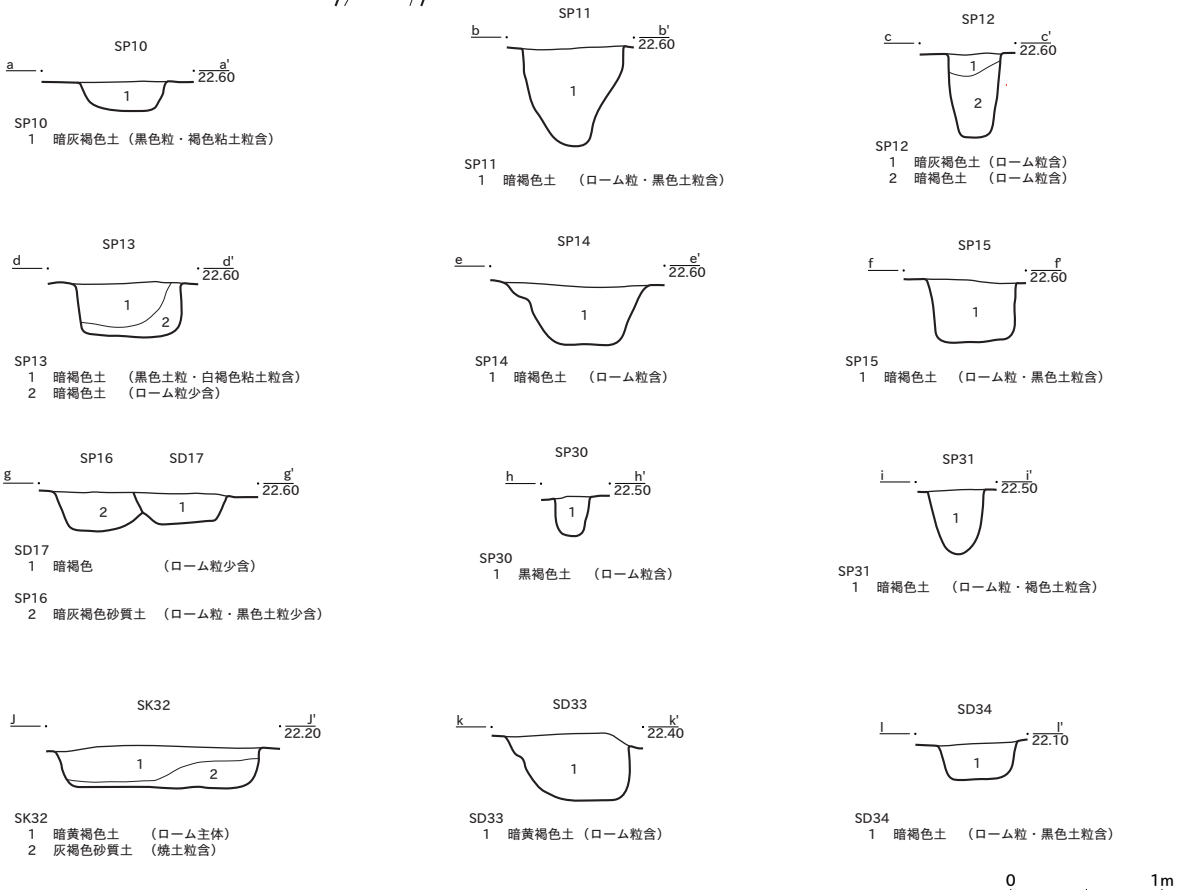


Ⅱ-5図　SP05･SK06･SK07･SP08

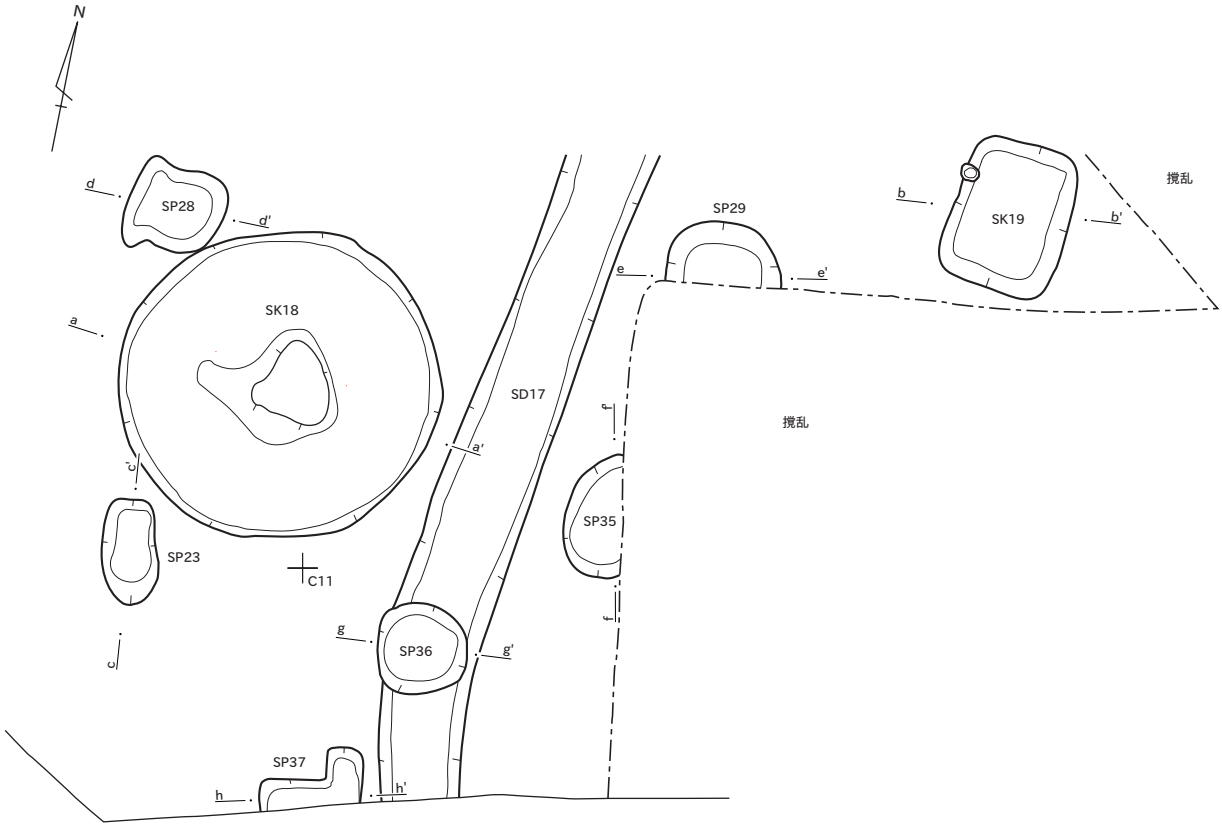


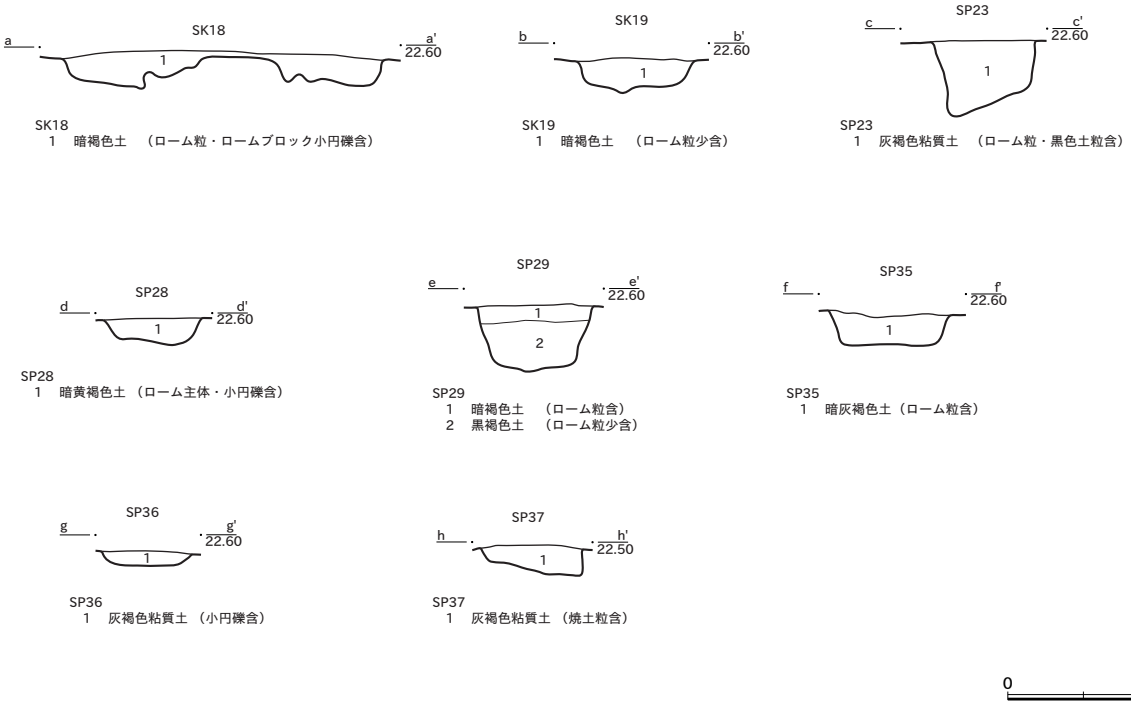
Ⅱ-6図　SP09・SP20・SP21・SD22・SP24・SP25・SP26・SP27



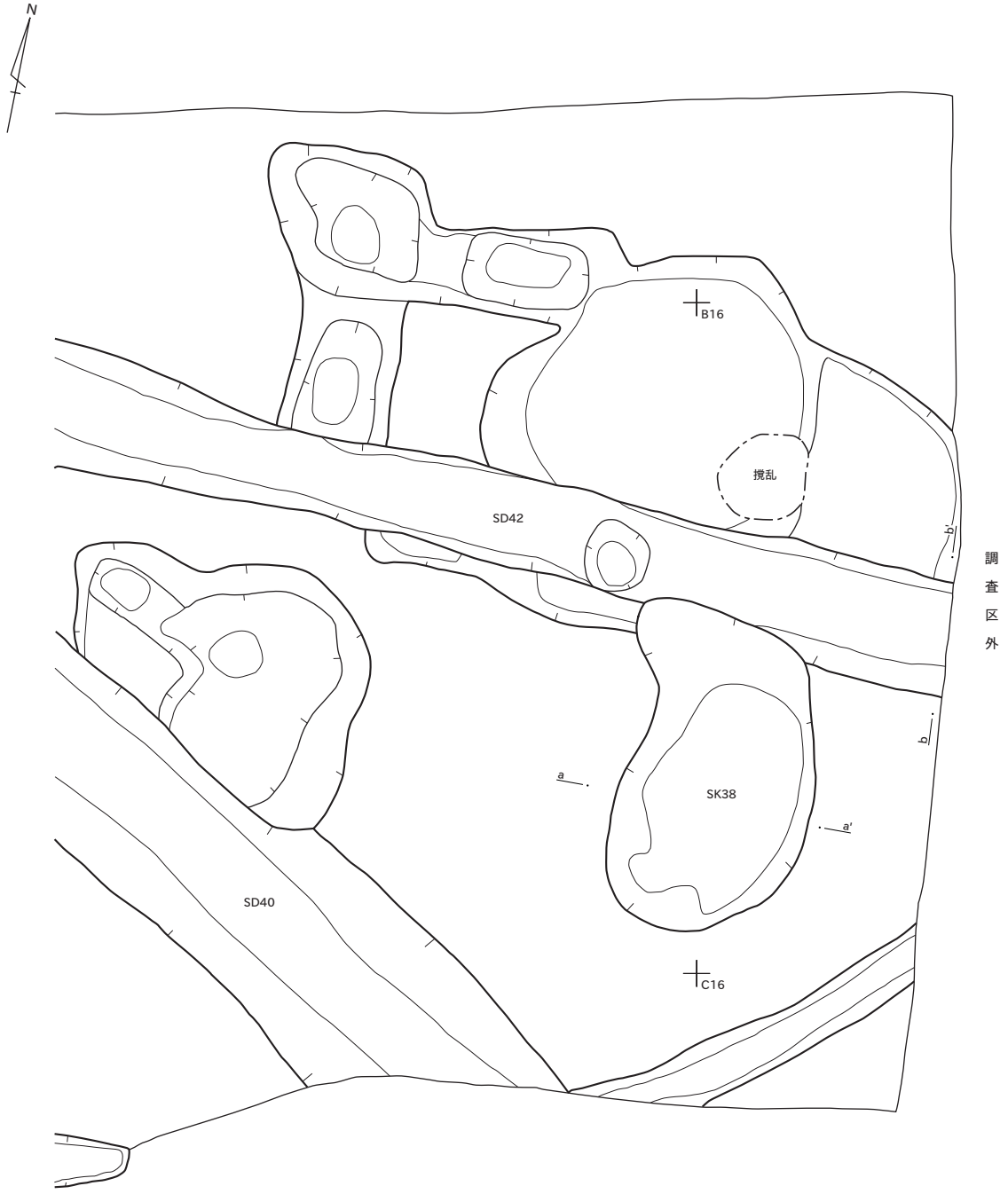


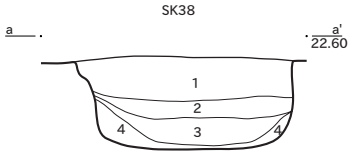
Ⅱ-7図　SP10・SP11・SP12・SP13・SP14・SP15・SP16
SD17（1）・SP30・SP31・SK32・SD33・SD34



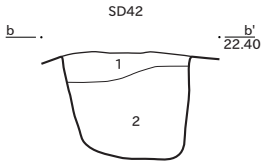


Ⅱ-8図　SD17（2）・SK18・SK19・SP23・SP28・SP29・SP35・SP36・SP37

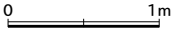




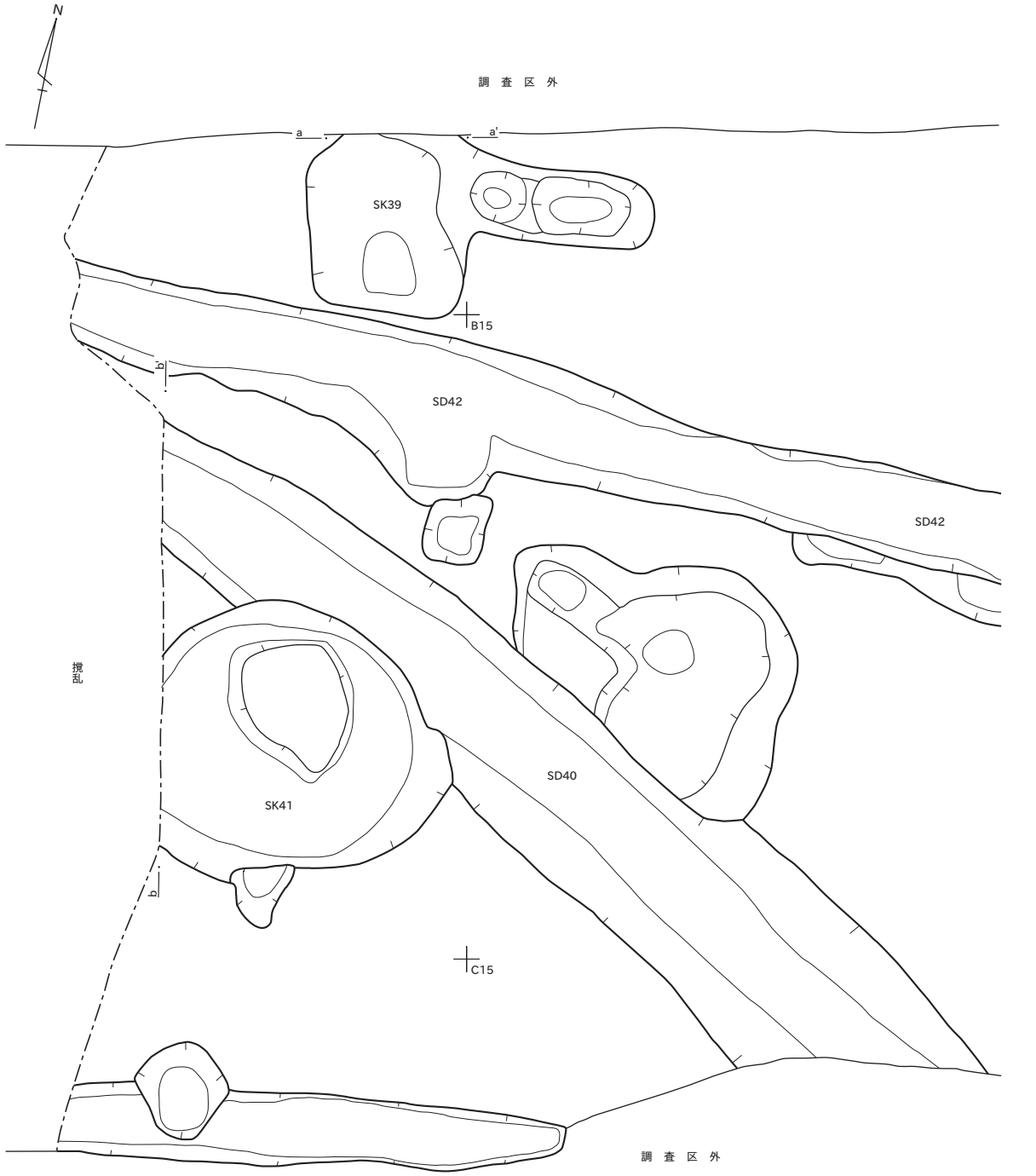
SK38
1　暗褐色土　（ローム粒・黒色土粒含）
2　暗褐色土　（ローム粒少含）
3　暗褐色土　（黒色土粒・茶褐色粘土粒含）
4　暗褐色土　（ローム粒微含）



SD42
1　暗褐色土　（ローム粒・黒色土粒含）
2　暗褐色土　（ローム粒少含）



Ⅱ-9図　SK38･SD42（1）



Ⅱ-10図　SK39･SD40･SK41･SD42（2）

遺構No.	種類	Grid	遺構図No.	年代	切り合い
SK01	土坑	B-1,B-2,B-3,B-4,C-1,C-2,C-3	Ⅱ-2,Ⅱ-3	ⅤⅢa	SK01>SX43
SK02	土坑	B-5,B-6,C-5,C-6	Ⅱ-4		
SE03	井戸	B-4	Ⅱ-4	19前	
SK04	土坑	C-2	Ⅱ-2	19前？	
SP05	ピット	B-6	Ⅱ-5		
SK06	土坑	B-6	Ⅱ-5		
SK07	土坑	B-5,B-6	Ⅱ-5		
SP08	ピット	B-6	Ⅱ-5		
SP09	ピット	B-10	Ⅱ-6		
SP10	ピット	B-10	Ⅱ-7	17	
SP11	ピット	B-10	Ⅱ-7		
SP12	ピット	B-10	Ⅱ-7	17中～後	
SP13	溝	B-11	Ⅱ-7		
SP14	溝	B-11	Ⅱ-7		
SP15	ピット	B-11	Ⅱ-7	？	
SP16	ピット	B-11	Ⅱ-7		SD17>SP16
SD17	溝	B-11,B-12,C-11	Ⅱ-7･8	？	SD17>SP16
SK18	土坑	B-10,B-11	Ⅱ-8		
SK19	土坑	B-11	Ⅱ-8	？	
SP20	ピット	A-8,A-9,B-8,B-9	Ⅱ-6		
SP21	ピット	B-10	Ⅱ-6		
SD22	溝	A-9,B-9	Ⅱ-6		
SP23	ピット	B-10,C-10	Ⅱ-8	？	
SP24	ピット	B-10,C-10	Ⅱ-6		
SP25	ピット	B-10	Ⅱ-6	？	
SP26	ピット	B-10	Ⅱ-6	？	
SP27	ピット	B-10	Ⅱ-6		
SP28	ピット	B-10	Ⅱ-8	17中～後	
SP29	ピット	B-11	Ⅱ-8	17前～中	
SP30	ピット	A-11,B-11	Ⅱ-7		
SP31	ピット	B-11	Ⅱ-7	？	
SK32	土坑	A-11	Ⅱ-7		
SD33	溝	A-11	Ⅱ-7	17前、19前	
SD34	溝	A-11,A-12	Ⅱ-7		
SP35	ピット	B-11	Ⅱ-8		
SP36	ピット	C-11	Ⅱ-8		
SP37	ピット	C-10,C-11	Ⅱ-8		
SK38	土坑	B-15,B-16	Ⅱ-9	17後	
SK39	土坑	A-14,A-15,B-14	Ⅱ-10		
SD40	溝	B-14,B-15,C-15	Ⅱ-10		
SK41	土坑	B-14	Ⅱ-10		
SD42	溝	A-14,B-14,B-15,B-16	Ⅱ-9,Ⅱ-10		
SX43	不明	B-2,B-3	Ⅱ-2,Ⅱ-3		SK01>SX43

新>旧

Ⅱ-1表　遺構対応表

第Ⅲ章　遺　　物

第１節　SK01

当地点の遺構で100個体以上のカウントが可能な遺構はSK01のみで、すべての遺物が一括で取り上げられている。 陶磁器、土器のカウント総数5202個体、内磁器989個体、陶器3153個体、土器1060個体であった。東大編年Ⅶ期、Ⅷａ期において構成される器種を中心としてⅧｂ期もわずかに含んでいる。二次焼成を受けているものはほとんど見受けられず、火災に伴う資料ではない。それ以外にも、石製品、木製品、金属製品、ガラス製品、瓦等が検出されている。

（1）　磁器･陶器･土器･墨書

磁　　器（磁器１～123）（図：Ⅲ-1～3）（PL.：Ⅲ-1～7）

1～51は碗である。1～2は高台径が小さい半球形の薄手碗。JB-1-fに属する。1は蛸唐草文様。全面に焼継ぎが見られる。

3～9は小広東碗。JB-1-iに属する。3は見込みに梵字文。有田町小樽２号新窯から、類似の小広東碗が検出されている（有田町教育委員会 1986）。4は梵字文。見込みにも梵字文。焼継ぎがみられる。5は見込み梵字文。6は仙芝文。8は草花文。見込みは梵字文。9は唐人文。見込みには草花文。

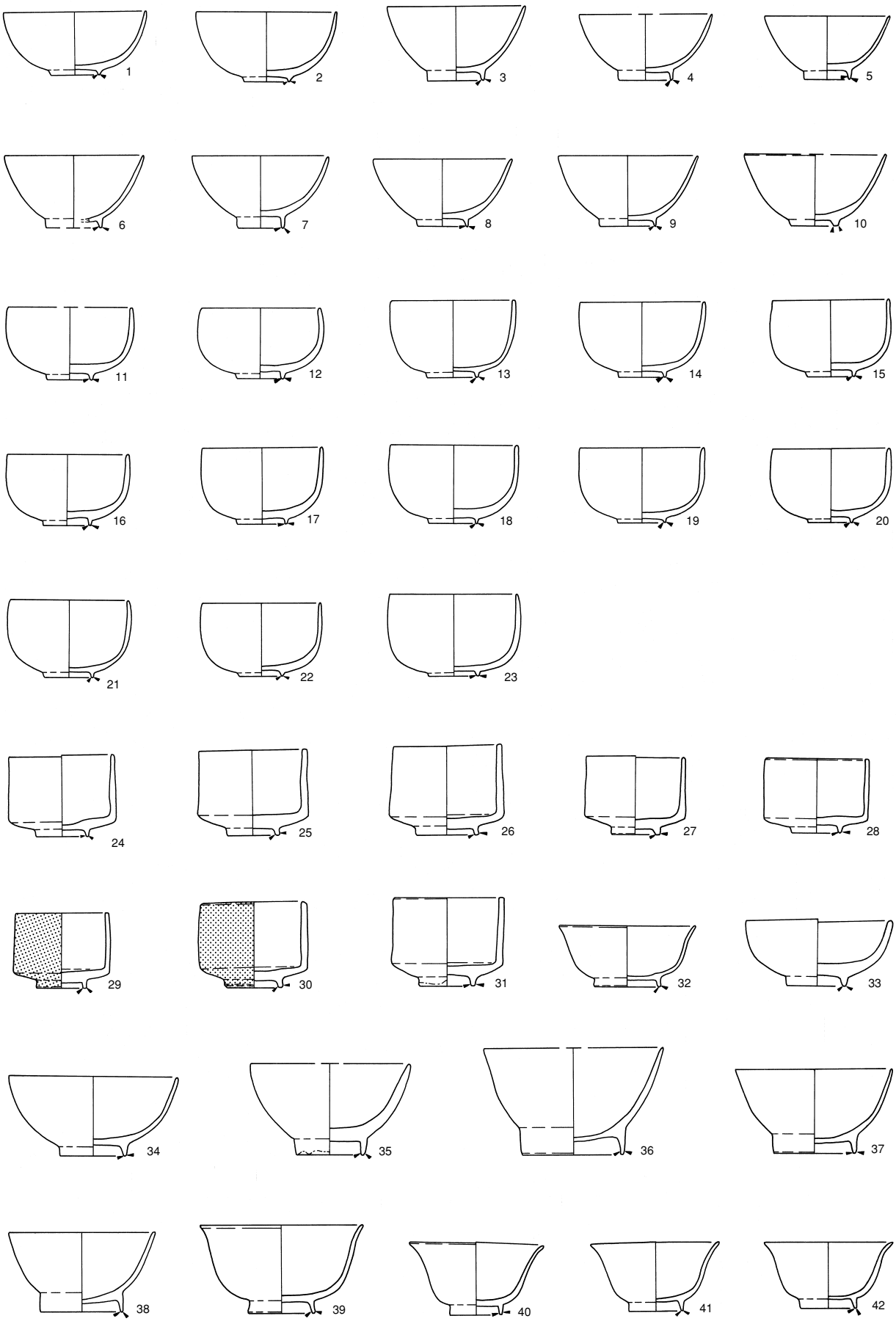
10は高台幅の広い小広東碗。JB-1-sに属する。山水文。見込みには火焔宝珠文。

11～23は小丸碗。JB-1-jに属する。11は孟宗の筍堀の図（二十四孝）。見込みには、簡略化された手描き五弁花。西有田町広瀬向２号窯物原から、類似の小丸碗が検出されている（佐賀県立九州陶磁文化館 1986）。12は竹の模様で３区画に区切られている。見込みには、簡略化された手描き五弁花。13は４区画に区切られ見込みには宝文。焼継ぎによる補修痕が見られ、高台内には焼継ぎ印が有る。14は２区画に区切られ、竹林賢人文が見られる。内面口縁部四方襷文。見込みには、簡略化された手描き五弁花。15は矢羽根文。見込みには、火焔宝珠文。16は虫篭文。見込み草花文。17は若松文。見込み虫文。18は見込みに、簡略化された手描き五弁花。19は紫陽花文。見込み虫文。20は人物文。見込みには、簡略化された手描き五弁花。21は人物文、山水文。見込み山水文。22は馬文。見込み鷺文。23は楼閣山水文。見込み山水文。

24～31は筒形碗。JB-1-lに属する。24～27は口縁部内面四方襷文。24は丁寧に描かれている。28･29は口縁部内面二重圏線。見込みは、24は手描き五弁花。25～29コンニャク印判による五弁花。25はコンニャク印判の中でもはっきりと文様が押されている。24はやや大ぶりで矢羽根文。高台内は、二重角枠内渦福。JB-1-lの中では、比較的古い様相を残している。30･31は青磁染付。口縁部内面四方襷文。見込みはコンニャク印判による五弁花。広瀬向２号窯物原から、類似の筒形碗が検出されている。

32･39は肥前系端反碗。JB-1-n に属する。32は見込み草花文。39は楼閣山水文。

33･34は絵付け･作りの粗雑な碗である。JB-1-gに属する。33は呉須の発色が悪く釉も青みがかっている。網目文。34は山水文。見込みに目跡が３ヶみられる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42

Ⅲ-1図　SK01　磁　　器（1）

1　2　3　4　5

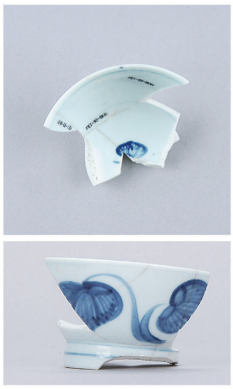
6　7　8　9　10

11　12　13　14　15

16　17　18　19　20

Ⅲ-PL.1　SK01　磁　　器（1）

Ⅲ-PL.2　SK01　磁　　器（2）


38

39

40

41

42

43

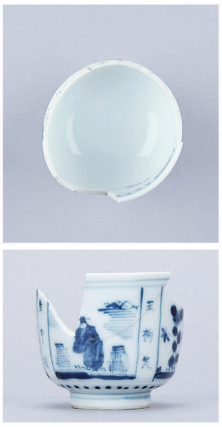
44

45

46

47

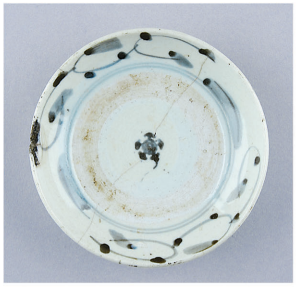
48


49

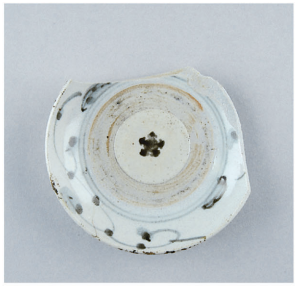
50

51

52


53

54


55

Ⅲ-PL.3　SK01　磁　　器（3）

35～37は肥前系広東碗。JB-1-mに属する。35は呉須の発色が悪く、釉もくすんでいる。虫篭文。36は松竹梅文。内面口縁部帯文。見込み竹文。

38は瀬戸･美濃系広東碗。JC-1-cに属する。

40～43は瀬戸･美濃系端反碗。JC-1-dに属する。41は仙芝文。見込み花文。42は山水文。43は内面口縁部帯文。高台内に銘。

44～47は清朝の端反碗。44･45はJAに属する。高台内に文字に似せた銘あり。釉の発色が全体に青みがかっている。文様や線に繊細な感じがなく、おそらく中国でも南方の窯で焼かれたものであろう。46はJA1に属する。景徳鎮窯。口唇部口銹。高台内が、胴体下半部よりえぐられて薄くなっている。高台内に「乾隆年製」銘あり。色替わり小碗十客セットの内の一つか。47はJA3に属する。徳化窯。色絵。口唇部の釉がぬぐわれ、畳付に釉が見られることから、伏せて焼かれたことがわかる。

48･49は腰が張り、体部が直立する小振りの碗。湯呑碗。48は肥前系でJB-1-oに属する。高台幅が広い。49は瀬戸･美濃系でJC-1-eに属する。4区画に分かれ、人物文と花文が交互に描かれている。内面口縁部帯文。

50は高台が「ハ」の字状に開き、大ぶりで腰が張る碗。JB-1-q に属する。紫陽花文。内面口縁部四方襷文。見込みに文様あり。

51は碗。JC-1に属する。体部中央が「く」の字状に曲がっている。高台外周が、面取りされており、面取りされた部分にも釉が掛けられている。内面口縁部に帯文。焼継ぎが見られる。山水文。

52～72は皿である。52～55は見込み蛇ノ目釉剝ぎで高台径が大きく、梅花繋ぎ文。見込み中央部の五弁花は、コンニャク印判。JB-2-m に属する。呉須の発色が悪く、釉もくすんでいる。高台はやや碁笥底気味に変化している。波佐見町永尾本登窯などで焼かれており、巨大な窯で焼かれた量産品であろう（長崎県波佐見町教育委員会 1993）。いずれも、口縁割口にススが付着しており、灯火皿として転用されたのであろう。

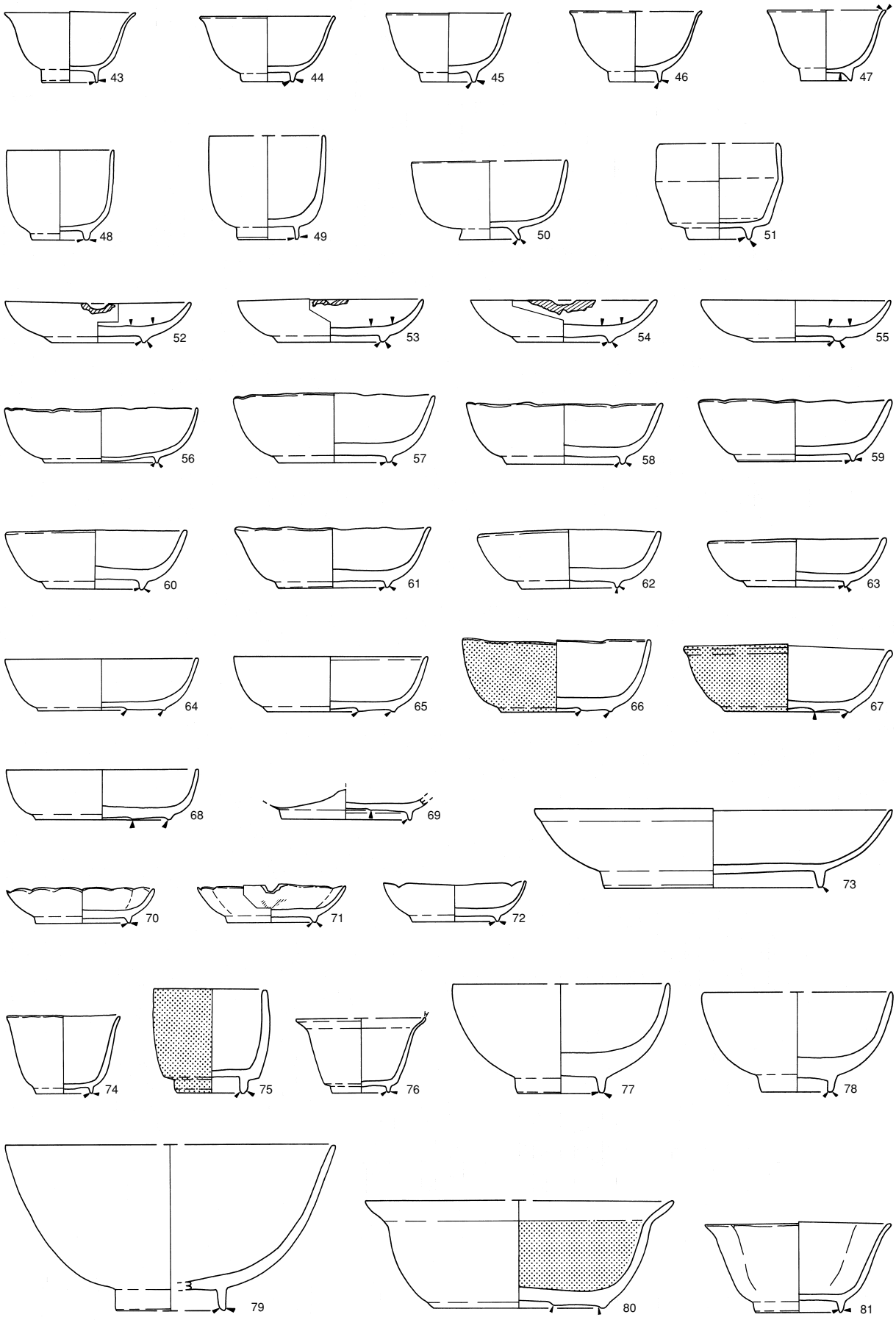
56は、やや深く腰が張る皿で、輪花に成形されている。JB-2-fに属する。見込み中央部は五弁花、高台内には二重角枠内渦福。

57～63は絵付け･作りが粗雑な皿。扇面文が描かれることが多い。見込み中央部には、コンニャク印判で五弁花。JB-2-gに属する。57は蛸唐草とコンニャク印判で花。58･59は宝文。58は宝文がはっきりと描かれているが、59は文様が抽象化している。高台内は一重角枠内渦福。60は呉須の発色が悪い。雪輪文。61～63は扇文。61は扇の文様がはっきりと描かれているが、62･63は文様が抽象化されている。いずれの文様も同一遺構からの出土であり、時期差であるか、製品差であるか判然としないが、窯資料などを見る限り大きな流れとしては次第に文様が抽象化されていくと考えてよいであろう。60～63の高台内には渦福。62･63は呉須の発色が悪い。

64～68は蛇ノ目凹形高台で高台高が低い皿。JB-2-jに属する。64は高台内に、二重角枠内に「筒江」銘。65は見込み中央部には、五弁花。高台内には、二重角枠内に「筒江」銘。66･67は青磁染付。高台内には、二重角枠内渦福。68は竹林賢人文が一枚絵で描かれている。

69は蛇ノ目凹形高台で高台高が高い皿。JB-2-iに属する。見込み環状松竹梅文。高台内には「成化年製」の銘。

70～72は高台断面が「U」字状、輪花に成形している皿。JB-2-qに属する。70は見込み十字花。高台内に虫文。71は口縁割口にススが付着しており、灯火皿として転用されたのであろう。72は口唇部に口銹が施されている。見込み全面に1枚絵。ほぼ同様のものが、東京大学本郷構内の遺跡総合研究棟（文･経･教･社研）地点で検出され、高台内に「御末」の釘書が描かれていた。


43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81

Ⅲ-2図　SK01　磁　　器（2）

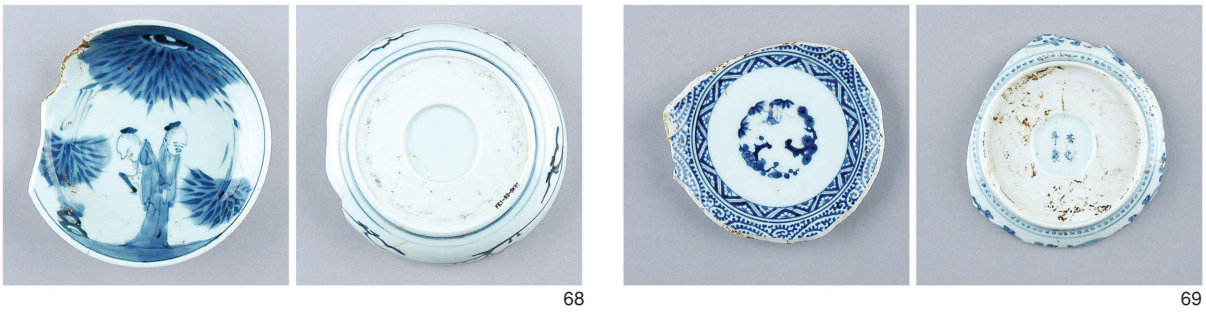
56　57　58　59

60　61　62　63

73

Ⅲ-PL.4　SK01　磁　　器（4）

64　65　66　67



68　69

70　71　72

74　75　76　77　78

Ⅲ-PL.5　SK01　磁　　器（5）

73は断面が「U」字状の高台を持つ大皿。JB-3-bに属する。高台内無釉。全面に焼継ぎが見られる。

74～81は鉢である。74は高台断面三角形の鉢。JB-5-fに属する。口縁部輪花。高台内に「富貴長春」の銘。75は鉢。JB-5に属する。外面は青磁に陰刻で丁寧に菖蒲文を描いている。内面口縁部は染付による蓮弁文。76は鉢。JB-5に属する。色絵。柿右衛門様式。口唇部に口錆が施されている。緑、朱、金の桜花の連続文で、緑色が剥落している。本遺構では、数少ない良品の一つである。

77～79は高台断面がシャープな「U」字状の鉢。JB-5-bに属する。77･78は見込み中央部の五弁花は、コンニャク印判である。高台内渦福。78は呉須の発色が悪く、釉もくすんでいる。79は内面口縁部に連続墨弾きによる帯文。全面に焼継ぎが見られる。80は蛇ノ目凹形高台の鉢。JB-5-dに属する。折縁口縁で、内面は青磁釉を一部に掛け分けている。高台内一重角枠内渦福。底部にはチャツの痕跡がある。81はロクロ成形の後、型打による八角鉢。JB-5-eに属する。見込み宝文。

82～89は坏である。82は坏。JB-6に属する。花が全面に描かれ、口唇部に口錆が施されている。高台内には「大明成化年製」の銘。83は高台径の小さい半球形の薄手坏。JB-6-fに属する。表裏面に色絵。84～86は丸碗形の坏。JB-6-aに属する。84は字文。85は見込みに文様。86は絵付け、作りが粗雑。87は高台径の小さい半球形の薄手坏。JB-6-fに属する。全体的に小振りで高台径が小さく、文様が高台近くに描かれていることなどから、主に伏せて使用されていたと考えられる。おそらく紅皿であろう。88は型作り。紅皿。JB-6-eに属する。89は清朝の坏。JAに属する。内面口縁部帯文。見込み花文。高台内銘あり。

90･91は輪高台状底部の猪口。JB-7-bに属する。90は蛸唐草文。91は花唐草文。92は蛇の目凹型高台の猪口。JB-7-aに属する。口縁部内面四方襷文。見込み手描き五弁花。

93～95は蓋物である。93は丸碗形の蓋物。JB-13-aに属する。94は蓋物。JB-13に属する。95は丸碗形の蓋物。JB-13-aに属する。色絵。96は段重。JB-13-cに属する。

97は小振りの筒形の合子。JB-18-ｂに属する。色絵。

98～107は蓋である。98は広東碗の蓋。JB-00-bに属する。99･100は端反碗の蓋。JB-00-cに属する。99は表裏とも鷺文。銘あり。101は瀬戸･美濃系端反碗の蓋。JC-00-bに属する。内面墨弾きによる文様。銘あり。102は高台が「ハ」の字状に開く碗の蓋。JB-00-eに属する。色絵･染付。「冨貴長春」の銘あり。口縁部内面四方襷文。見込み環状松竹梅文。環状松竹梅文は、まだ省略されず、しっかりと文様が読みとれる。103･104は蓋物の蓋。JB-00-fに属する。橋状のつまみ。103は雀と竹文。104は丸文。105はJB-00に属する。色絵。橋状のつまみ。106･107は合子の蓋。JB-00-nに属する。106は紗綾形文。

108･109は脚部のえぐりが浅く、畳付外周面取りの仏飯器。JB-8-cに属する。

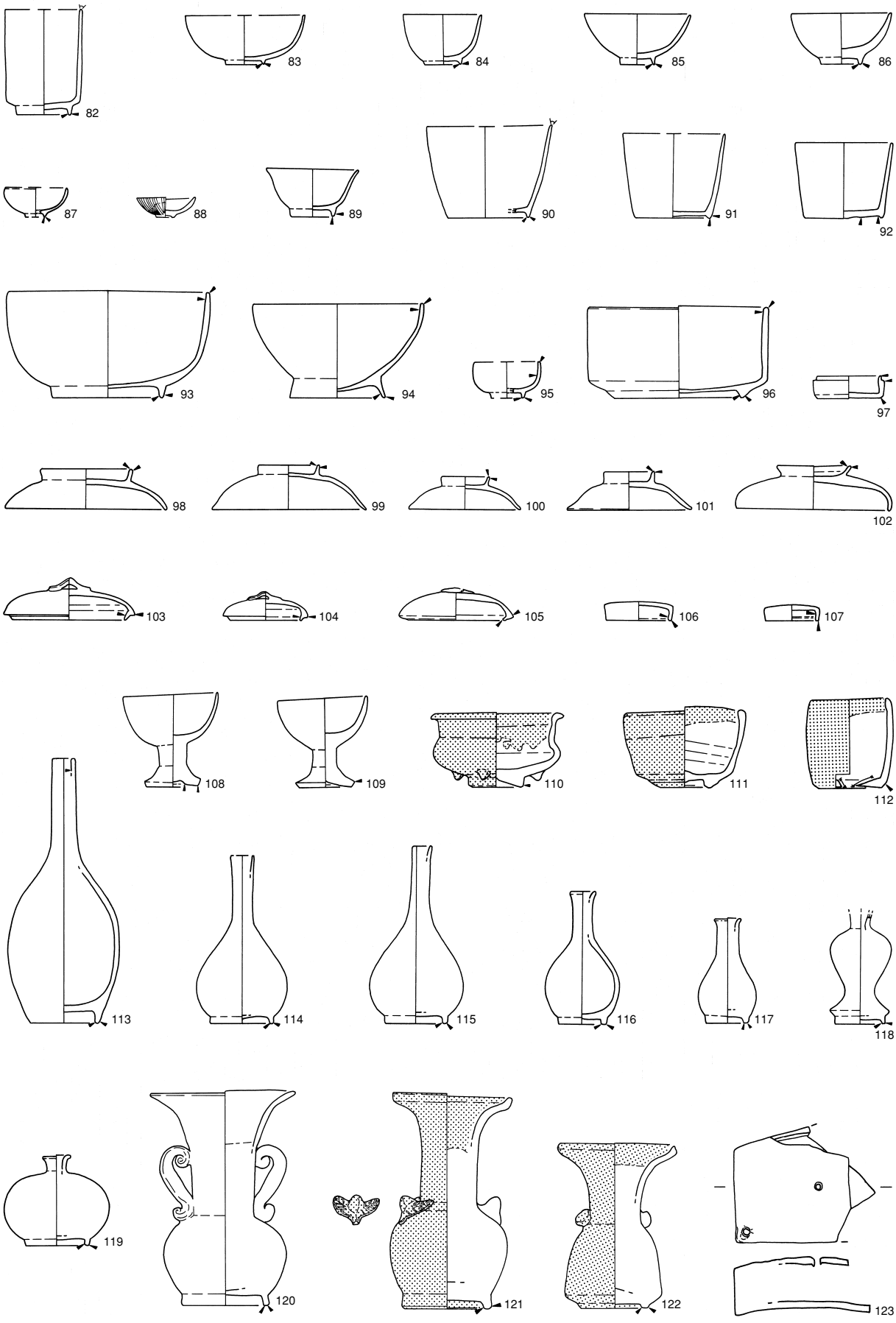
110は円盤状の露胎部の香炉･火入れ。JB-9-aに属する。青磁。111は香炉･火入れ。JB-9に属する。青磁。口縁部が楕円形に歪んでいる。112はべた底の香炉･火入れ。JB-9-dに属する。青磁。底部に穿孔あり。植木鉢として転用された物であろう。

113･114･115･117は肥前系鶴首形御神酒徳利。JB-11-bに属する。113は体部蛸唐草文。腰部蓮弁文。口縁部がわずかに狭くなっている。有田町窯の谷窯では御神酒徳利か花瓶として大量に生産されていた（有田町教育委員会 1994）。116は瀬戸･美濃系鶴首形御神酒徳利。JC-11-bに属する。118は肥前系瓶子形御神酒徳利。JB-11-aに属する。

119は油壺。JB-12に属する。

120･121･122は花生け。JB-22に属する。121･122は青磁。

123は水滴。JB-19に属する。型押し陽刻張り合わせ。裏面布目痕が見られる。


82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123

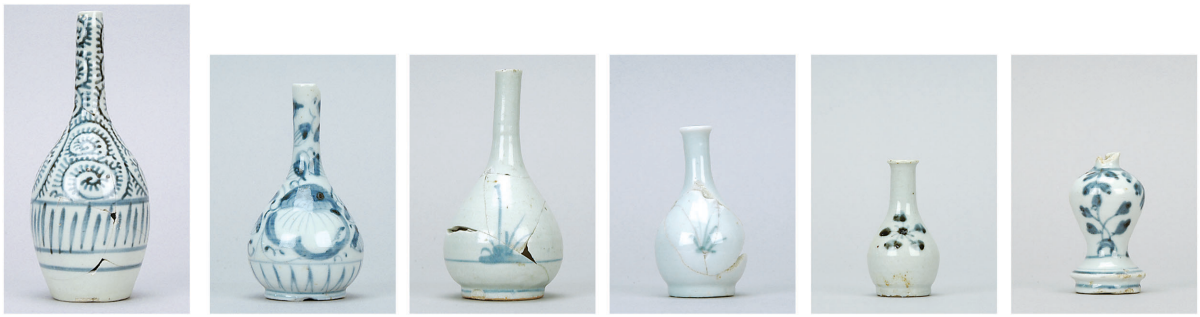
Ⅲ-3図　SK01　磁　　器（3）

Ⅲ-PL.6　SK01　磁　　器（6）

98　99　100　101　102

103　104　105　106　107

108　109　110　111　112



113　114　115　116　117　118

119　120　121　122　123

Ⅲ-PL.7　SK01　磁　　器（7）

陶　　器（陶器１～245）（図：Ⅲ-4～12）（PL.：Ⅲ-8～20）

１～84は碗である。１～５は灰釉丸碗。TC-1-cに属する。底部無釉。この中で、大きく大小に分けられる。大振りの碗は口縁部が真直ぐ立ち上がり、小振りの碗は口縁部がやや内湾している。カウント数は177個体で、大振りの碗が61個体、小振りの碗が101個体であった。大振りの碗に、目跡が見られるものが多い。１は大振りの中でも特に大きく、口縁部がやや内湾している。見込みには目跡が３ヶみられる。２は大振りの碗で、見込みには目跡が３ヶみられる。内面わずかに擦痕が見られる。３は大振りの碗で内外面とも釉だれが見られる。４は小振りの碗で内面全体に褐色の付着物が見受けられる。５は小振りの碗で、内面わずかに擦痕が見られる。

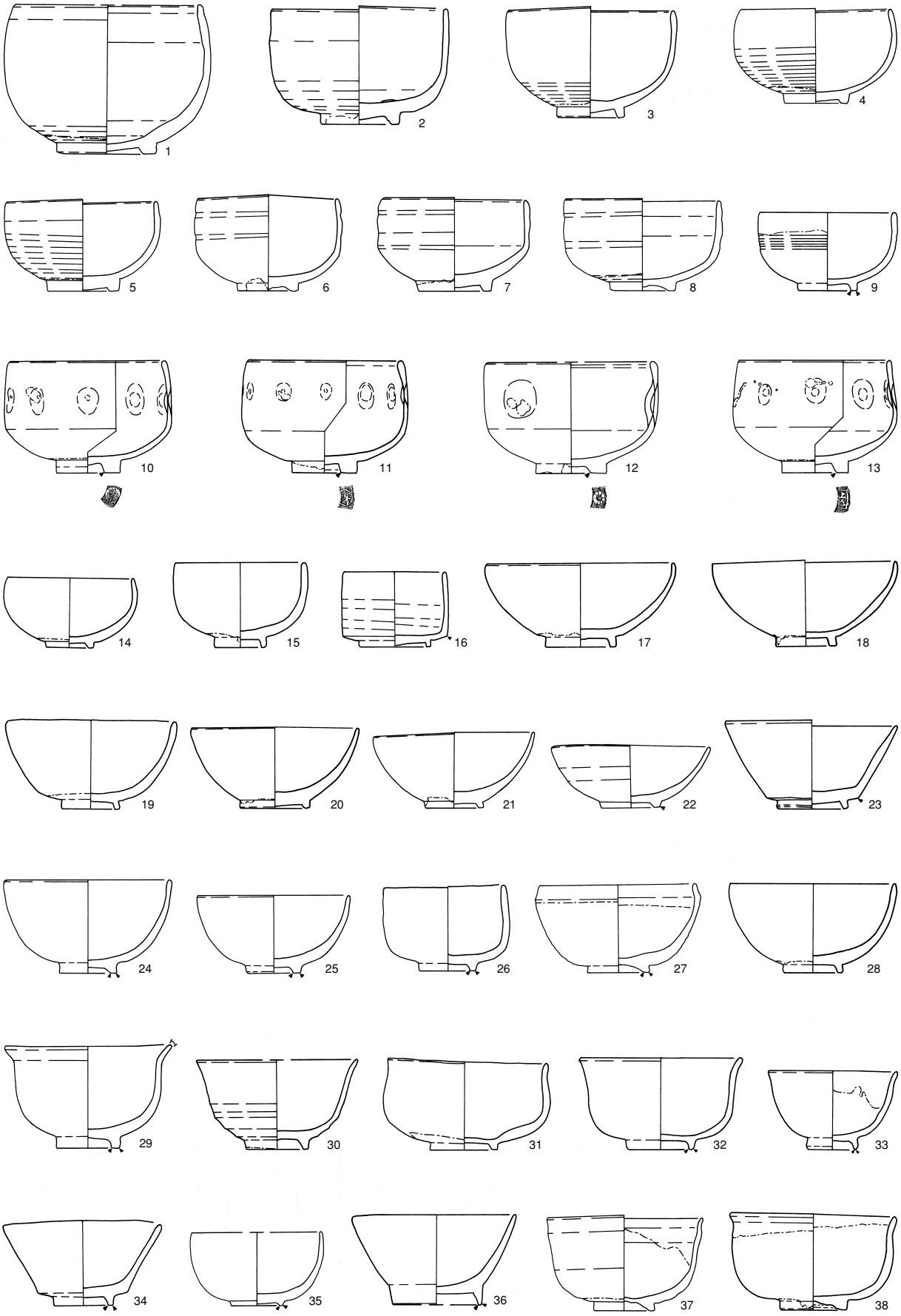
６～８は腰が張る二段の段を有する碗。渦巻高台、灰釉鉄釉流し。TC-1-fに属する。底部無釉。８は渦巻高台の渦巻きがほとんど判別できない。内面に擦痕が見られる。９は内面･外面上半灰釉、外面下半錆釉。腰錆碗。TC-1-uに属する。10～13は漆黒釉に長石散らし。幅広高台。高台内にも釉が掛けられている。畳付に刻印あり。挙骨茶碗。TC-1-pに属する。10は刻印有り。内面に擦痕が多く見られる。11は刻印「㊦」。内面に擦痕がわずかに見られる。12は刻印有り。13は刻印「上△」。内面に擦痕がわずかに見られる。14は半球形の小振りの碗。口縁部が内湾している。TC-1-mに属する。灰釉。15～17は碗でTC-1に属する。15は灰釉に呉須絵。慣用名「長の」。16は筒形碗。内外面鉄釉が掛けられている。17は長石釉に色絵。色絵はほとんど剥落している。全面に貫入が見られる。

18～21は体部が「ハ」の字状に開き、鉄絵具･呉須で絵が描かれている。柳茶碗。TC-1-gに属する。高台無釉。18は鉄絵でかなり崩れた柳文。19は鉄絵で松。高台一部面取り。20は呉須絵で柳文。21は朝顔形、鉄絵で柳文。22～25はトビガンナ状の押型文、掛け分け。鎧茶碗。TC-1-rに属する。高台内施釉。22は灰釉緑釉掛け分け。内面緑釉。23は灰釉緑釉掛け分け。内面緑釉。24は腰が張る碗。灰釉緑釉掛け分け。内面緑釉。内面全体に褐色の付着物が見受けられる。25は灰釉鉄釉掛け分け。内面外面口縁部鉄釉。他の鎧茶碗と比較すると、トビガンナ状の押し形文や口縁部の作りが非常に丁寧である。高台内は丸く抉られている。

26は緑釉丸碗。TC-1-xに属する。底部無釉。27･28は刷毛目。TC-1-sに属する。灰釉。底部無釉。27は内外面とも打刷毛目。28は外面渦巻状、内面打刷毛目。29･30は口縁部端反、白化粧に鉄絵。奈良茶碗。TC-1-yに属する。全面に貫入が入っている。29は外面に鉄絵。30は内面に鉄絵。31は碗でTC-1に属する。腰張り、口縁部端反。長石釉。外面に鉄絵。全面に貫入が入っている。32は丸碗。太白手。TC-1-hに属する。呉須で文様が描かれている。見込み星梅鉢。33は広東碗。太白手。TC-1-jに属する。呉須で文様が描かれている。見込み星梅鉢。34はTC-1に属する。朝顔形。灰釉口縁部鉄釉瑠璃釉掛け分け。体部に鉄絵。35･36は灰釉口縁部瑠璃釉掛け分け。TC-1-aeに属する。高台内施釉。35は腰張り、口縁部端反。36は口縁部端反。37･38はTC-1に属する。37は腰張り、口縁部端反。鉄釉･うのふ釉流し。渦巻高台。底部無釉。見込みにも渦巻きが見られる。38は腰張り、口縁部端反。灰釉。口縁部青緑釉。渦巻き高台。

39･40は平碗。TD-1-hに属する。39は色絵で舟文。40は灰釉。無文である。41は高台径が小さい半球形の碗。薄手。TD-1-bに属する。色絵。高台無釉。42はTD-1に属する。灰釉。

43はTB-1-bに属する。灰釉に鉄絵。笹文が描かれている。腰張り、口縁部端反。底部無釉。高台外周面取り。高台内の削り込みが深く、生地に縮れが見られる。京焼風陶器を焼く志田窯の内、志田東山２号窯からは口縁部が直立している碗で、高台部無釉のものが検出されている。鉄絵で笹文が描


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

Ⅲ-4図　SK01　陶　　器（1）

Ⅲ-PL.8　SK01　陶　　器（1）

29　30　31　32　33

34　35　36　37　38

39　40　41　42　43

44　45　46　47　48　49

50　51　52　53　54　55　56　57　58　59

Ⅲ-PL.9　SK01　陶　　器（2）

かれている。京焼風陶器の規格が崩れていく中で生まれたものであろうとされており、18世紀初頭に比定される京焼系陶器の影響を指摘されている。鉄絵の笹文が43の方が窯資料よりもより簡略化されているようであるが、これらの流れをくむものであろう。本遺構からは他にもう1点類似資料が検出されている。

44～49は小杉茶碗。TD-1-dに属する。44～48は鉄または呉須で若杉文。44は大振り。呉須で若芽が、鉄絵で根の部分まで描かれている。45は鉄絵で若芽と根が描かれている。46は灰釉鉄絵。47･48は灰釉呉須絵。若杉は4～6本の線で簡略化して描かれている。49は大振りで無文。50･51は体部中位に大きな凹みあり。TD-1-kに属する。灰釉。内外面貫入。渦巻高台。高台外周面取り。50は大振り。51は小振り。52は碗でTD-1に属する。腰張り。灰釉。内外面貫入。高台が薄く削り出されている。53は端反碗。小振りで器面には細かい貫入。TD-1-gに属する。灰釉。底部無釉。54･55はTD-1に属する。54は端反碗。灰釉鉄絵。高台内施釉。高台脇二重圏線。55は灰釉に口縁部緑釉流し。56は端反形の碗。口縁部緑釉･体部灰釉の掛け分け。TD-1-eに属する。

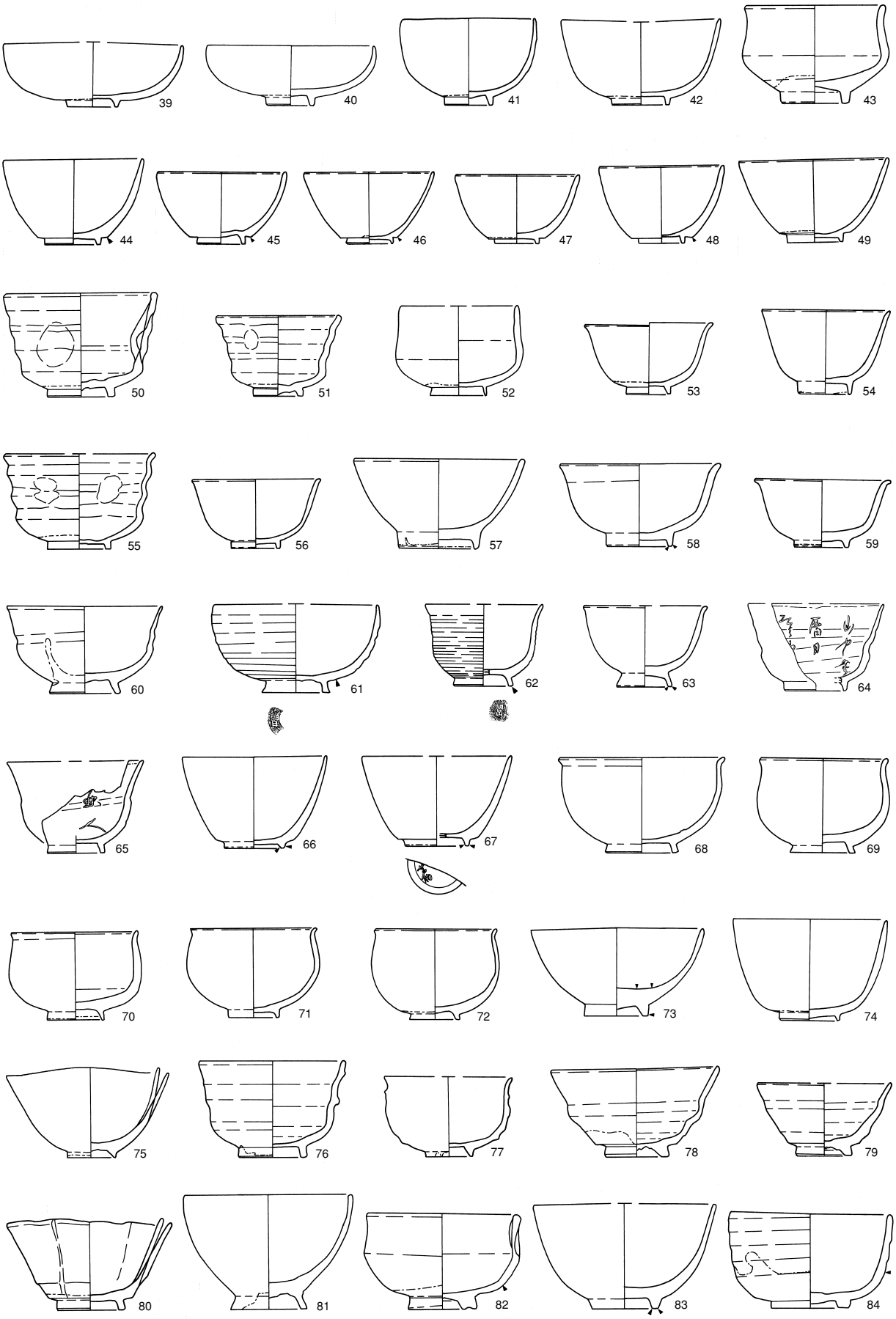
57～59は外面は灰釉。白土と鉄絵で折枝梅花文。内面は白土。57は広東碗。TC-1-afに属する。58･59は腰張り、口縁部端反。TC-1-zに属する。58は大振りの碗。59は小振りの碗。

60～72はTD-1に属する。60は灰釉。見込み象嵌。見込み目跡5ヶ。底部無釉。渦巻高台。高台外周面取り。61は小振りの碗。白土･灰釉。見込み砂目5ヶ。渦巻高台。底部無釉。高台内銘「朝日」。62は白土･灰釉。見込み目跡残存2ヶ。見込み象嵌。高台外周面取り。高台内無釉。高台内銘「朝日山」。63は小振りの碗。白土･灰釉。全面に貫入。高台は「ハ」の字に開く。高台内灰釉。64は口縁部端反の碗。内面白土･灰釉。外面無釉。刻字。高台外周面取り。65は内面白土･灰釉。見込み目跡残存2ヶ。外面無釉。刻字。高台外周面取り。66は杉形の碗。灰釉。高台内施釉。高台内銘あり、おそらく「せ戸助」と思われる。67は杉形の碗。灰釉。高台内施釉。高台内銘「せ戸助」。68は大振りで、腰張り、口縁部端反の碗。内面白土･灰釉。外面錆釉･上絵。上絵は白土と緑青色顔料･鉄を用いて若草文を描く。見込み目跡3ヶ。69は腰張り、口縁部端反の碗。胎土灰褐色。内面白土･灰釉。外面白土･錆釉。高台外周面取り。高台内施釉。高台内銘「岩倉山」。70は腰張り、口縁部端反の碗。内面は白土･灰釉。口唇部呉須。外面灰釉。高台が薄く削り出されている。高台内施釉。71は腰張り、口縁部端反の碗。鉄泥･白土･灰釉。高台内鉄泥。72は腰張り、口縁部端反の碗。鉄泥･白土･灰釉･緑釉。高台内鉄泥。

73はTZ-1に属す。柿釉･飴釉の掛け分け。胎土は明赤褐色。見込み蛇ノ目釉剝ぎ。高台無釉。底部ケズリ出し右回転。産地は不明であるが、同様の特徴を持つ鉢（114）も検出している。74は杉形の碗。TZ-1に属す。胎土は灰褐色。灰釉。白泥象嵌。渦巻高台。高台無釉。底部ケズリ出し左回転。相馬駒焼菊花文象嵌茶碗と思われる。新宿区水野原遺跡（財団法人新宿生涯学習財団 2003）C-001-528号遺構でも同様の碗が出土している。この遺構からは、1810～1860年代の遺物が多く検出されており、尾張藩川田久保屋敷からの廃棄と、水野家下屋敷からの廃棄が考えられている。

75～77は駒絵碗。TJ-1に属する。75は灰釉。外面口縁部青緑釉流し掛け。見込み走り駒。渦巻高台。高台無釉。76は鉄釉。内面口縁部鉄釉流し掛け。高台無釉。77は青緑釉。内面口縁部青緑釉流し掛け。見込み走り駒。高台無釉。

78･79は藁灰釉開口碗。渦巻高台。TH-1-aに属する。胎土灰白色。藁灰釉鉄釉流し掛け。見込み渦巻き状の削り。高台外周面取り。底部無釉。78は大振り。79は小振り。80は藁灰釉開口碗。渦巻高台ではない。TH-1-aに属する。胎土灰白色。藁灰釉鉄釉流し掛け。見込み渦巻き状の削り。高台外周面取り。底部無釉。輪花に成形。


39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84

Ⅲ-5図　SK01　陶　　器（2）

Ⅲ-PL.10　SK01　陶　　器（3）

81 ～ 84 は碗でTZ-1 に属する。81 は灰釉。底部無釉。呉器茶碗を意識している器形である。高台内に生地の縮れが見られる。底部ケズリ出し左回転。82 は口縁部端反の碗。灰釉。うのふ釉。底部無釉。幅広高台。83 は胎土灰白色、白色粒子混入。灰釉、鉄絵。高台内施釉。内面付着物あり。底部ケズリ出し左回転。84 は腰張り灰釉。胴部下半から無釉。外面にロクロ目を強く残す。胎土淡黄色。大小不揃いの黒色粒子（鉄分）混入。外面は黒色粒子（鉄分）が浮き出て斑点状に見える。底部ケズリ出し右回転。

85 ～ 98 は皿である。85･86 は灰釉摺絵皿。御深井。TC-2-e に属する。85 は小皿。灰釉呉須絵。高台内施釉。86 は中皿。灰釉鉄絵。見込み目跡５ヶ。高台内施釉。87 は灰釉摺絵。輪禿皿。TC-2 に属する。灰釉呉須絵。鉄絵。輪禿部分に鉄奨が塗られている。胎土は灰白色。器形は高台のケズリ出しが甘くなって、畳付けがやや丸みを帯びて灰釉摺絵皿の末頃に類似しているが、同様の資料は窯資料からは確認されていない。日影町Ⅱ（都立学校遺跡調査会 1999）でも類似の資料が検出されている。88 は幅広高台。鉄、呉須による絵付。石皿。TC-2-fに属する。大皿。灰釉。呉須絵･鉄絵。見込み目跡５ヶ。89･90 は見込み外周に鉄絵による扁平な渦巻文。馬の目皿。TC-2-g に属する。白土･灰釉。鉄絵。見込み目跡５ヶ。底部無釉。幅広高台。89 は中皿。90 は大皿。91 は輪高台。太白手。TC-2-h に属する。灰釉呉須絵。見込み花文。高台内施釉。92 ～ 94 は柿釉。灯明皿、小振り。TC-2-o に属する。92 は見込みに重ね焼きの溶着痕。口唇部油付着。94 は見込みと底部に重ね焼きの溶着痕。95･96 は灰釉丸皿。TD-2-a に属する。櫛目。貼り付け文。裏面無釉。裏面口縁部油付着。95 は見込み目跡３ヶ。

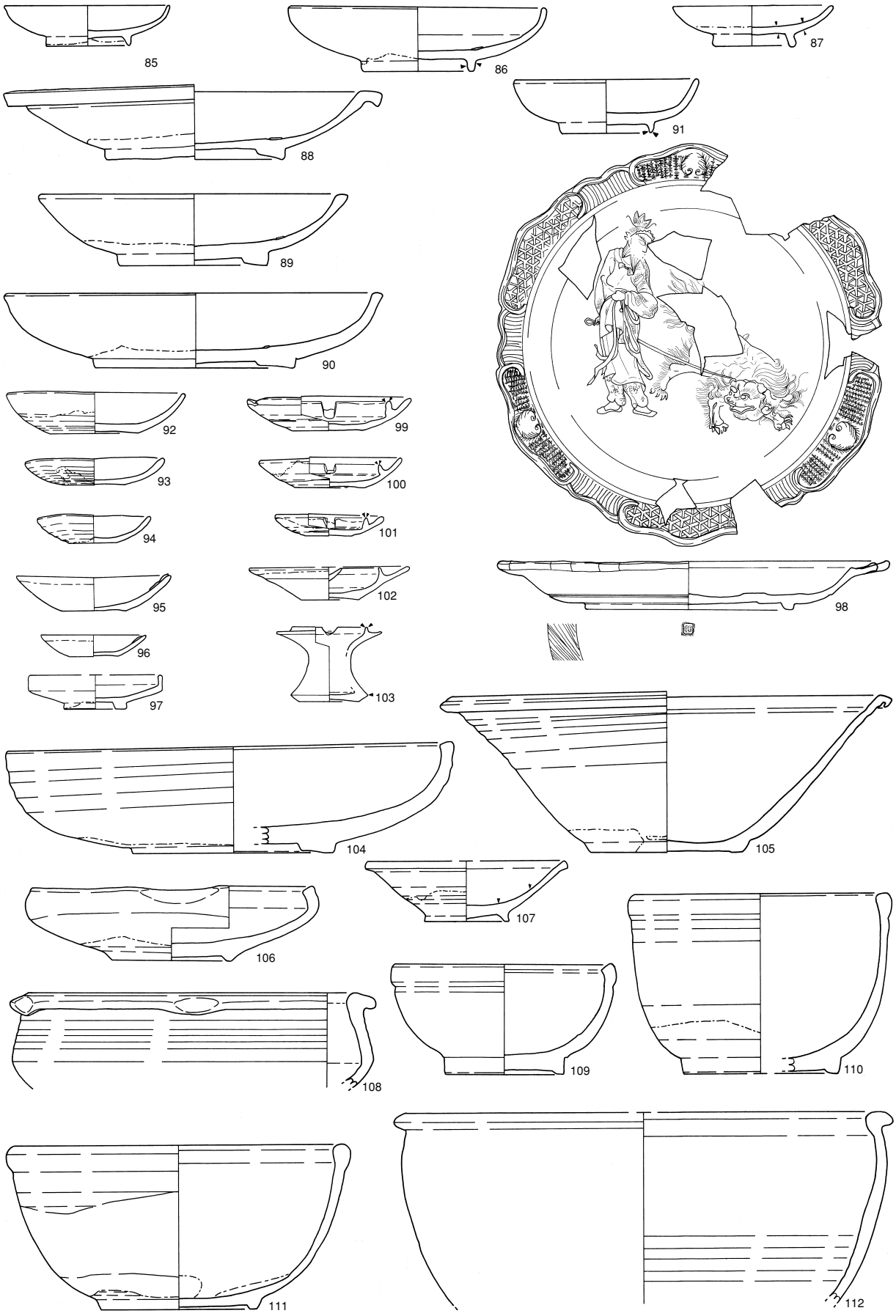
97 はTD-2 に属する。口縁部が垂直に立ち上がる皿。灰釉。幅広高台。高台外周面取り。底部無釉。

98 はTZ-2 に属する。軟質施釉陶器。型皿。緑釉。口縁部に文様帯を持ち、型により人物と獅子が描かれている。蛇ノ目凹形高台状の底部であるが、全面に施釉されている。高台脇には二重に圏線が書かれ、それに挟まれるように斜めに櫛目文が描かれている。高台内中央に銘「民」。ボストン美術館にあるモース･コレクションに類似の皿が見受けられ、同笵の可能性もある。他にも同笵と思われる三彩の皿が確認されている。源内焼。

99 ～ 101 は油受け皿。脚なし。TC-40-c に属する。錆釉。受け部裏面に重ね焼きの溶着痕。102 は油受け皿。脚付、灰釉。TD-40-a に属する。103 は油受け皿。脚無、灰釉。TD-40-b に属する。

104 ～ 114 は鉢である。104･108 はTC-5 に属する。灰釉。104 は見込み目跡残存２ヶ。底部無釉。108 は底部欠損。折り返し口縁、凹みあり。灰釉に緑釉･鉄釉流し掛け。105 は笠原鉢。鉄絵。口縁部外反。TC-5-a に属する。文様の崩れが見られる。106 は輪禿鉢。灰釉。口唇部外削ぎ状。TC-5-c に属する。底部無釉。107 は水盤。灰釉。碁笥底。口縁部１ヶ所凹み。TC-5-fに属する。見込み目跡４ヶ。底部無釉。109 ～ 112 はこね鉢。TC-5-1に属する。灰釉。109 は見込み目跡３ヶ。高台無釉。110 は底部無釉。111 は高台無釉。112 は大振りで、口縁の折り返しが顕著に残っている。113･114 はTZ-5 に属する。113 は鉄釉。内外口縁部なまこ釉流し掛け。胎土は褐灰色。底部ケズリ出し右回転。高台内施釉。114 は柿釉･飴釉。胎土は明赤褐色。見込み蛇ノ目釉 剝ぎ。高台無釉。底部ケズリ出し右回転。産地は不明であるが、同様の特徴を有する碗（73）も検出している。

115 ～ 120 は坏である。115 はTC-6 に属する。灰釉。底部無釉。116 ～ 119 はTD-6 に属する。116 は灰釉･色絵。底部無釉。高台外周面取り。117 は灰釉･鉄絵。見込み目跡４ヶ。底部無釉。高台外周やや粗めの面取り。118 は灰釉･鉄絵。高台内無釉。高台外周面取り。119 は白土･灰釉。内面無釉。高台内施釉。高台三角。120 は大堀･相馬系の坏。TJ-6 に属する。青緑釉。内面口縁部青緑


85
86
87
88
91
89
90
92
99
93
100
94
101
95
102
98
96
103
97
104
105
106
107
108
109
110
111
112

Ⅲ-6図　SK01　陶　　器（3）

85

86

87

88

89

90

98

Ⅲ-PL.11　SK01　陶　　器（4）

92

93

94

91

95

96

97

102

103

99

100

101

106

104

107

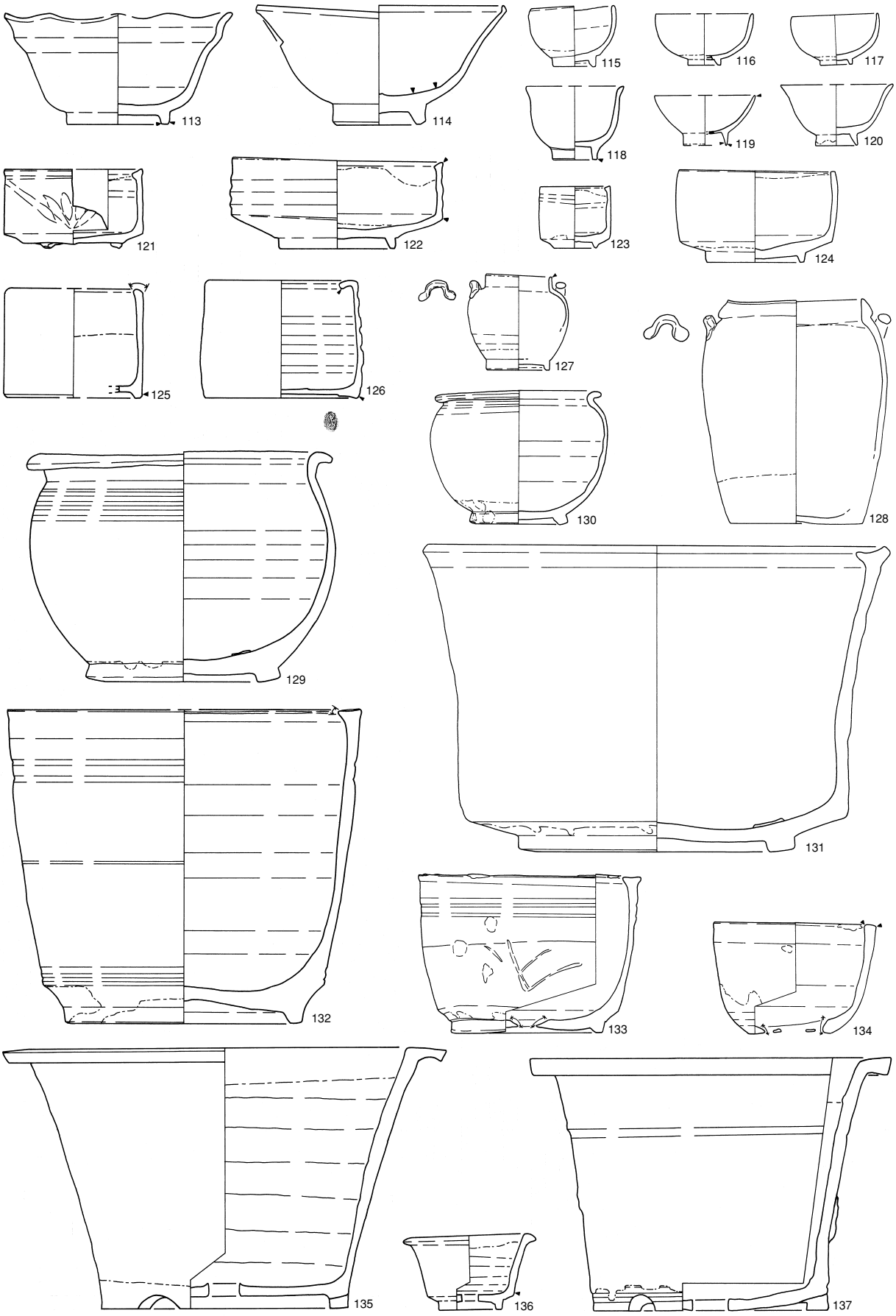
105

108

109

110

Ⅲ-PL.12　SK01　陶　　器（5）


113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137

Ⅲ-7図　SK01　陶　　器（4）

111

112

114

113

125

126

115

116

117

118

119

120

120

121

122

123

124

127

128

129

130

131

138

Ⅲ-PL.13　SK01　陶　　器（6）

釉流し掛け。見込み走り駒。高台無釉。

121 ～ 123･125･126 は香炉･火入れ。121 は褐釉で半菊状のしのぎのある香炉･火入れ。TC-9-d に属する。貼り付け三脚。122･123 はTC-9 に属する。灰釉。底部無釉。122 は口唇部及び内面無釉。

124 は蓋物でTC-13 に属する。鉄釉。

125 は筒形の香炉･火入れ。TD-9-c に属する。白土。灰釉。口縁部緑釉流し。口唇部に敲打痕。底部無釉。白化粧のみ。126 はTZ-9 に属する。鉄釉。しのぎ。底部糸切り痕あり。底部銘「丸い」。「丸い」の刻印はないが、滋賀県蒲生町石塔窯出土資料に類似の製品が多く見受けられ、TD の可能性が高い（滋賀県教育委員会 1999）。

127 ～ 134 は壺･甕である。127･128 は壺･甕でTC-15 に属する。灰釉。底部無釉。127 は高台あり。128 は平底。129･130 は柿釉･灰釉流し。底部及び器面下端露胎。口縁部外反。TC-15-b に属する。129 は見込み目跡４ヶ。高台畳付にも目跡４ヶ。大振り。130 は小振り。131 水甕。灰釉に鉄釉や緑釉を流す。流水状の文様。斑状の刺突。TC-15-c に属する。見込み目跡５ヶ。底部墨書「[？][？]」。132 ～ 134 は壺、甕。柿釉。底部及び器面下端露胎。平縁。赤津半胴･銭甕。TC-15-a に属する。植木鉢として使われた物であろう。132 は赤津半胴。口唇部目跡残存３ヶ。二次的に底部穿孔１ヶ。底部釉ふき取り。133 は赤津半胴。口唇部目跡８ヶ。134 は銭甕。二次的に底部穿孔５ヶ。

135 ～ 137 は植木鉢。TC-21 に属する。底部穿孔１ヶ。底部無釉。135 は灰釉。高台切れ込み４ヶ。136 は灰釉。輪高台。137 は緑釉。押印貼付文。目跡見込み４ヶ、高台畳付４ヶ。高台切れ込み３ヶ。

138 は壺･甕。TC-15 に属する。灰釉。水差し。底部欠損。胴部下半がやや膨らみ、凹みを持つ。

139･140 は「ハ」の字状に開く片口鉢。TC-23-c に属する。底部無釉。139 は灰釉。見込み目跡４ヶ。直接、火に掛けて使用したためか、底部スス付着。140 は灰釉。見込み目跡３ヶ。141 はTZ-23 に属する。胎土灰白色。柿釉。底部欠損。

142 は水注。灰釉･摺絵。御深井。TC-27-c に属する。143 は円筒形の体部に注口。把手、蓋付。汁次。TC-27-b に属する。柿釉。

144 ～ 147 は蓋である。144 は碗の蓋でTC-00 に属する。長石釉。鉄絵。145 は水注の蓋。TC-00-e に属する。橋状のつまみを持つ。灰釉。裏面無釉。146 は壺･甕あるいは水注の蓋でTC-00 に属する。147 はボタン状のつまみを持つ汁次の蓋。TC-00-c に属する。146･147 は柿釉。

148 ～ 151 は合子。148･149 はTC-18 に属する。灰釉。148 は大振り。149 は小振り。150･151 は筒形合子。TD-18-b に属する。灰釉。平底。底部面取り。152 ～ 154 は筒形合子の蓋。TD-00-i に属する。152 は灰釉･鉄絵。153 は、灰釉･鉄絵･呉須絵。154 は灰釉。

155･156 は餌入れ。TC-30 に属する。灰釉。

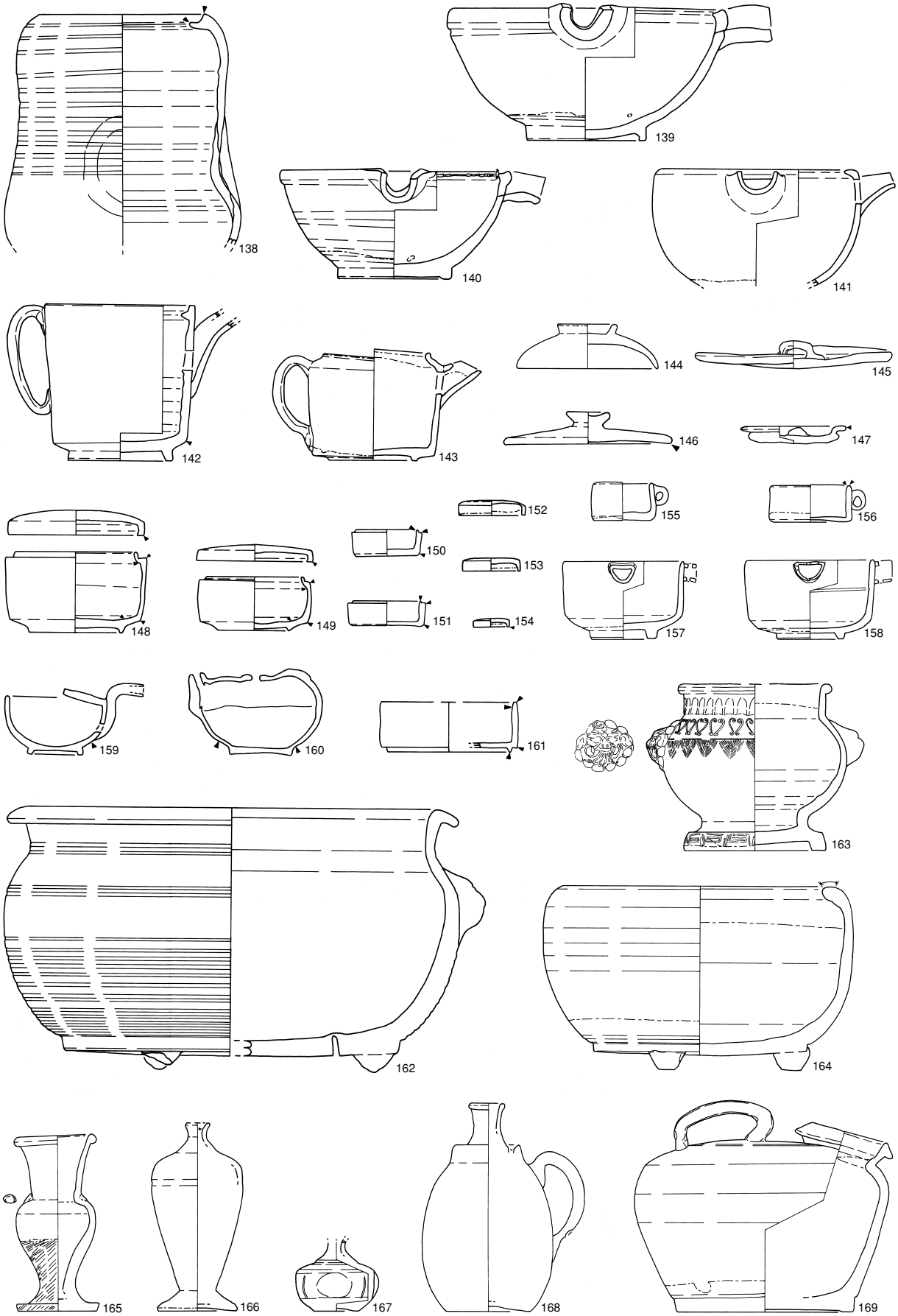
157･158 は柄杓。TD-32 に属する。底部無釉。高台外周面取り。157 は灰釉。内面中位に鉄で線書き。158 は柿釉。内面中位に沈線。

159 は水滴。TD-19 に属する。灰釉。陽刻。「本山」。底部無釉。高台外周面取り。160 は水滴。TC-19 に属する。菊文。灰釉･呉須絵。型作り。内面布目痕。高台無釉。

161 は蓋物。段重。TD-13-b に属する。灰釉･色絵。草花文。

162･164 は火鉢。TC-31 に属する。162 は型押し文。緑釉、錆釉。口唇部敲打痕。底部目跡５ヶ。164 は鉄釉。底部目跡残存３ヶ。163 は瓶掛。TC-31-a に属する。型押し文。緑釉。

165 は口縁部朝顔形の花生け。TC-22-b に属する。灰釉･鉄釉掛け分け。糸切り痕右回転。166 は


138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169

Ⅲ-8図　SK01　陶　　器（5）

132

133

134

135

136

137

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

Ⅲ-PL.14　SK01　陶　　器（7）

155

156

157

158

159

160

161

163

162

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

Ⅲ-PL.15　SK01　陶　　器（8）

TZ-22に属する。胎土褐灰色。灰釉。底部無釉。

167は備前系の瓶。TE-10に属する。化粧土。

168は油徳利。TC-41に属する。柿釉。169は溲瓶。TC-28に属する。灰釉。

170は灰釉の雪平鍋。TZ-42-aに属する。1脚（残存）。把手は上面のみ型押しで、草花文。底部ス ス付着。171～174は紐状把手貼付の柿釉鍋。TZ-33-aに属する。171は胎土乳白色。見込み目跡3ヶ。底部スス付着。172は底部欠損。胎土乳白色。左右把手に銅線が巻き付けられている。173は胎土灰褐色。見込み目跡3ヶ。底部の脚間に指様の釉痕が3ヶ見受けられる。底部スス付着。174は胎土灰褐色。小型。底部に、ススの付着は見られない。

175は長筒形で横手のちろり。TD-36-aに属する。灰釉･色絵。白土･緑･青色顔料･鉄を用いて、草花文を描く。176は燗鍋。TD-17に属する。柿釉。177は銚子形で釣り手の水注。TD-27-aに属する。灰釉･鉄絵。

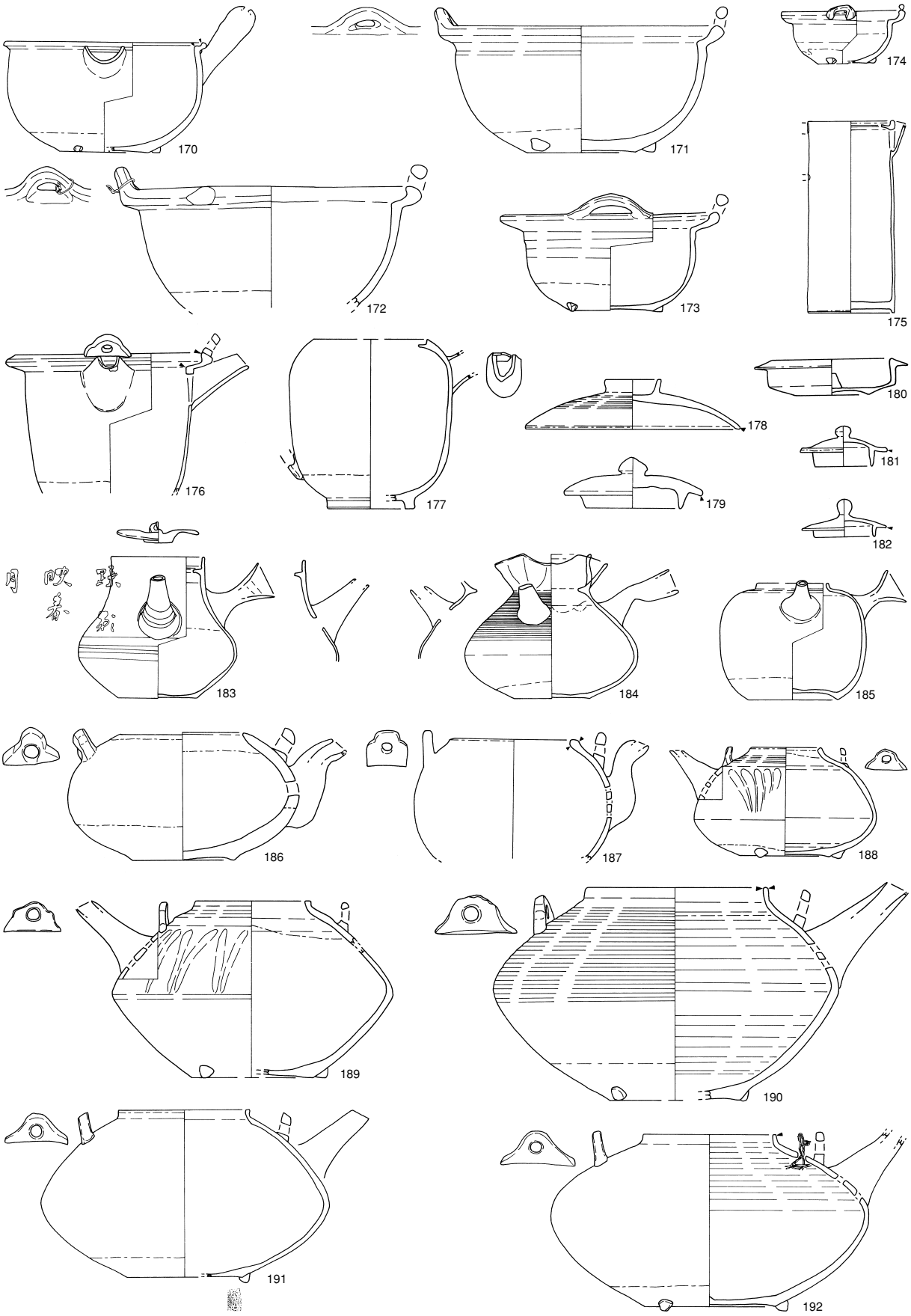
178は行平鍋の蓋。TZ-00-jに属する。灰釉。179は土瓶の蓋。鉄釉。TZ-00-eに属する。胎土は明赤褐色。厚手でぼってりとしている。180は土瓶の蓋。TZ-00-gに属する。灰釉。181･182は土瓶の蓋。181はTZ-00、182はTD-00に属する。灰釉。球状のつまみ。182は色絵。白土･緑･青色顔料･鉄を用いて、山水文を描く。

183～185は急須。TZ-16に属する。胎土は灰白色。薄手で硬質感がある。183は内面に灰釉。外面は白泥で5文字の漢字。平底。底部スス付着。蓋も検出されている。184は緑釉。内面に灰釉。平底。底部スス付着。東大構内の遺跡理学部7号館地点などでも検出されている。185は灰釉･鉄絵。イッチン。内面無釉。碁笥底。底部にススは付着していない。

186～198は土瓶である。186はTC-34に属する。柿釉。注口穴が3ヶ。187はS字状注口。錆絵染付。TZ-34-mに属する。白土･鉄･呉須を用いて折枝梅花文を描く。注口穴が7ヶ。188･189はしのぎのある鉄釉土瓶。TZ-34-lに属する。2脚（残存）。188は注口穴が2ヶ。189は注口穴が4ヶ。190～193は灰釉土瓶。TZ-34-gに属する。190は2脚（残存）。底部スス付着。注口穴が4ヶ。191は底部刻印「丸い」。底部スス付着。注口穴が4ヶ。126の香炉･火入れと同一産地と思われる。192は3脚。底部スス付着。釣手掛けの部分を銅線で補修。釣手掛けの上部を丸く穿孔し、束ねた銅線を通し、抜けないように四角い銅板を2枚内側に挟み込んでいる。注口穴が4ヶ。193は2脚（残存）。底部スス付着。注口穴が2ヶ。194は青緑釉の土瓶。TZ-34-aに属する。内面灰釉。注口穴が4ヶ。195はTZ-34に属する。灰釉･鉄絵。底部スス付着。銅製の釣手が残存している。釣手は2本の棒状の物を、中央部分において扁平にして重ね合わせ2本の釘状の留め金で繋ぎ、湾曲を作っている。注口穴が3ヶ。196は鉄釉の土瓶。TZ-34-eに属する。注口穴が1ヶ。胎土は橙色で白色粒子混入。大振りの3脚。底部には成形時にできたと思われる細かい筋が入り、中央部分がやや窪んでいる。底部スス付着。197は鉄釉の土瓶。TZ-34に属する。大振りの3脚。注口穴が3ヶ。196に胎土、作りなどは類似しているが、胴部の器形が196は丸みを帯びているのに対し、197はそろばん形である。酒器の可能性もある。底部に顕著なスス痕は見受けられなかった。196･197ともに底部に重ね焼きの溶着痕がみられる。198はDZ-34に属する。底部銘「雲光山」。

199はTDに属する。釘隠（？）。灰釉･鉄絵。内面無釉。

200～214は擂鉢である。200はTC-29に属する。柿釉。中央の擂目は同心円。平底。201～214は堺擂鉢。TL-29に属する。201は櫛目が9本。擂目は放射パターン。202は櫛目が8本。擂目はクロスパターン。平底。縁帯の下端が丸い。203～213、擂目は三角パターン。縁帯の下端が強く張り出す。203は櫛目が9本。底部内側に凹線を巡らす。204～207は櫛目が9本。平底。207


170
171
174
172
173
175
176
177
178
180
179
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192

Ⅲ-9図　SK01　陶　　器（6）

175

176

177

178

179

180

181

182

183

183

184

185

186

187

188

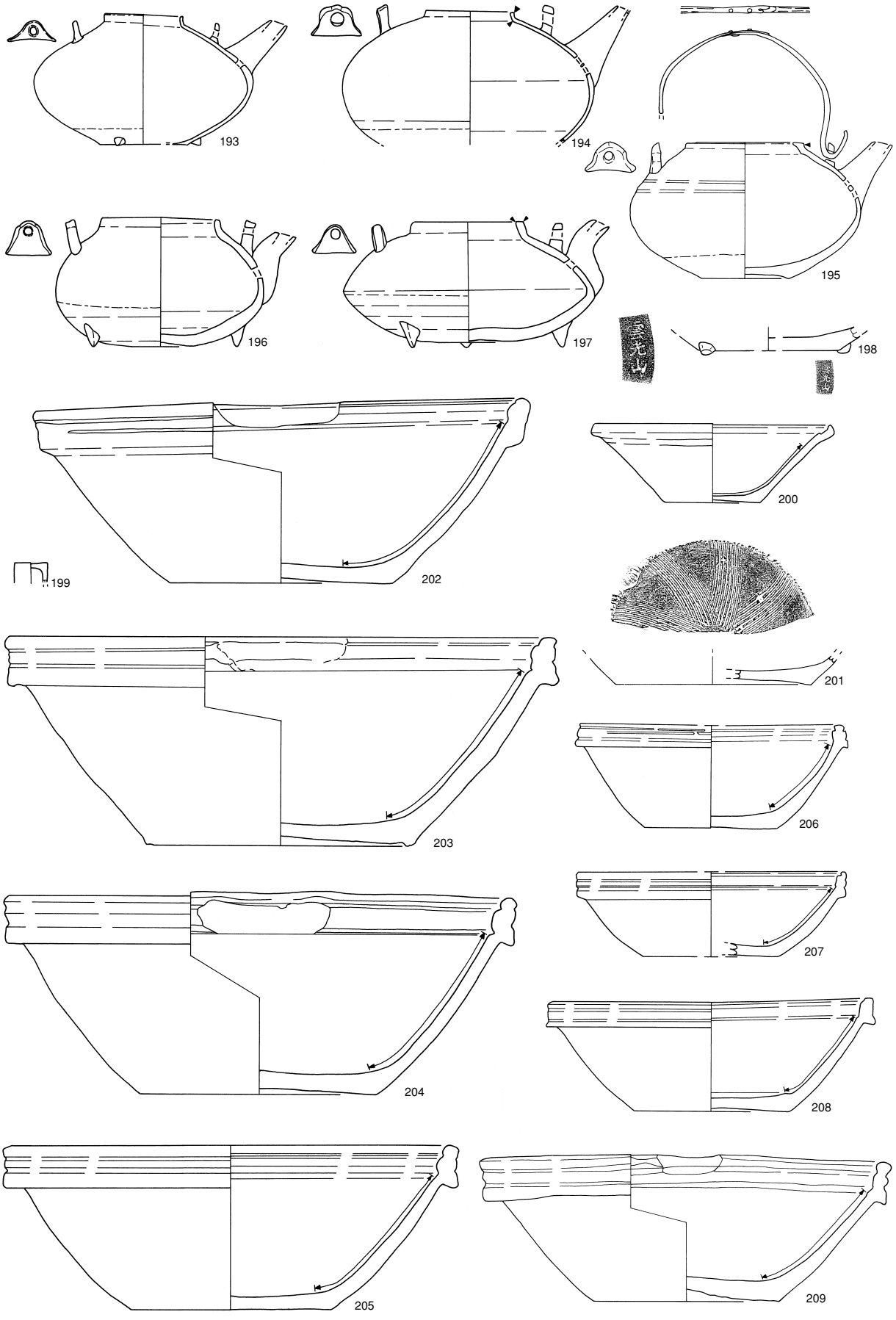
189

190

191

192

Ⅲ-PL.16　SK01　陶　　器（9）



Ⅲ-10図　SK01　陶　　器（7）

193

194

195

196

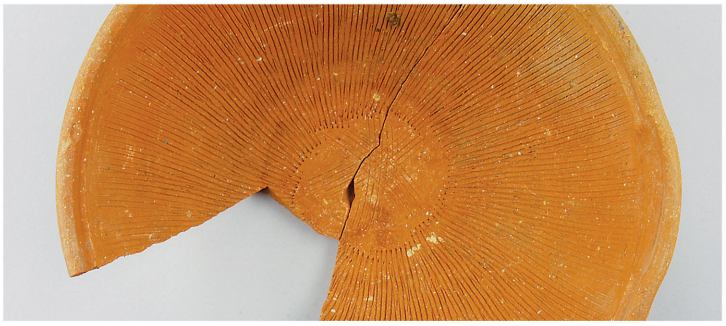
197

198

199

200

201


202

206

203

207

204

208

Ⅲ-PL.17　SK01　陶　　器（10）

205

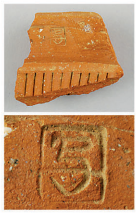
209

210

211

212

215


214

213

216

217

Ⅲ-PL.18　SK01　陶　　器（11）

内面朱付着。化粧土。208内面スス付着。櫛目が８本。平底。209は櫛目が８本。平底。210は櫛目が７本。底部内側に凹線を巡らす。211は櫛目が８本。底部内側に凹線を巡らす。212は櫛目が８本。平底。213は櫛目が９本。平底。214は口縁部刻印「写」。

215は壺の蓋。TC-00に属する。全面に粘土を厚さ2.0mm～10.0mmに貼り付けている。216･217は壺。TC-15に属する。全面に粘土を厚さ2.0mm～10.0mmに貼り付けている。粘土には4.0mmほどの白色粒子が混ぜられている。内面には付着物がほとんど見られない。同様の状態の物が８個体検出されており、別の場所にある何らかの生産遺構で使用された後、廃棄されたと考えている。また、貼り付けられている粘土の状況から、蓋を逆さまにした状態で口縁部に載せ、粘土で固めたようにも見える。

218は柿釉。舟徳利。TC-10-fに属する。219は錆釉。TF-10に属する。220･221は柿釉徳利。献上備前写し。TC-10-gに属する。

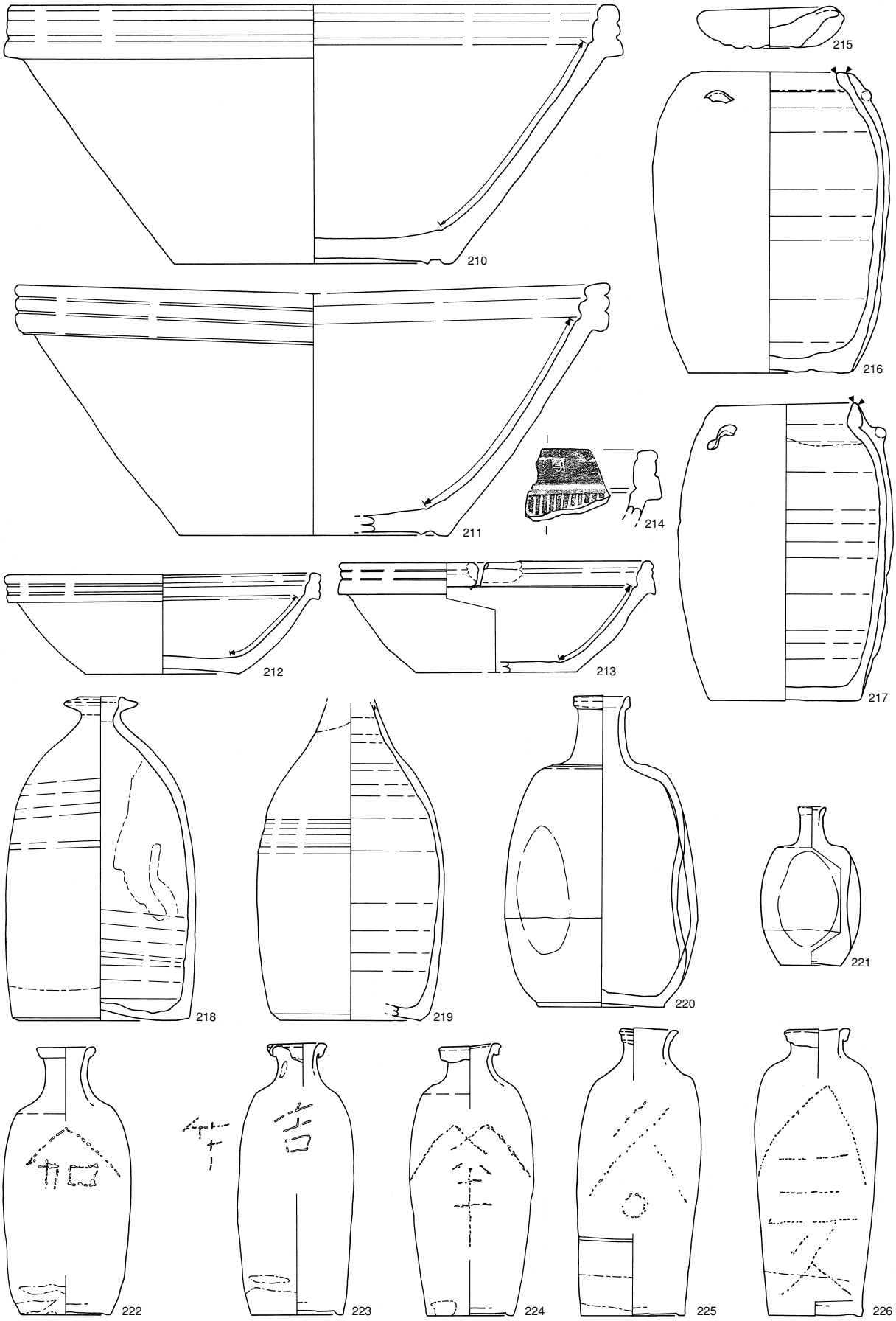
222～233は二合半徳利。釘書。222･223･225･228･229･233は底部釉拭き取り。最大径は胴上半。TC-10-aに属する。他は、底部つけ掛け。最大径は胴上半。肩が張り、円筒形に近い。TC-10-cに属する。222は「八加」。223「吉」、「？」。224「𠆢半」。225「久〇」。226「八三久」。胴部下端無釉部に「久」字の釘書上一部に墨書の痕跡。227「冂」。228「八若」。229「万とく」。230「久上」。231「高サキ」。232「⿴」。233「太」、「万」。

234～239は五合徳利。TC-10-dに属する。いずれも口唇部肥厚。首の短い、肩の張るタイプ。234「高サキ」。235「いセや」。236「久〇」。237「久上？」。238「⿴」。239「カメ」。

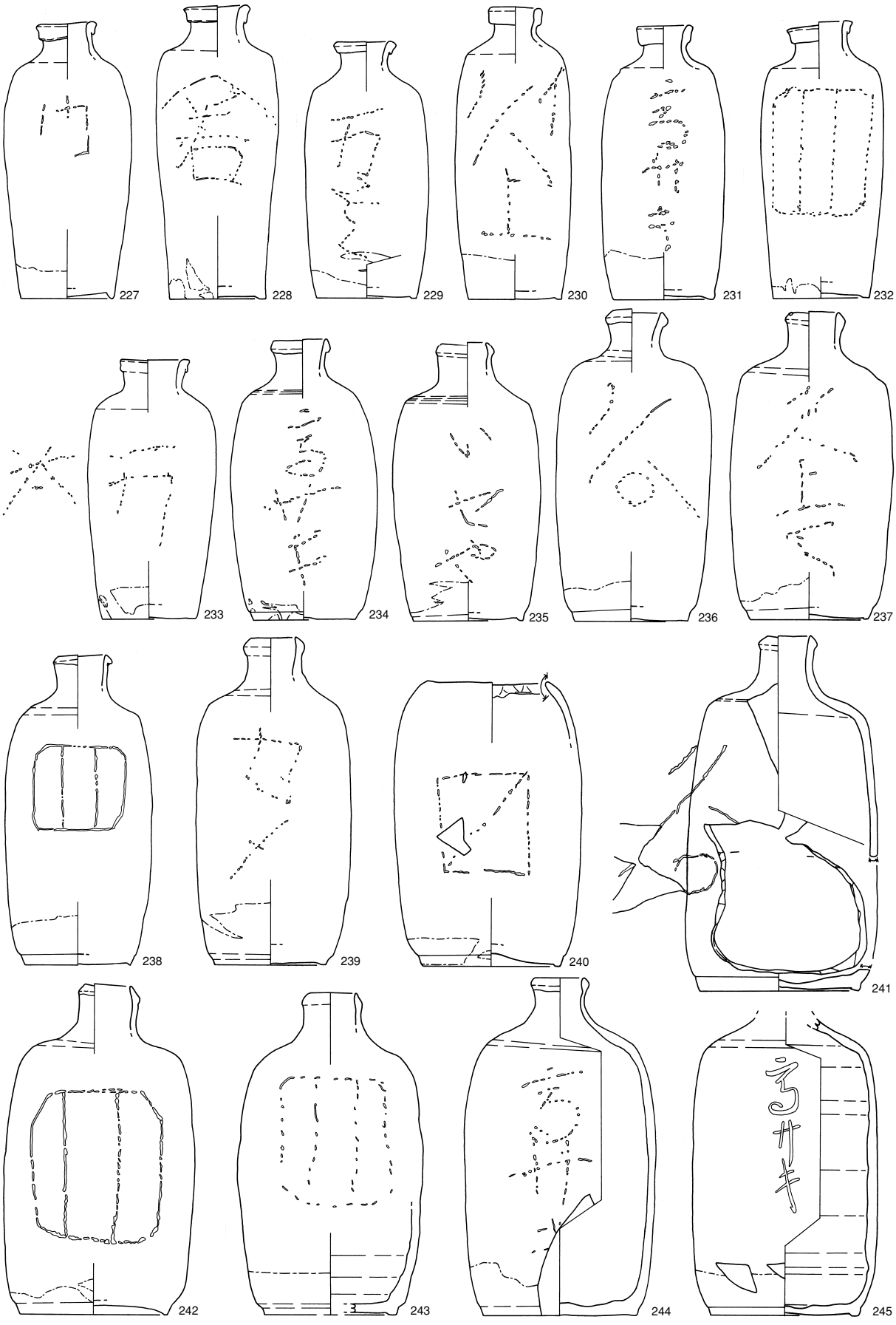
240～245は１升徳利。TC-10-eに属する。いずれも口唇部肥厚。首の短い、肩の張るタイプ。240は肩上部を打ち欠いて、容器として転用した物であろう。「⿸」。241「久〇」。242「⿴」。243「⿴」。244「高サキ」。245焼成前に、棒状工具で「高サキ」。

徳利に付けられている釘書きとヘラ書きを判読し、判別可能な釘書きを、線刻と点刻に分類してみた。内訳をⅢ-1･2表に示した。線刻が35個体、点刻が377個体であった。線刻の種類は17種類、点刻の種類は82種類であった。この中では、同一の酒屋のものも、含まれていると思われる。この内「⿴」が58個体、「高サキ」56個体、「久〇」53個体、「カメ」28個体であった。

徳利の胴部に刻まれているものには後から付けられた釘書きと、釉をかける前にヘラ書きされた物がある。釘書きにも線刻と点刻があり、線刻による釘書きのあと次第にⅦ期以降点刻が主流になる。



Ⅲ-11図　SK01　陶　　器（8）



Ⅲ-12図　SK01　陶　　器（9）

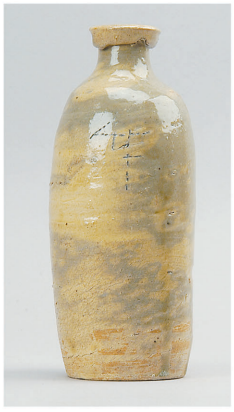
218

219

220

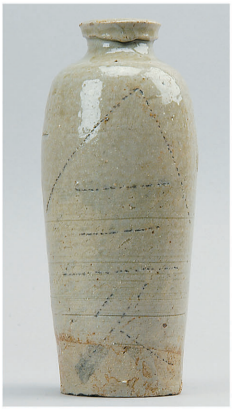
221

222


223

224

225


226

227

228

229

230

231

232

Ⅲ-PL.19　SK01　陶　　器（12）

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

Ⅲ-PL.20　SK01　陶　　器（13）

	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
																						点刻
	1	1	1	1	1	1	1	3	2	2	2	3	3	4	3	6	11	16	19	19	25	一升
												2	4	1	1			9	15	16	5	五合
	1						1	5		3		3	6	4	1			3	22	13	23	二号半

	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	
																						点刻
			2					1				1			1	1		1			1	一升
		3			1	1	1	1	1				3	1		3			1	2		五合
	1	3	1	1		1	1			1	1		2	3		7	1	3	1		1	二号半

	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	
																						点刻
					2			1	1				1	1	1			1	1			一升
							1	1													1	五合
	1	1	1	1	1	3	1	10		1	1	1				1	1			3		二号半

	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	
																				点刻
	1		1	1						1					1							一升
		1						1													1	五合
					1	1	1		1		1	1	1	3		1	1	1				二号半

Ⅲ-1表　徳利釘書類（1）

瀬戸・美濃系灰釉徳利　釘書き

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
線刻																	
一升	4	2				1		1		1	1			1			
五合	1	2	1	2	1		1		1			1	1				1
二合半		1													1	1	

瀬戸・美濃系灰釉徳利　ヘラ書き

	1	2	3	4
ヘラ書き				
一升	1		1	
五合	2	2		
二合半	4			1

献上備前　釘書き

	1
点刻	
	1

	1	2
線刻		
	1	1

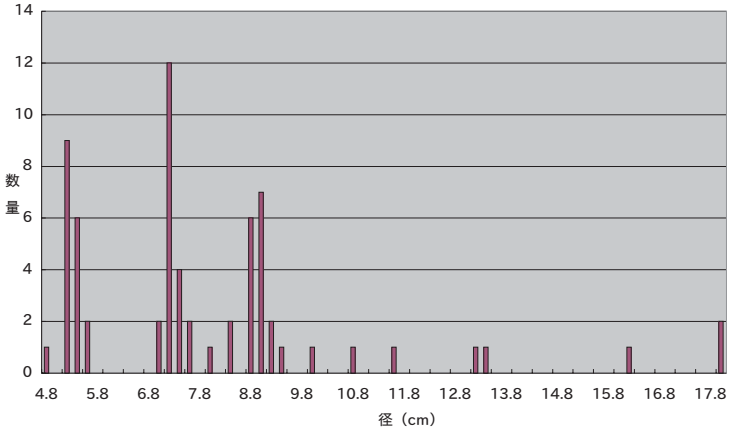
Ⅲ-1表　徳利釘書類（2）

土　　器（土器１～96）（図：Ⅲ-13～16）（PL.：Ⅲ-21～23）

１は碗。DZ-1に属する。腰が張り、浅い渦巻高台で高台径が大きい碗である。胎土は燈色。全面に透明釉が施されている。産地不明。

２～11はかわらけである。２は磨きかわらけの内面に「寿」字の浮文がある皿。DZ-2-jに属する。胎土は褐色で、文字部分に金箔が貼られていたと思われる。内外面を「三つ星」状？に黒く還元焔焼成している。口縁部にススが付着している。口径は6.7cmと小振りである。他にも東大本郷構内の遺跡医学部附属病院地点や家畜病院地点で「寿」字の浮文のあるかわらけが検出されているがいずれも口径が10～12cmと大きく、時期もやや新しいようである。

３～８は底部糸切りが左回転のかわらけ。DZ-2-bに属する。ほとんどが内面立ち上がり際に窪みがみられ、江戸在地系のかわらけと思われる。かわらけを法量ごとに表にまとめてみた（Ⅲ-2表）。計測できたものが71点あり、5.2cm（一寸七分）、7.4cm（二寸半）、9.2cm（三寸）でそれぞれにピークができた。それぞれに19個体、21個体、17個体とあり、大中小のセットとして使用されたものかもしれない。これらの中には、口縁部などにススの付着している物は見受けられなかった。東大本郷構内の本遺跡の他地点のかわらけと比較してみると、年代が新しくなるにつれて次第に口径が小さくなってきているのがわかる。詳細は次の機会に回したい。5.2cm前後の小振りのかわらけには、やや厚手で底部が小さいもの（19点中５点）と薄手で底部が大きいもの（19点中14点）の二種類が見られる。７はやや厚手の物、８はやや薄手の物である。３は口径が19.8cmの大型のかわらけ。４は口縁部にススの付着あり。糸切りが右回転のかわらけは見受けられなかった。



Ⅲ-2表　左回転かわらけ法量

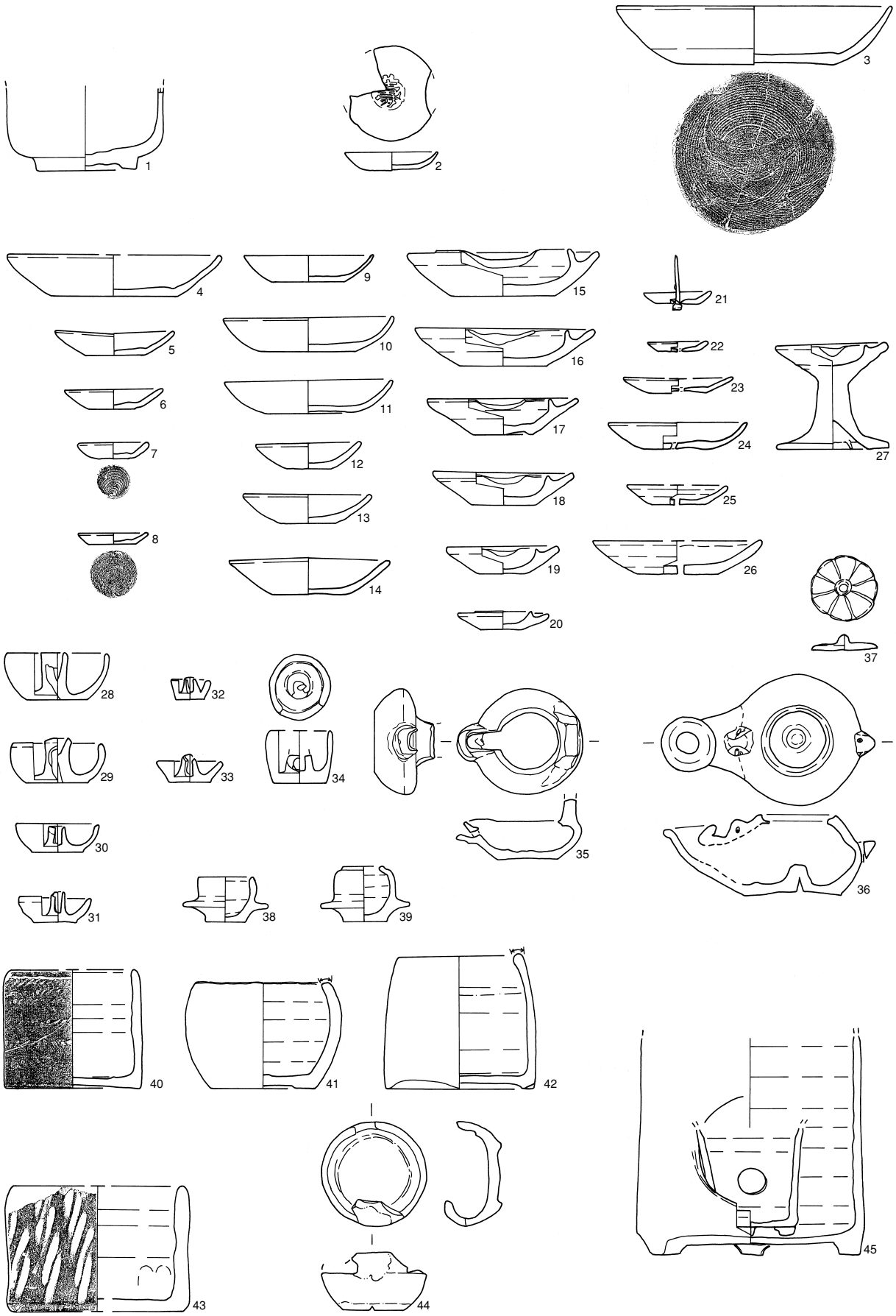
９～11は磨きかわらけ。DZ-2-dに属する。10cm前後に集中しており小振りのものは見られない。

12～20は油皿及び油受け皿である。12～14は油皿で透明釉が掛けられている。DZ-2-hに属している。15～19は脚の無い油受け皿で透明釉が掛けられている。DZ-40-bに属する。総数87個体が確認された。特大５個体･大22個体･中35個体･小25個体であった。20は無釉である。DZ-40に属する。形状は一般的な脚の無い油受け皿に近似しているが、受け部分に切り込みがない。口縁部から底部に掛けて部分的にススの付着が見られ、やはり油受け皿として使用された物であろう。底部が無くドーナッツ状になっている物が、東大本郷構内の遺跡工学部14号館地点から検出されている。

21～24は底部に穿孔がみられるかわらけである。DZ-2-iに属する。21はかわらけの中央部に穿孔されている穴に釘がはめられた状態で検出されている。釘の長さは4.9cmで燭台と思われる。24は内外面に赤色塗料（ベンガラか？）が塗布されており、口縁部一部分にススが付着している。

25･26は透明釉が施され、底部穿孔されている。DZ-2-hに属している。26は口縁部にススが付着している。

27は脚付き油受け皿で透明釉が施されている。DZ-40-aに属する。



Ⅲ-13図　SK01　土　　器（1）

Ⅲ-PL.21　SK01　土　　器（1）

28 ～ 35 はひょうそくである。28 ～ 31 は体部が内湾、脚が無く透明釉が掛けられている。DZ-44-b に属する。28･29 は芯立てが円筒形、横穴状に刳り抜かれたもので底部軸孔がみられる。30･31 は芯立てが半円形で底部軸孔がみられない。総数 27 点確認され、特大（8cm 前後）1 点、大（7cm 前後）8 点、中（6cm 前後）9 点、小（5cm 前後）9 点で大･中･小ほぼ同数であった。特大･大は芯立てが円筒形横穴状に刳り抜かれた遺構で、1 点を除き底部には軸孔がみられる。中･小は芯立てが半円形で、底部軸孔がみられない。32 ～ 34 は脚が無く、無釉のひょうそくである。DZ-44-c に属する。32･33 は芯立てが半円形である。底部軸孔がみられない。34 は芯立ての形は上部が欠損しているため不明であるが、芯立て部分の下から鉄釘のような物がはめ込まれている。35 は壁掛け型のひょうそくである。DZ-44 に属する。壁掛け部分は欠損。底部糸切り痕有り。透明釉が施されている。口部に返しが付いており、ススが付着している。

36 はカンテラである。DZ-46 に属する。透明釉が施されている。蓋受けがあり、おそらく 37 のような蓋が付いていたのであろう。36 には上から吊すための把手が 2 ヶ付いている。

37 はカンテラ（DZ-46）などの蓋。DZ-00 に属する。表面のみ透明釉が掛けられている。

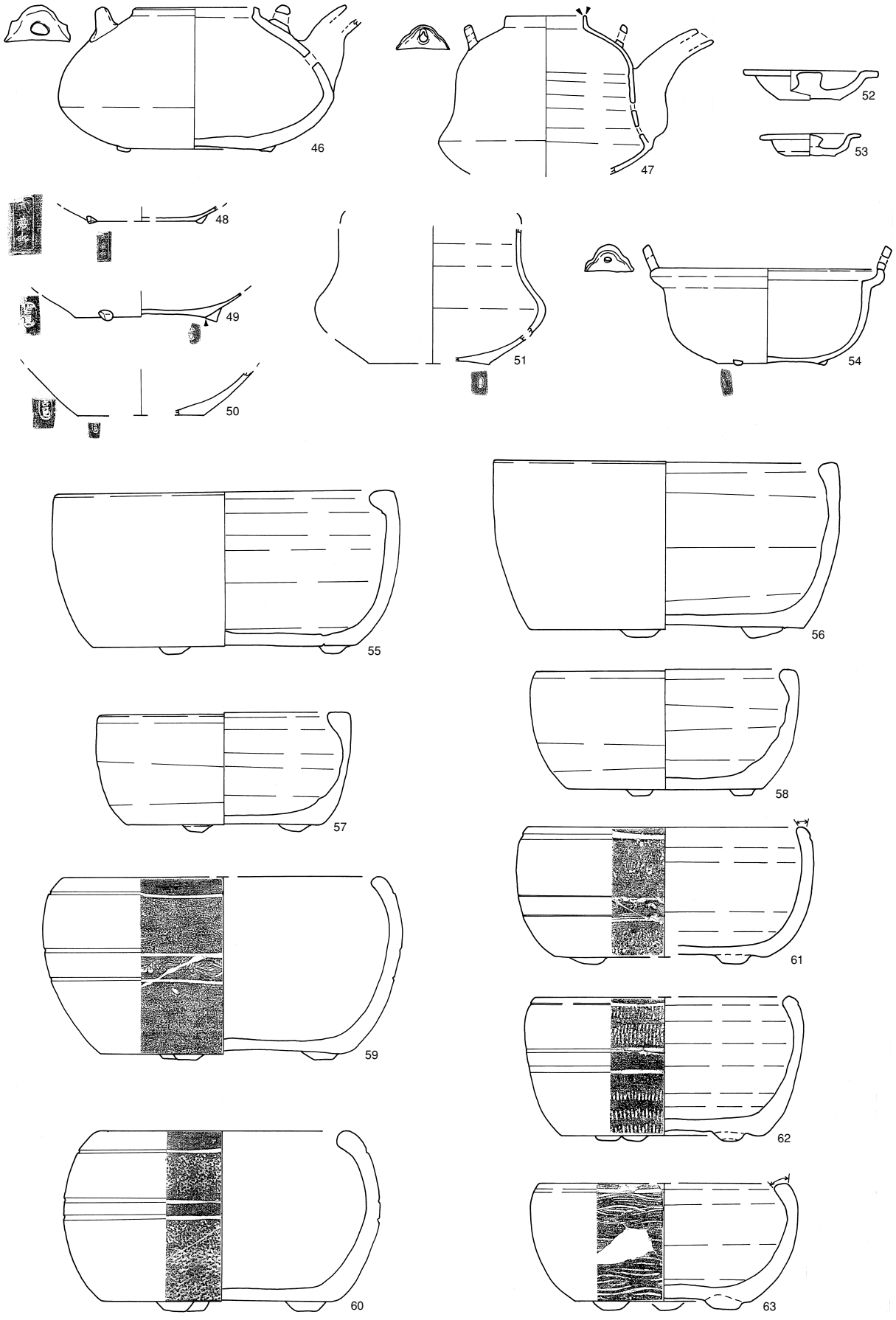
38･39 は釜形土製品。DZ-5-c に属する。燈明具の一種とも考えられているが、性格は不明。38 は羽釜タイプ。39 は口縁部がややすぼまっている茶釜タイプである。茶釜タイプで、東大本郷構内の遺跡の中で確認されている一番古いものは医学部附属病院病棟地点の SK03 から検出されており、17 世紀後葉に比定されている。

40 ～ 43 は香炉･火入れ。DZ-9 に属する。40 は硬質瓦質。口縁部には沈線が巡っており、表面が磨かれている。41 は胎土は橙色。胴部は丸みを帯び、外面が丁寧に磨かれている。口唇部に敲打痕がみられる。底部は碁笥底状に中央部を削って幅 1.4cm ほどの高台を作り出している。42 の胎土は橙色。外面から内面上方にかけて、白土に透明釉が掛けられている。表面が劣化のため釉が剥落しているが、おそらく緑釉も掛けられていたであろう。底部は碁笥底状に中央部を削って幅 0.9cm ほどの高台を作り出し、3 方向を斜めに削っている。口唇部に敲打痕がみられ、ススが付着している。43 は胎土は暗褐色。外面は斜め方向の刻みが施されている。内面に指頭痕が見られ、口唇部に敲打痕がみられる。内面上方にススが付着している。

44 は胎土は橙色。表面は白土化粧がけの後、透明釉･緑釉が掛けられている。底部は白化粧のみの無釉で割高台。上部はほとんどが欠損しており不明であるが、窓が 3 ヶ所に開いていたと思われる。実用品であったのか、それともミニチュアのようなものであったのかは不明。

45 は涼炉。DZ-49 に属する。全体の 5 分の 1 ほどしか残存していない。胎土は浅黄橙色。外面は白土が化粧掛けされている。底部は中央部を削って高台状のものを作り、アーチ状に脚を削り出している。内側には正方形の窓とその反対側に小さな円孔が開けられており、底部にはボタン状の貼り付けが 3 ヶある。

46 ～ 51 は土瓶で、DZ-34 に属する。46 は厚手で、土師質の胎土に釉が掛けられているが、47 ～ 51 は、薄手で灰白色の胎土である。「武蔵野」と「吉見」の刻印があることから 2 ヶ所の産地があったと思われる。吉見が現在の地名のある埼玉方面だとすれば、多摩、埼玉方面は明治期には土器生産が盛んな地域であり、19 世紀に入った頃には既に土器生産が盛んに行われていたと考えられるのではないか。46 は、算盤形土瓶。器壁は厚手で胎土は橙色。表面胴部は、透明釉の掛け分け。胴部上半は褐色を呈し、胴部下半と内面は透明釉が施されている。糸切り底。貼付 3 脚、注口穴 3 ヶ。DZ-34 に属する 52 が蓋になる。47 の外面は黒色を呈する釉が施されている。内面は黒色を呈するが光沢はない。器壁は薄手で、胎土灰白色。胎土は「吉見」の刻印を持つものとほぼ同じである。注口に



Ⅲ-14図　SK01　土　　器（2）

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

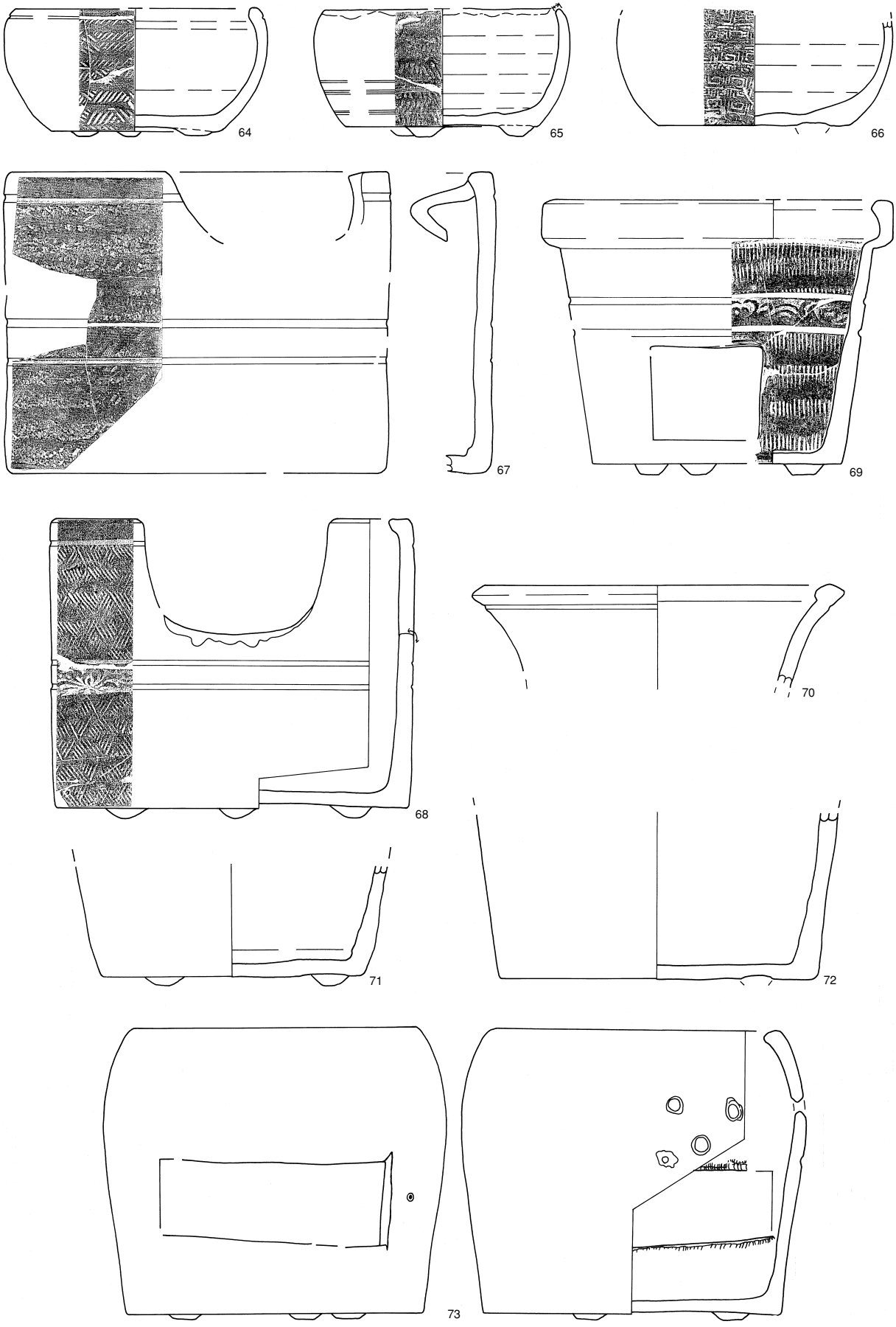
67

68

69

70

Ⅲ-PL.22　SK01　土　　器（2）



Ⅲ-15図　SK01　土　　器（3）

は穴が４ヶ開けられている。48の内面は黒色を呈する釉が施されている。器壁は薄手で胎土灰白色、「吉見」の刻印を持つものより赤みがかっている。底部に「武蔵野」の刻印有り。49の外面は黒色を呈する釉が施されている。内面も黒色を呈するが光沢はない。器壁は薄手で胎土灰白色。残存２脚（1脚欠損）底部に「吉見」の刻印有り。50は、外面は黒色を呈する釉が施されている。内面は褐色を呈し光沢はない。器壁は薄手で胎土灰白色。底部に「吉見」の刻印有り。外面スス付着。51は、内外面とも黒色を呈する釉が施されている。器壁は薄手で胎土灰白色。底部に「吉見」の刻印有り。

52･53は蓋。DZ-00に属する。52の表面は褐色を呈する釉が施され、裏面は透明釉が施されている。46の算盤形土瓶の蓋。53の表面はやや緑色を呈する透明釉。裏面は透明釉が施されている。

54は鍋。DZ-33-aに属する。外面は黒色、内面は緑色を呈する釉が施されている。器壁は薄手で胎土灰白色。「吉見」の刻印を持つ土瓶と類似している。残存２脚（1脚欠損）、見込みには目跡が３ヶ見られる。底部に「吉見」の刻印有り。

55～66は火鉢である。火鉢は全体の中でも数が多く、本遺構の特徴の一つといえる。全体で220個体確認され、その中で土師質丸火鉢は123個体、硬質瓦質丸火鉢は74個体確認された。いずれも胴部に丸みを持ち、口縁部がやや肥厚している。脚はボタン状の貼り付けが３ヶ見られる。径24cmほどの大型のものと、径18cmほどの小型のものに分けられた。小型のものには墨書で名前のあるものもあり、一部は個人的に使用されていたことも考えられるが、ほとんどは、部屋などの備品として一括管理されていたのであろう。55～58は土師質丸火鉢。DZ-31-aに属する。いずれも無文である。脚はボタン状の貼り付けが３ヶ所に見られる。59～66は硬質瓦質丸火鉢でDZ-31-dに属する。59～62は沈線が口縁部と胴部に巡っている。63～66は口縁部のみに沈線が巡っている。60は、蔀目文。61･63は、口唇部が打ち欠いたようになっており、火入れのような使われ方をしたかもしれない。65は赤彩が施されている。66は雷文。

67～70は七輪。DZ-48に属する。67･68は筒形で口縁部に窓が開いている。脚はボタン状の貼り付けが３ヶ所に見られる。沈線が口縁部と胴部２ヶ所に巡っている。69は胴部下半に窓が開いている。70は口縁部が朝顔形に開いており、口唇部が肥厚している。

71～73は火消し壺。DZ-31-iに属する。73は窓が付けられ七輪のようなものに転用されたようである。穴が４つ穿孔されているが、左下の穴は小さく粗雑で、そのままで使われたのではなく、窓に付けられていたと思われる蓋などの金具がとり付けられていたことが想定される。他の３つは比較的きれいに成形されており、空気穴のようなものであったのであろう。

74～77は火消し壺の蓋。DZ-00-hに属する。異なる大きさで４段階に分かれた。

78は七輪の風口でDZ-48-cに属する。

79～81は焙烙でDZ-47-aに属する。79は内耳が３ヶあり。80は内耳が無い大型のもの、81は内耳が無い小型のものである。

82～87は植木鉢である。82･83はDZ-21-cに属する。82は土師質でロクロ成形されている。表面と内面半ばまで施釉され、褐色を呈す。底部には縦方向の刻みの施された脚が１ヶ貼り付けられて残存している。83～87はロクロ成形され、底部に糸切り痕が見られる。83は土師質で表面と内面上部まで施釉され、褐色を呈す。光沢はない。口縁部欠損。底部には貼り付けられた脚が３ヶ所の内、２ヶ残存している。中央からややずれたところに、穴が１ヶ開けられている。84は瓦質の植木鉢で、底部に穿孔が見られる。DZ-21-bに属する。85は口縁部に鍔が付く土師質の植木鉢で、底部に穿孔が見られる。DZ-21-aに属する。86･87は口縁部に鍔が付く土師質の鉢で、底部に穿孔は見られないが植木鉢として使われたものであろう。87は表面に白土が塗布されている。DZ-21-aに属する。

88は土師質の鉢でロクロ成形され底部に糸切り痕が見られる。DZ-5に属する。

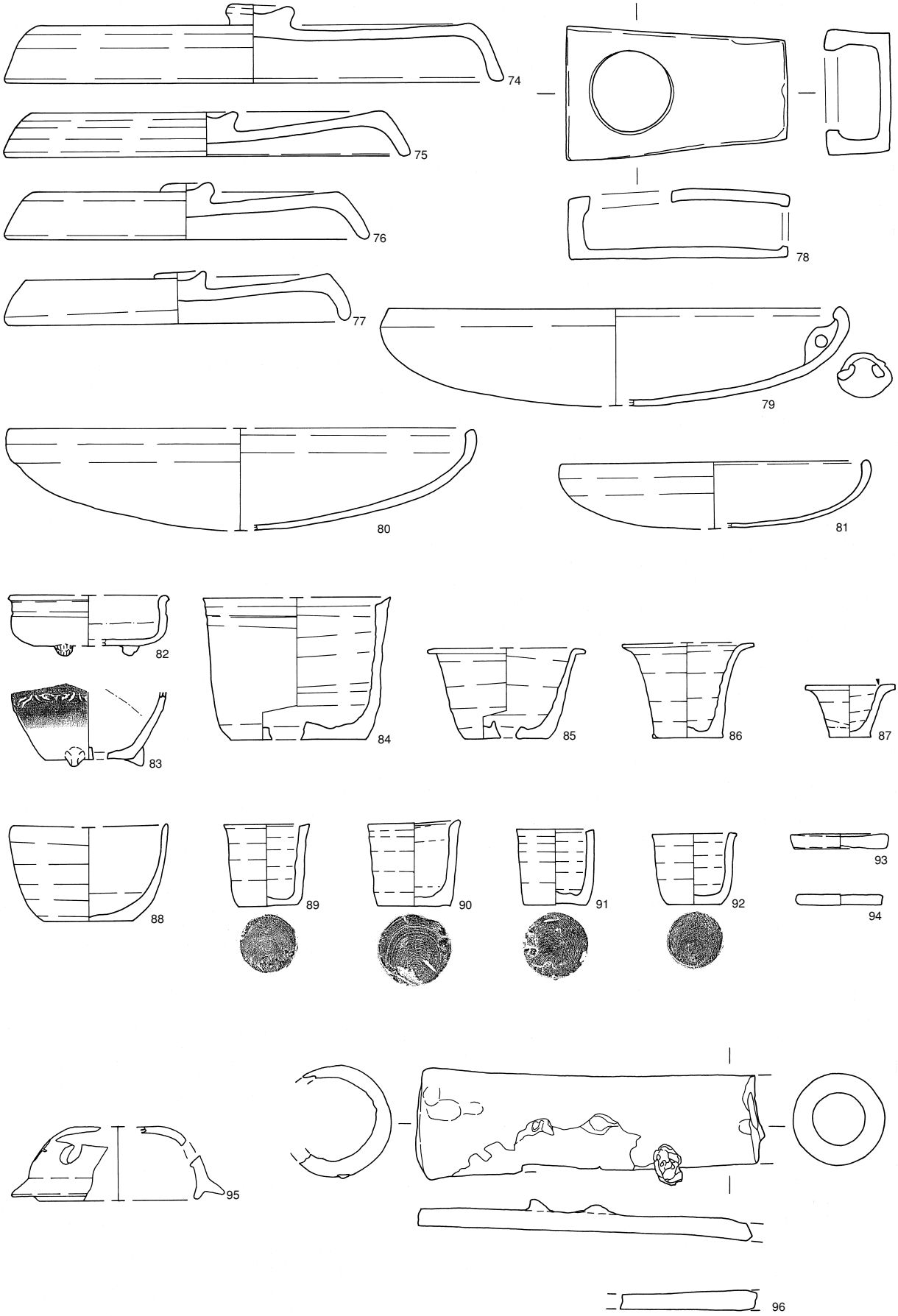
89～92はいずれもロクロ成形の塩壺である。DZ-51-wに属する。

93は断面が逆台形の塩壺の蓋。DZ-00-dに属する。94は断面が長方形の塩壺の蓋。DZ-00-gに属する。

95は瓦質の蚊遣り蓋と思われる。内面スス･タール付着。側面円孔は径が1.5cm、おそらく６ヶあったもので、５ヶが残存している。口受けがある。ほとんど同様の蓋が文京区真砂遺跡第２地点で検出されており（文京区遺跡調査会 1991）、また、大型でやや作りは異なるが、下部構造までわかるものが新宿区四谷１丁目遺跡で検出されている（新宿区新司法書士会館遺跡調査団 1998）。

96は鞴の羽口で片側が欠損している。胴体外側に鉄滓が付着していた。

未実測のなかには、十能や片手鍋の把手などがある。



Ⅲ-16図　SK01　土　　器（4）

71

72

73

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

Ⅲ-PL.23　SK01　土　　器（3）

墨　　書（墨書１～106）（図：Ⅲ-17～20）（PL.：Ⅲ-24～32）

碗、皿を中心に約400点の墨書資料が検出されている。ここでは、墨書以外にも徳利以外の釘書きなども取り扱っている。カウント総数が5202個体であるので、総数比で7.7％に墨書が施されていた事になる。瀬戸美濃系灰釉徳利を除くと、約１割の器に墨書が書かれていた事になる。磁器には釘書きが多い。ここでは、判別可能で残存状態の良好な106個体を掲載した。内62個体が碗である。墨書を内容的に分類すると大きく①人名、②年号、③役所名･役職名、④商店名の４種類に分けられる。

１～62は陶器碗でほとんどが人名と思われる。一部には役職名なども見られる。SK01の墨書資料の中では、半数以上が碗に書かれたものである。ここには掲載していない物も含めると碗は京都･信楽系小杉碗（TD-1-d）は総数182個体のうち墨書94個体、端反形で器面に貫入の入る碗（TD-1-g）は総数63個体のうち墨書40個体、瀬戸･美濃系の灰釉薄掛け丸碗（TC-1-c）は総数162個体のうち墨書51個体と非常に多く書かれている。**57**は、墨書ではなく窯傷を隠したものであろうが、便宜的にここに掲載した。

63～66･68～70は皿である。**63**は見込みに釘書きが施され、**66**は漆で書かれている。これらは、墨書と比べ字が消えにくいことを意識して付けられており、自分たちで書いたと考えるよりは、料理屋等の仕出しの器と考えられるのではないか。

碗皿以外は様々な器種に墨書が施されている。

74は釘書きで「四ばん」、**75**は墨書で「芝／美の家／口」と書かれている。おそらく「芝口」にある「美の家」で、いずれも料理屋の仕出しの器であろう。

76は文化三年頃は鳥を飼う事が非常に盛んであったと言われている時期である。「八之内」とあり、複数の鳥を飼っていた事が伺われる。上級武士の役宅か御殿空間からの廃棄であろう。

83～92は片口に店名と思われる奈良屋と人名が入っている。「のし」と入っている物もあり、どのような性格の物なのか興味深い。

93･94は役職名や役所名、年号が書かれている瀬戸･美濃系こね鉢（TC-5-1）である。

98･99は瀬戸･美濃系陶器の火鉢に書かれている。

104は土製の火鉢に書かれている。出土個体数は220個体と大変多いが名前等が書かれている物はほとんど無い。これは、碗のように個人が所有したのではなく、部屋などに備え付けられていたのであろう。

105は火鉢の内面に白で書かれており、店屋が書いた物であろう。

106は外面陰刻。いたずら書きのようにも思われるが裃を着た武士の様子が当時を彷彿とさせる。内面は、字の練習であろうか。

番号	分類	口径	底径	高さ	慣用名	墨書	備考
1	TC-1-c	13.00	7.40	8.50		「御小人/六通/［？］右衛門」	目跡　4ヶ
2	TC-1-c	14.00	6.10	9.20		「佐」	
3	TC-1-c	13.10	5.60	9.05		「八左衛門」	
4	TC-1-c	(12.60)	5.30	8.30		「後藤/宮北/小屋」	
5	TC-1-c	－	6.60	[7.50]		「伊」	
6	TC-1-c	(10.30)	5.30	8.30		「佐」	
7	TC-1-c	11.10	4.40	7.50		「文左衛門」	
8	TC-1-c	(11.00)	4.90	7.00		「平」	
9	TC-1-c	11.10	3.80	7.70		「八十」	
10	TC-1-c	10.60	5.10	7.00		「伊」	目跡　2ヶ
11	TC-1-c	(9.80)	4.40	6.40		「三四」	
12	TC-1-c	－	4.80	[2.65]		「文化八年/忠（兵衛ヵ蔵カ）/［？･･･］」	
13	TC-1-c	－	4.00	[2.40]		「久」	
14	TC-1-f	10.20	4.40	6.65		「文化二/［？］」	
15	TC-1-g	(12.90)	3.10	5.70		「表」	
16	TC-1-g	12.60	3.80	5.80		「長」	
17	TC-1-g	12.70	51.00	6.40		「彦」	
18	TC-1	10.50	4.20	6.30		陰刻「水戸」	
19	TC-1	－	4.15	4.60		「十右衛門」	
20	TC-1-s	12.80	4.50	6.80		「文政元/六月廿一日/二［？］印」	
21	TJ-1	－	4.00	[3.40]		「次印」	
22	TD-1-d	(9.20)	3.50	5.00	小杉碗	「寸崎/七之内」	
23	TD-1-d	(9.80)	3.60	5.00	小杉碗	「寸崎/七ツノ内」	
24	TD-1-d	(9.20)	3.40	5.20	小杉碗	「寸崎/七ツ内」	
25	TD-1-d	－	3.40	[1.20]	小杉碗	「寸崎/七ツノ内」	
26	TD-1-d	－	3.50	[3.90]	小杉碗	「坂家/五之内」	
27	TD-1-d	(9.00)	3.10	5.40	小杉碗	「直［？］/五印/［？］二ツ/［？］十二文」	
28	TD-1-d	(9.60)	3.60	5.25	小杉碗	「水」	
29	TD-1-d	－	3.50	[4.70]	小杉碗	「水」	
30	TD-1-d	8.90	3.40	5.20	小杉碗	「水」	見込みベンガラ
31	TD-1-d	－	3.40	[4.00]	小杉碗	「次［印ヵ］」	
32	TD-1-d	(9.40)	3.30	[4.90]	小杉碗	「石田」	
33	TD-1-d	(9.40)	3.20	5.20	小杉碗	「藤作」	
34	TD-1-d	9.20	3.30	5.40	小杉碗	「寺尾」	
35	TD-1-d	－	3.10	[3.00]	小杉碗	「岡部/山田」	
36	TD-1-d	9.10	3.30	5.20	小杉碗	「寺」	
37	TD-1-d	9.00	3.50	5.30	小杉碗	「太」	
38	TD-1-d	8.70	3.80	5.30	小杉碗	「牛」	
39	TD-1-d	(9.60)	3.20	5.75	小杉碗	「クロ」	
40	TD-1-d	9.00	3.30	5.20	小杉碗	「ナ　タ　［？］」	
41	TD-1-d	(9.40)	3.30	5.20	小杉碗	「大嶋/山本」	
42	TD-1-d	(9.20)	3.30	5.10	小杉碗	「兵」	
43	TD-1-d	－	3.70	[4.15]	小杉碗	「森」	
44	TD-1-g	(9.50)	3.40	5.40		「永」	
45	TD-1-g	(9.00)	3.10	5.10		「中」	
46	TD-1-g	9.40	3.00	5.60		「和」	
47	TD-1-g	(9.20)	3.20	5.45		「和」	
48	TD-1-g	9.00	3.30	5.65		「和」	
49	TD-1-g	(9.20)	3.40	7.00		「吉」	
50	TD-1	(8.60)	4.10	6.45		［？］	
51	TD-1-k	9.40	4.20	6.50		「藤」	
52	TD-1-k	－	5.00	[1.45]		「清」	
53	TD-1-e	9.30	3.30	5.20		「御作」	

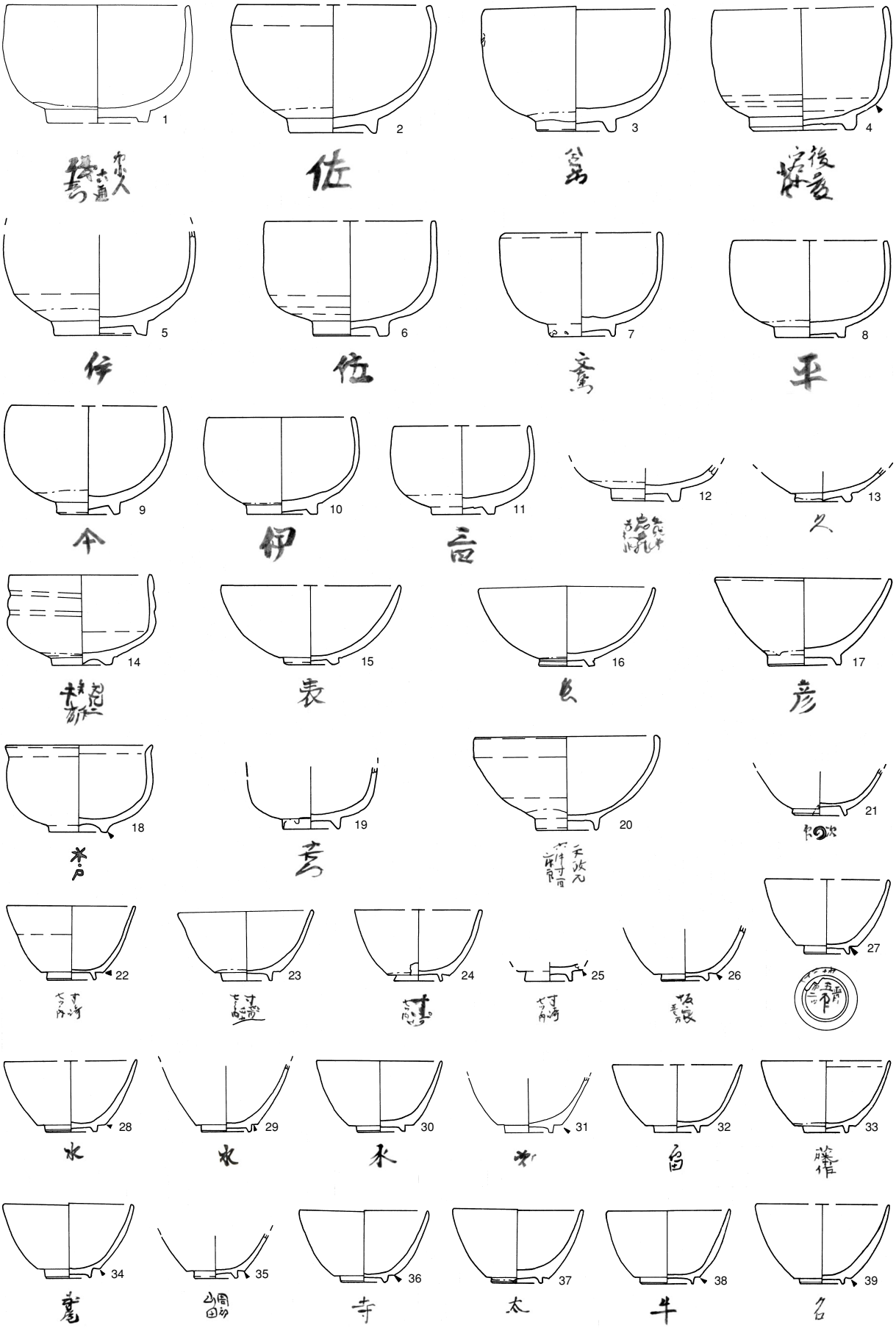
単位cm

Ⅲ-3表　墨書観察表（1）（Ⅲ－17～20図）（Ⅲ－PL.24～32）

番号	分類	口径	底径	高さ	慣用名	墨書	備考
54	TD-1-e	9.40	3.50	5.35		「雪山」	
55	TD-1-e	9.30	3.30	5.40		「藤村」	
56	TD-1	10.60	4.50	6.30		「吉」	
57	TD-1-c	10.60	4.60	6.60		高台内に花模様（青色）	
58	TD-1	9.15	5.20	5.85		「野尻」	
59	TD-1	－	4.20	［1.10］		（篆書）	
60	TD-1-h	12.60	4.00	4.55		「一」	
61	TD-1-h	11.80	3.20	3.85		「高村」	
62	TZ-1	－	6.20	5.70		「ツタマコ」	
63	JB-2-m	13.80	6.80	［2.40］		釘書（見込み）	
64	JB-2-j	14.30	9.30	3.70		「山」	
65	JB-2-j	（14.60）	8.50	4.10		「松井」	
66	JB-2-j	13.70	8.80	3.80		「大八」	漆書きか
67	TC-5	39.60	18.20	8.90		「福［？］」	
68	TC-2-g	（27.60）	（13.20）	6.05	馬ノ目皿	「安永［五ヵ］／［？］小屋」	
69	TC-2-g	－	（13.00）	［3.90］	馬ノ目皿	「享和二／岡部／小／山田／九月改」	
70	TC-2-0	10.40	5.10	2.10		「小野平左衛門［？］物」	
71	JB-6-a	7.60	2.50	3.60		見込み「花の［?］山の［深ヵ］山　側面「コん［こヵ］やな」	
72	TC-15-a	（23.00）	15.60	16.00		［？］	
73	TC-15	（7.20）	6.40	［9.1］		「う／なみ」	
74	JB-10	－	9.00	［6.60］		釘書「四ばん」	
75	JC-4	－	5.30	2.40		「芝／美の家／口（くち）」	
76	TC-30	4.50	3.80	2.55		「文化三／二月／［？］鳥／八之内」	
77	TC-9	（15.00）	7.30	6.50		「又［？］」	
78	TC-9	（14.50）	8.40	6.15		「上下」	
79	TD-32	－	4.80	［3.10］		「栄／天明七年［？］月［？］天［？］」	
80	TD-32	8.80	5.00	5.60		「池田」	
81	TC-18	（6.40）	4.10	3.60		「文化／［？］［？］口／元年」	
82	TD-18-b	4.30	4.50	1.65		「文化／子／［？］村田／両国二而［？］」	
83	TC-23	（20.20）	8.60	9.50		「山原新八／小屋／上［？］」	
84	TC-23	（17.60）	8.30	8.70		「のし／ならや／佐助」	目跡４ヶ
85	TC-23	（17.60）	8.00	8.10		「のし／ならや／佐助」	目跡１ヶ
86	TC-23	（17.00）	9.00	8.20		「ならや／佐助」	
87	TC-23	（17.00）	8.70	8.20		「奈良屋／佐助」	目跡３ヶ
88	TC-23	（17.30）	8.60	9.00		「奈良屋／佐助」	
89	TC-23	－	8.40	［5.40］		「のし／な［？］屋／［？］兵衛」	目跡３ヶ
90	TC-23	－	8.10	［5.40］		「のし／奈ら屋／平三郎」	目跡４ヶ
91	TC-23	－	7.30	［2.50］		「奈良屋／平三郎」	
92	TC-23	－	6.20	［5.10］		「奈良や／（佐助ヵ）」	
93	TC-5-l	－	13.20	（10.00）		「御近所／文化四年正月／火消」	
94	TC-5-l	（12.40）	12.30	13.65		「安永七年五月廿三日請取／漆細工所」	
95	TC-23？	（18.00）	8.40	8.00		「金四郎」	
96	TC-23？	（16.00）	8.60	7.80		「［？］十年／［？］弥戸／午四月下旬改之」	
97	TC-5？	－	（13.30）	（2.90）		「［？］所」	
98	TC-31	11.00	16.30	13.60		「乃［？］」	
99	TC-31	（12.80）	12.70	10.40		「左［？］」	
100	TC-00-c	9.10	4.60	2.25		「吉田九兵衛［?］·［?‥］／徳蔵所持／吉田九兵衛［?‥］／申四月改之」	
101	TC-10-b	（9.70）	11.00	19.90		内面「茂太［？］」／釘書「高サキ」	頸部打欠
102	TL-29	39.00	19.50	15.60		「（寛政八ヵ）辰正月／山田左門／［？］小［？］」	
103	DZ-45	14.00	17.30	（4.40）		底部「寛政六年／野村」	
104	DZ-31-a	（20.00）	（14.20）	（9.40）		底部「（石ヵ左カ）田ノ和平」	
105	DZ-31-a	25.80	18.50	12.40		内側底面に白「小豆／ヤセ」	
106	DZ-31-d	19.30	14.00	9.40		侍·松·水鳥の絵を陰刻。内面。	

単位cm

Ⅲ-3表　墨書観察表（2）（Ⅲ－17～20図）（Ⅲ－PL.24～32）



Ⅲ-17図　SK01　墨　　書（1）

1

2

3

4

5

6

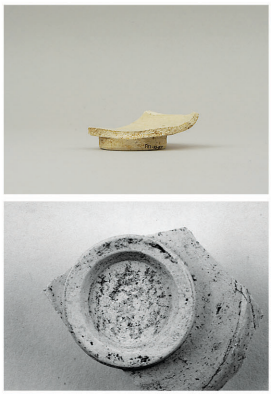
7

8

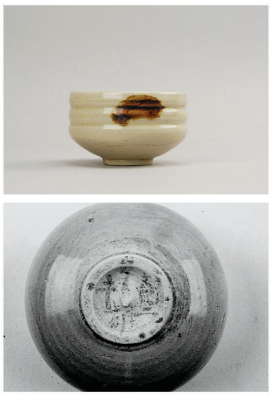
9

10

11


12

13


14

15

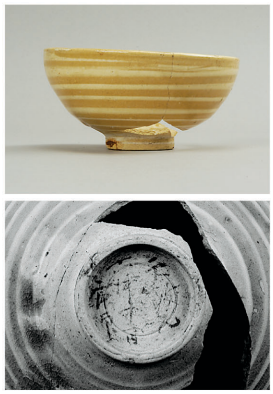
16

Ⅲ-PL.24　SK01　墨　　書（1）

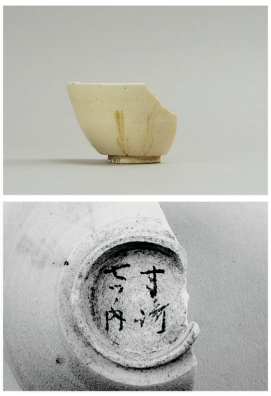
17

18

19

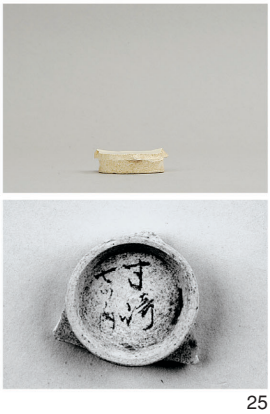

20

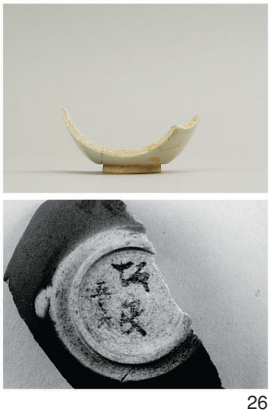
21

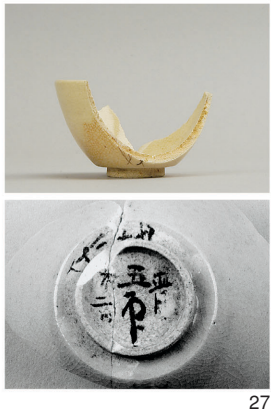

22

23

24


25


26


27

28

29

30

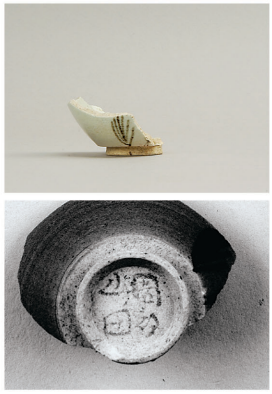
31

32

Ⅲ-PL.25　SK01　墨　　書（2）

33

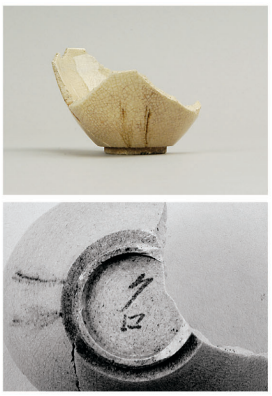
34


35

36

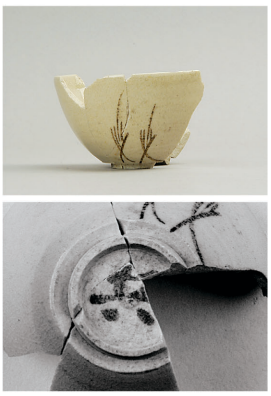
37

38

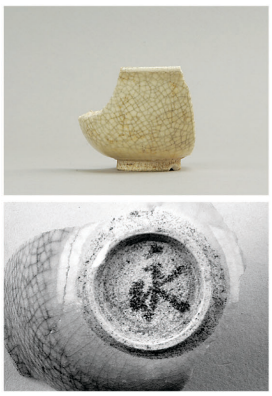

39

40

41


42

43


44

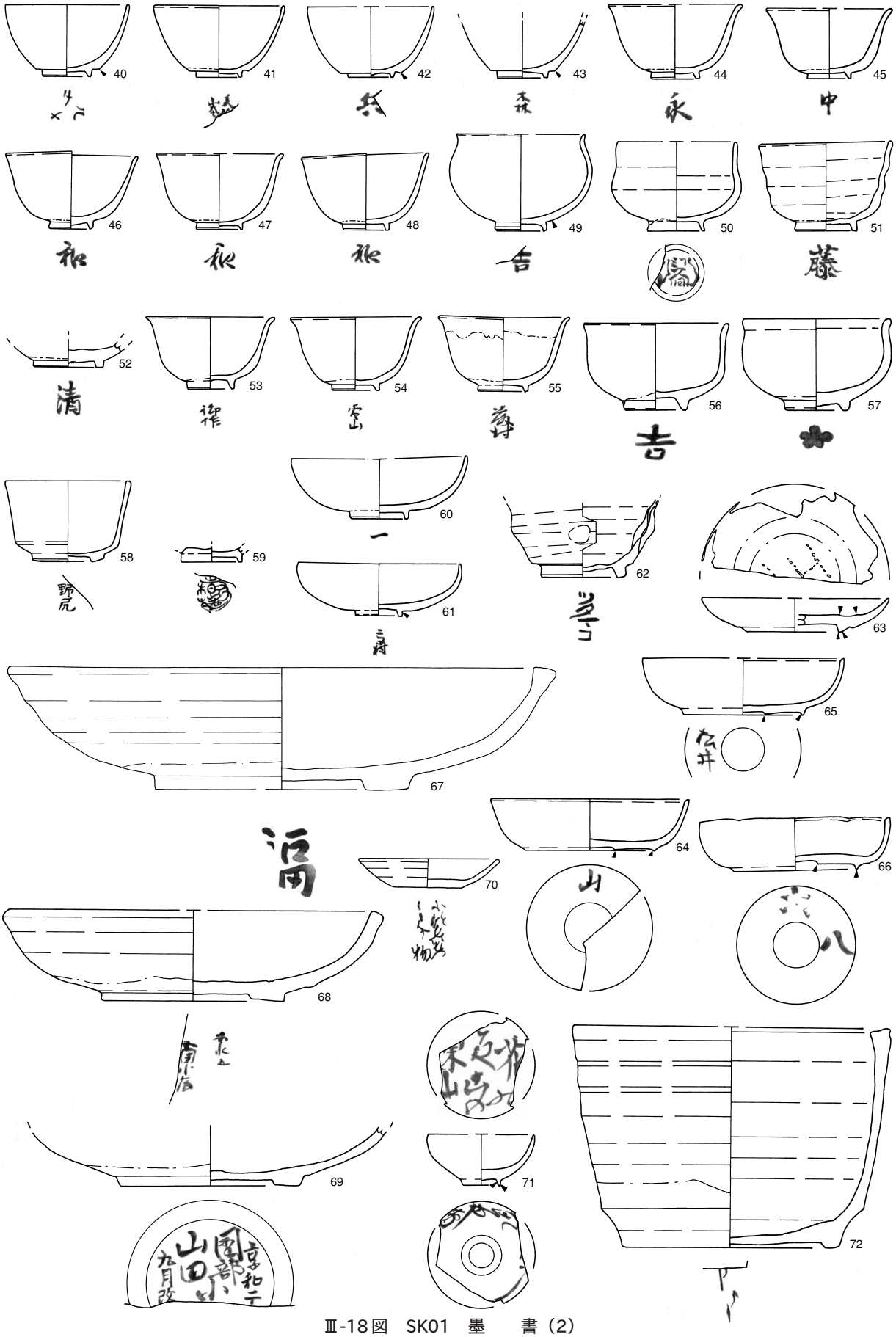
45

46

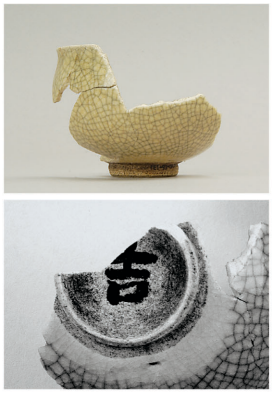
47

48

Ⅲ-PL.26　SK01　墨　　書（3）

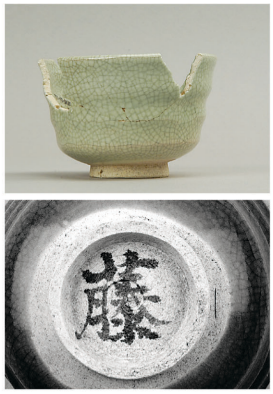


Ⅲ-18図　SK01　墨　　書（2）



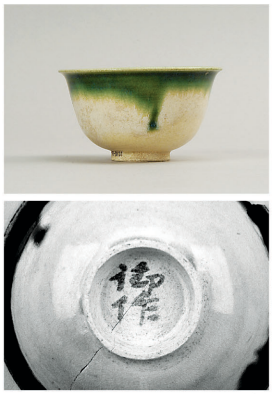
49

50



51

52



53

54

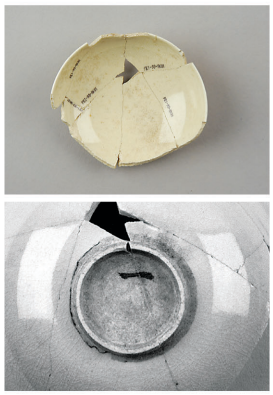
55

56

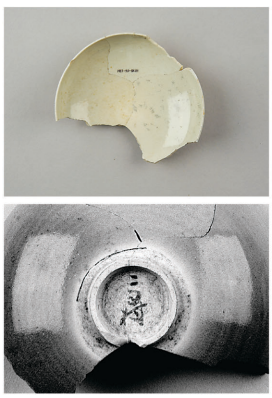
57

58

59



60



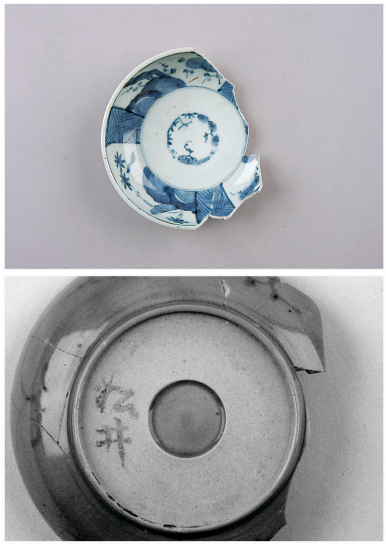
61

62

63

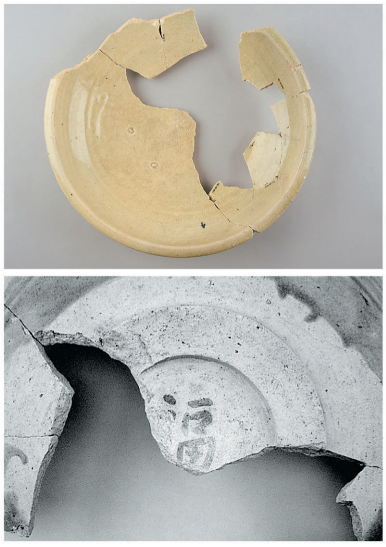
64

Ⅲ-PL.27　SK01　墨　　書（4）



65

66

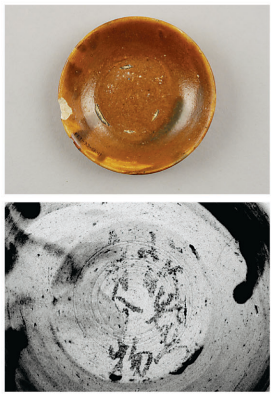


67

68

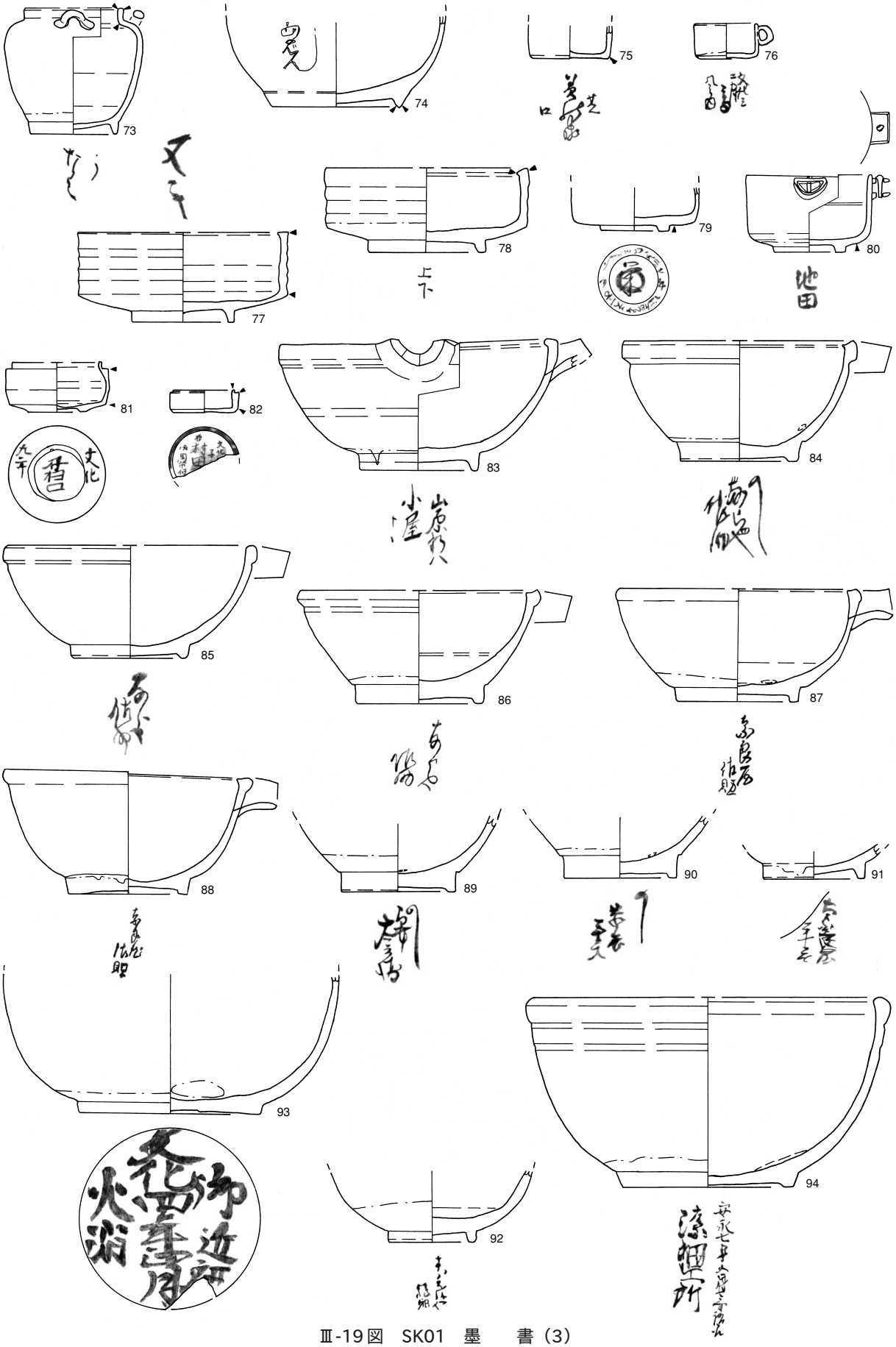
69

71

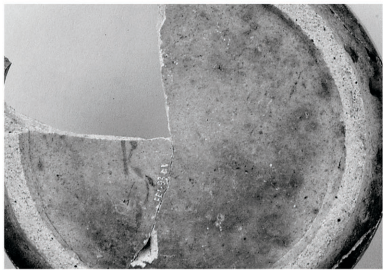


70

Ⅲ-PL.28　SK01　墨　　書（5）



Ⅲ-19図　SK01　墨　　書（3）


72

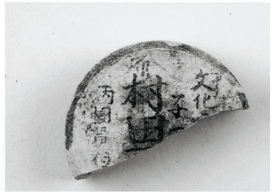
73

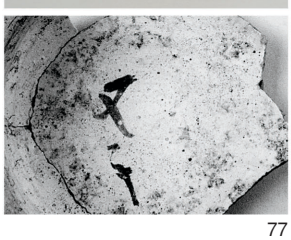
74

75

76

81


82


77

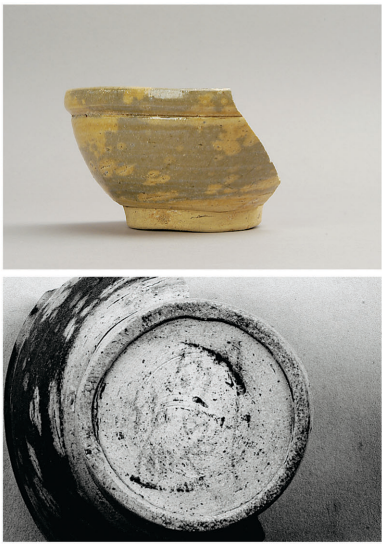
78

79

80

83

Ⅲ-PL.29　SK01　墨　　書（6）

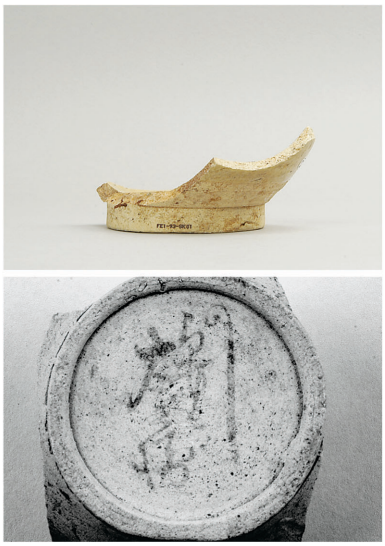

84

85

86

87

88

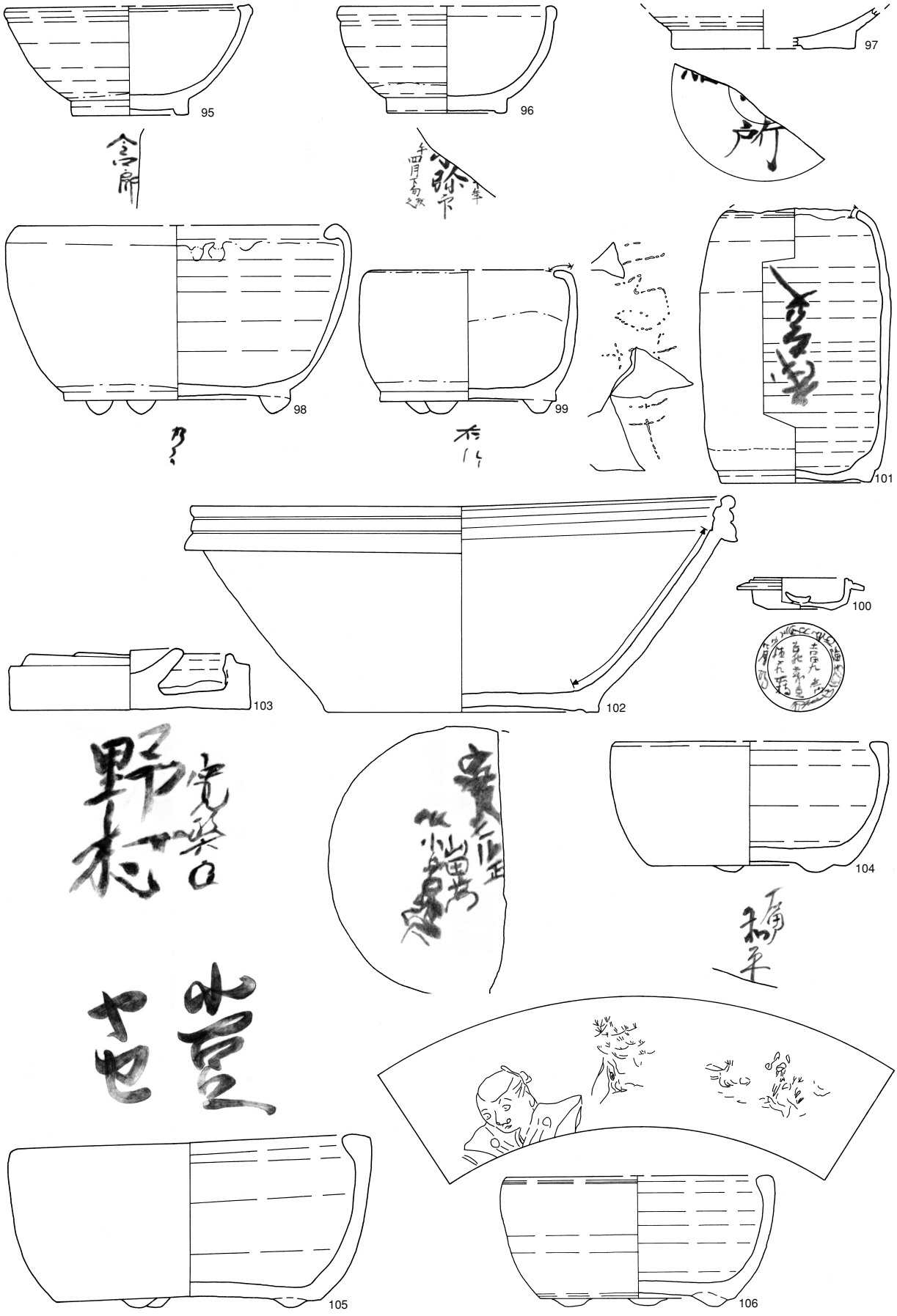

89

90

91

92

Ⅲ-PL.30　SK01　墨　　書（7）

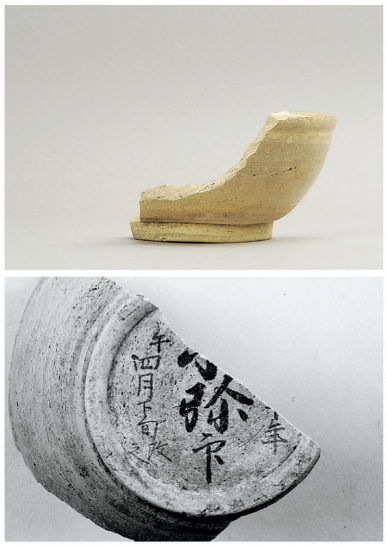


Ⅲ-20図　SK01　墨　　書（4）

93

94

95


96

97

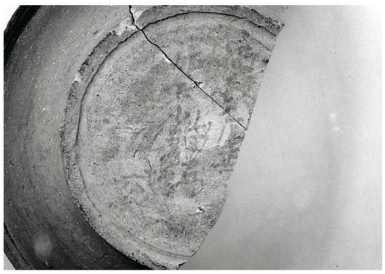
98

99

100

101

Ⅲ-PL.31　SK01　墨　　書（8）

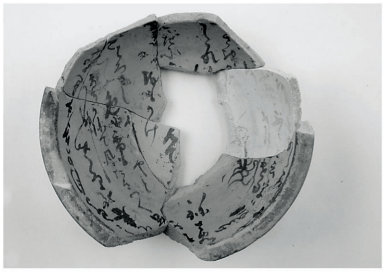


102

103

104

105



106

Ⅲ-PL.32　SK01　墨　　書（9）

（2）　木製品･漆器椀

木　製　品（木製品１～67）（図：Ⅲ-21～26）（PL.：Ⅲ-33～37）

1は印籠の蓋。外面朱漆、内面黒漆。身との合わせの部分は金彩。両脇には紐通し穴がある。

2は櫛。無柄で背が緩く湾曲している。歯は1cmにつき11本ほどで密である。根本部分を残してすべて欠損している。歯の付け根の断面形は中央部分にややふくらみが見られるがほぼ平らである。遺存状態は非常に悪く、装飾の有無を確認できる状態ではなかった。

3は刷毛。柄の部分のみで毛先は遺存していない。把手部より下の部分で断面に割れ目が入れられている。毛の部分は溝を伴う上下２段の小孔を使って結束されていたと思われる。黒漆。漆がほとんど剥落している。柾目の板材を用いている。

4は鏡箱の底板。木釘により側板を留めたと思われる跡が見られる。柾目の板材を用いている。

5～10は杓子。大振りの杓子（5～8）と、小振りの杓子（9･10）に分けられる。大振りの杓子の皿部の長さは約３寸。小振りの杓子の皿部の長さは約2.4寸であった。皿部はいずれも浅い。5･7は内外面とも朱漆。6は内面朱漆、外面黒漆。8は内外面とも黒漆である。9･10は内外面とも朱漆である。いずれも柄部分は欠損している。

11は柄。12は棒状製品。黒漆。先端部欠損。13は棒状製品。黒漆に朱漆で線。先端部欠損。14は篦状製品。先端部分をやや薄く削り出している。上端部には釘穴が２ヶ所穿たれており、１ヶ所には、そのまま釘が差し込まれた状態になっている。

15は膳。黒漆の上に朱漆で草花文。裏面には脚を取り付けたと思われる円形の痕跡が２ヶ見られる。側縁部には木釘の打たれた痕があり、側板を取り付けたと思われる。16は膳の脚部（くるみ脚）。表裏面とも黒漆。

17は灯明皿の受け台（蜘蛛手）と思われ、十文字に組み合わせて灯柱の頭に差し込み、灯明皿を安定させて支えた物であろう。材質は杉、桧、桐が一般的。18は提灯の底板（？）。中心部に釘が立てられており、蝋燭を立てる芯か。

19･20は箱枕（？）。外面黒漆。木釘により板を留めたと思われる跡が見られる。

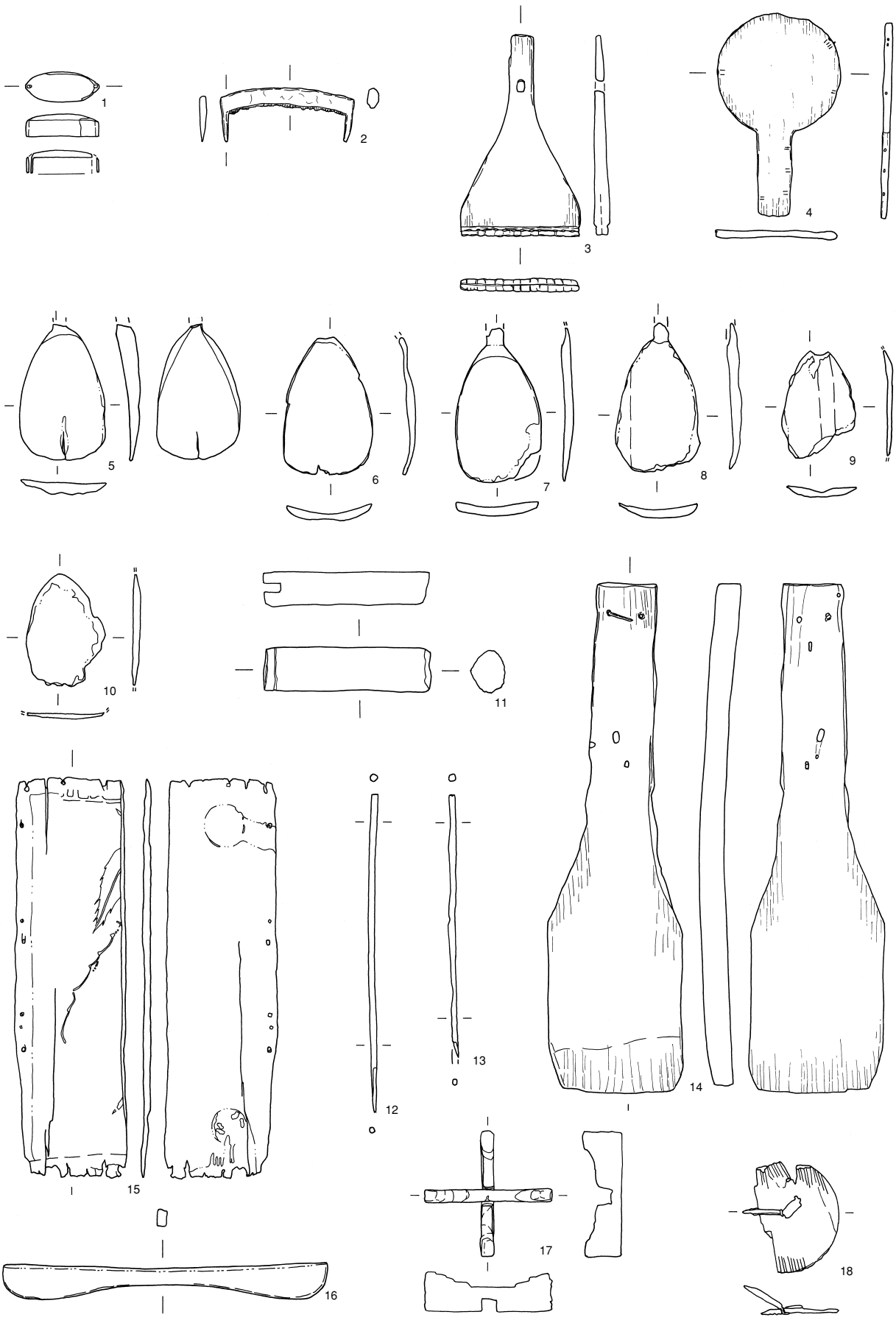
21･22は曲げ物。21は内面黒漆。22は内面朱漆。23･24は曲げ物の蓋。23は楕円形を呈する、弁当箱の蓋か。内外面とも黒漆にベンガラや朱漆を加えたり、透釉に油煙やベンガラを混ぜて作った茶褐色の色漆（潤色）。中央に花文。24は内外面とも黒漆で文字のみ朱漆。25～28は曲げ物の蓋か底板。25は白で左右線対称に三角形の模様が描かれている。

29は挽き物の蓋。外面は糸目が施され、中央部分がくぼんで中心部につまみを持つ。外面糸目部分は茶褐色の色漆、他の部分は黒漆を施されている。内面は朱漆。

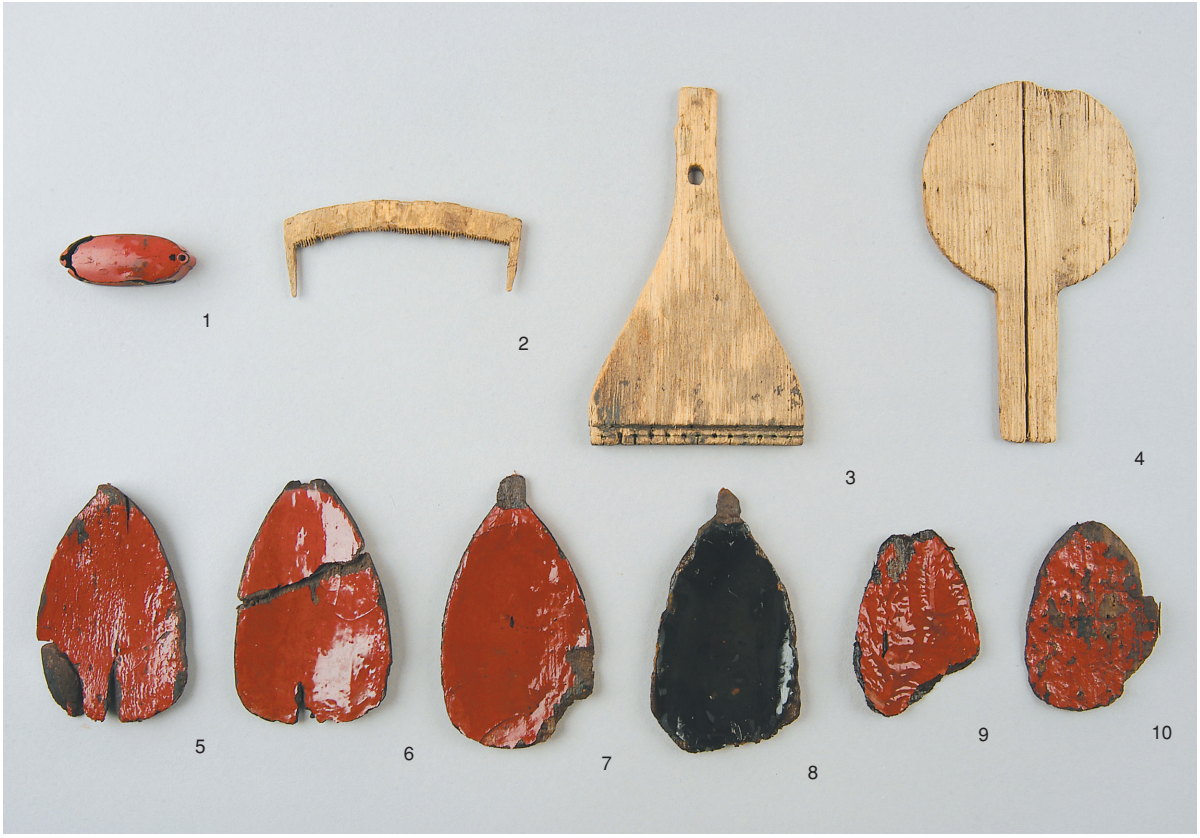
30は底板。内面のみ朱漆。31は楕円形の蓋。はめ込み式のつまみ付き。内外面とも朱漆。32は底板。内面のみ黒漆。33は八角形の蓋。把手が２本釘で打ち付けられている。34は楕円形の桶の蓋。両脇に把手のための切れ込みが入っている。35は丸桶の底板。３枚の板を組み合わせている。36は丸桶の蓋。くびれを持たない円錐形の栓がはまったままで検出。３枚の板を組み合わせている。37は丸桶の蓋。栓径2.80cm、焼印で「※」と押されている。

38･39は栓。38はくびれを持たない円錐形の栓。39は段差を持つ栓である。

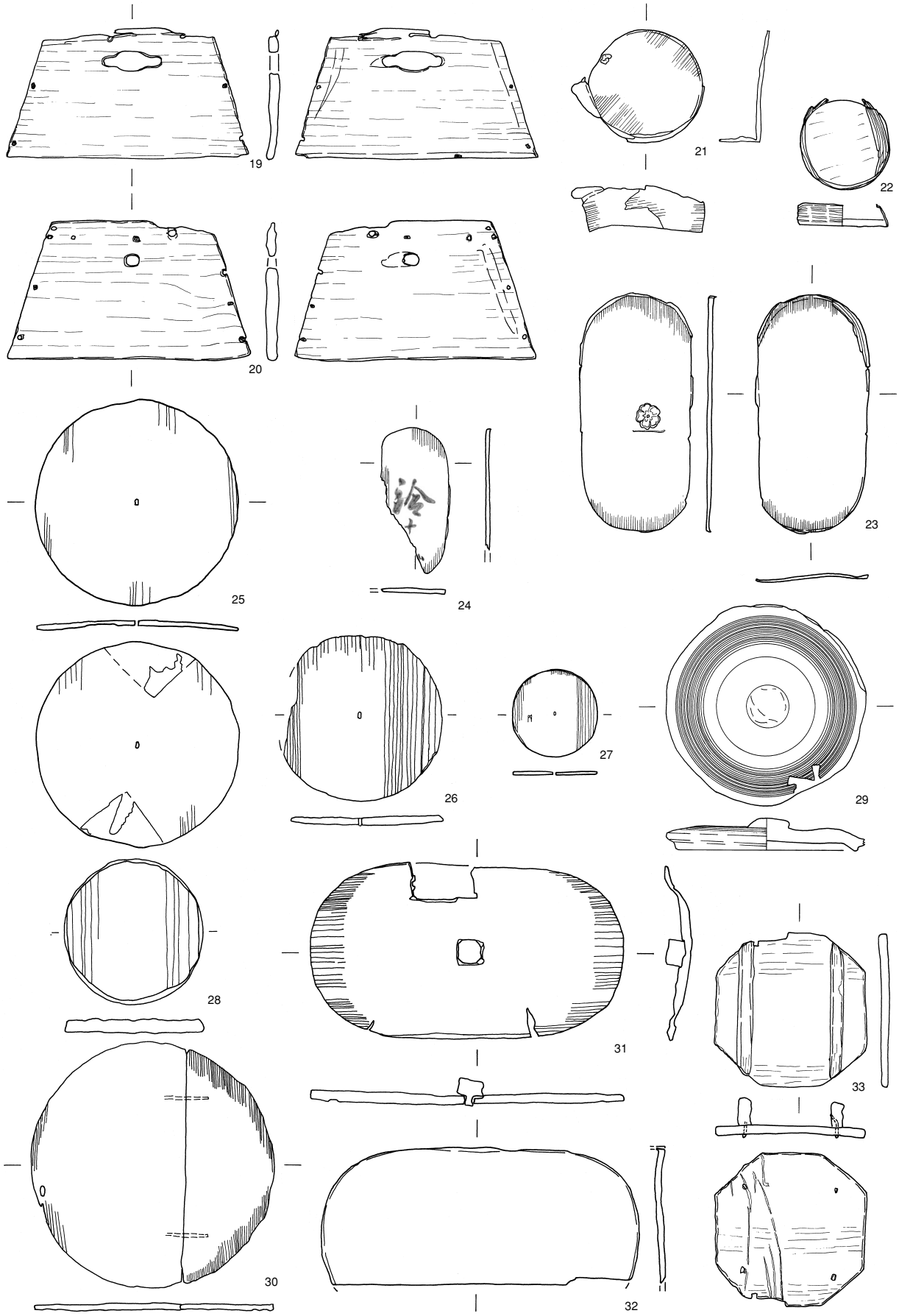
40は桶の側板、13枚がまとまって検出された。外面は朱漆。上方は１本、下方は２本のたがの痕跡が残る。下方は内側が削られ薄くなっている。41は手桶の側板。柄の穴あり。42は桶の側板。



Ⅲ-21図　SK01　木製品（1）　S=1/4

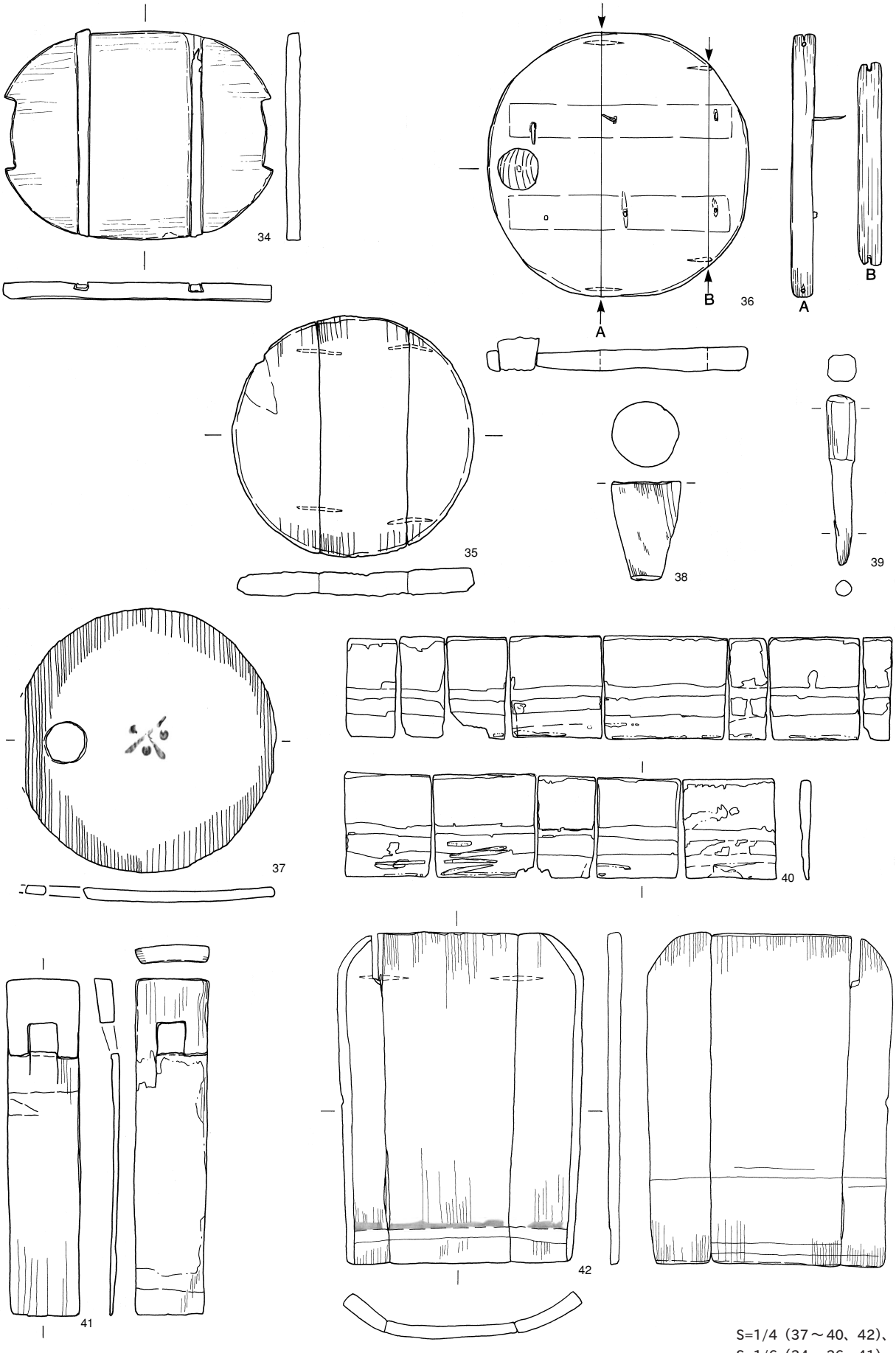


Ⅲ-PL.33　SK01　木 製 品（1）



Ⅲ-22図　SK01　木 製 品（2）　　S=1/4（19～29）、S=1/6（30～33）

Ⅲ-PL.34　SK01　木 製 品（2）



Ⅲ-23図　SK01　木 製 品（3）

S=1/4（37～40、42）、
S=1/6（34～36、41）

Ⅲ-PL.35　SK01　木 製 品（3）

Ⅲ-PL.36　SK01　木 製 品（4）

43～45は把手。上下に釘穴。43･44は朱漆。45は黒漆。

46は板状製品。47は板状製品。木釘により板を留めたと思われる跡が見られる。箱の側板か。片面黒漆に朱漆で模様。片面朱漆。

48は扇形製品。中央部分に釘穴のような穴が10個ほど開けられている。両面に刃痕があり、二次的にまな板として使われたのかもしれない。

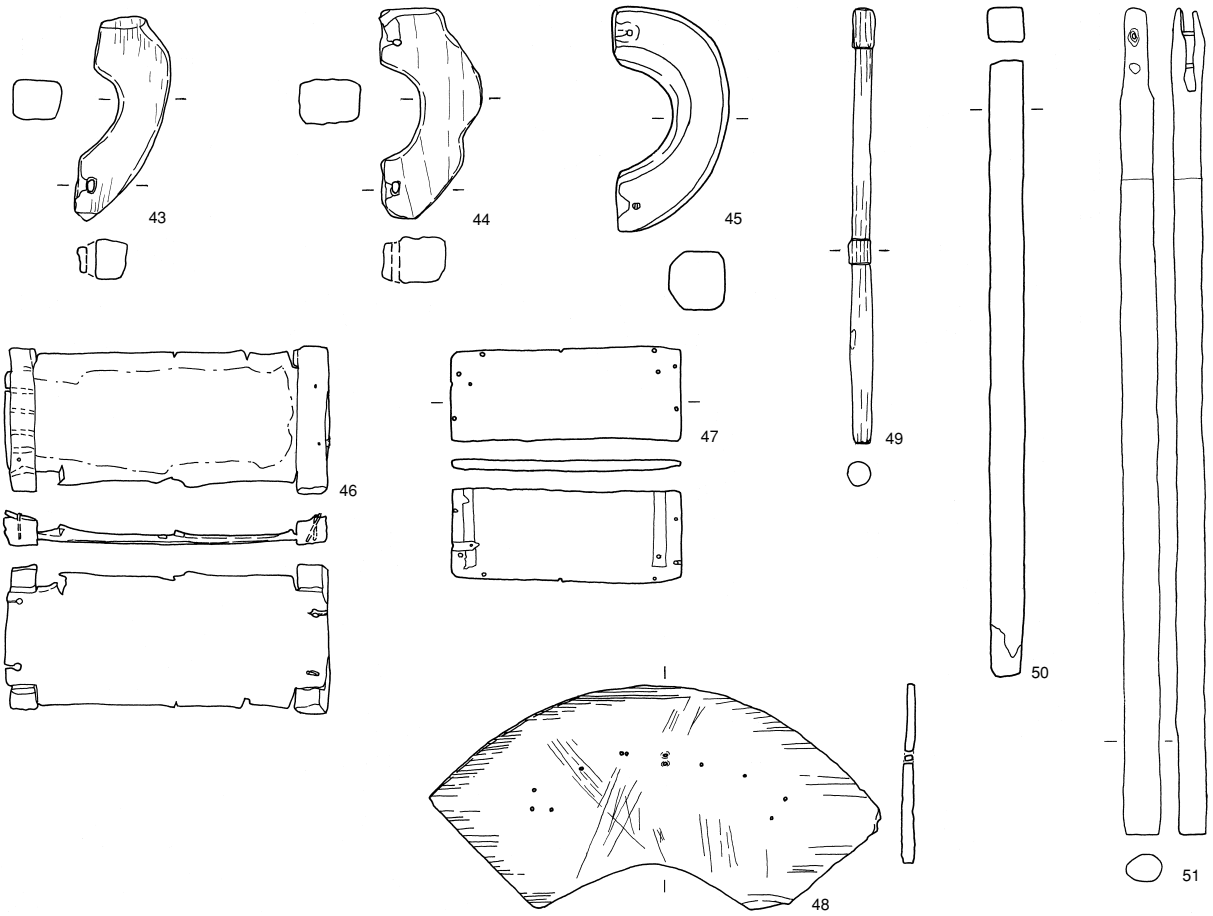
49～51は棒状製品。49は漆がほとんど剥落している。50は黒漆。51は茶褐色の色漆が塗られ片側の二股に分かれている部分は黒漆が塗られている。二股の部分に留め金として金属製品の釘が2本はめこまれている。

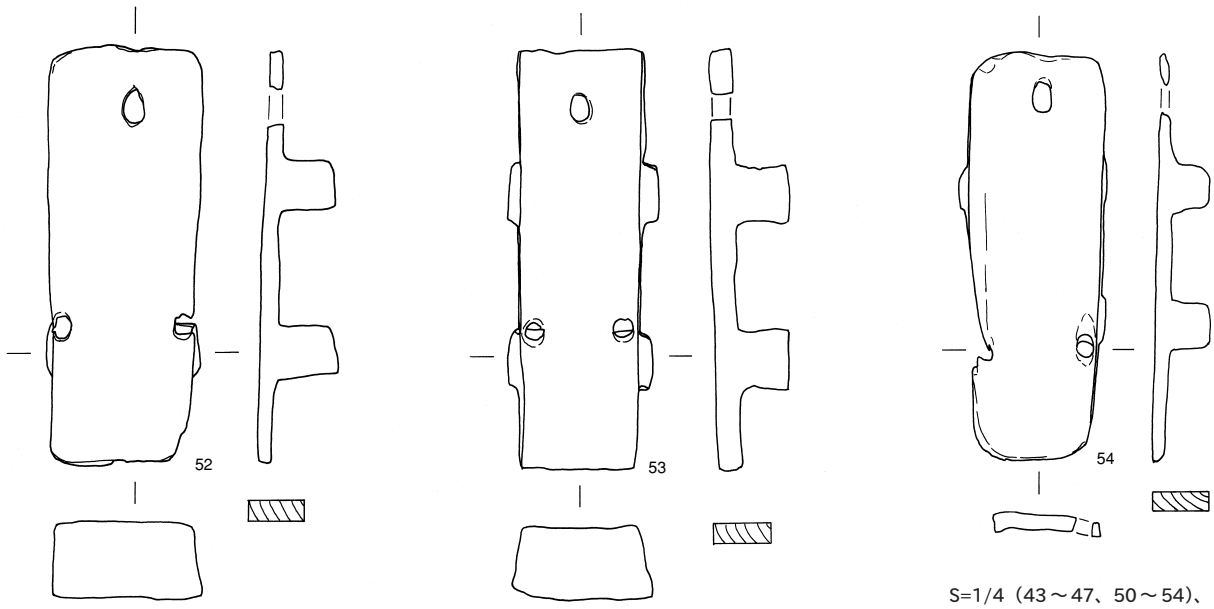
紐類も多数検出されている。

下　　駄

漆器を除く木製品は乾燥保存としたため、厳密には出土時のサイズを示していない。下駄の観察表に記載している計測値は、参考値である。なお、図に表現されている木目は、木取りを反映していない。

下駄は、台と歯、鼻緒からなる。分類は、古泉弘が行った分類をもとに行った（古泉 1979）。近世遺跡では、下駄は眼（鼻緒を通す穴）の位置や、歯の形状、装飾等から詳細に分類されるが、ここでは行っていない。





Ⅲ-24図　SK01　木 製 品（4）

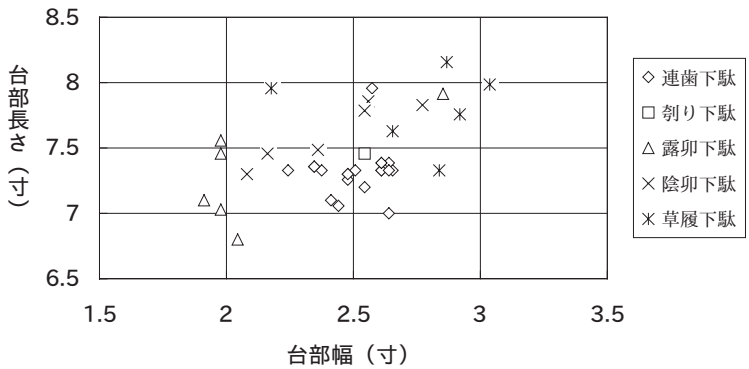
S=1/4（43～47、50～54）、
S=1/6（48、49）

○一木下駄
　・連歯下駄
　・刳り下駄
○構造下駄
　・露卯下駄
　・陰卯下駄
○無眼下駄
　・草履下駄
○その他の下駄

分　類	最小個体
連歯下駄	20
刳り下駄	1
露卯下駄	7
陰卯下駄	19
草履下駄	11
個体数合計	58

Ⅲ-4表　SK01　下駄組成

出土点数39点



Ⅲ-5表　出土下駄の台部法量分布

出土下駄は分類し、カウントを行った。前の眼がある資料を1個体としてカウントした結果、最小個体数は58点であった。Ⅲ-4表に数量を示した。完形資料は抽出し、観察表を作成した（Ⅲ-6表）。形状特徴には台部の平面形を記載した。表面装飾は、漆や顔料の塗布の有無に関する項目で、出土資料はすべて白木の下駄であった。

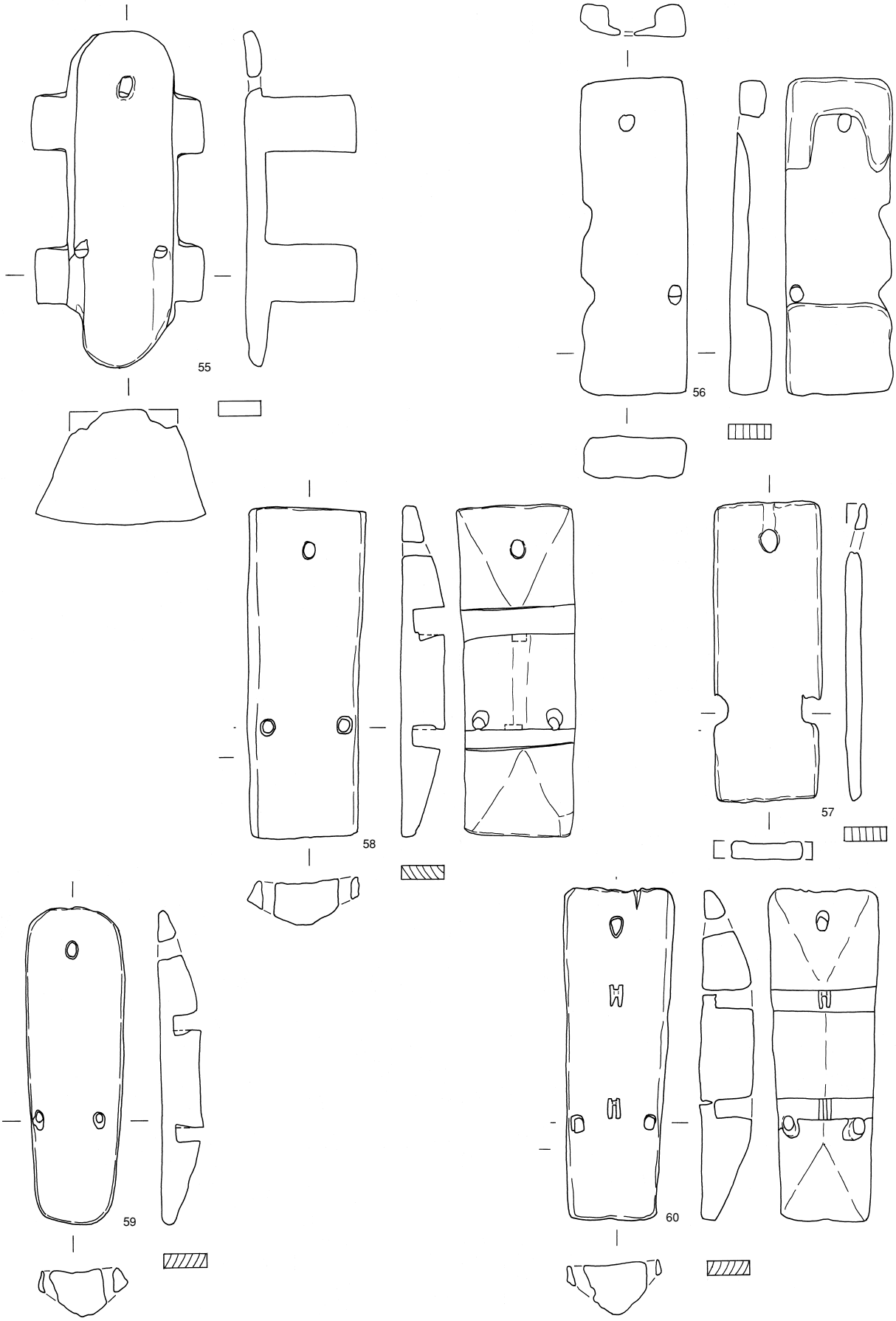
完形の45点中、16点を図化した。52～55・57は連歯下駄、56は刳り下駄、58～60は陰卯下駄、61は露卯下駄、62～67は草履下駄である。65～67は「中折れ」とされる草履下駄である。片面が磨耗し、下駄の設置面に見られる砂利の付着が認められ、草履を貼り付けるための釘があることから草履下駄とした。

完形資料の内39点の下駄について、台部の長さと幅を寸に換算しグラフ化した。台部の長さは概ね7寸～8寸、幅は概ね2寸～3寸の分布に収まる。厳密ではないが、各分類の下駄は、いくつかの寸法にまとまる傾向にある。旧芝離宮庭園遺跡出土下駄では、長さ6寸以下の小型の下駄を除き、概ね2遺跡の法量分布域に重なる事が指摘できる（原 2001）。一方、1683年頃の遺構である東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院病棟地点SK03で、同様のグラフを作成したところ、分布域は、長さ六寸以下の小型の下駄を除き、概ね長さ6寸～7寸、幅2寸～3寸の分布となり、病棟地点SK03より新しい年代の工学部1号館地点では、下駄の寸法が長さ、幅ともに1寸大きくなっていることが指摘できる。また、病棟地点で出土した6寸以下の小型の下駄は工学部1号館地点では出土していない。

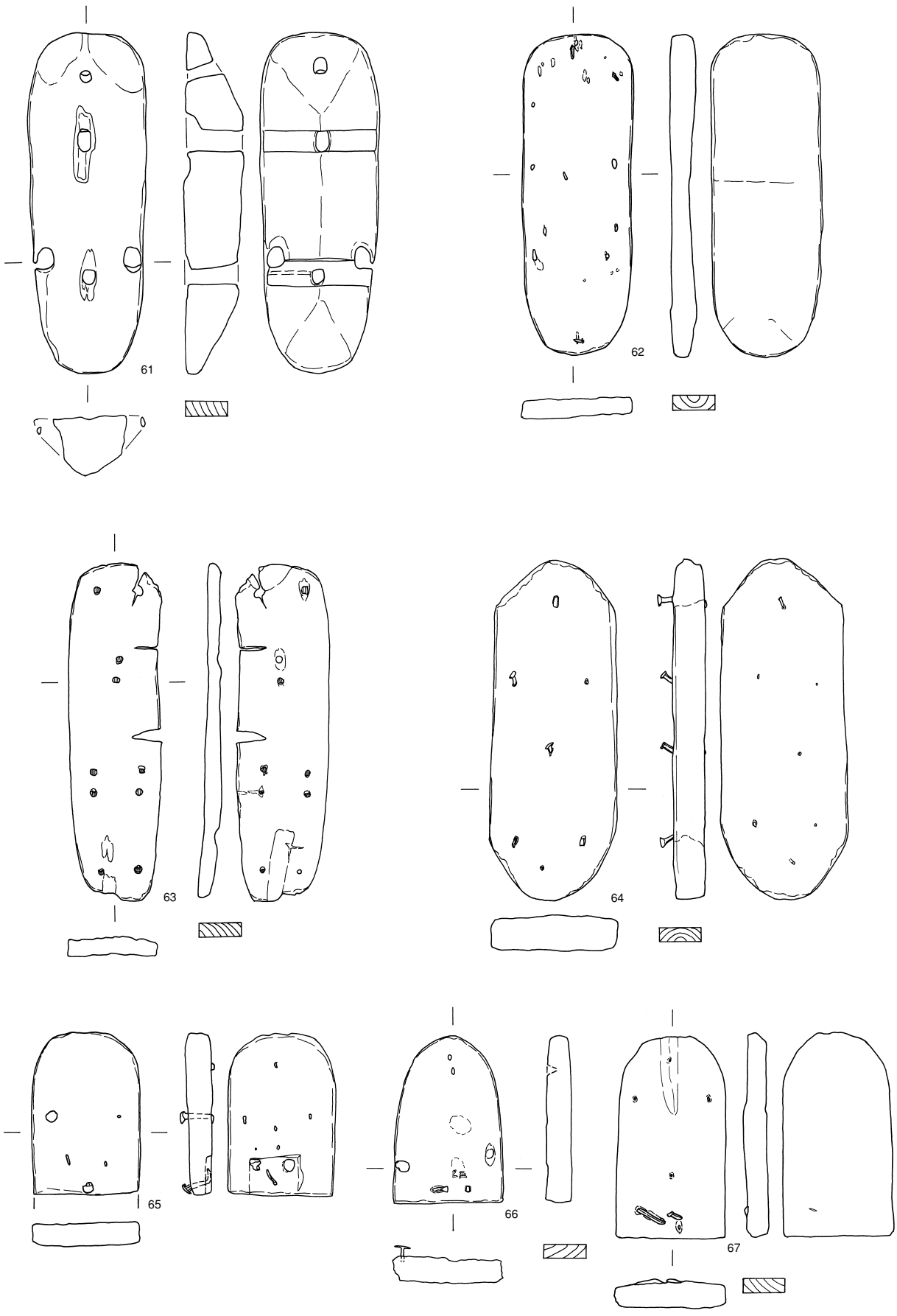
図版番号	実測番号	分　類	形状特徴	表面装飾	法　量（cm）			備　考	写真図版	管理番号
					長さ	幅	高さ			
Ⅲ-24図	52	連歯下駄	角形	白木	22.2	8.1	4.3		Ⅲ-PL.37	01
	53	連歯下駄	角形	白木	22.2	7.9	4.1			02
	54	連歯下駄	角形	白木	21.5	7.3	3.0			03
Ⅲ-25図	55	連歯下駄	丸形	白木	24.1	7.8	8.3			08
	56	刳り下駄	角形	白木	22.6	7.7	3.2			09
	57	連歯下駄	角形	白木	21.5	7.7	1.0			10
	58	陰卯下駄	角形	白木	23.7	8.4	3.4			22
	59	陰卯下駄	丸形	白木	22.7	7.2	3.6			26
	60	陰卯下駄	角形	白木	23.8	7.8	4.2			27
Ⅲ-26図	61	露卯下駄	丸形	白木	24.0	8.7	4.4			32
	62	草履下駄	丸形	白木	24.2	9.2	2.6			36
	63	草履下駄	丸形	白木	24.8	5.8	2.5	底部刳り抜き		41
	64	草履下駄	丸形	白木	24.1	6.6	1.3			43
	65	草履下駄	丸形	白木	11.6	7.8	2.1	中折れ底刳り抜き		44
	66	草履下駄	丸形	白木	11.9	7.9	1.9	中折れ		45
	67	草履下駄	丸形	白木	14.6	7.9	2.1	中折れ		46
		連歯下駄	角形	白木	22.2	7.9	4.3			04
		連歯下駄	角形	白木	22.2	6.8	3.8			05
		連歯下駄	角形	白木	22.4	8.0	2.6			06
		連歯下駄	角形	白木	22.1	7.5	2.9			07
		連歯下駄	角形	白木	22.2	7.2	2.5			11
		連歯下駄	角形	白木	21.4	7.4	5.1			12
		連歯下駄	角形	白木	21.2	8.0	3.6			13
		連歯下駄	角形	白木	22.4	7.9	3.1			14
		連歯下駄	角形	白木	22.3	7.1	4.6			15
		連歯下駄	角形	白木	22.0	7.5	2.5			16
		連歯下駄	角形	白木	22.2	7.6	3.9			17
		連歯下駄	角形	白木	22.2	8.0	5.6			18
		連歯下駄	角形	白木	22.1	7.5	3.9			19
		連歯下駄	角形	白木	21.8	7.7	4.1			20
		連歯下駄	角形	白木	22.3	7.1	3.4			21
		陰卯下駄	角形	白木	23.7	8.4	3.6			23
		陰卯下駄	角形	白木	22.1	6.3	2.6			24
		陰卯下駄	角形	白木	22.6	6.6	4.4			25
		陰卯下駄	角形	白木	23.6	7.7	4.0			28
		露卯下駄	丸形	白木	20.6	6.2	3.1			29
		露卯下駄	角形	白木	22.6	6.0	30.0			30
		露卯下駄	丸形	白木	22.9	6.0	2.4			33
		露卯下駄	丸形	白木	21.5	5.8	3.0			34
		露卯下駄	丸形	白木	21.3	6.0	3.8			35
		草履下駄	丸形	白木	23.5	8.9	3.7			37
		草履下駄	丸形	白木	22.2	8.6	1.9			38
		草履下駄	丸形	白木	24.2	8.5	2.0			39
		草履下駄	丸形	白木	24.7	8.7	2.4			40
		草履下駄	丸形	白木	23.1	8.1	2.0	底部刳り抜き		42

※法量は乾燥のため参考値である。

Ⅲ-6表　SK01　下駄観察表



Ⅲ-25図　SK01　木 製 品（5）



Ⅲ-26図　SK01　木 製 品（6）

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

Ⅲ-PL.37　SK01　木 製 品（5）

漆　器　椀（漆器椀１～60）（図：Ⅲ-27～29）（PL.：Ⅲ-38～41）

出土した漆椀106個体中、60点の実測図を掲載した。

１～12･14は飯椀で、口径12.7～13.1cm、底径5.5～7cm、器高6.4～7.2cm、口径と底径の比率が２対１程度の大振りの椀で安定感がある。

１～９は器壁が厚い椀で、腰部が丸く口縁部にかけて垂直に立ち上がる。高台が低く畳付の幅は比較的広い、高台内は深く挽かれている。表面色調は外面黒色･内面赤色である。1･2･3は胴部三単位に蒔絵の紋章が描かれる。１は暗黄褐色で丸に瓜･桔梗をモチーフとし、ブン廻し跡が認められる。紋章径は１寸６分である。２は黄褐色で花？をモチーフとする。３は暗黄褐色で幾何学紋様が描かれる。１は高台内に「田」「市」に似た押印がある。漆表面の状況から漆が塗られた後、押印がされたと考えられる。

４～９は加飾の無い椀である。４の高台内には１同様の「田」の押印がある。２は「上」、９は「叶」が赤色で書かれている。「上」「叶」は他の遺跡の資料でも認められる文字である。5･8は赤色のしるしが付けられる。７は「坂」が発色の良い赤色で書かれる。筆跡が観察できる文字である。

10～12･14は腰部に稜を持つ椀で、体部は腰部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。10は器壁が厚く、高台内は深く挽かれている。表面色調は内外黒色である。蒔絵で紋章が描かれ、色調は茶褐色でモチーフは不明である。11は器壁が薄く高台内は高台脇まで挽かれている。表面色調は外面黒色、内面赤色である。12は器壁が厚く高台が高く高台内の挽きが浅い。内外赤色で畳付は黒色である。14は器壁が厚い。高台内はレンズ状に挽かれる。内外黒色である。

加飾の無い椀5･6･8･9には内面に著しい汚れが認められた。内外黒色の椀と見間違うほどである。加飾のある資料にも汚れや傷が認められるが、前者のような著しい汚れではない。

13･15～22は汁碗で、口径10.9～12.5cm、底径5.8～6.5cm、器高4.1～5cmで飯碗より小振りである。

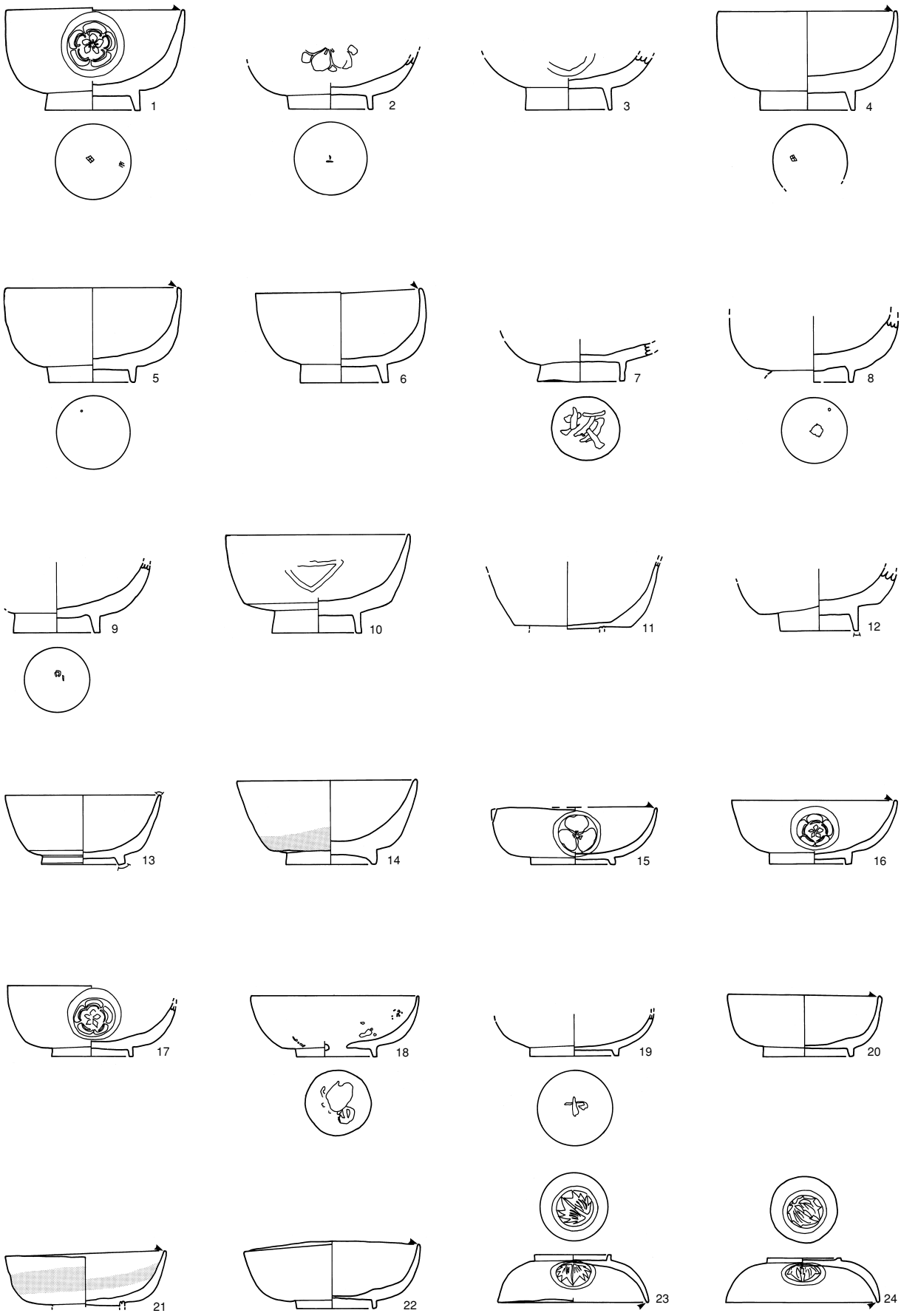
13は腰部に稜を持ち、体部は腰部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。畳付の幅が広く、内外赤色で畳付は黒色である。

15～22は腰部が丸い点は飯椀に似るが、飯碗に比べ腰部から口縁部が緩やかに開く。表面色調は外面黒色･内面赤色である。15～17は体部三単位に蒔絵の紋章が描かれ、紋章にはブン廻し跡が認められる。15は暗黄褐色で丸に片喰をモチーフとする。文様径は１寸２分である。16は黄褐色で丸に瓜･桔梗をモチーフとする。文様径は１寸２分である。17は暗黄褐色で16同様の文様である。文様径は１寸３分である。

19～21は加飾の無い椀である。この内19･20は底径の幅が他の椀より広い。19は高台内に「ヤ」に似た文字が赤色で書かれる。体部に赤色の漆が付着しているが文様とは考えにくい。18は高台内に「の」に似た文字が赤色で書かれ、穿孔されている。

15･17～19･21は内面に汚れが認められたが、飯椀のような著しい汚れは認められない。

23～35は椀蓋で、口径9.6～11cm、底径5.2～5.8cm、器高2.6～3.9cmである。汁椀に比べ腰部から口縁部が緩やかに開く。この中で29･32は小型である。表面色調は外面黒色、内面赤色である。23～29は胴部三単位に蒔絵の紋章が描かれ、紋章にはブン廻し跡が認められる。文様を観察すると蒔絵の下地を書く順は、内文様を囲む丸を描き、続いて内文様を描き蒔絵を施している。23は銀色で丸に抱き柊をモチーフとする。文様径は１寸１分である。24は暗黄褐色で23同様の紋章である。文様径は１寸である。25は暗黄褐色で丸に抱き茗荷をモチーフにする。文様径は１寸１分で



Ⅲ-27図　SK01　漆 器 椀（1）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

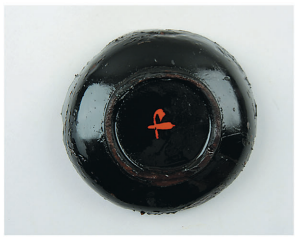
15

16

Ⅲ-PL.38　SK01　漆 器 椀（1）

17

18


19

20

21

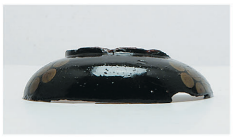
22

23

24

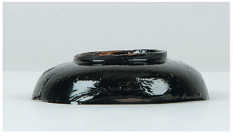
25

26

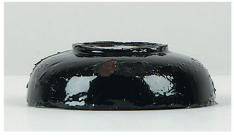

27

28

29


32

33


34

30

31

Ⅲ-PL.39　SK01　漆 器 椀（2）

ある。26は暗茶褐色で25同様の紋章である。文様径は1寸である。23～26は内文様の葉脈にあたる部分の表現を、針状の工具で引っ掻いて描く「引っ掻き」の技法を用いて表現している。27は暗黄褐色で七ツ星をモチーフとする。ブン廻し跡はそれぞれの星に認められる。中心の星は文様径4分、周りの星は文様径3分である。28は暗黄褐色で丸に角立一ツ目をモチーフとする。文様径はつまみ内が1寸、体部が9分である。29は赤色の上に銀色の蒔絵が施される。丸に桔梗をモチーフとする。文様径はつまみ内が1寸、体部が9分である。つまみ内の文様径は他の椀蓋と変わりないが、体部には同じ径で文様を描くスペースがないため文様径が小さくなっていると考えられる。

30～35は加飾の無い椀である。30は高台内に「今清」が赤色で書かれる。筆跡が観察できる椀である。31は「の？」が赤色で書かれる。18と同じ筆跡である。

18･30･33は内面に汚れが認められたが飯椀にみられるような著しい汚れではない。椀蓋は取り皿として使用されることもあるが、椀蓋の性格を考えるとそれほど汚れるものではなかったのではないだろうか。

36～41は平椀で、口径は12.5～13.4cm、5.5～6.8cm、器高は4.6～5cmである。腰部には稜があり面取りされ、胴部から口縁は直線的に立ち上がる。『守貞謾稿』に「壺　本名、ツボサラ也。平　本名、ヒラサラ也。此古制ノ曲物ヨリ模シ造ル。トモニ細キ輪ヲカケタリ。細輪ヲ桂ト云也。模之故ニ、壺ト平ハ、外面ニ細紐ヲ挽タリ。蓋、壺、平トモニ、蓋アリ。此二ツノミ椀ヨリハ、蓋ヲ大ニス。他椀ハ、皆、椀ヲ小ニス。」とある[1)]。36～39の胴部には『守貞謾稿』でいう「桂」と呼ばれる隆線が巡る。40･41は完形でないため「桂」の有無は不明である。

36～40は外面黒色、内面赤色である。41は内外黒色で高台内がレンズ状に挽かれる。36は体部に「キ」に似た文字が茶褐色で書かれる。37は高台内に「山田」が赤色で書かれる。筆跡が観察できる椀である。38は高台内に針状の工具で引っ掻いた傷がある。39は体部に「イ」、高台内には「？久」が茶褐色で書かれる。36･39は体部に雑な字が書かれるのに比べ丁寧に描かれている。

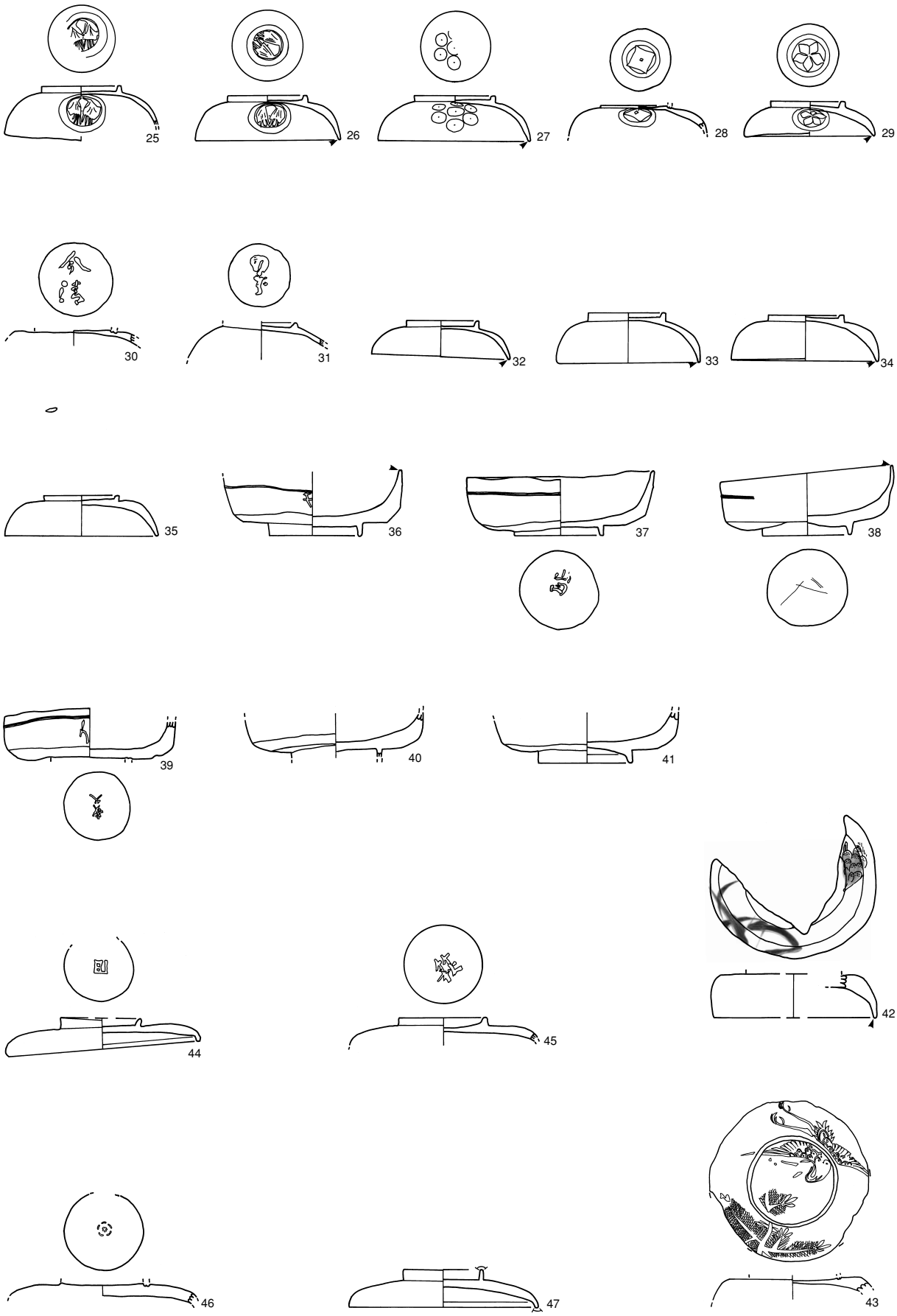
23～35以外の蓋と、平椀の蓋をここでは扱う。

42･43は腰部に一直線の稜を持つ椀蓋である。42は外面赤茶色、内面黒色である。蒔絵で茗荷と草？をモチーフとした文様が書かれる。金属粉は一部失われているが、茗荷は赤色で全体を描き黒色で線を入れ、金色の蒔絵を施している。草？は黒色と赤色で描いている。つまみから口縁部に直線的に引かれた赤色の2本の線には金色の蒔絵を施している。43は外面全体を使って鶴と若松が描かれる。下地を赤色で描き金色の蒔絵を施している。

44～47は平椀の蓋である。口径13.5～14cm、つまみ径6.4～5.8cm、器高2.7cmである。被せ蓋で、36～41に被せることができる口径である。44･46･47のつまみ内はつまみ脇まで直線的に挽かれる。45はレンズ状に深く挽かれる。44･46･47は外面黒色、内面赤色である。45は内外黒色である。文様･文字はすべてつまみ内に書かれる。44は蒔絵で「巴」が黄褐色で書かれる。45は「竹」と「秋」の文字が赤色で描かれている。「竹」の後に「秋」が描かれたもので竹の方が若干明るい色調である。46は梅が書かれる。47はつまみと口縁部に金色の蒔絵が施される。

48～53はその他の椀である。48～51は外面に芙蓉が鮮明な赤色で描かれている。表面色調は内外黒色で、49･51の口唇部は赤色である。吉野産のいわゆる「吉野椀」と同様の文様･製作技法で制作されている。48は口径12.5cm、底径7.7cm、器高5.5cmで、体部から口縁にかけてが丸みを帯びる。口径と底径の比率が約1.6：1で、畳付の幅が8mmと広い。『守貞謾稿』には、胴部が丸みを

1）喜多川守貞著　朝倉治彦編集1988『合本　守貞漫（謾）稿』東京堂出版　後集巻之一　食類P279



Ⅲ-28図　SK01　漆 器 椀（2）

35

36

37

38

39

40

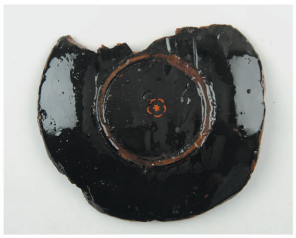
41

42

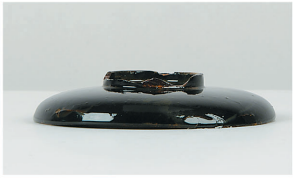
43

44

45



46


47

Ⅲ-PL.40　SK01　漆 器 椀（3）

帯びた椀で、つまみと畳付の幅が厚い椀が描かれており、「菓子椀　京坂、本膳必ラズ漆之也。形、汁椀ニテ、大形、又厚シ。平ト似タル食ヲ盛ル。蓋、平ハ、スマシ、菓子ワンニハ、葛ヲ加ユル等也。又、四ツ椀ト、平ト、壺ハ、必ラズ同製同色ナリ。菓子ワンハ、別製、異色ヲモ交ヘ用フ江戸ハ更ニ無之。」とある。『商用録』にも「菓子椀」が描かれており、本資料に似た特徴を持つ。『商用録』では「吸い物椀」の一つのバリエーションとして扱われている[2)]。

49～**51**は体部に稜を持つ資料である。腰部丸く胴部から口縁部は急角度で立ち上がり、体部から口縁部は垂直に立ち上がる。**52**は底径が6.2cmと広く、体部は立ち上がりが丸みを帯びつつも斜め方向に広がっている。外面黒色、内面暗褐色である。口縁から体部が赤色で塗られている。

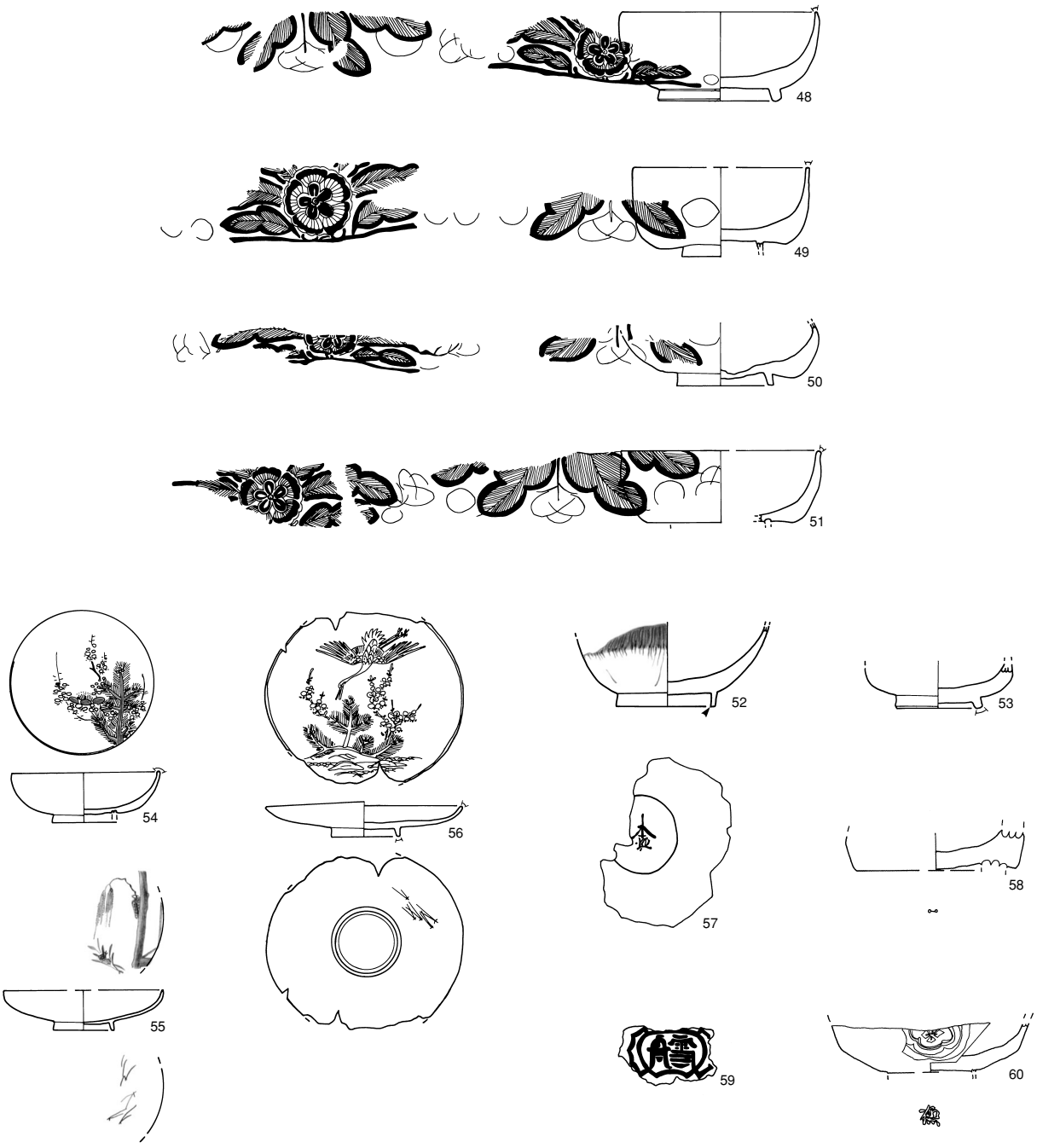
53は腰部が丸く体部が垂直に立ち上がる。内外赤色で畳付は黒色ある。畳付の幅は6mmと広い。

54～**56**は杯である。**54**は口径9.2cm、器高3.1cmで腰部から口縁部は丸みを帯びる。深めの杯である。内外赤色で口唇部は茶色である。内面に漆絵と蒔絵で若松と梅が描かれる。**55**は口径9.9cm、底径3.8cm、器高3.1cmで腰部から胴部はなだらかに立ち上がり、口縁部近くで急角度で立ち上がる。内外赤色である。文様は金色の蒔絵で、内面に正月の茶事をモチーフとした、床の間の床柱に掛けた籠花掛に枝垂柳、水仙、外面には敷き松葉が描かれる。**56**は口径12.2cm、底径4.3cm、器高2.2cmで他の杯に比べ口径があり、器高が低い。体部はなだらかに立ち上がり口縁近くで立ち上がりが急になる。内外赤色で口縁部と畳付が金色である。蒔絵で、内面に若松･梅に鶴、外面に敷き松葉が描かれる。出土した杯はそれぞれ形状･大きさが異なるが、「若松･梅」「正月の茶事･水仙」「若松･梅･敷き松葉」と正月～早春をモチーフとした文様が描かれており、文様のモチーフに限ってはまとまった資料群といえる[3)]。

57～**60**は文様･文字が描かれている破片である。**57**は椀もしくは椀蓋で、外面黒色、内面赤である。「本極」が赤色で描かれる。他の遺跡の資料でも認められる文字である。**58**は椀もしくは椀蓋で変形が激しいため、高台内もしくはつまみであろう。外面黒色、内面赤色である。体部三単位で丸に瓜･花菱をモチーフにした紋章が黄褐色に銀色の蒔絵で描かれる。赤色でしるしが描かれる。**59**は椀の体部で、外面黒色、内面赤色である。外面に赤色で「雪舟」が書かれる。**60**は椀で、内外赤色である。高台内に黒色で「極」が書かれる。他の遺跡の資料でも認められる文字である。

2）輪島市史編纂委員会　1973 「商用録」『輪島市史　資料編第六巻輪島漆器資料』P427･428

3）茶事･茶花については以下を参考にした。
平凡社　1991 『茶の歳時記辞典　炉　風炉』
学習研究社　1996 『野草実用図鑑〔5〕茶花の入れ方（第15刷）』　講淡社　1994 『生活ごよみ－冬』



Ⅲ-29図　SK01　漆 器 椀（3）

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

Ⅲ-PL.41　SK01　漆 器 椀（4）

(3) 石　製　品

石　製　品（石製品１～32）（図：Ⅲ-30～31）（PL.：Ⅲ-42～43）

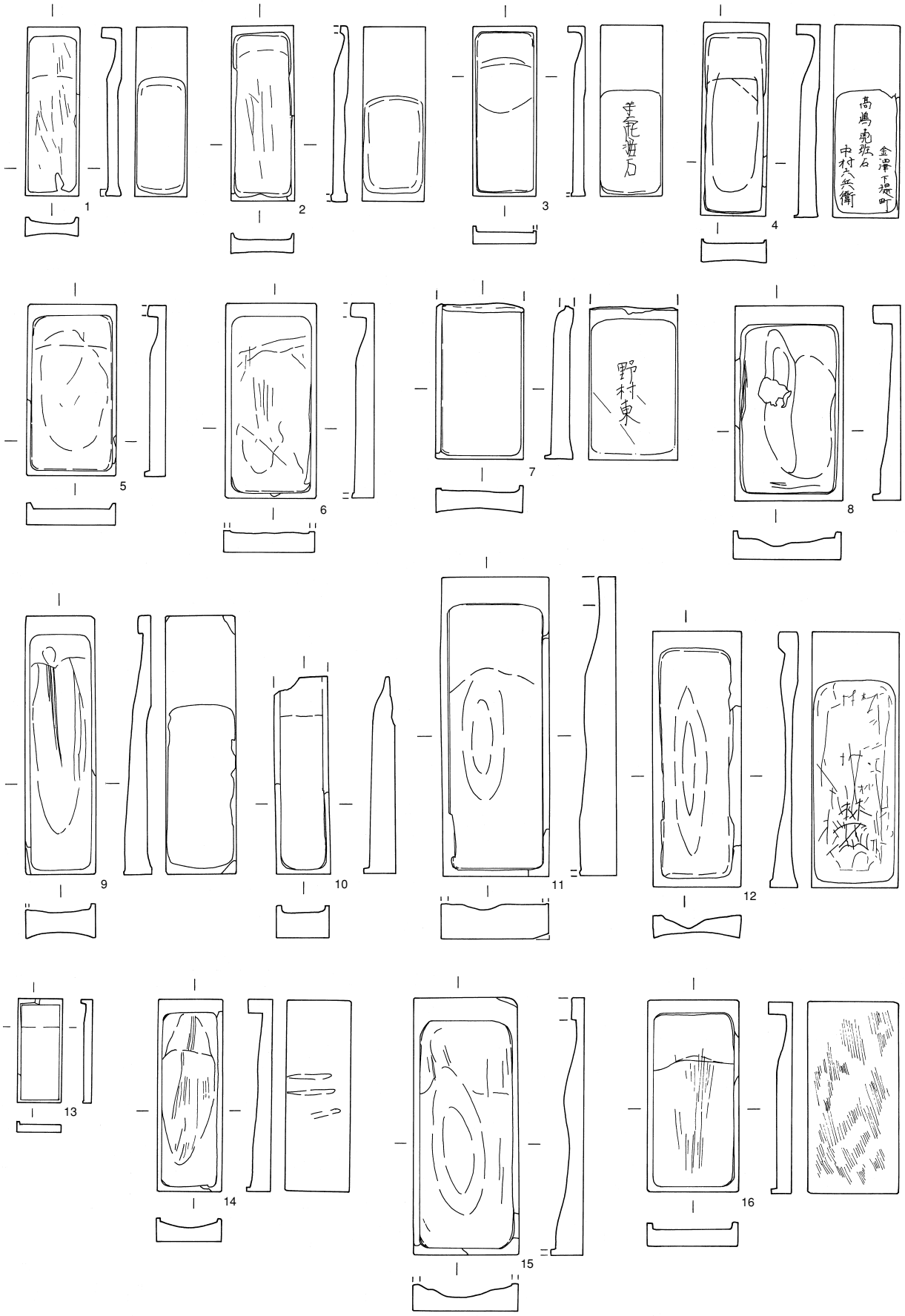
１～17は硯である。1、粘板岩。硯背に窪みあり。内面に朱墨が付着している。2、粘板岩。むこう縁が欠損。硯背に窪みがある。内面に朱墨が付着している。3、粘板岩。硯背に窪みがある。窪みの中に線刻で「虎班石」と思われる文字があるが、あまり文字の体を為しておらず、おそらく実際の漢字を知らずに真似をして書いたものであろう。4、粘板岩。硯背に窪みがあり、その中に「高島虎班石　金澤下堤町　中村六兵衛」の線書がある。これらの字体は全く同じであり、おそらく、上等とされる高島虎班石の名と所有者本人の名前を刻んだものであろう。金澤下堤町は、金沢に実在する町名であり、中村六兵衛氏が金沢から本郷邸内に持ち込んだ後廃棄したのであろう。5、粘板岩。6、緑色を帯びた粘板岩。硯側に漆を塗布されている。7、粘板岩。硯背に窪みがある。海部欠損。表、背の両側から切断の痕跡がある。背に「野村　東」の刻書がある。8、粘板岩。陸の中央部分が大きく窪んでおり、硯側に黒色塗料（木蝋か）を塗布している。9、粘板岩。縁欠損。硯背に窪みがある。10、粘板岩。海部欠損。11、粘板岩。むこう縁が欠損。陸の中央部分が大きく窪んでいる。硯側に黒色塗料（木蝋か）を塗布している。12、粘板岩。むこう縁欠損。石材は軟質で、内側の線が湾曲している。石材の色や硯背の窪みなど高島硯を意識して作ったものであろうが、石材が軟質のため、陸の中央部分が大きく窪んでいる。硯背に「林」の線書がある。13、粘板岩。小さく、おそらく携帯用であろう。14、泥岩。硯側に黒色塗料（木蝋か）を塗布している。15、泥岩。むこう縁が欠損。陸の中央部分が大きく窪んでいる。硯側に黒色塗料（木蝋か）を塗布している。16、凝灰岩。17、頁岩。異形硯。陸の中央部分が大きく窪んでいる。表面は線書きにより模様が刻まれている。比較的粗く、自分で刻んだものかもしれない。表面一部欠損。内面に朱墨が付着している。

18～21は温石である。18、片麻岩。表面は被熱で白変、劣化している。19、片麻岩。表面は被熱で白変、劣化している。劣化のためか半分ほど剥離欠落している。20、片麻岩。表面は被熱で白変、劣化している。劣化のためか上端のみしか残存していない。21、片麻岩。表面に被熱の痕跡は見られず、18･19と同じような温石として作られたものが、温石としては使用されず、人為的に切断、加工されたものであろう。表面には多数の擦痕が見られ、最終的には砥石として使用されたのであろうか。19～21の長さは不明であるが、幅、厚さは18と同一で、同規格のものであろう。

22、片麻岩。材質的には18～21と同じである。側面には細く雑な線で「内藤氏［石？］持」と刻まれている。印の材料として加工している途中のものであろう。

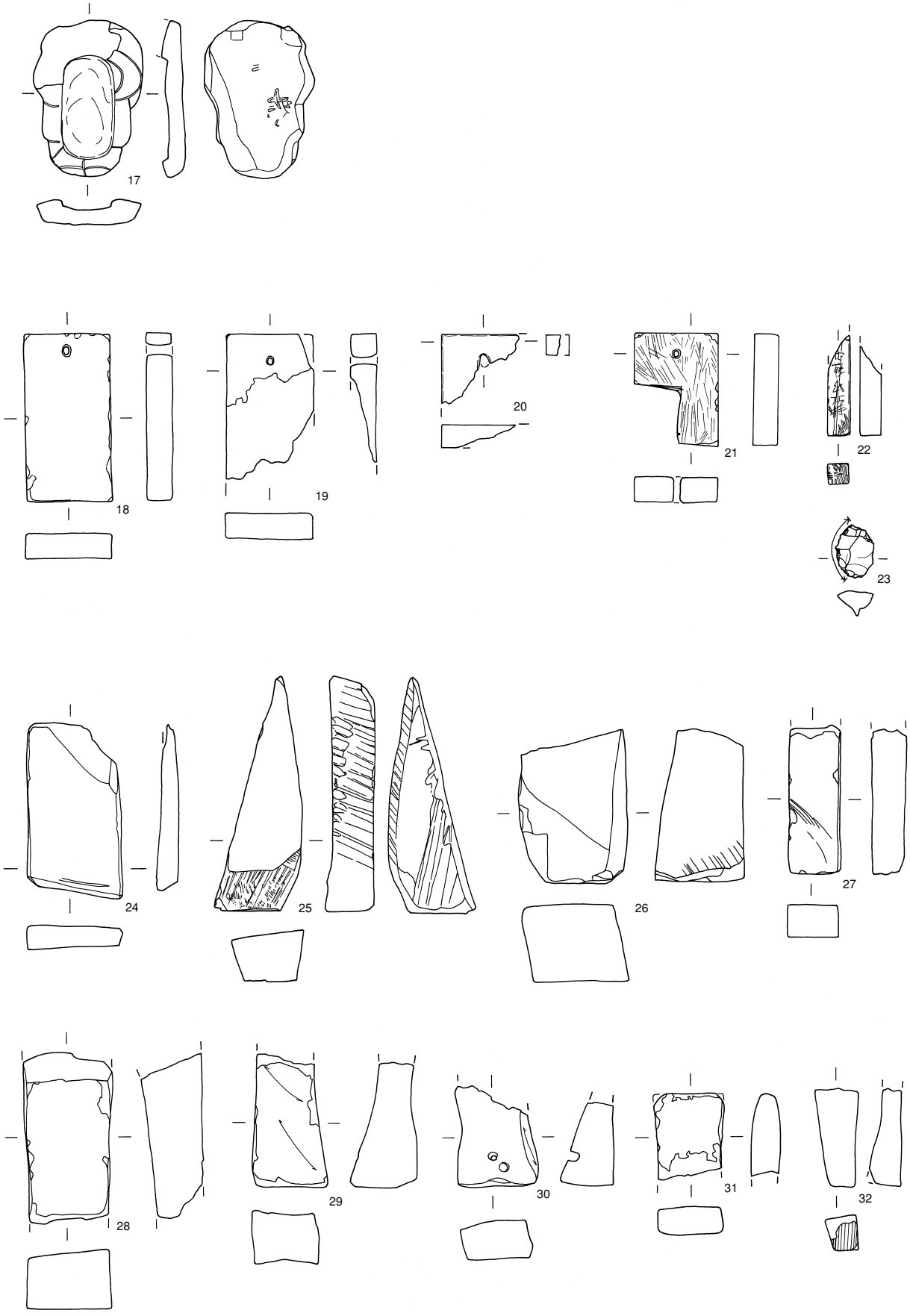
23は火打ち石である。石英。打ち欠いてかなり小さくなっている。

24～32は砥石である。24、中砥。泥岩。面は平らで、折れている。石の摂理面のため表面にわずかに段ができており、砥石としては使いづらいものであったと思われる。25、中砥。粘板岩。折れている。表面の一部と、側面の２ヶ所に工具痕が残る。別のものからの二次転用と思われるが、砥石ではなく、なにかの石製品の一部である可能性もある。26、中砥。粘板岩。折れている。右手前から左奥にかけて使用痕が見られる。二面に工具痕が残る。27、中砥。泥岩。厚さはほぼ均一であるが、端部が切断されている。28、中砥。泥岩。折れている。手前が厚くなっており、右手前から左奥にかけて使用痕が見られる。29、中砥。泥岩。折れている。手前が厚くなっており、右手前から左奥にかけて使用痕が見られる。30、中砥。泥岩。２ヶ所に穴をあけようとした痕が見受けられる。うまく開けられずに、少しずれたところを試したがおそらくそこも開けられなかったのであろう。



Ⅲ-30図　SK01　石 製 品（1）

Ⅲ-PL.42　SK01　石 製 品（1）



Ⅲ-31図　SK01　石 製 品（2）

Ⅲ-PL.43　SK01　石 製 品（2）

31、中砥。泥岩。折れている。中央部が厚く、周縁部が薄くなっている。持砥として使用したのかもしれない。32、中砥。凝灰岩。一面のみ工具痕あり。４面とも使用されている。右手前から左奥にかけて使用痕が見られる。

温石について

SK01からは、４点の温石が検出されているが、いずれも片麻岩製のものである。大きさは１点のみが完形で、４寸×２寸の長方形である。温石は大、中、小とある程度規格化されており大型に属する。他のものも幅は残存しており、いずれも２寸である。おそらく同じような規格を持っていたのではないかと考えられる。

21は、温石としては使用されず、人為的に切断、加工されているもので、22は、同じ素材のものが印材として加工されている途中のものである。21と22は厚みがわずかに異なるため21から22が切断されたものではない。

構内遺跡の他の地点を見てみる。法文地点E8-5号土坑（18世紀後～19世紀前）では、被熱していない温石１点と名が刻まれ印鑑として使われたと思われる１点が検出されている。外来地点SK81（東大編年Ⅷb期）でも被熱しているものが１点検出されている。これらは、本遺構とほぼ同時期である。病棟地点はL32-1、AE35-6から検出されており、L32-1は東大編年Ⅲ期とかなり時期が古い。

一般的に滑石といわれている石は温石や印材として使われていたが、「万金産業袋」には、次のようなくだりがある。「石印本式は蝋石なり。…価むつかしきがゆえ、今、海石･硯石･砥石是等の石を硯屋にて印形にすらせ彫なり。」元々印材ではないものを印材として転用していたことがわかる。

本遺跡出土の片麻岩製の温石も、本来の目的の温石として使われる以外に印の材料としても使わ

れていたのであろう。また、今の段階では、出土遺構の多くが18世紀後～19世紀前に比定されており、この時期に多く使われるようになったものかもしれない。温石としてはかなり重く、被熱による劣化も激しいように見受けられる。

構内遺跡の他の地点では温石として使われたと考えられている有印土製円盤が検出されている。有印土製円盤は、17世紀後葉から18世紀後葉の時期にある程度まとまって検出されており、18世紀後葉から19世紀前半のまとまった資料である本地点SK01から検出されていないのは、それらのことを裏付ける良好な資料といえよう。

(4)　金 属 製 品

銭　　貨（金属製品1～10）（図：Ⅲ-32）（PL.：Ⅲ-44上段）

銭貨は12枚出土している。観察については『新寛永銭鑑識と手引き』（万国貨幣研究会 1964）、『季刊方泉處』22号（1998）を参考とした。

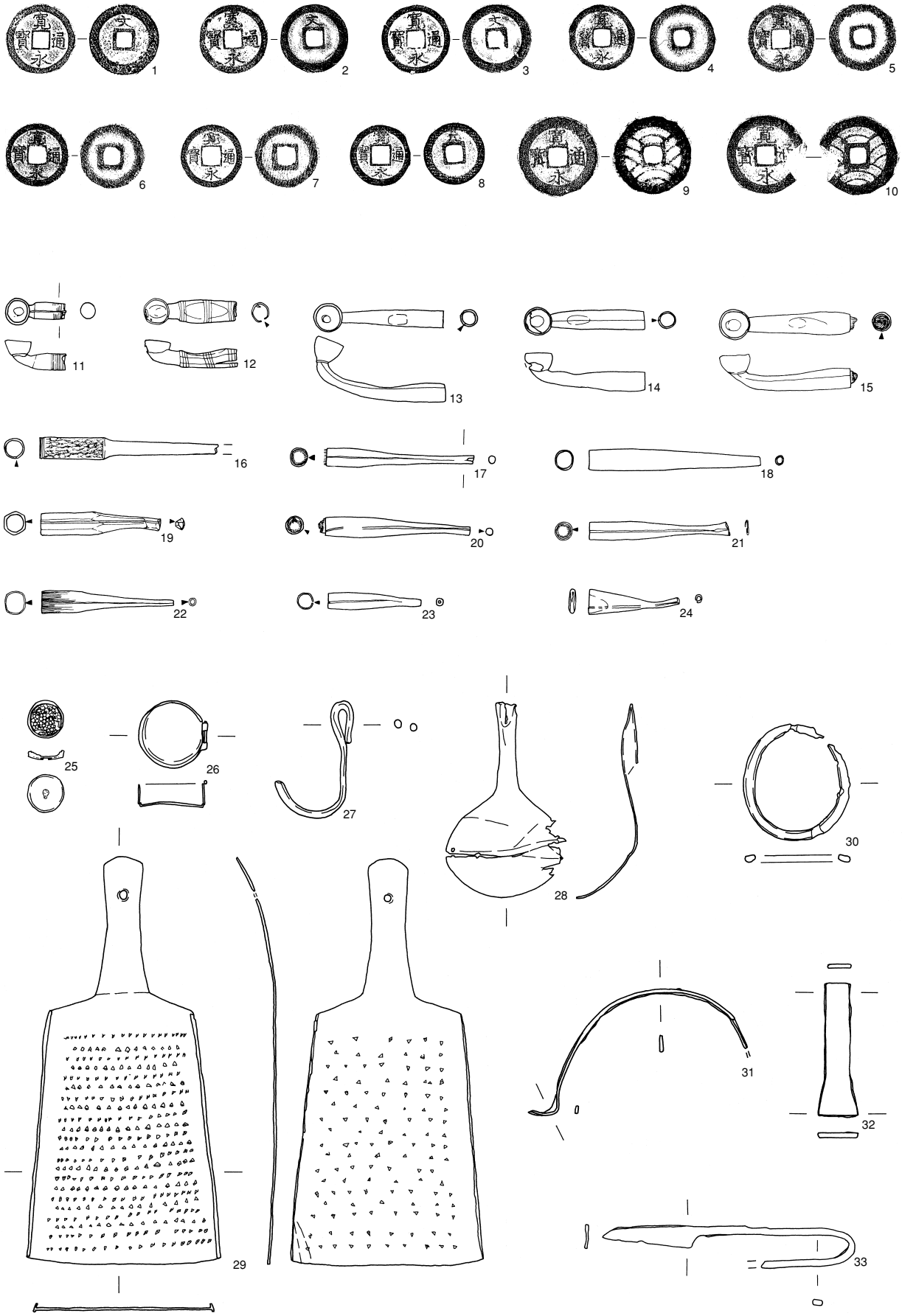
1～3は寛文8年（1668）江戸亀戸村で鋳造された通称文銭である。**1**は細字背文である。背の「文」の字がひろく、その交差点に切れ目がある。**2**は正字小文である。文の字の第一画と二画が必ず密着している。正字は背文銭の代表銭である。**3**は島屋文か。島屋銭は、通頭が普通の文銭と異なり「コ」の字でなく「ユ」となっているものである。寛文銭の鋳造期については『新寛永銭鑑識と手引き』「銭録」によると寛文8年～天和3年（1668～1683）までの16年間鋳造するとある。**4**は文字が潰れているため、判読が困難であった。**5**は江戸深川十万坪で享保11年～17年（1726～1732）鋳造された銭貨である。「寛」の字が多少広めになっている広目寛で、通称不旧手である。「通」の字コ頭でなくマ頭通となっており不旧手の特徴を持っている。**6**は元文元年（1736）に江戸深川十万坪で鋳造された含二水永銭か。**7**は宝永5年（1708）に鋳造された勁永広寛、通称四ッ寶銭か。**8**は寛保元年（1741）に大坂高津新地で鋳造された小字は細字背元か。**9·10**は背に「11波」の波をもつ四文銭である。四文銭の銭種を色による見分け方でみると、黄味がかった特徴を持つ明和期、赤みがかっているものは文政期、黒みがかっているものは安政期と云われる。本地点の**9**は、赤みがかったもので文政4年（1821）に鋳造されたものである。**10**は黄みがかっている四文銭で、明和6年（1769）に鋳造されたものである。

以上本地点の銭貨12枚をみると背に「文」をもつ寛文8年の文銭、背に「元」をもつ寛保元年に鋳造されたものや、明和6年に鋳造された四文銭と文政4年に鋳造された四文銭であった。共伴した陶磁器は18世紀末～19世紀初頭に位置付けられており、銭貨は共伴資料の年代より若干古いもので占められていた。

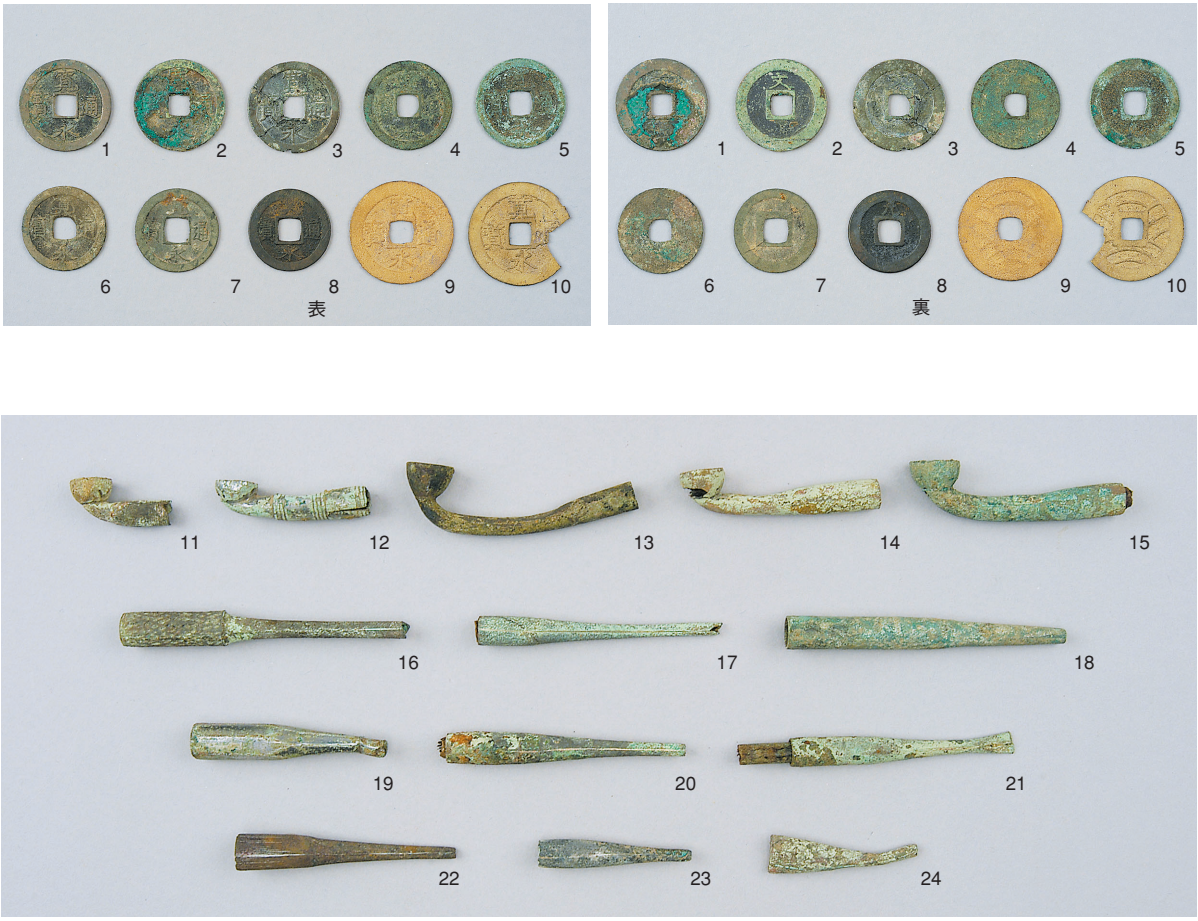
煙　　管（金属製品11～24）（図：Ⅲ-32）（PL.：Ⅲ-44中段）

煙管は14点（雁首5点·吸口9点）出土している。なお、煙管の名称については『地下からあらわれた江戸』（古泉 2002）、また、技法については『きせる』（田中 1988）を参考とした。

11は雁首である。肩付きで脂返しの湾曲は小さい。火皿は器高の低い碗形を呈し、首部との接合部はやや太い。肩部に縞状に筋文様（小松筋）が施されている。**12**は銀製の雁首である。肩付きで脂返しの湾曲はない。火皿は器高が低く、口径の大きい碗形を呈する。**3**本単位で3ヶ所縞状の筋文様が施されている。敲打痕が確認される。**13**は雁首である。脂返しの湾曲は大きく（河骨形）、補強帯を有する首部の長いものである。火皿は器高が高い、腰の張らない碗形である。首部との接合部は細



Ⅲ-32図　SK01　金属製品（1）



Ⅲ-PL.44　SK01　金属製品（1）

い。敲打痕が確認される。14は雁首である。脂返しの湾曲はわずかにみられ、火皿高は低い碗形で首部との接合部はやや太い。敲打痕が確認される。15は雁首である。脂返しの湾曲は小さく、補強帯を有する。火皿は器高の低い碗形で口径は大きい。ラウが残存している。16は肩付きの吸口である。二段筋入りで肩部に毛彫りで文様を施している。胴部は太く長いものである。17は吸口である。胴部は細く長い。ラウが残存している。18は吸口である。胴部は太く長いものである。19は吸口である。肩は六角形を呈し、六角形の稜線は山形に叩き出されている。20は吸口である。緩やかに細くなる。ラウが残存している。21は吸口である。口付部に向かい急激に細くなる。口付部は潰されている。ラウが残存している。22は銅製の吸口である。小口に近い胴部に細かい筋がみられるが、文様として施されたものであろうか。口付部はすぼまる。23は銀製で小形の吸口である。口付部はすぼまる。24は小形の吸口である。小口から潰されている。

以上煙管を観察してきたが、材質は真鍮製と銅製と銀製の３種類であった。共伴した陶磁器は18世紀末～19世紀初頭に比定されるものであった。

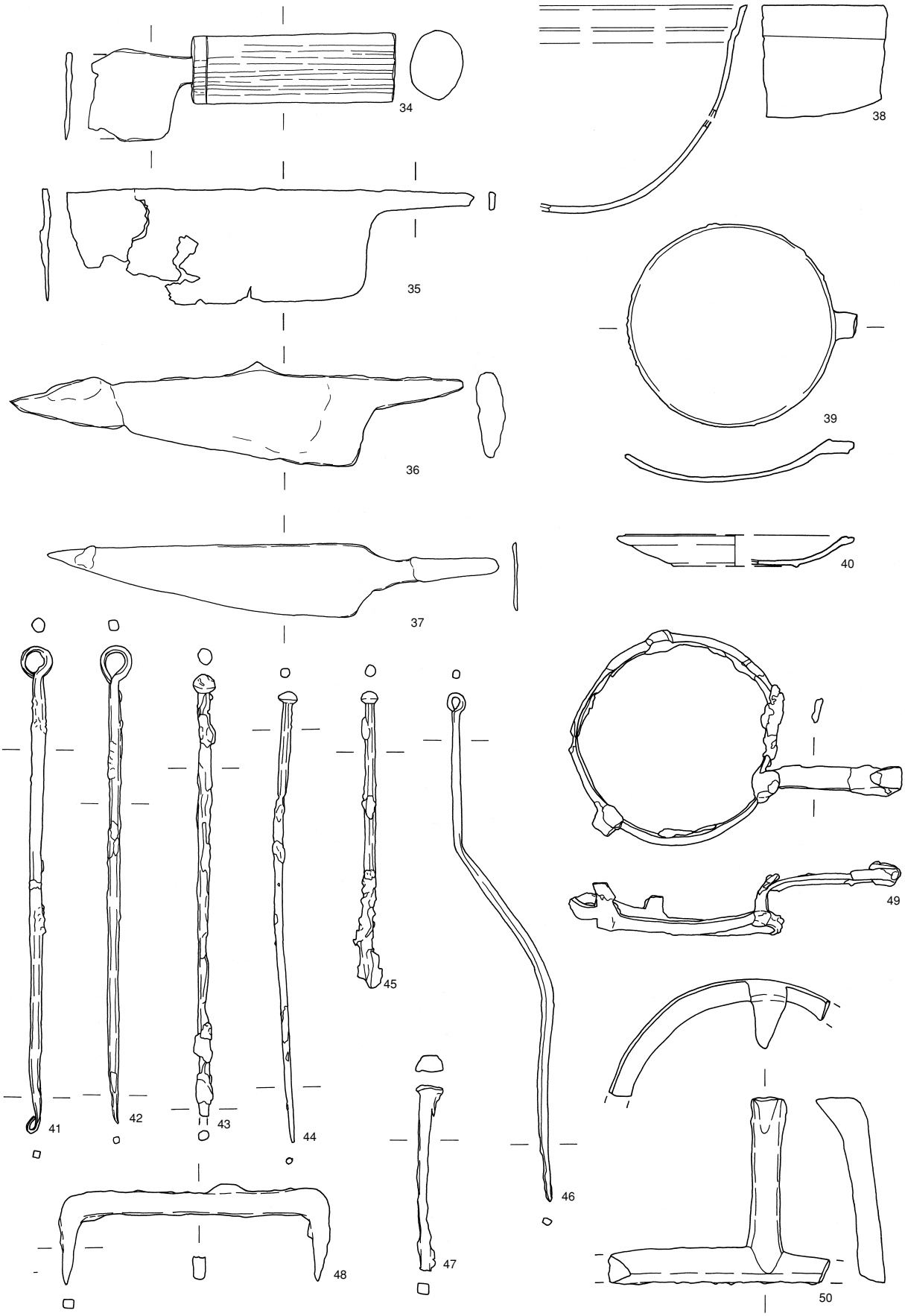
銅　製　品（金属製品25～29･a･b）（図：Ⅲ-32）（PL.：Ⅲ-44下段）

銅製品は７点出土している。25は飾金具か。縁部と内面は別作りである。底部中央に穿孔がある。内面は魚々子（ななこ）状になっている。「魚々子」とは、切先が小さな円状のノミで打ち込んだもので、魚の卵をまき散らしたように見えることから名が付けられた地文様である。26は蓋付きの容器である。蓋はないが蓋の開閉に使用するための蝶番（ちょうつがい）が付けられている。27は釣り状金具である。28は円状の杓子である。把手は両面から折り返し丸めている。29はおろし金である。表裏に刺突が配列されている。表面は細かい刺突で22列、裏面は粗く17列である。PL.44-aは鉉状製品である。幅は一定ではなく、端から1cmあがった箇所に径2mmの穿孔がある。端部は捻れている。同様の鉉が汐留遺跡脇坂家から出土していることから、捻れは装飾として製作されたものと思われる。PL.44-bは灯芯押さえ。針金５本で円形部の基を作り、その上を３本の針金で編み込み装飾としている。把手は３本の針金を撚り、上から２本の針金で交差させている。

鉄　製　品（金属製品30～50）（図：Ⅲ-32･33）（PL.：Ⅲ-45）

鉄製品は22点出土している。30は輪状製品である。31は鉉状製品である。鉄瓶や土瓶等の把手と思われる。32は不明である。33は握り鋏である。34は菜切包丁である。木製の柄が残存している。35は菜切包丁である。他に同様のものが１点出土している。36は包丁と思われる。錆びているが他の包丁より厚いため、出刃包丁と思われる。37は刺身包丁と思われる。38は鍋である。ススが付着している。二片あるが同一個体と思われる。39は吊灯台の灯明皿である。ススが付着している。40は高台が付いた灯明皿である。41～46は火箸である。41･42･46は頭部を丸めて環状としている。２本を括る為のもであろうか。43～45は頭部を球状にしている火箸である。47は頭巻の釘である。48は鑓である。49は不明である。３ヶ所可動式の別の金属を取り付けている。50は重量感のある炉用の五徳である。爪の大きいものは炉用で小さいものは風炉用である。

以上銭貨、煙管以外の金属をみてきたが、包丁やおろし金、杓子、火箸、五徳など台所に関係したものが多く確認された。



Ⅲ-33図　SK01　金属製品（2）

Ⅲ-PL.45　SK01　金属製品（2）

番号	器種	材質	銭径	穿径	輪厚	特徴
1	寛永通宝	銅	24.80	5.80	1.00	背文「文」/細字背文
2	寛永通宝	銅	25.00	6.00	1.00	背文「文」/正字背文
3	寛永通宝	銅	24.80	5.80	1.00	背文「文」/島屋文
4	寛永通宝	銅	24.00	5.80	0.80	判読不可
5	寛永通宝	銅	23.00	6.00	0.80	享保11～17年鋳造/広目寛･不旧手
6	寛永通宝	銅	24.30	6.30	1.00	元文元年鋳造/含二水永
7	寛永通宝	銅	22.50	6.80	0.80	宝永5年鋳造/勁永広寛/四ツ寶銭
8	寛永通宝	銅	22.30	6.00	0.80	寛保元年大坂高津鋳造/細字背元
9	寛永通宝	銅	28.00	7.00	0.80	明和6年鋳造/背文「11波」穿孔にバリあり
10	寛永通宝	銅	28.20	6.30	0.90	明和6年鋳造/背文「11波」

単位　mm

Ⅲ-7表　銭　　貨（Ⅲ－32図）（PL.Ⅲ－44図）

番号	器種	材質	長さ	火皿径	小口径	特徴
11	煙管･雁首	真鍮	32.50	14.00	－	肩付き/縞状の小松筋
12	煙管･雁首	銀	50.00	14.00	10.00	敲打痕/肩付き/小松筋に彫られている/敲打痕
13	煙管･雁首	真鍮	73.50	16.00	9.00	補強帯有り/脂返し河骨形/火皿高は高い/敲打痕
14	煙管･雁首	真鍮	65.00	14.50	10.00	脂返しなし/火皿高は低い/敲打痕
15	煙管･雁首	真鍮	71.00	16.50	10.00	補強帯有り/脂返し小さい/火皿高は低い
16	煙管･吸口	真鍮	94.00	－	10.50	肩付き/肩部に毛彫り/小口に小松筋
17	煙管･吸口	真鍮	79.00	－	10.00	胴部中央より急激に細くなる
18	煙管･吸口	真鍮	78.00	－	12.00	太く口付部に向かい緩やかに細くなる
19	煙管･吸口	銀	64.00	－	12.00	六角形煙管/肩の変形したものか口付部は潰れている
20	煙管･吸口	真鍮	75.00	－	9.50	緩やかに細くなる
21	煙管･吸口	真鍮	93.00	－	11.00	胴部下方部で急激に細くなり口付部は潰れて広がる
22	煙管･吸口	銅	71.50	－	12.00	小口は楕円形/肩の名残/急激に細くなる
23	煙管･吸口	銀	50.00	－	9.00	短く口付部はすぼまる
24	煙管･吸口	真鍮	49.00	－	13.00	小口は潰されている

単位　mm

Ⅲ-8表　煙　　管（Ⅲ－32図）（PL.Ⅲ－44図）

番号	器種	材質	長さ	幅	厚	特徴
25	装飾金具か	銅	19.50	4.50	－	内面は別作りで魚々子状になっている
26	蓋付き容器	銅	36.00	13.50	－	底部と胴部別作り/蝶番付き
27	釣金具	銅	63.00	－	4.00	
28	杓子	銅	106.00	－	1.00	円形の杓子柄は裏側に折り曲がっている
29	おろし金	銅	218.00	－	1.00	刺突は表22列、裏17列
写a	鉉状金具	銅	(164.00)	13.00	2.00	
写b	灯心押さえ	銅	46.00	－	－	銅銭3本を束ねたもので形成、1本を飾り状に巻く
30	輪状製品	鉄	(62.00)	4.00	－	
31	鉉状金具	鉄	－	10.00	2.00	
32	不明	鉄	(72.00)	12.00	2.50	柄か
33	鋏	鉄	135.00	(21.00)	(3.00)	片刃欠損
34	包丁	鉄	(160.00)	－	2.50	菜切包丁
	上記･柄部	木製	107.50	36.00	28.50	
35	包丁	鉄	216.00	161.00	4.50	菜切包丁
36	包丁	鉄	240.00	48.00	9.00	出刃包丁
37	包丁	鉄	239.00	40.00	0.45	刺身包丁か
38	鍋	鉄	－	－	－	二片同一個体
39	灯明皿	鉄	107.00	20.00	－	スス付き
40	灯明皿	鉄	(117.00)	16.50	－	高台付き
41	火箸	鉄	258.00	6.50	－	頭部環状/42と対か
42	火箸	鉄	(233.00)	6.50	－	頭部環状/41と対か
43	火箸	鉄	253.00	5.50	－	頭部球状
44	火箸	鉄	239.00	5.00	－	頭部球状
45	火箸	鉄	(157.00)	5.50	－	頭部球状
46	火箸	鉄	270.00	4.50	－	頭部環状
47	釘	鉄	(98.50)	60.00	－	頭巻き
48	鎹	鉄	144.00	16.00	0.50	
49	不明	鉄	114.00	177.00	－	
50	五徳	鉄	－	－	100.00	

単位　mm

Ⅲ-9表　その他の金属（Ⅲ－32･33図）（PL.Ⅲ－44 ・ 45図）

（5）人形･ミニチュア･遊戯具

人形･ミニチュア･遊戯具（人形･ミニチュア･遊戯具１～15）（図：Ⅲ-34）（PL.：Ⅲ-46）

一個体と判断できる破片を含め人形は８点、ミニチュア12点、遊戯具はおはじき状製品２点、泥面子１点、碁石形土製品106点であった。人形は人や動物の形状をしたものとし、ミニチュアはままごと道具や橋や塔などの箱庭道具とし、遊戯や勝負ごとに用いるものを遊戯具とした。

1は型作りの壺持ちの唐人と思われる。中空である。透明釉と緑釉で装飾されている。胎土は京都系と云われる灰白色である。**2**は型作りの素焼きの亀である。底部は開口型で甲羅の裏面は凹でいる。胎土は江戸在地系の鈍い橙色である。**3**は型作りの素焼きの蓋である。上面には菊花文様が施されており、墨で彩色されている。側面は下に向かい広がる。胎土は江戸在地系の鈍い橙色である。**4**は型作りの施釉の蓋である。胡粉により白色に彩色され、さらに緑釉で装飾されている。胎土は江戸在地系の橙色である。**5**は型作りの施釉の土瓶である。胡粉の白、緑釉で装飾されている。上下で別々に作られ貼り合わせている。胎土は江戸在地系の橙色である。**6**はロクロ成形の白磁の鉢である。**7･8**は染付の皿片を利用したおはじき状のものである。破片か製品かの判断は難しいが、縁部は丸く加工されている。**9**～**13**は手捻りによる碁石形土製品である。図示した他に101点出土している。白と黒に装飾されたと思われる痕跡を残している。大半のものに掌紋痕が確認される。彩色痕の白と黒から碁石を模倣して作られたものと思われる。断面は凸レンズ状になっている。胎土は江戸在地系の橙色である。106点については径と厚さを計測し、平均をみることを試みた。**14**は泥面子である。下に向かい広がり、側面に刻みを施している。白色の彩色痕が認められる。上面は格子状に区切り文様をつけている。胎土は江戸在地系の橙色である。**15**はSK01出土の碁石形土製品である。

碁石形土製品

106点の碁石形土製品の法量から規格性について検討してみた。

①　径：（平均値20.5mm）

最小16.5mm～最大23mmであった。各径の出土点数を列記すると以下の通りである。

16.5mm：１点、18.0mm：１点、19.0mm：８点、19.5mm：６点、20.0mm：26点、20.5mm：25点、21.0mm：24点、21.5mm：６点、22.0mm：７点、23.0mm：２点

②　厚さ：（平均値6.0mm）

厚さの範囲は4.5mm～7.5mmであった。各厚さの出土点数をみると以下の通りである。

4.5mm：３点、5.0mm：10点、5.5mm：23点、6.0mm：37点、6.5mm：15点、7.0mm：13点、7.5mm：５点

③　重量：（平均値2.2g）

最重量4.1g～最軽量1.2gであった。各重さの出土点数（４点以上）をみると以下の通りである。

1.8g：７点、1.9g：８点、2.0ｇ：15点、2.1g：９点、2.2ｇ：13点、2.3g：６点、2.4g：６点、2.8g：４点

④　碁石形土製品の法量分布（Ⅲ-10表）

径と厚さの組み合わせを、出土点数でみると以下の表となる。

法量分布から、径16.5～23.0mm、厚さ4.5～7.5mm、重量1.2～4.1gと幅広いものであった。

組み合わせの点数が多いものを、径を中心にみると20.0mmと20.5mm、21.0mmのものが数種類の厚みのもので構成されていた。下記の表にあるように径も厚さも多種類あるが、径は20.0～21.0mmに集中しており、厚さは5.5～6.0mmに集中していることから、ある程度の規格性を持ちながら手捻りにより作られていたと思われる。製品の大半には掌紋痕と太い筋がついている事からも手捻りにより作られていた事が判る。また大きさにバラツキがみられるのは、職人の手の大きさや掌の丸みにも関係するのではないだろうか。文京区『諏訪町遺跡』の報告の中で石神氏はきれいな円形で凸レンズ状を呈し、布目痕があるものは型による成形であると報告しているが、本遺構の106点には確認できなかった（石神 1996）。

径mm＼厚mm	4.5	5.0	5.5	6.0	6.5	7.0	7.5	合計
16.5		1						1
18.0		1						1
19.0			2	2	3	1		8
19.5		1	3	2				6
20.0	2	3	7	10	2	2		26
20.5		1	4	12	2	4	2	25
21.0	1	1	6	10	4	2		24
21.5		1		3	1		1	6
22.0		1			3	2	1	7
23.0		1				1		2
合計	3	11	22	39	15	12	4	106

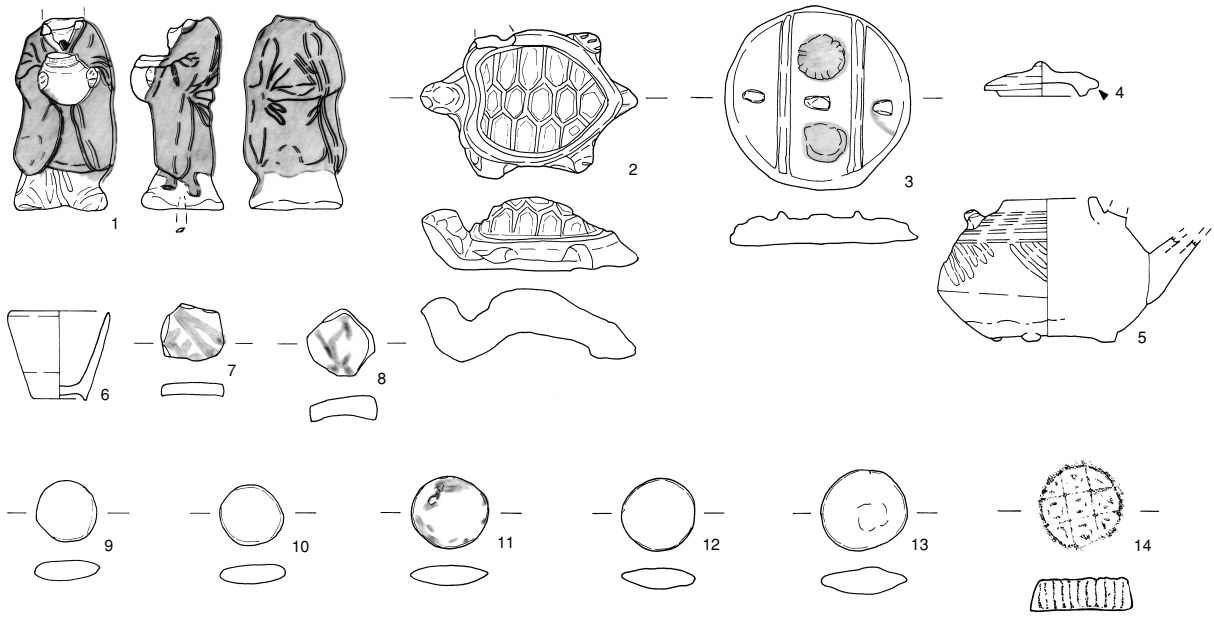
Ⅲ-10表　碁石形土製品の法量分布

以上、人形、ミニチュア、遊戯具について観察をしてきたが、全体の出土点数は碁石形土製品が圧倒的に多く、人形、ミニチュアは少なかった。また、人形、ミニチュアの未掲載の破片については、工学部1号館　CD-ROM¥遺物¥SK01¥人形・ミニチュア・遊戯具¥FE-0001-N-参考01･02に収録しておく。破片は人形の福助、布袋、裸人形（ブラ人形）、狐、鳩等で、ミニチュアは、陶器製の土瓶と碗、素焼きの鉢と太鼓で、施釉土製品はすべて柚でんぼであった。柚でんぼについては飯事道具か疑問視されているものである。

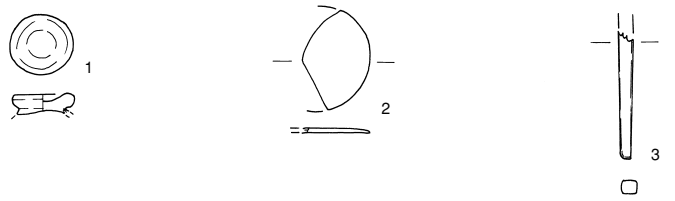
図版番号	名称	材質	東大分類	胎土	色調	成形技法	装飾	高	幅	厚
1	壺持ち聖人	施釉土製品	DZ-60	7.5YR8/2	灰白色	型･中空	透明釉･緑釉	(51.00)	26.00	25.00
2	亀	素焼土製品	DZ-60	7.5YR7/4	鈍い橙	型･底部開口		20.00	37.50	57.50
3	蓋	素焼土製品	DZ-61	7.5YR7/6	鈍い橙	型	菊花文様･墨で塗彩	50.00	－	8.00
4	土瓶	土製	DZ-61	7.5YR6/6	橙	型	白（胡粉）･緑釉	8.50	31.50	－
5	土瓶	施釉土製品	DZ-61	7.5YR6/6	橙	型･上下別	白･緑釉･透明釉	38.00	24.00	29.00
6	鉢	磁器	JC-61			ロクロ		23.00	27.00	14.00
7	おはじき状製品	磁器	JB-2			転用品	染付皿	－	16.50	3.50
8	おはじき状製品	磁器	JB-2			転用品	染付皿（内面青色）	－	18.00	6.00
9	碁石形土製品	素焼土製品	DZ-56	7.5YR6/4	鈍い橙	手捻り		－	16.50	5.00
10	碁石形土製品	素焼土製品	DZ-56	7.5YR6/4	鈍い橙	手捻り		－	18.00	5.00
11	碁石形土製品	素焼土製品	DZ-56	7.5YR6/4	鈍い橙	手捻り	黒色痕/掌紋痕顕著	－	21.00	5.00
12	碁石形土製品	素焼土製品	DZ-56	7.5YR7/6	橙	手捻り	掌紋痕顕著	－	20.00	5.00
13	碁石形土製品	素焼土製品	DZ-56	7.5YR7/6	橙	手捻り	歪みあり	－	23.00	7.00
14	泥面子	素焼土製品	DZ-55	7.5YR7/6	橙	型/王冠形	白（胡粉）	－	27.00	8.00

単位　mm

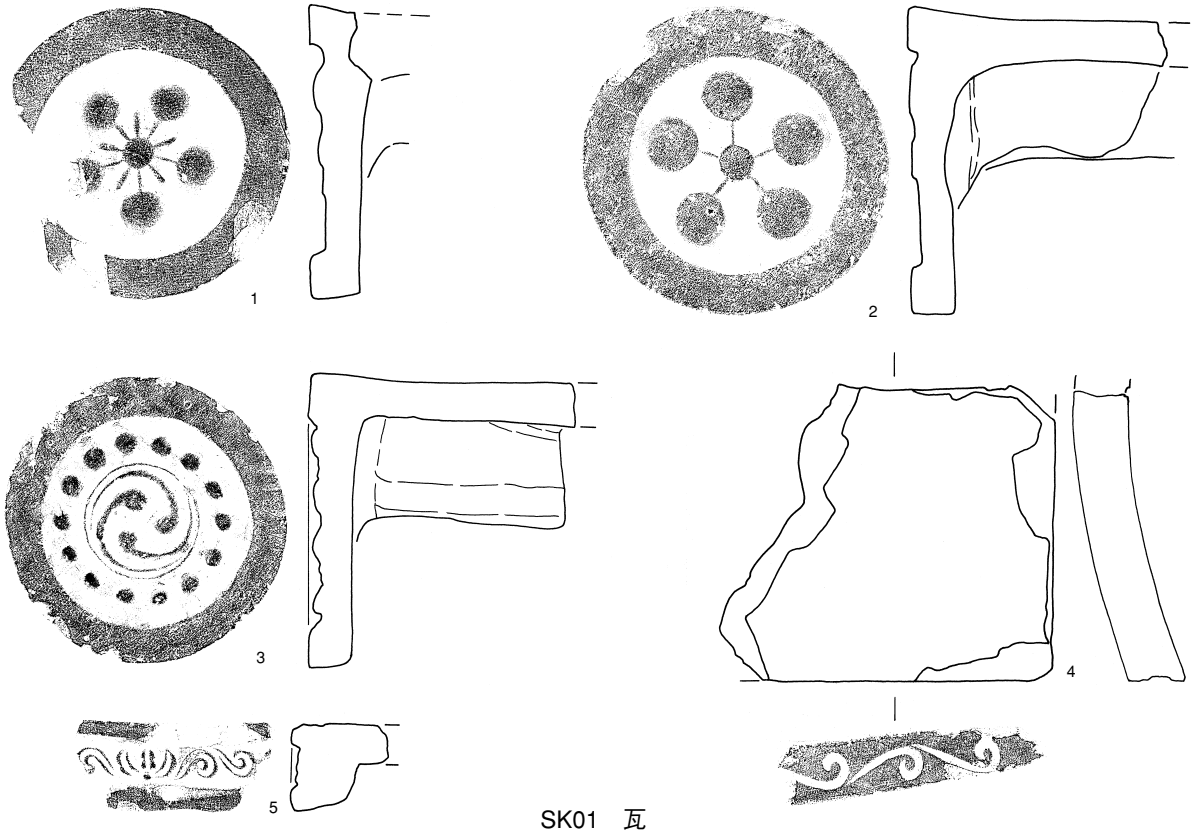
Ⅲ-11表　人形･ミニチュア･遊戯具　観察表（図：Ⅲ-34）（PL.：Ⅲ-46）



SK01　人形・ミニチュア・遊戯具

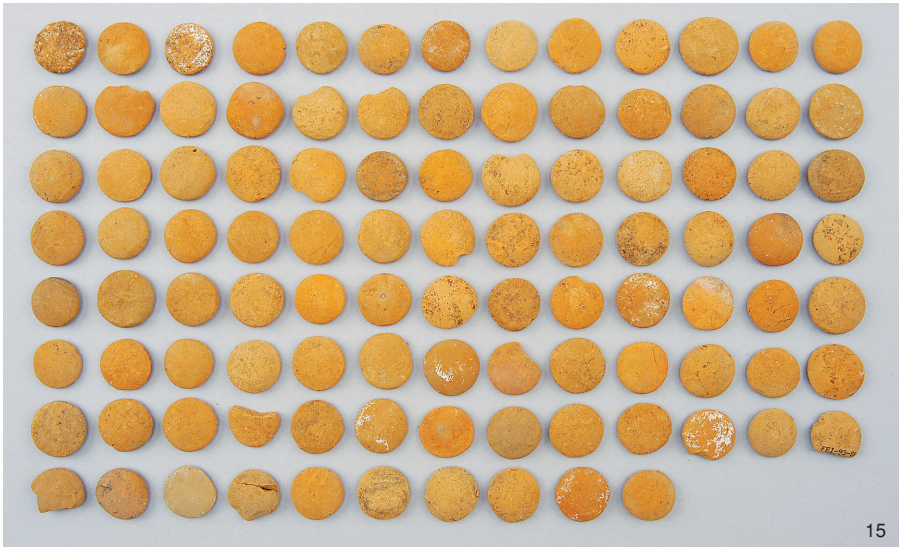


SK01　ガラス製品



SK01　瓦

Ⅲ-34図　SK01　人形･ミニチュア･遊戯具、ガラス製品、瓦



SK01　人形・ミニチュア・遊戯具

SK01　ガラス製品

SK01　瓦

Ⅲ-PL.46　SK01　人形･ミニチュア･遊戯具、ガラス製品、瓦

（6）ガラス製品（ガラス製品１～3）（図：Ⅲ-34）（PL.：Ⅲ-46）

3点のみ出土している。3点とも鉛ガラスである。**1**は蓋のつまみである。欠損している下方部に向かい広がっている。**2**は円状を呈する製品である。中央部やや厚くなっている。**3**は簪と思われる。上方に向かい太くなっている。硬質感がある透明なガラスである。

（7）瓦（瓦１～5）（図：Ⅲ-34）（PL.：Ⅲ-46）

1～**3**は軒丸瓦である。**1**は剣梅鉢文の軒丸瓦。瓦当面にはやはり、型抜きのための砂が認められる。丸瓦部は剥落しているが、瓦当との接合部に、剥落防止のための瓦当側に放射状、丸瓦側に同心円状の刻み目を入れていたことがわかる。**2**は梅鉢文の軒丸瓦で、**1**と同様作りはきわめて良好である。**3**は右巻き三つ巴文で、珠文は14付けられている。瓦当面には砂の付着が認められる。作りはよく、丸瓦の凸面には、縦方向の丁寧なヘラ削り跡が認められる。

4は大棟に載せられた熨斗瓦である。奥行きは約16cmで、凹面には瓦を半裁するための深さ2mmほどのヘラなどによる切り込みがみられる。表裏側面とも丁寧なナデやヘラ削り調整がなされている。

5は江戸式の軒瓦で、加藤晃の「江戸式」の1．に属する中心飾りを持つ。瓦当面は型を抜きやすくするための砂の付着が顕著である。断面の観察で、平瓦と瓦当を接合した痕跡がはっきりと見てとれる。

第２節　その他の遺構

SK01 以外の遺構からはほとんど遺物が検出されていない。実測図を作成したのはSE03 が３点、SP29 が１点である。本地点の遺構は遺物から見ると大きく２時期に分けられる。17 世紀と 18 世紀末から 19 世紀前葉の遺物である。18 世紀末から 19 世紀初頭の遺物が検出されている遺構はSK01 以外には、SE03、SK04、SD33 である。17 世紀の遺物が検出されている遺構はSD10、SP12、SP29、SK38 である。

SE03（図：Ⅲ-35）（PL.：Ⅲ-47）　SK01 と同時期には既に廃絶されていたと考えられる。ガラス製のランプのホヤと思われる物も検出されている事から明治期にもわずかに廃棄が行われていた事が解る。総数 25 点ほどである。**1** は瀬戸･美濃系端反碗。JC-1-d に属する。内面口縁部帯文。**2** は青緑釉の土瓶。TZ-34-a に属する。灰釉。注口穴が４ヶ。**3** は土製品、鞴の羽口である。先端部欠損。残長 21cm。**4** はガラス製ランプのホヤか。

これ以外の遺物は、実測図はなく写真のみである。**5** は肥前系磁器小丸碗（JB-1-j）、**6** は瀬戸・美濃系陶器拳骨茶碗（TC-1-p）、**7** は瀬戸･美濃系端反折枝梅花文碗（TC-1-z）である。

SP29（図：Ⅲ-35）（PL.：Ⅲ-47）　**1** は大型の手づくねのかわらけ。DZ-2-g に属する。胎土は浅黄橙色。他は実測図はなく写真のみである。**2** は肥前系磁器小杯（JB-6）。外面鉄釉、長石釉。高台内鉄釉。**3** は乳白色の耳かわらけ（DZ-2-e）である。17 世紀前半か。

実測は行わなかったが、以下の遺構からもわずかに遺物が検出されている。集合写真を掲載しているので、参照されたい。

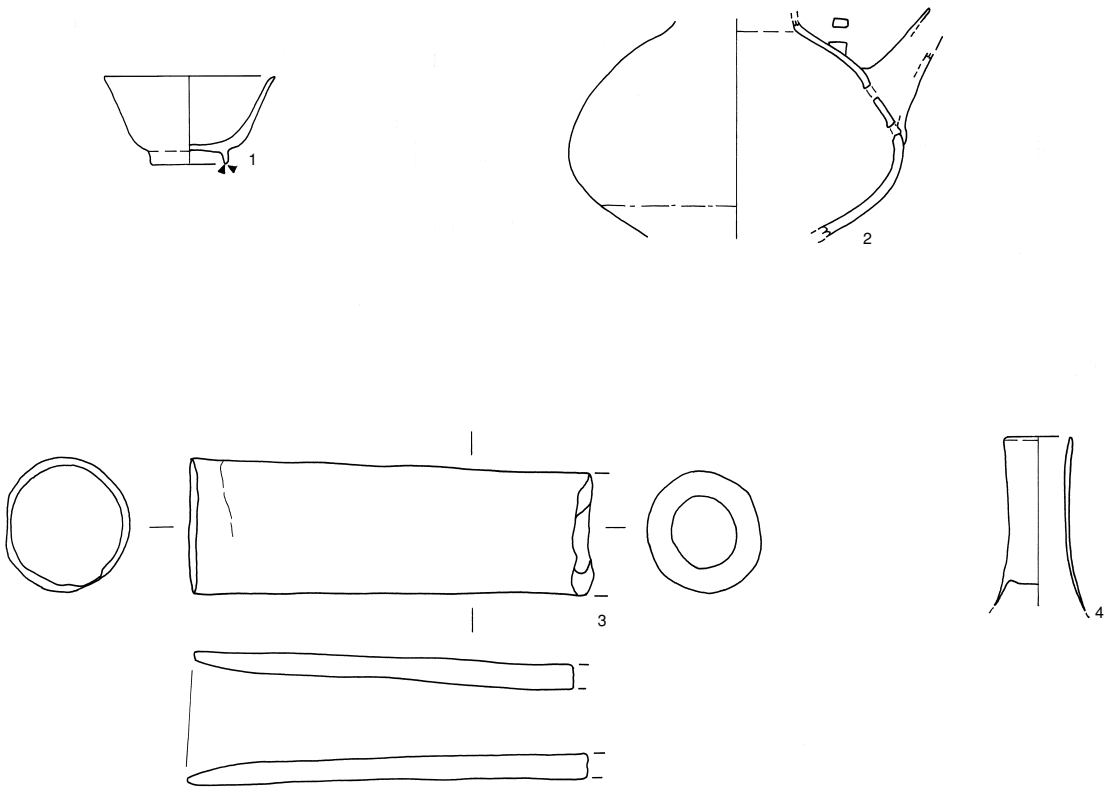
SK04（PL.：Ⅲ-47）　瀬戸･美濃系擂鉢（TC-29）、瓦燈（DZ-45）、丸底焙烙（DZ-47-a）等が検出されている。19 世紀前葉に比定されている。

SP10（PL.：Ⅲ-47）　底部糸切り右回転のカワラケ（DZ-2-a）。胎土は橙褐色。黒褐色のサンドイッチ状。口径 9.2cm、底径 6.5cm、高さ 2.0cm。器壁の立ち上がりが急で 17 世紀代の様相を示す。

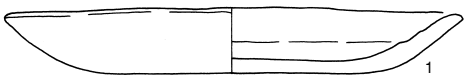
SP12（PL.：Ⅲ-47）　肥前系磁器初期伊万里皿（JB-2-a）、焼成を受けている瀬戸･美濃系片口鉢（TC-23-b）、丹波擂鉢（TK29）が検出されている。17 世紀中～後葉に比定されている。

SD33（PL.：Ⅲ-47）　全部で 15 点検出されている。色絵祥端皿（JA1-2）。変形型皿で、内外面ともに色絵染付。17 世紀前半。産地不明陶器灰釉土瓶（TZ-34-g）、瀬戸･美濃系陶器こね鉢（TC-5-l）、瀬戸･美濃系陶器赤津半胴･銭甕（TC-15-a）、底部糸切り左回転のカワラケ（DZ-2-b）等の遺物が検出されている。カワラケは 5.2cm 前後の小振りで内面立ち上がり際に窪みがみられ江戸在地系と思われる。SK01 とほぼ類似しており、19 世紀前葉に比定される。

SK38（PL.：Ⅲ-47）　肥前系陶器碗京焼風（TC-1-n）、見込みに鉄絵。肥前系磁器碗（JB-1-c）、高台断面三角の製品。長吉谷窯指標。17 世紀後葉に比定されている。



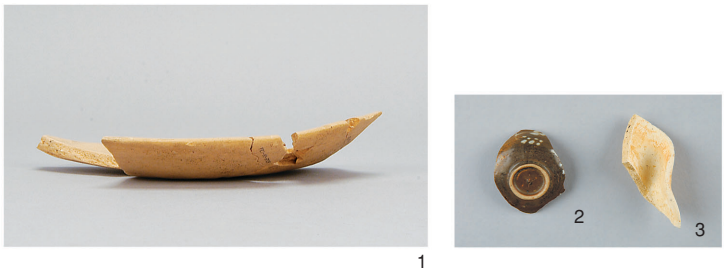
SE03



SP29

Ⅲ-35図　SE03・SP29

SE03

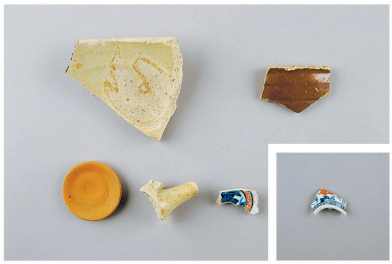


SP29

SK04

SP10

SP12



SD33

SK38

Ⅲ-PL.47　その他の遺構

第３節　出土陶磁器･土器類の数量分析

分析の目的と方法

出土遺物を位置付けるにあたり器種組成、産地組成の分析から、①文化相の復元(衣･食･住文化など)、②社会･経済相の復元（流通、階層性など)、③年代相の復元（編年など）を目的とするものである。ここであげた目的である文化史、社会･経済史の復元、時間軸の構築を行う手段として数量的分析法（Assembiage）が現段階では極めて有効な分析法であると考えている。

工学部１号館地点出土の陶磁器･土器の整理、分析するにあたって分類可能な遺物全点を分析の対象とし、特に遺構中より出土したものについては一括遺物としてまとまりとしてとらえ、遺構別の把握を行い、以後の定量的分析の基礎資料とした。分析は推定個体数100個体以上出土した遺構について行った。カウントとその呈示は個体数で行った。分析の方法については、以下のような手順で行った。

①　出土した陶磁器全般にわたり胎土、施釉技法、成形技法、文様等の特徴で産地の、また主に器形的特徴で器種の分類を行う。さらに細分可能な器種に関しては細分類を行い、その分類基準となった諸特徴を示す。これについては「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類（1)」(東京大学埋蔵文化財調査室 1999）において既に行った。

②　遺構一括遺物群における各分類の数量を推定個体数での呈示を行い、以降の分析の基礎資料とする。

③　陶磁器群がほぼ同様の器種組成をするものについて同時期の廃棄ととらえるとともにその組成が相対年代を位置付けるに際して共通の理解を得られるであろう最小単位の把握を行う。またその組成を明示する。

④　各最小単位の相対的順序を把握する。遺跡における層序、遺構の切り合いから各期の組列の方向を推定し、段階の古い順にその様相をとらえていく。

⑤　各期の実年代の推定を行う。推定は出土量も多く、文様･器形等の変化が顕著であり、生産地での研究も進んでいる肥前及び瀬戸･美濃の磁器碗･皿を用いて行った。本分析において分類された器種について、生産地での研究及び東京大学本郷構内の遺跡及び他の江戸遺跡における紀年銘資料、災害、土地利用の変遷など遺跡の状況とを判断材料とした。③～⑤については「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」(堀内 1997）において既に行った。

本地点の遺構で100個体以上の遺物を検出した遺構はSK01のみであった。SK01はすべての遺物が一括で取り上げられており、陶磁器、土器の総点数個体と非常に大量である。磁器個体、陶器個体、土器個体で、この内瀬戸･美濃系陶器灰釉徳利は個体であった。成果については研究編「加賀藩邸内における陶磁器消費の諸相―SK01出土遺物からみた19世紀前葉の様相―」を参照されたい。

時期	胎質・産地	JA1	JA2	JA3	JA4	JA6	JA8	他		JB（肥前系磁器）																																	
	器種								合計	1（碗）																										2（皿）							
	小分類									a	b	c	d	e	f	g	h	I	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h
	SK01	1		1		△		3	5			1			6	14		34	300		68	31	6	2		3	1	9			1	1	1	2	480		△	1	1	8	29	46	

時期	胎質・産地																																										
	器種													3（大皿）							4	5（鉢）								6（坏）								7（猪口）				8（仏飯器）	
	小分類	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	他	小計	a	b	c	d	e	他	小計		a	b	c	d	e	f	他	小計	a	b	c	d	e	f	他	小計	a	b	他	小計	a	b
	SK01	11	81		4	19		8		4	△	5	217		△				1	1	0		9	1	1	3	4	5	23	22	1	3		1	2	2	31	3	7		10		

時期	胎質・産地																																										
	器種				9（香炉・火入れ）						10（瓶）				11（御神酒徳利）					12	13（蓋物）					15	16	18（合子）				19	20	21	22	24	27（水注）			29	34	35	60
	小分類	c	他	小計	a	b	c	d	他	小計	a	e	他	小計	a	b	c	他	小計		a	b	c	他	小計			a	b	他	小計						a	他	小計				
	SK01	9		9			5	1	4	10			3	3	1	14			15	4	15	2	4	1	22	0	△		3		3	3			5	1			0				

時期	胎質・産地																		JC（瀬戸・美濃系磁器）																								
	器種	61	00（蓋）															合計	1（碗）								2（皿）								4	5	6（坏）						
	小分類		a	b	c	d	e	f	g	i	j	k	l	m	n	他	小計		a	b	c	d	e	f	他	小計	a	b	c	d	e	f	他	小計			a	b	c	d	e	f	g
	SK01		1	20	2		3	29	1		1				7		64	901			2	60	8		1	71								0	3	1				2			

時期	胎質・産地																																					JN（九谷系磁器）				
	器種			7	8（仏飯器）			9	11（御神酒徳利）				12	13（蓋物）			15	16	18	19	20	21	22	27	34	61	00（蓋）										他	合計	1	2	6	他	合計
	小分類	他	小計			他	小計		a	b	他	小計		b	他	小計											a	b	c	d	e	f	g	i	他	小計							
	SK01	1	3				0				1	1				0										1		3								3		83					0

時期	胎質・産地	JP（淡路系磁器）				
	器種	2	6	20	他	合計
	小分類					
	SK01					0

時期	胎質・産地	TA5	TA6	TA7	TA8	他		TB（肥前系陶器）																																			
	器種						合計	1（碗）										2（皿）								5（鉢）						6	9（香炉・火入れ）					10	13（蓋物）				15
	小分類							a	b	c	d	f	g	h	I	他	小計	a	b	c	d	e	f	他	小計	a	b	c	d	他	小計		a	b	c	他	小計		a	b	他	小計	
	SK01						0	2	3							1	6								0		△	1			1	0					0		1			1	

時期	胎質・産地													TC（瀬戸・美濃系陶器）																													
	器種	23（片口鉢）				29（擂鉢）				00（蓋）			合計	1（碗）																													
	小分類	a	b	他	小計	a	b	他	小計	a	他	小計		a	b	c	d	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	u	v	w	x	y	z	aa	ab	ac	ad	ae	af
	SK01					△			0			0	8		1	162	29	31	84	2		1	2		1		1	20	△	18	34	13			2	6	4	49	3			10	1

時期	胎質・産地																																										
	器種			2（皿）																					4	5（鉢）										6	8	9（香炉・火入れ）					
	小分類	他	小計	a	b	c	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	他	小計		a	c	f	h	i	j	k	l	他	小計			a	b	c	d	e	f
	SK01	49	523	1			13	27	7	2		△	1		△	1	37			△			1	90		1	6	4			3		19	7	40	12	1		7	△	2		

時期	胎質・産地																																										
	器種				10（瓶）										12	13	15（壺・甕）						18	19	21	22（花生）				23（片口鉢）					24（灰落とし）				25	26	27（水注）		
	小分類	g	他	小計	a	c	d	e	f	g	h	k	他	小計			a	b	c	d	他	小計				a	b	他	小計	a	b	c	他	小計	a	b	他	小計			a	b	c
	SK01		15	24	105	301	226	413	1	19			10	1075		1	53	5	13		20	91	44	10	26		16		16		26	19	34	79	1			1				9	13

時期	胎質・産地																																			
	器種			28	29	30	31（火鉢）				34	38	39	40（油受け皿）						41	44（ひょうそく）			61	00（蓋）										合計
	小分類	他	小計				a	b	他	小計				b	c	d	e	他	小計		a	他	小計		a	b	c	d	e	f	g	h	他	小計	
	SK01		22	7	5	11	1		10	11	1	11			40				40	4	△		0		1	9	5		3	35		1	6	60	2205

時期	胎質・産地	TD（京都・信楽系陶器）																																							
	器種	1（碗）													2（皿）					4	5	6	9（香炉・火入れ）					13（蓋物）						14	15（壺・甕）			16	17	18（合子）			
	小分類	b	c	d	e	g	h	i	j	k	l	m	他	小計	a	b	c	他	小計				a	b	c	他	小計	a	b	c	d	他	小計		a	他	小計			a	b	他	小計
	SK01	2		182	6	63	17			36		1	91	398	6	1		2	9	△	△	4			2		2		1		△		1		△		0	2	1	1	7		8

時期	胎質・産地																																TE（備前系陶器）										
	器種	19	22	24	25	27（水注）				32	34	36（ちろり）				40（油受け皿）				46	60	61（蓋）									他	合計	2	5	10（瓶）			12	15	22	29	37	40
	小分類					a	d	他	小計			a	b	他	小計	a	b	他	小計			a	b	c	f	h	i	j	他	小計					a	他	小計						
	SK01	5				1			1	7		1			1	6	3		9					1		3	4		1	9		457				2	2		△				

時期	胎質・産地						TF（志戸呂系陶器）											TG（常滑系陶器）			TH（萩系陶器）					TI（万古系陶器）						TJ（大堀・相馬系陶器）				TK（丹波系陶器）				TL（堺系陶器）			
	器種	41	61	00	他	合計	1	2	6	10	13	15	29	40	00	他	合計	15	他	合計	1（碗）				合計	1	16	34	00	他	合計	1	6	他	合計	15	29	他	合計	29	他	合計	29
	小分類																				a	b	他	小計																			
	SK01					2				5							5	1		1	15			15	15						0	14	2		16		24		24	26		26	

時期	胎質・産地	TM（笠間・益子）		TO（壺屋系陶器）					TZ（生産地不明）																																		
	器種	他	合計	10	15	00	他	合計	1	2	5	6	9	16	17	20	21	23	27	29	33（鍋）			34（土瓶）														42（行平鍋）					53
	小分類																				a	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	l	m	他	小計	a	b	c	他	小計	
	SK01		0					0	8	1	2		1	7	1			1	1		4	27	31	7		1	△	21	1	105	1		△	10	1	51	198	8		1		9	

※1

時期	胎質・産地																					
	器種	61	00（蓋）																			合計
	小分類		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	n	p	r	s	t	他	小計	
	SK01	1	3	4			17	1	75			7							21	5	133	394

時期	胎質・産地	DZ（生産地不明）																																							
	器種	1	2（皿）												5（鉢）						9	16	21（植木鉢）					31（火鉢）														33（鍋）	
	小分類		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	他	小計	a	b	c	d	他	小計			a	b	c	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	他	小計	a	他
	SK01	1		91	1	26				99	6	1	6	230		△	2			2	4		30	6	2		38	123	2		74	3			1	6	2			9	220	2	

時期	胎質・産地																																										
	器種		34	38	40（油受け皿）								42	43	44（ひょうそく）								45	46	47（ほうろく）					48（七輪）						49	50	51（塩蓋）					
	小分類	小計			a	b	c	d	e	f	他	小計			a	b	c	d	e	f	他	小計			a	b	d	他	小計	a	b	c	d	他	小計			a	b	c	d	e	f
	SK01	2	14	△	28	87		2				117		1		27	6					33	1	2	13		4		17			3	△	13	16	1							

※2

時期	胎質・産地																																										
	器種																															52（燭台）				54	55	56	57	58	59	60（人形）	
	小分類	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	aa	ab	ac	ad	ae	af	ag	ah	他	小計	a	b	他	小計							a	b
	SK01																	99													99				0		1	106			2		

時期	胎質・産地																																		
	器種	60（人形）														61	62	OO（蓋）																他	合計
	小分類	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	他	小計			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	他	小計		
	SK01													6	6	10				12	29			67	17							10	135	2	1060

※3

※1　内　鉄釉23
※2　厚手5・薄手9
※3　羽口1・器台1

○胎質
J．磁器
T．陶器
D．土器

○生産地
A －輸入陶磁器
　A1 景徳鎮窯系
　A2 漳州窯系
　A3 徳化窯系
　A4 龍泉窯系
　A5 宜興窯系
　A6 朝鮮
　A7 ベトナム
　A8 ヨーロッパ
B －肥前系
C －瀬戸・美濃系
D －京都・信楽系
E －備前系
F －志戸呂系
G －常滑系
H －萩系
I －万古系
J －大堀・相馬系
K －丹波系
L －堺系
M－益子・笠間系
N －九谷系
O －壺屋系
P －淡路系
Z －不明

○器種
1．碗　2．皿　3．大皿　4．燗徳利　5．鉢　6．坏　7．猪口
8．仏飯器　9．香炉・火入れ　10．瓶　11．御神酒徳利　12．油壺　13．蓋物　14．筆立て
15．壺・甕　16．急須　17．燗鍋　18．合子　19．水滴　20．蓮華　21．植木鉢
22．花生　23．片口鉢　24．灰落し　25．鬢水入れ　26．茶入れ　27．水注　28．溲瓶
29．擂鉢　30．餌入　31．火鉢　32．柄杓　33．鍋　34．土瓶　35．戸車
36．ちろり　37．薬研　38．手焙り　39．おろし皿　40．油受け皿　41．油徳利　42．行平鍋
43．十能　44．ひょうそく　45．瓦燈　46．カンテラ　47．ほうろく　48．七輪　49．涼炉
50．五徳　51．塩壺　52．燭台　53．蒸し器　54．懐炉　55．泥面子・芥子面　56．碁石形製品
57．玉　58．鈴　59．笛　60．人形　61．ミニチュア　62．面型　00．蓋

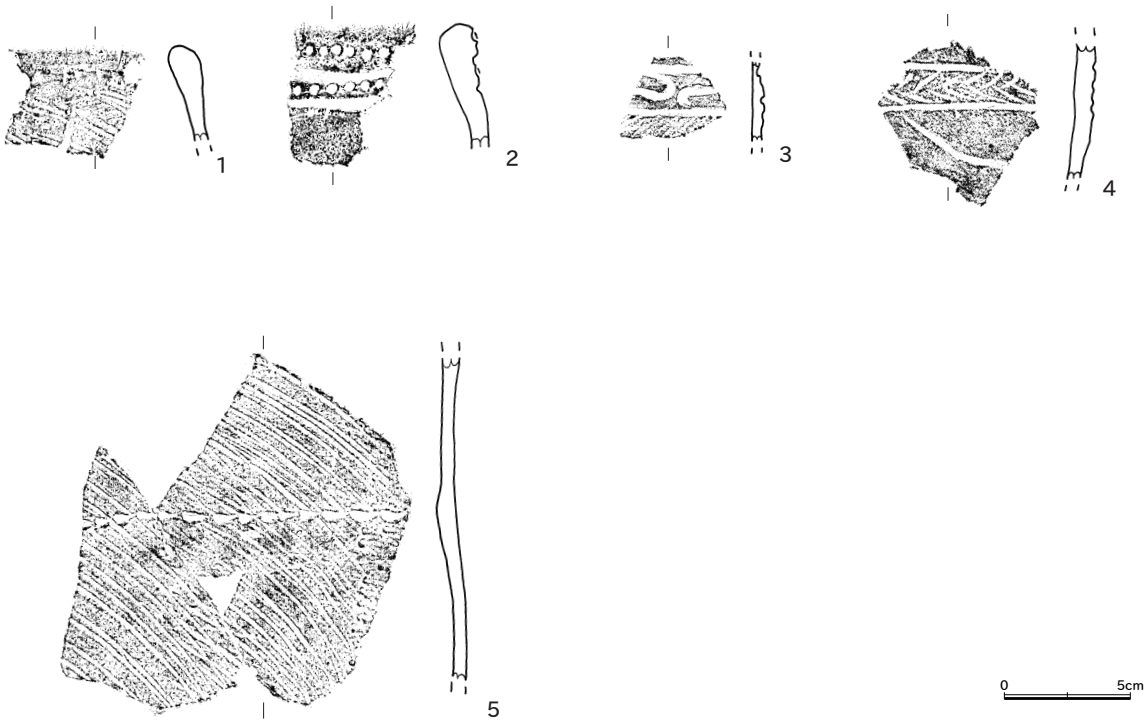
Ⅲ-12表　SK01カウント表

第4節　縄文時代

(1)　出土した遺物

今回の調査では縄文時代に属すると思われる遺構は検出されていないが、縄文時代中期･後･晩期の土器片が少量検出されている。これらの土器片は調査区の東側、ソフトローム上層の黒色土中より検出されている。これらの土器片について述べてみたい。

1は内傾する深鉢の口縁部である。胎土色は赤褐色で小石を含み、焼成は良好で硬質である。斜めに条線が認められる。2は深鉢の口縁部で口唇部は肥厚する。焼成はやや不良で表面は黄褐色を呈し、内部は黒色である。円形の刺突文が認められる。3は器種不明の胴部片で黒色を呈し、焼成は良好である。棒状工具による雲形の沈線及び下位にはLRの縄文が施されている。内面は丁寧に磨かれる。大洞系統の土器片と考えられる。4は深鉢胴部片で2本の沈線内に矢羽根状の文様が施されている。下位に逆つの字状を呈するのであろう線刻がみられる。内面には縦位の擦痕が認められる。5は検出された土器片中最大の大きさで、その他に同一と思われる破片も2点出土しているが、接合はしない。深鉢胴部片と思われる。斜行する条線、連続刺突文が施されている。



Ⅲ-36図　縄文土器実測図

(2)　ま　と　め

今回の調査では少量の縄文時代後･晩期の土器片が検出されたのみで、遺構は検出されず調査地点の縄文時代の状況を類推することは難しいが、「本郷台遺跡群」及び周辺地区にはIV-1図に示したように、数カ所の縄文時代後･晩期の遺物を出土している遺跡が存在し、この地区に連続的に縄文時代後･晩期の営為が行われていたと考えられる。これらの地点･遺跡から出土した土器片の様相や立地環

境から本遺跡の位置付けを若干行ってみたい。

東京大学本郷構内で、当該期のまとまった数量の遺物を検出した地点では、医学部附属病院病棟地点及び向ヶ岡貝塚が存在し、東京大学構内以外では湯島貝塚及び茅町遺跡があげられる。その他に少量の土器片などが検出された文学部３号館地点･御殿下記念館地点･医学部附属中央診療棟地点･薬学部資料館地点･農学部家畜病院地点などがあり、微量の土器片は本郷構内の多数の地点で検出されている。

本郷構内は20mから22mの標高を持つ上位面（M2面）と15mから17mの標高を持つ下位面（M3面）が存在し、今回の調査区は上位面に位置する（香取 2000）。明治19年の陸軍参謀本部測量局作成による等高線から本調査区は谷頭に位置し、自然地形は東側に下がっており、黒色土の堆積が認められた。今回の調査で出土した縄文時代の土器片は、この黒色土より出土している。医学部附属病院病棟地点では800点あまりの縄文時代晩期の土器片が出土し、これらも谷の斜面部で検出されている。そのほかに低地部では台東区内に「茅町遺跡」が存在し、泥炭層から多量の縄文時代晩期後半の土器片を中心に検出された。茅町遺跡の南側台地上には「湯島貝塚」が存在し、湯島貝塚からは縄文時代後期後半から晩期前半の多量の土器片が出土している（木下 1967）。この２地点の関係については拙稿を参照されたい（香取 1999）。

これら遺跡における土器片の出土の傾向から、台地の縁辺部ないし低地部ではまとまった量が出土し、台地の内陸部に入り込むほど出土する土器片の減少する傾向が認められ、時代が下るほど営為が低地側へと移行していくのではないかと推測することもできる。しかしながらこの推測を裏付けるにはまだまだ資料の蓄積が必要であろう。今後の資料の増加を期待したい。

（明治19年版　参謀本部陸軍部測量局製　五千分ノ一に加筆）

Ⅲ-37図　周辺の遺跡と地形

第Ⅳ章　ま　と　め

東京大学本郷構内の遺跡工学部１号館地点は、加賀藩上屋敷の北西隅にある。1802～1825年に比定されている「江戸本郷御上屋敷絵図」（金沢市立玉川図書館所蔵氏家文庫）が残されている（Ⅰ-3図）。調査地点は、加賀藩邸と水戸藩邸の地境に近い部分であろうと推定され、竹藪などがかかる地点であると思われる。加賀藩邸と水戸藩邸の地境は今のところ検出されていない。南側には、表御納戸とそれに伴う他の土蔵、地蔵堂などがあり、その周辺にある長屋は邸内の他の長屋と比べて区画が小さく、庭のない長屋もある。東側には牢屋まであり、その先には三四郎池から続く谷が入る地域である。屋敷地全体からみたら、裏手に当たる場所である。

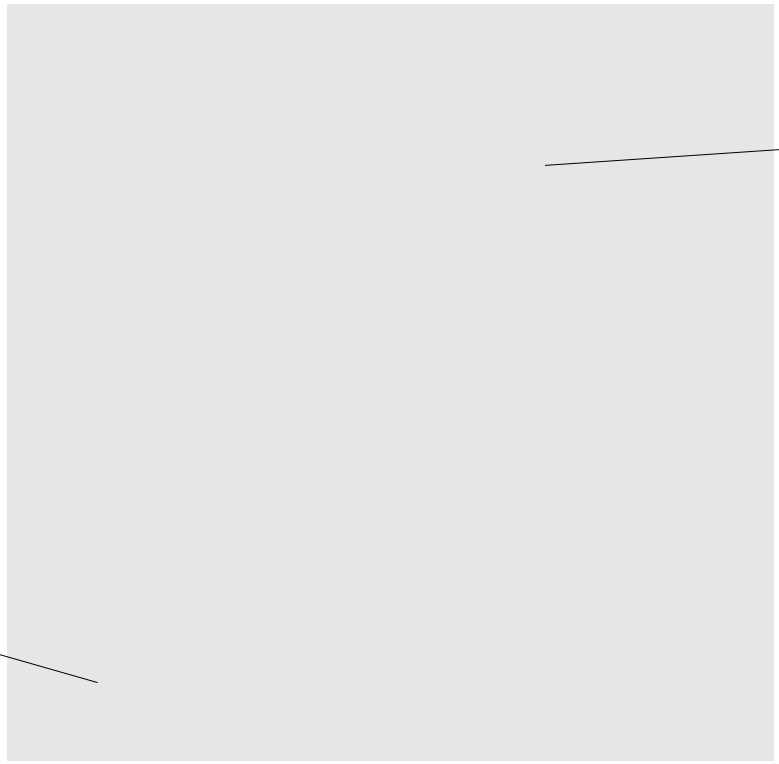
江戸期における本地点の遺構は大きく２時期に分けられる。17世紀と18世紀末～19世紀前葉の遺構である。17世紀の遺物が検出されている遺構はSP10･SP12･SP28･SP29･SK38である。これらは、ほとんどが土坑及び柱穴等で大がかりな建物跡などは確認されていない。18世紀末～19世紀初頭の遺物が検出されている遺構はSK01･SE03･SK04･SD33である。SE03はガラス製のランプのホヤと思われるものも検出されている事から明治期にもわずかに廃棄が行われていた事が解る。

この他に、遺構は検出されていないが縄文時代後期･晩期の土器片が少量検出されている。

（1）　SK01の遺構について

本地点で中心となるのは調査区東側に位置する大型土坑のSK01である。一部分しか調査されておらず、全容は不明であるが、東西12.5m、確認されているだけで南北6mあり、さらに南北に延びる。平面プランは不定形で、底面にはテラスを有する。深いところで5mの規模がある。覆土は大きく２層に分けられ、下層の黒色粘質土層からは主に建築部材を含む木製品･漆製品が、上層の灰白色粘質土からは主に陶磁器･土器などが大量に検出されている。しかし、下層から上層にかけて、遺物が連続的に含まれていた事から、一括遺物として処理された。建築部材は4cm程度の角材や、幅30～60cmの板材が多く検出された。貝や魚の骨なども多く検出され、調査中から異臭がするなどの土の状態などから大量の食物残滓が含まれていたと思われる。この土坑が廃棄土坑として使用されていたと考えるのは問題のないところである。

上屋敷ではないが同じ加賀藩の18世紀後半頃と思われる中屋敷の絵図（「中屋敷総絵図」尊経閣文庫所蔵8081旧外）が残されている（Ⅳ-1図）。ここには２ヶ所の点線で囲まれた「土取候跡」の記載がある。本来ならば土取穴などは一過性であり、記載が残っているのは非常に珍しいと思われる。１ヶ所は大きめで平面形は不正円形であり、屋敷地の北隅で本遺構と同じように屋敷の裏手に当たる部分である。また、もう１ヶ所はやや小振りで御殿空間の壁の外側に沿っている細長い土坑である。この絵図は本遺構とはかなり近い時期であり、同様のことが上屋敷でも行われていたと考えてもよいであろう。大規模で、不定形であり、テラスを有することなどから、採土坑として掘削されたものを、その後、廃棄土坑として二次利用したのではないのではないだろうか。中屋敷でも、この「土取候跡」はゴミの廃棄土坑として二次利用されたと想定される。また、中屋敷では御殿空間と思われる場所の近くに１ヶ所、詰人空間と思われる場所に１ヶ所あり、それぞれの地域のゴミが廃棄されたのであろうか。廃棄土坑として二次利用することを考えた上で、採土坑の場所の選定が行われているのであろう。



Ⅳ-1図「中屋敷総絵図」（尊経閣文庫所蔵、8081旧外に一部加筆）

本遺構の性格を考える上で、これらのゴミが非日常的なゴミであるか、日常的なゴミであるかを考えなければならない。また、もし日常的なゴミだとすれば、日常的に出されているゴミが、藩邸内のみで処理されていたのか、随時外に運び出されていたのかは大きな問題であろう。建築部材も今のところどこのものが廃棄されたのかは不明である。

（2）　SK01の出土遺物について

SK01出土の陶磁器、土器などの数量分析を行った。総数5202個体の一括であった。

磁器の総数は989個体で、内容的に量産品がほとんどで高級磁器は検出されていない。器種組成は碗･皿が多く、磁器全体の約８割を占める。碗547個体のなかでは、小丸碗が300個体、筒形碗が68個体、広東碗が少なく33個体、湯呑碗が10個体であった。中皿は肥前系磁器蛇ノ目凹形高台92個体、扇面文46個体、見込み蛇ノ目釉剝ぎ23個体、腰張り輪花皿29個体、その他27個体、計217個体である。大皿は１個体のみであった。東大編年Ⅶ期･Ⅷａ期を中心とする遺物群である。

陶器の総数は3153個体で、わずかに、涼炉や急須など若干の嗜好性の高い器種が検出されているが、ほとんどが実用品である。産地組成は瀬戸･美濃系、京都･信楽系がほとんどで、いずれも量産品である。器種組成は碗や土瓶、中皿などが多く、飲茶に関するものである。碗は954個体で、京都･信楽系、瀬戸･美濃系でほとんどを占める。その中でも京都･信楽系陶器小杉茶碗が182個体、端反形で器面に貫入の入る碗が63個体、瀬戸･美濃系陶器灰釉薄掛け丸碗が162個体、柳茶碗84個体とかなりの数を占める。高台内には個人名と思われる墨書が多く書かれている。萩系陶器では、Ⅷａ期に多く見られる藁灰釉の碗は検出されているが、その後出てくるピラ掛けの碗は検出されていない。土瓶は199個体で産地不明の灰釉土瓶が105個体と多く、Ⅷｂ期以降多く見られる青土瓶は7個体ほどしか検出されていない。少量であるが検出されている急須は、急須の中でも比較的上等な

もので、上級武士が煎茶を行っていたことが裏付けられる資料である。瀬戸･美濃系灰釉徳利は1045個体で、陶器の３分の１を占める。二合半徳利は406個体。五合徳利は226個体。一升徳利は413個体である。首の短い肩の張ったタイプの徳利が多い。これらの徳利はⅧａ期以降多く見られる。

土器の総数は1060個体である。器種組成は皿、燭台、火入れ、鍋、火鉢、塩壺などである。 皿230個体、灯明受け皿117個体、火鉢220個体等の灯火具･暖房具が多く、それ以外では塩壺が99個体検出している。そして数量的には多くないが、施釉の厚手と薄手の土瓶14個体が検出されており、いずれも江戸在地及び周辺部で生産されたと思われる。

石製品はコンテナ箱で３箱ほど検出されている。主な器種は硯、温石、砥石などである。硯は粘板岩性の材質が多く、泥岩などで作られた目の粗いものもある。「虎班石」の線刻がある硯が２点検出されているが、いずれも、虎班石ではないと思われる。ほとんどが実用的な長方形の硯で、異形硯は１点のみ確認されたが、自分で作ったのではないかと思われるような、粗い作りのものであった。温石は、片麻岩製のものしか検出されず、興味深い。また、使われ方も多様であったようである。砥石は、比較的細かい目のものもあり、農具、工具ではなく、刀剣類に使用された可能性がある。

木製品は下層の粘質土から桶、下駄などの日用品や建築部材などが多数検出された。粘質土層により残りが良かった為か出土量が多く、漆器なども検出されている。酒盃等も検出されているが、ほとんどが生活什器類である。下駄･漆椀以外の木製品はコンテナ箱に11箱ほどである。漆器の椀は飯椀13個体、汁椀15個体、平椀11個体、椀26個体が出土している。

北野信彦氏は「東京大学本郷構内遺跡（工学部１号館地点）出土漆器資料の材質と製作技法」（東京大学埋蔵文化財調査室1997）で既に漆器の分析を行っており、一部分を抜粋する。「本出土漆器資料の基本的な様相は、江戸市中における各大名藩邸や一般武家地･さらに町屋出土のそれと大差が無い、極めて一般的な資料が中心であった。そしていずれの一括資料の場合でも基本的には極めて実用に即した生活汁器類である飲食器類を中心としていることも同時に理解された。」また、「本漆器資料の性格自体は、日常生活什器の範疇に入るためか江戸市中で賄ったものが主流を占めたであろうことが同時に推察された。」とある。これらの分析結果は陶磁器の分析結果とも合致しており、漆器の分析からも本遺構の性格が裏付けられたことになる。

金属製品では、台所に関係する包丁やおろし器等が多く検出されている。

自然遺物では大型のアワビなどが多く検出されている。これらは、宴会料理の残滓と思われ、詰人空間から出された残滓である可能性も捨てきれないが、御殿空間からの残滓である可能性が高い。しかし、御殿で使われていたような上質の陶磁器は検出されていない。この廃棄土坑の遺物に被熱しているものはなく火災などによる廃棄ではない。恐らく火災のような非日常的な出来事がない限り、上質の陶磁器が廃棄されることはほとんどなかったのであろう。他の自然遺物としては、獣骨が多数検出されている。その中でも犬は36個体以上が検出されており、いずれも埋葬された状態ではなく検出されている。自然遺物は全体の７分の１ほどが取り上げられ、コンテナ10箱ほどである。

そのほかの遺物では人形の出土が少なく、碁石などが多く検出されている。また鏡箱や櫛も数点しか検出されておらず、女性や子供に関する遺物はほとんど見受けられない。これらは加賀藩邸内の他の地域の調査でも同じような傾向が見られ、加賀藩邸内の特徴の一つといえよう。

ふいごの羽口や周囲に焼けた粘土がこびりついている瓶が多数検出されている。この場所で使用されていたものではなく、何らかの工房跡を片付けたものと考えている。

以上、東大編年 Ⅶ期･Ⅷａ期中心の遺物群であり、湯呑椀などのⅧｂ期の遺物もわずかに検出され

ている。使用期間が短く遺構年代を決めるときの基準資料とされる事が多い瀬戸･美濃系灰釉徳利にⅧａ期以降のものが多く検出されている事などから、Ⅷａ期の遺構と考えて良いであろう。この時期になると、いろいろな地方窯が発展して出土陶磁器も多様化してくるが、ここでは、かなりの画一性が感じられるものが多い。器種組成を見ても飲茶に関係する、碗、土瓶、中皿が多く、灯火具の灯明皿や火鉢が多く検出されている。漆器や金属製品において、飲食に関する遺物が多い事を指摘されているが、飲食に関するものほど日常的に使用して廃棄される事が多いのではないだろうか。また、肥前系磁器の中皿や京都･信楽系陶器の小杉碗、土製の灯明皿などは完形のまま廃棄されているものも数多くある。それらのものは、国元に帰るときなどに、まとめて廃棄していった事も考えられる。しかし、江戸藩邸では、それも日常の出来事の一部として考えても良いであろう。詰人空間を中心に御殿空間の廃棄物も含め、藩邸内全域のゴミが何年にもわたり廃棄されていたと考えられる。

【参考･引用文献】

有田町教育委員会　1986『小樽２号窯跡』
有田町教育委員会　1994『窯の谷窯跡』
石神　裕之　1996「出土泥面子の研究とその課題―江戸市中より出土する面打ちを中心に―」『諏訪町遺跡』文京区遺跡調査会
江戸遺跡研究会編　2001『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房
大貫　浩子　2000「東京大学構内遺跡出土の貿易陶磁について」『加賀殿再訪』東京大学総合研究博物館
大貫　浩子　2003「東京大学構内遺跡における19世紀前葉の廃棄土坑」『江戸遺跡研究会第16回大会発表要旨 遺跡からみた江戸のゴミ』江戸遺跡研究会
香取　祐一　1999「第４章 第１節 縄紋時代 2 小結」『茅町遺跡』台東区文化財調査会
香取　祐一　2000「東京大学医学部附属病院病棟地点の土器廃棄場について」『東京考古』第18号　東京考古談話会
木下　正史　1967「湯島切通貝塚の調査」『文京区史 巻1』
古泉　　弘　1979「江戸の出土下駄」 物質文化研究会『物質文化32号』
古泉　　弘　2002『地下からあらわれた江戸』教育出版
小林　謙一　1996「江戸在地系土器と江戸出土土師質塩壺類の編年」『江戸出土陶磁器･土器の諸問題Ⅱ』江戸陶磁土器研究グループ
財団法人新宿生涯学習財団　2003『新宿区水野原遺跡』
佐賀県立九州陶磁文化館　1986『南川原窯ノ辻窯･広瀬向窯』
滋賀県教育委員会　1999『竹ノ鼻遺跡』
新宿区厚生部遺跡調査会　1992「細工町遺跡別冊２ 細工町遺跡の木製品分類（兼凡例）」『細工町遺跡』
新宿区新司法書士会館遺跡調査団　1998『新宿区四谷１丁目遺跡Ⅱ』
瀬戸市史編纂委員会　1988～1993『瀬戸市史』陶磁史篇１～６
千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会　1997『渋谷区 千駄ヶ谷五丁目遺跡』
田中　冨吉　1988「きせる」『たばこ』たばこと塩の博物館
東京大学遺跡調査室　1989『東京大学本郷構内の遺跡 理学部７号館地点』
東京大学遺跡調査室　1990a『東京大学本郷構内の遺跡 法学部４号館･文学部３号館建設地遺跡』
東京大学遺跡調査室　1990b『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
東京大学埋蔵文化財調査室　1990『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館･御殿下記念館地点』
東京大学埋蔵文化財調査室　1997『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
東京大学埋蔵文化財調査室　1999『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
東京大学埋蔵文化財調査室　2002『東京大学構内遺跡調査研究年報』3
東京大学埋蔵文化財調査室　2004『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
東京大学埋蔵文化財調査室　2005『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』
東京大学文学部考古学研究室編　1979『向ヶ岡貝塚』
東京都教育委員会　1996『東京都遺跡地図』
東洋鋳造貨幣研究所　1998『季刊 方泉處』22号
都立学校遺跡調査会　1999『日影町Ⅱ』
長崎県波佐見町教育委員会　1993『波佐見町内古窯跡群調査報告書』
中野　泰裕　2003「海を渡った源内焼」『源内焼』五島美術館
原　　祐一　1999「東京大学本郷構内の遺跡出土木製品１　工学部１号館地点出土の漆椀」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査研究年報２ 1997年度』p.269-287
原　　祐一　2001「江戸時代の遺跡から４ 下駄」 柏書房 『辞典 しらべる江戸時代』p.91
原　　祐一　1999「東大構内出土のキセル材質および亜鉛輸入」 東京大学原子力研究総合センター他

『第１回考古科学シンポジウム』p.39
万国貨幣研究会　　1964 『新寛永銭鑑識と手引き』
文京区遺跡調査会　　1991 『文京区真砂遺跡 第２地点』
細川　　義　　1990 「加賀本郷邸の全体図について」『東京大学構内の遺跡 山上会館･御殿下記念館 第３分冊 考察編』
堀内　秀樹　　1997 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1

研　究　編

加賀藩本郷邸における廃棄物処理に関する考察

堀内　秀樹

はじめに

東京大学本郷構内の遺跡（以下、「東大構内遺跡」と略す）工学部１号館地点（以下、「工１地点」と略す）SK01は、陶磁器･土器類をはじめ、木製品、石製品、金属製品などコンテナ箱にして約350箱にのぼる多量の遺物が出土した。陶磁器･土器類だけみても推定個体数5202個体をカウントする。このような多量の遺物を包含する遺構の類例は、江戸遺跡においては、文京区本郷追分、新宿区四谷三丁目遺跡、同坂町遺跡などいくつか確認されている。大量廃棄に関する議論はそれぞれに行われてはいるが、これまでは共通の要因に起因していると言うより当該地の特殊な事情と解釈されているようである。

工１地点SK01は、加賀藩上屋敷の北辺部に位置する遺構である。出土遺物の年代的位置付けは東大編年Ⅷａ期（19世紀初頭）に比定される。本稿では本例を含め加賀藩本郷邸内から検出されている遺物が多量に廃棄されている土坑を取り上げ、藩邸内でのゴミ廃棄について考えるものである。

（1）　東京大学本郷構内の遺跡検出の廃棄坑の分析

東大構内遺跡から確認されている遺構のうち、遺物が多く出土した遺構をあげてみる。モノが廃棄される要因は多様であるが、ここでは災害や不定期的な大がかりなイベントなどに伴って多量に廃棄物が出される一括廃棄を除き、藩邸内の日常的な生活の中で出されたモノの廃棄について考えてみたい。これまで廃棄については遺構内出土遺物の内容や総量によって廃棄行為の推定を行った論考はいつくかあるが、本遺跡では瓦、自然遺物に関してサンプリングの精度の差が激しく、等価の比較･評価ができない制約があり、遺物の量は主に陶磁器･土器の量で行った。また、東大構内遺跡内の既報告の地点で出土陶磁器･土器類のカウント方法が不統一であるため、統一的なデータを呈示し得ないが、ここでは各地点ごとの年代的な増減の推移に着眼したい。

1-1　御殿下記念館地点（1表）

御殿下記念館地点（以下、「御殿下地点」と略す）で数量呈示が行われている遺構は22遺構であるが、遺構の容量が復元できる17遺構について分析の対象とする。このうち火災などが廃棄の直接の原因になっていると推定される遺構は、252号遺構、537号遺構である。このほか遺物の多く出土している遺構はⅢ期に偏在しており、本地点は天和二（1682）年に屋敷が全焼する以前の下屋敷時代に比定される大型の土坑が多い特徴を有する。これらは土取のための採土坑であろうと推定しており、17世紀後半に盛んに当該地の土を利用して屋敷の造営がなされていたと推定できる。換言すれば、Ⅲ期（17世紀後半）までは空閑地であり、主に御殿造営のために使用する土を得る大型採土坑などが掘られるスペースであったと考えられる。当該地は少なくともⅣ期（17世紀末）以降には御殿空間になることが絵図面等で確認されており、考古学的調査においてもⅣ期以降に大型の土坑を含め、遺物の総量は少なくなる。これは御殿空間にゴミの廃棄がされないことによる。火災、御殿造営、破却な

どに伴う土地の大きな改変時以外にゴミが大量に廃棄されることはなくなり、継続的に御殿として土地が利用される地域になることが確認できる。

御殿下地点のカウント法は破片数である。上記のように多くの遺物を出土した遺構は、17遺構中13遺構が17世紀に集中している。出土遺物群の特徴は、かわらけの割合が他地点より突出して高いことがあげられる。特にⅡ～Ⅲ期の遺構では最も比率の高い395号遺構では全体の９割近くがかわらけで占められている。少ない遺構は537号遺構（14％）、252号遺構（15%）であるが、これらの遺構はいずれも元禄十六（1703）年の火災に伴う一括廃棄資料であると推定できる。火災資料を除くと886号遺構の26％が最も低い遺構であり、比率にばらつきがあるもののほぼ３割以上の高比率になっている。これらかわらけの口唇部には灯明痕の観察できるものが64％で、かわらけの多くが灯明具として使用されていることも指摘できる。御殿空間内におけるこれを用いた行為の頻度の高さを示唆していると思われる。他方、灯心痕がないものについては、おそらく反復して使用するような性格を有するものではないと推定され、これらかわらけが数量分析の際に他地点との等価評価を阻害している側面を考慮する必要があろう。他地点と比較して遺構間の遺物含有率に大きな開きが認められる原因はかわらけの量的偏在性に起因すると推定できる。

こうした制約の中での観察になるが、遺構容量に対して遺物の量が高い遺構は395号遺構、252号遺構、391号遺構、537号遺構、416号遺構である。これらはいずれも5m^{3}未満の遺構容量の小さい遺構あるいは火災の一括廃棄遺構に限定される。遺構容量の大きい100m^{3}程度以上の532号遺構、270号遺構、618号遺構、678号遺構、255号遺構の５遺構はいずれも1m^{3}あたり30点未満の低密度になっている。また、覆土の状況は遺物、特に自然遺物などは局所的に確認されていることなどから、廃棄場所としてある程度時間幅を有するような性格は想定しにくく、報告でも推定しているように短期間に埋め立てられていると思われる。したがって、御殿下地点の大型土坑は土取が第一義的で、埋める過程において邸内で発生した廃棄物を混ぜたと考えられる。

遺構名	年代	遺構の性格	遺物数 (a)	遺構容量 (b)	包含率 (a/b)	かわらけ数 (d)	かわらけ率 (d/a)	備考
532	Ⅱ	大型土坑（土取）	6192	320	19	3927	63	
395	Ⅲ	土坑	1007	2	504	885	88	多量のかわらけ
270	Ⅲa	大型土坑（土取）	1544	312	5	676	44	
309	Ⅲa	土坑（土取）	668	27	25	393	59	
618	Ⅲa	大型土坑（土取）	1303	292	4	1030	79	
678	Ⅲa	大型土坑（土取）	3475	1000	3	1034	30	
802	Ⅲa	大型土坑（土取）	921	54	17	518	56	
252	Ⅲb	地下室	1099	8	137	164	15	火（元禄）
255	Ⅲb	大型土坑（土取）	2627	96	27	1186	45	多量の瓦出土
276	Ⅲb	大型土坑（土取）	2602	54	48	1226	47	
391	Ⅲb	土坑	2049	3	683	1272	62	
537	Ⅲb	地下室	2526	16	158	357	14	火（元禄）
886	Ⅲb	地下室	358	11	33	92	26	
416	Ⅵ	土坑	1316	5	263	176	13	
233	Ⅶ	土坑	867	23	38	9	1	
245	Ⅶ	土坑	1205	27	45	17	1	
49	Ⅷb	井戸	1455	55	26	50	3	

１表　御殿下記念館地点

1-2　医学部附属病院（中央診療棟、設備管理棟、給水設備棟）地点（2表）

医学部附属病院地点（以下、「病院地点」と略す）は17世紀後半以降大聖寺藩邸になる。ここでのカウント法は推定個体数であり、100個体以上陶磁器類が出土している遺構は48遺構である。このうち火災などが廃棄の直接の原因になっていると推定される遺構であるD32-1･F27-1･G32-1･H29-1･H32-5･L32-1及び遺構容量の推定ができにくい溝を除いた36遺構について分析の対象とする。

ここでは御殿下地点で見られたような大型土坑は確認されていない。最も大型のものであるF34-11でも推定遺構容量は100m^{3}を下回ることから、Ⅲ期以降当該地域が大型土坑を掘るような空閑地であった時期がなかったと推定できる。遺構の種類は土取を行ったと推定される土坑、地下室、土坑、溝、井戸などがあるが、Ⅵ期までは24遺構中、12遺構が大型の不定形土坑と地下室であるが、地下室は当初別の目的で掘られたことが確実な遺構で、半数がこれにあたる。これに対してⅦ期以降は12遺構中、2遺構が井戸が含まれるのみである。また、推定遺構容量に対する陶磁器類の含有率は、

遺構名	年代	遺構の性格	遺物数(a)	遺構容量(b)	包含率(a/b)	備考
AE36-8	Ⅲ	大型土坑（土取）	138	19	7	
C28-1	Ⅳ	土坑	181	5	36	
E35-4	Ⅳ	地下室	129	7	18	
F34-11	Ⅳ	大型土坑（土取）	820	92	9	徳利9個体
G30-2	Ⅳ	地下室	209	4	52	
K30-1	Ⅳ	土坑（土取）	231	14	17	徳利2個体
AD35-2	Ⅴ	土坑	150	3	50	
AE36-4	Ⅴ	地下室	189	7	27	
D33-1	Ⅴ	土坑	206	5	41	徳利16個体
E24-1	Ⅴ	土坑	140	4	35	
E28-1	Ⅴ	井戸	138	3	46	
E31-1	Ⅴ	地下室	115	6	19	
F33-3	Ⅴ	地下室	629	30	21	徳利25個体
G20-2	Ⅴ	土坑	270	15	18	徳利8個体
G22-1	Ⅴ	地下室	103	3	34	
G26-1	Ⅴ	地下室	114	2	57	
I20-3	Ⅴ	地下室	139	14	10	
K34-1	Ⅴ	地下室	224	13	17	
L34-2	Ⅴ	地下室	139	15	9	徳利4個体
Z35-5	Ⅴ	土坑	145	3	48	
E22-1	Ⅵ	土坑	372	5	74	徳利40個体
E34-1	Ⅵ	地下室	132	3	44	
L34-1	Ⅵ	土坑（土取?）	298	13	23	
Y34-4	Ⅵ	土坑	292	5	58	徳利48個体
AE39-1	Ⅶ	土坑	150	3	50	
AJ33-1	Ⅷ	土坑（土取?）	610	4	153	徳利126個体
AJ34-1	Ⅷ	土坑（土取?）	511	5	102	徳利79個体
AJ34-2	Ⅷ	土坑（土取?）	496	4	124	
AJ35-1	Ⅷ	土坑（土取?）	883	8	110	徳利152個体
C26-1	Ⅷ	土坑	161	5	32	
H21-1	Ⅷ	土坑	321	4	80	徳利50個体
H21-2	Ⅷ	土坑	351	2	176	徳利23個体
H21-3	Ⅷ	土坑	178	2	89	
H21-8	Ⅷ	井戸	149	2	75	井戸側より出土
I20-1	Ⅷ	井戸	205	2	103	井戸側より出土
Z37-1	Ⅷ	土坑	155	3	52	

2表　医学部附属病院地点

1m³あたり７～176点となっているが、100点以上あるいはそれに近い値を示す遺構はE22-1･AJ33-1･AJ34-1･AJ34-2･AJ35-1･H21-1･H21-2･H21-3･H21-8･I20-1でⅥ期のE22-1を除くといずれもⅧ期の遺構である。これらの遺構の性格は井戸を除くといずれも不整形の平面形を呈し、明確な当初目的が検証できにくい。しかし、埋められる過程では、ゴミ穴として利用されていたと思われ、自然遺物も多く確認されている。一方、古いⅢ～Ⅳ期の遺構は土取を行ったと推定できるAE36-8･F34-11･K30-1などは、量的に多く出土しているにもかかわらず遺物の包含率が低く、ゴミ穴としてある期間開口し、継続的に廃棄が行われていたとは判断しにくい。Ⅲ期～Ⅵ期にあげられている遺構で、廃棄する対象として地下室が多く選択されている。ここでは火災の直後に焼け出された陶磁器などと共に廃絶された遺構を除外していることから、廃絶時に埋め戻す過程が問題となるだろう。しかし、崩落の危険を有する穴を一定期間開口していたとは考えづらいこと、地下室の存在していた場所が新規の土地利用が予定されている場所も多いことなどから、おそらく短期間に埋め戻していると考えられる。

1-3　理学部７号館地点（3表）

理学部７号館地点（以下、「理学部地点」と略す）は加賀藩邸に位置している。ここで数量呈示が行われている遺構は8遺構である。このうち火災などが廃棄の直接の原因になっていると推定される遺構は6号地下式土坑のみで、他の７遺構はそれ以外の要因で遺構が廃絶されている。陶磁器類のカウント法は破片数である。本地点も御殿下地点のような大型の土坑は存在せず、調査範囲が空閑地ではなかったことが推定される。当該地は「八筋長屋」と称される中･上級家臣の長屋が元禄期の絵図にはすでに描かれており、以降幕末まで当該地域に存在し、これは調査成果と合致する。

ここであげた遺構のうち、土取の可能性がある遺構はⅡ期に該当する２号土坑のみであるが、これも特に規模は大きくない。他は地下室、井戸、杭を周囲に伴う小土坑である。遺物の含有率は、Ⅵ期の４号地下式土坑、Ⅷ期の63号土坑が大きい数値がでているが、遺構容量が小さい遺構も多く、傾向として指摘するには誤差も大きいと思われる。しかし、地下式土坑や井戸に多く廃棄している現象は病院地点と共通である。

遺構名	年代	遺構の性格	遺物数 (a)	遺構容量 (b)	包含率 (a/b)	備考
2号土坑(土取?)	Ⅱ	土坑	395	11	36	
1号井戸	Ⅲ	井戸	532	2	266	
6号地下式土坑	Ⅳ	地下室	680	5	136	火（元禄）
4号井戸	Ⅴ	井戸	510	5	102	
5号地下式土坑	Ⅴ～Ⅵ	地下室	1189	8	149	
4号地下式土坑	Ⅵ	地下室	1568	2	784	
14号地下式土坑	Ⅶ	地下室	118	1	118	
63号土坑	Ⅷ	土坑	720	1	720	

3表　理学部７号館地点

1-4　医学部附属病院外来診療棟地点（4表）

医学部附属病院外来診療棟地点（以下、「外来地点」と略す）は、加賀藩と大聖寺藩との境に位置している調査区である。年代によって藩邸境は動いており、遺構の廃棄時のおける藩邸名は表中に呈示した。ここでは1遺構で100個体以上出土した13遺構を対象に数量呈示を行った。このうち遺構の推定容量が復元できないSK392と火災などが廃棄の直接の原因になっていると推定されるSK139･

SK141･SU279の３遺構を除く９遺構について分析の対象とする。

本地点からはSK290･SK152･SK174など比較的大型の遺構が確認されている。これらは不定形で、土取のために掘られたと推定でき、当該時期が空閑地として利用されていたことが想起できる。史料や絵図からもⅤ期後半～Ⅷ期初頭にかけて西側の加賀藩邸側には作事御門前の「空地」が存在していることが確認できる[1)]。本地点のカウント法は推定個体数である。先述した病院地点も同じカウント法をとるが、個体認定に違いがある。外来地点では底部中央など重複確認しにくい特定部位から個体カウントする方法をとっている[2)]ため、破片であっても個体の特徴から識別する病院地点と比べて絶対値はおよそ１／２～１／３程度になると思われる。この中で遺物の包含率が大きい遺構はSE271･SK81･SK166でいずれもⅧ期の遺構である。また、Ⅲ～Ⅵ期の土取遺構と推定したSK18･SK141･SK290･SK152･SK174はいずれも低い値を示している。しかし、ここで重要なのは土取穴の可能性を推定しているSK81は本地点で最も高い数値を示していることである。

遺跡名	遺構名	年代	遺構の性格	遺物数(a)	遺構容量(b)	包含率(a/b)	藩邸	備考
外来	SK139	Ⅳ	土坑（方形）	119	12	10	大聖寺	火（元禄）
外来	SK18	Ⅴ	土坑（土取）	172	23	7	大聖寺	
外来	SU20	Ⅴ	地下室	122	10	12	大聖寺	
外来	SK141	Ⅴ	土坑（土）	124	8	16	大聖寺	火（享保）
外来	SU279	Ⅴ	地下室	121	11	11	大聖寺	火（享保）
外来	SK137	Ⅴ	土坑（方形）	345	21	16	大聖寺	
外来	SK290	Ⅴ	大型土坑（土取）	541	30	18	加賀	
外来	SK152	Ⅵ	大型土坑（土取）	714	90	8	加賀	
外来	SK174	Ⅵ	大型土坑（土取）	234	65	4	加賀	
外来	SE271	Ⅷ	井戸	121	3	40	大聖寺	井戸側内より出土
外来	SK81	Ⅷ	土坑（土取?）	680	10	68	大聖寺	（破片数は6497）
外来	SK166	Ⅷ	土坑	210	6	35	大聖寺	

４表　医学部附属病院外来診療棟地点

1-5　工学部１号館地点（５表）

工学部１号館地点（以下、「工１地点」と略す）は加賀藩邸内に位置している。ここで数量呈示の対象とした遺構はSK01のみである。SK01は推定遺構容量は93m³あり、比較的大型の遺構である。冒頭でも書いたようにこれまでの研究から土取遺構と推定される特徴を持っている。また、報文でも記述されているように遺物にもある程度の年代幅が認められることや調査時の所見としてかなりの量の生ゴミが廃棄されていたと考えられるような臭いが確認されていることからある期間開口して、廃棄場所として継続的に機能していたと判断できる。

本遺構のカウント法は外来地点と同様である。遺物の出土量は同計測法では最大で、推定個体数は5000個体を超える。また、包含率は1m³あたり56点である。外来地点と比較すると大きな値となっている。

1）このあたりの土地利用の変遷は『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院外来診療棟地点』（2005）に詳しい。

2）『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院外来診療棟地点』「外来診療棟地点出土陶磁器･土器類について」参照。

1-6　INC（インキュベーション施設）地点、医学部附属病院病棟地点（5表）

INC（インキュベーション施設）地点（以下、「INC地点」と略す）、医学部附属病院病棟地点（以下、「病棟地点」と略す）の報告は未刊行である。調査の概略はそれぞれ『東京大学構内遺跡調査研究年報』4及び2を参照されたい。INC地点は加賀藩邸、病棟地点は大聖寺藩邸に位置している。現時点で遺物のカウントを行っておらず、参考値としてコンテナ箱の数量を記載した。

INC地点のSK01は18世紀末～19世紀前半（Ⅶ～Ⅷ期）の遺物と共に多量の自然遺物が共伴して出土している。大型のアワビやサザエが多量に含まれていることから、近接した御殿で食された残滓が廃棄されたものと推定できるが、工1地点SK01と比較して陶磁器含有量や含有率はコンテナ数から勘案して、この数量からやや小さくなると推定される。

一方、病棟地点SK03は推定遺構容量2500m³の超大型土坑である。出土遺物と調査時における遺構の層位から17世紀末（Ⅳ期）に下限を有する土坑である。出土量はコンテナ箱にして300箱程度で、ほぼ工1地点SK01と匹敵する。しかし、遺構容量に30倍程度の違いがあることから含有率もかなり異なった値がでることは想像に難くない。

遺跡名	遺構名	年代	遺物数（a）	遺構容量（b）	包含率（a/b）	備考
工1	SK01	Ⅷa	5202	93	56	個体
外来	SK290	Ⅴb	541	30	18	個体
外来	SK152	Ⅵa	714	90	8	個体
外来	SK174	Ⅵ	234	65	4	個体
外来	SK81	Ⅷb	680	10	68	個体
病院	F34-11	Ⅳa	820	92	9	個体
御殿下	532	Ⅱ	6192	320	19	破片数
御殿下	270	Ⅲa	1544	312	5	破片数
御殿下	309	Ⅲa	668	27	25	破片数
御殿下	618	Ⅲa	1303	292	4	破片数
御殿下	678	Ⅲa	3475	1000	3	破片数
御殿下	802	Ⅲa	921	54	17	破片数
御殿下	255	Ⅲb	2627	96	27	破片数
御殿下	276	Ⅲb	2602	54	48	破片数
病棟	SK03	Ⅳ	300	2500		箱
INC	SK01	Ⅷ	200	184		箱

5表　土取と推定される各地点の遺構

（2）　分析の結果

これまで東大構内遺跡の比較的遺物量の多い廃棄土坑について遺物量及び遺構容量とその比率を示した。各地点のカウント法が異なるため、直接的な対比は不可能であるが、傾向としていくつかの点が指摘できそうである。これについて述べる前に関連する事象としてカウント法と土取について軽く触れておきたい。

2-1　カウント法との関係

カウント法によって得られる数字が大きく異なることは、これまでの研究で指摘されているとおりである（東京大学遺跡調査室 1989、森本 2003、石神 2004など）。本稿がカウントやその方法を目的としたものではないので多くを触れることはしないが、ここで使用したカウント法では、個体の

底部中央など特定の部位をカウントする個体数（外来地点、工１地点）（サンプルユニットを遺跡、地域など広く求める場合にメリットがある方法であると思われる）→個体の諸特徴から識別する個体数（病院地点）（遺構や層などをサンプルユニットにする場合にメリットがあると思われる）→底部片数→口縁部片数→破片数（御殿下地点、理学部地点）の順に値が大きくなると推定できる。したがって、外来地点、工１地点と御殿下地点、理学部地点とでは最小値と最大値の相違は、破片数でカウントをした後者の方がより差の割合が大きくなる傾向を示している。参考として外来地点SK81を取り上げる。上記個体数では680個体であるが、破片数では6497点出土しており、破片数カウントの遺物包含率は1m^{3}あたり650点になり同カウント法を用いた御殿下地点、理学部地点の最も多く出土した遺構などと比肩する大きさを呈する。このことは日常的なゴミ穴として使用された遺構の埋没が、ある程度一定の速度で進行するととらえることが可能で、カウント法によらず、火災資料や大きなイベントによる特殊な遺物出土例を除くと、埋められる過程の違いが遺物包含率の検討によって復元できる可能性を示唆していると思われる。

2-2　土取について

土取についても若干触れておきたい（5表）。「当初目的が土取と推定できる土坑」の判別は難しいと言わざるを得ないが、おおむね「不定形を呈するものが多い」、「大型の遺構が多い」、「不規則な階段相当施設がある」、「平面的に複数と遺構と思われるものでも切り合いが認められない」などが最大公約数的な認識になろう。これらに該当するものを拾うとⅡ～Ⅵ期（17世紀中葉～18世紀後半）の遺構では、御殿下地点532･270･618･678･255号遺構などの大型の土坑では破片数カウント法を用いたデータでも数～20数破片であるのに対して、Ⅷ期（19世紀前半～中葉）の遺構では工１地点SK01、外来地点SK81などでは外来地点･工１地点個体数カウント法で50個体以上の数値となっている。最もデータの揃えられた病院地点においても同遺跡のカウント法で、Ⅲ期～Ⅴ期のAE36-8･F34-11･K30-1などで数～10数個体に対し、Ⅷ期の諸土坑は100内外あるいはそれ以上のデータが復元できた。これらからⅧ期とそれ以前では土取遺構の廃絶過程に違いを指摘できうると考える。加賀藩、大聖寺藩における土取の目的は屋敷造営のための平坦面を作り出すことにあると考えられる。すなわち面のかさ上げ、平坦面の拡張、廃棄する施設の埋め戻し等であろう。壁土には、粘質の高い土が良好で、土の粒子が揃っている関東ロームや石等が混じる人口堆積土は向かないとされている。以下は前田家のものではないが、行人坂火事後の毛利家江戸屋敷造営に関する記録が残っている(宮崎 1999)。これを見ると国元各地から木材、瓦、釘、縄、土などが多量に調達されており、この中に「赤土」が計4900俵、「上野土」が計2500俵江戸に送られている記述がある。赤土は周防にみられる粘質のある土壌のことであり、共に書かれた品目から建築に関連するものと推定でき、おそらく壁土に使用されたものであろう。これらは江戸麻布邸を中心として新橋邸、桜田邸など約6000坪の建築に対して調達された部材であり、藩邸の建築には多くの土が必要であったことは間違えない[3)]。本遺跡で確認されている土取と考えられる土坑については、大型の病棟地点SK03で2500m^3、御殿下地点の678号遺構で1000m^{3}ある。藩邸内には壁土になる粘性土が存在する場所がなく、掘削された土は

3）1俵あたりの大きさは不明であるが、仮に米と同様1俵＝4斗＝72リットル＝0.072m^{3}で梱包したとすると、赤土と上野土あわせて7400俵＝29600斗＝532800リットル＝532.8m^{3}である。壁土の他に平坦面を造成する土や廃棄する施設を埋め戻す土などをあわせると膨大な土が必要であったことは想像に難くない。

盛り土、関東ロームが主体となると考えられる。これらのことから加賀藩邸の造成は1000m³単位の造成土が必要になることが推定できる。調査で確認されたこれらの大型遺構は、本郷邸を前田利常隠居所として定めた寛永十六（1639）年、本郷邸が全焼した慶安三（1650）年、明暦の大火によって上屋敷である辰口邸消失後藩主綱紀が居住する明暦三（1657）年などの契機となる事件とそれ以後の藩邸造営と関わっていると考えている。また、藩邸が全焼するような火災があった元文三（1738）年以降、すなわち18世紀中葉以降はこの規模の土坑が確認されていないこともこのこれらの大型土坑が藩邸造営と関わっていたことは首肯されよう。

一方、地下室の覆土に関して、新宿区細工町遺跡の分析から覆土にローム土が多く使用されていることが指摘されている（原1992）。本郷邸の場合でもローム土単体で覆土が構成される例は見ないが、それが多く使用されており、また、遺物が伴う層は今回あげた地下室においてもローム土以外の層中であることから、ピュアなローム土が埋め立てに使用されていることが理解できる。

2-3　データから伺える特徴

東京大学本郷構内の遺跡検出の廃棄坑の分析では以下のようないくつかの特徴が看取された。

・Ⅷ期の土坑は、遺物の包含率が他の時期と比べて高い傾向にある。
・Ⅵ期以前には地下室のように短時間に埋められるような性格の遺構から多くの遺物が出土している。
・当初目的が土取と推定できる土坑の遺物包含率の年代的違いは顕著である。

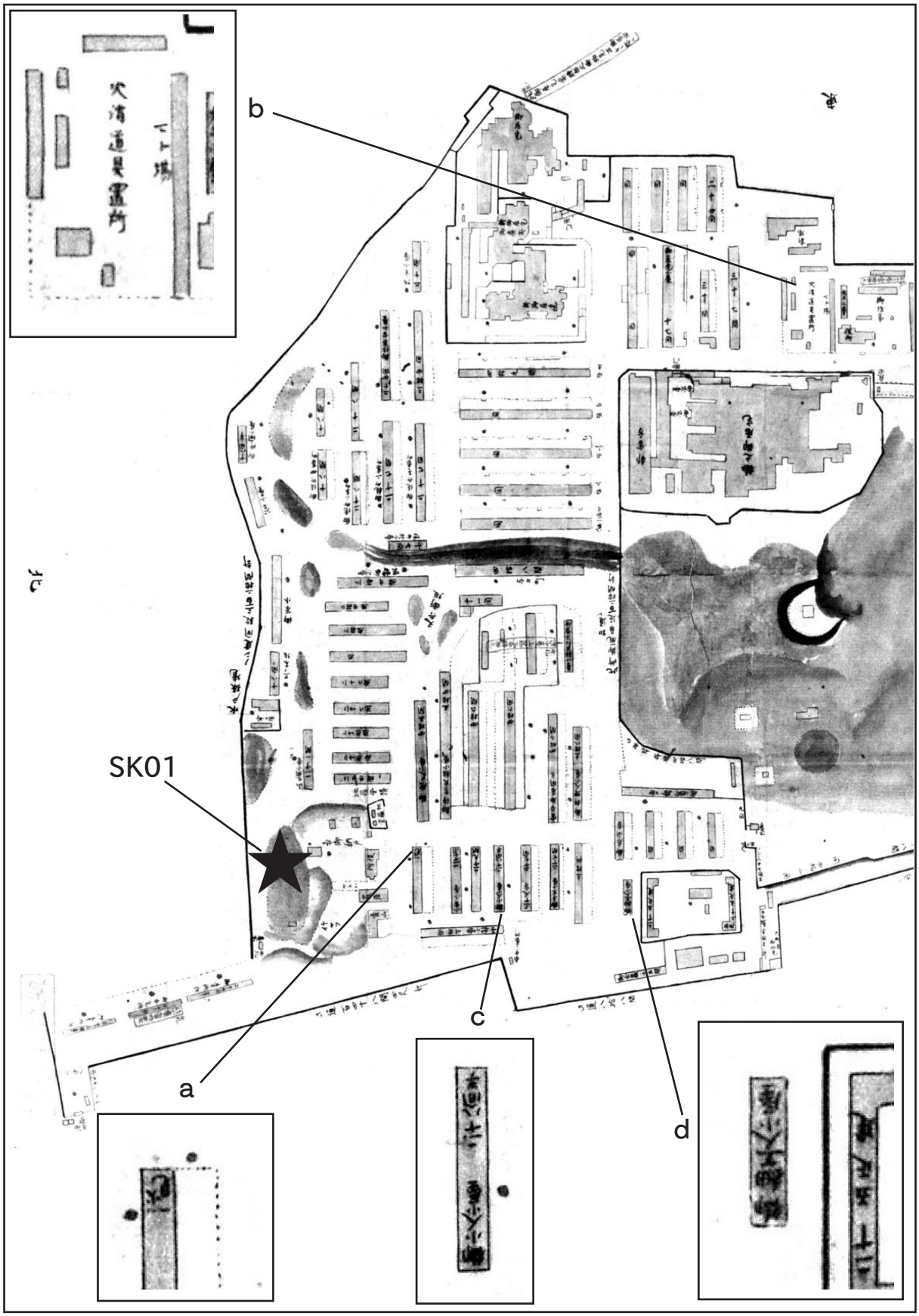
上記のことを踏まえて遺物包含率から得られた特徴を考えると、Ⅵ期までは廃棄されている遺構の種類が多いことや包含率が小さいことから、遺構を一度に埋め立てる際に土と伴って遺物が廃棄されることが考えられる。これに対して、Ⅷ期の土坑は、遺物包含率では外来地点、工1地点のカウント法である個体数ベースでもおおむね3倍以上の開きが認められている。これは破片数ベースではさらに大きくなることは先述したが、Ⅷ期には遺構の種類も不定形の土坑が多く、遺物包含率が飛躍的に高くなることから、土取という行為が伴っていたかは別として、その当初からゴミ穴として使用することを想定した上で掘削が行われ、廃棄による埋め戻しが行われていることが考えられる。この変化には藩邸内のゴミの増加と廃棄場所の問題といった実情にもあったのであろうと思われる。この手法は既に南町遺跡などで検討されているが（井汲・成田 1994）、ここでの「遺物数量相乗平均値包含密度」が70（点／m³）を境に二極に分布されること、これ以上の数値を示すものについて「ごみを廃棄する目的として、ごみの量に合わせて構築された遺構」としている。カウント法の相違があるものの、ある一定密度を境とした分布を示している状況は同様である。ただし、「ごみの量に合わせて」は土地利用や廃棄する人口の母集団などによって異なることが想定され、南町遺跡では2m³以下の遺構に限定されているようであるが、本郷邸では工1例やINC例などは100m³あるいはそれを越える規模を有しており、ゴミの量に合わせるのではなく「一定期間の使用」を視野に入れていると考えられる。

（3）　工学部1号館地点SK01と加賀藩邸内の塵芥処理

SK01の出土遺物からは墨書された陶磁器類が多く含まれていることも大きな特徴であり、この墨書には「御近所火消」、「漆細工所」、「御小人」などこれらを使用したと推定できる役所や居住区を特定できるものもある。「御近所火消」は役名であるが、おそらく担当部署は上屋敷の近習火消であろう。「江戸御上屋敷絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）には藩邸の南西隅に「南火消詰所」の記載があり、他の絵図ではその脇に「南火之見」と記されている。これに対して北側に詰所の記載は確認できない

が、文久年間の様子が描かれたと推定される「東都御屋敷略図」に「表御納戸」の南側長屋の東端に「北火ノ見」と記され、当該地には幕末まで櫓が存在していたことがわかる。あるいは、1802～1825年の様子を描いたと推定される「本郷御屋敷惣絵図」(1図)では、「梅之御殿」東側に「火消道具置所」(b)と記載された場所も確認でき、これらのうちで使用された道具であろう。また、先の「火見」(a)が存在する長屋の南側に「御小人小屋」(c)、さらに南側に「御細工人小屋」(d)が確認でき、SK01から出土している。これらを墨書した遺物が藩邸の北側を中心とした地域の廃棄物であり、少なくとも工1地点SK01が19世紀初頭におけるこれらの地域における最終的な処分地の一つであったことが推定できる。また、御殿内の廃棄物が持ち込まれた可能性については、別稿の大貫論文で推定しているように否定するものではないが、陶磁器の質などから出土遺物の主成分とはなり得ないと考えている。当該期の他の大型廃棄土坑ではINC地点SK01･SK62が確認されており、これは表御殿の南側「御料理所」、中奥部分や奥御殿の「御膳所」に近接し、大型の貝類遺体や上質の陶磁器類が一定量認められることから、これが開口していた時期にはここが御殿の廃棄物の主たる最終処分地であった可能性が強い。したがって同時期に集められる地域を異にする廃棄場が存在していたことが指摘できよう。しかもこれらは土坑の規模や出土量の数量などからもある期間開口していた廃棄物処理所であった可能性が高い。そして、これらの土坑が存在する藩邸内の位置は、屋敷境付近の縁辺部あるいは御殿外の空閑地と後述する岩淵令治氏が絵図面の分析から指摘する所定のゴミ穴の位置である「非御殿空間の、外塀や門のそばや、長屋の端」などと異なるものではない。しかし、SK01は最終的な処分場所であって、岩淵氏が指摘している仮置き場なども含まれるであろう「所定の廃棄場所」と同じであるとは考えていない。

次にSK01の廃棄土坑としての使用期間であるが、遺物の検討から東大編年Ⅶ期～Ⅷａ期の遺物が主体的に出土していることは、事実記載あるいは別稿で述べられている。当然ながらこれと開口期間が平行であるかは、道具の使用期間があり単純には推定できない。これを推定する手がかりとして瀬戸･美濃産のいわゆる貧乏徳利に注目したい。この徳利は周知の通り「通い徳利」としての性格を持ち、江戸の発掘調査から18世紀以降数多く出土する遺物である。筆者はかつてこの徳利の廃棄状況からモノの廃棄に関する意識の変化について私見を述べたことがある（堀内 2004）。6表は東大構内遺跡病院地点F34-11（17世紀末）、外来地点SK152（18世紀中葉）、SK81（19世紀前葉）、同医学部附属病院給水設備棟地点AJ35-1（19世紀初頭）、工1地点SK01（19世紀初頭）と新宿区坂町遺跡4号遺構（18世紀末）、同内藤町遺跡A-51･52･53（19世紀初頭）、同四谷三丁目遺跡82号遺構（19世紀前葉）の大型の土坑について総数、徳利数、徳利割合、徳利の欠損率などを表したものである。これをみると、年代が下がるに従って徳利の量比、完形率が上がっていることが看取できる。これは徳利を使用する頻度が上がっていることと、欠損することなしに廃棄される割合が上がっていることを示している。東大構内で見た場合19世紀にはいるとAJ35-1･SK01･SK81例ではそれ以前と比較して徳利の占める割合が増加し、ほぼ2割にもなっている。また、そのうち全く欠損することなしに廃棄される数量が増加し、「通い徳利」システムのルールが遵守されていないことが理解できる。この傾向は重要であり、徳利が破損するしないにかかわらず廃棄される器種であれば、当然廃棄場所の開口期間の長さに伴って他器種の廃棄量より相対的に多くなるはずであり、徳利の含有率が廃棄土坑の開口期間を推定できる可能性があると考えられる。これを比較するには同じ藩邸などで時間幅を有さない火災資料などと比較する方法があるだろう。しかし、東大構内ではⅦ～Ⅷ期に大きな火災に遭っていないため、参考として大名屋敷であり、かつ工1地点SK01とほぼ同時期の文化6（1809）年の火災の一括廃棄遺構と位置付けられている内藤町遺跡A-51･52･53遺構をあげてみた。同遺跡は高遠藩



1図　本郷御屋敷惣絵図

内藤家の中屋敷にあたる。加賀藩、大聖寺藩、越後高田藩（榊原）では陶磁器総数のほぼ2割を徳利が占めているが、内藤例では11％とその半分程度であった。類例が少なく、可能性の呈示として指摘せざるを得ないが､時間幅を有するであろう遺構出土の資料が相対的に多くの徳利が含まれている。このほか同年代の火災資料は他遺跡においても報告例はあるものの数量データが呈示されていないなど好事例に恵まれていないため現時点ではこれ以上の検証が難しい。

一方、自然遺物などを利用した判別法もある（桜井 1986、小川･阿部 2002)。これらによると郵政省飯倉分館構内遺跡の18世紀初頭の宝永火山灰を坑底に持つ上杉家中屋敷内一括資料1号土坑は4～5年で、新宿区坂町遺跡の18世紀末の組屋敷内大型廃棄遺構4号遺構は1年で廃棄による埋没が完了していると推定している[4)]。飯倉分館例は陶磁器が230個体に対して、坂町例は土器類も合わせてであるが、10854個体と数量に格段の相違がある。本遺跡例と対比するならば、飯倉分館例は土取を目的にし、埋没までに数年を要したと考えるべきであろうか？また、坂町例の徳利含有率は9％と低い。これは大名藩邸ではないため酒を小口で購入する頻度の多いと思われる詰人の少ない場所であるためであろうと推定している。

遺跡	遺構	遺構の年代	遺跡の性格	総数	徳利		完形		備考
					徳利数	含有率(%)	完形数	完形率(%)	
東大中診	F34-11	東大Ⅳa（17末葉）	大名屋敷	820	9	1	0	0	※1
東大外来	SK152	東大Ⅵa（18中葉）	大名屋敷	720	51	7	1	2	
東大給水	AJ35-1	東大Ⅷa（19初頭）	大名屋敷	731	152	21	16	10.5	※1 二合半は115個中13個完形
東大工1	SK01	東大Ⅷa（19初頭）	大名屋敷	5202	1045	20	77	7.5	
東大外来	SK81	東大Ⅷb（19前葉）	大名屋敷	680	115	17			
坂町	4号	18末	組屋敷	10854	984	9			
内藤町	A-51･52･53	19初頭	大名屋敷	1774	193	11	－	－	文化6年火災 ※2
四谷三丁目	82号	19前葉	町地	463	91	20	－	－	嘉永4年火災 ※2

※1 総数は磁器･陶器のみ　※2 徳利数は瓶の数

6表　徳　　利

（4） 文献との対比

江戸における塵芥処理については文献史から岩淵令治氏の業績がある。この中で大名藩邸に触れたものを取り上げてみたい（岩淵 2000･2004a･2004bなど)。これらによると大名藩邸では例えば鳥取藩邸では元禄年間（1688-1704)、秋田藩では宝永年間（1704-1711）に、すでに塵芥の処理に関する触れなどが出されており、これが問題となっていることが理解できる。塵芥処理問題自体はおそらく共通のものであったであろうと推定できるが、それに対する対処法についていくつかの史料から指摘がされている。その一つは藩邸内における日常的な廃棄場所に関する記述であろう。複数の大名屋敷には絵図面から「掃溜」、「ボロ」、「塵芥捨場」、「芥溜」などと書かれた場所が確認でき、その場所は屋敷の「非御殿空間の、外塀や門のそばや、長屋の端などに置かれていた」（岩淵 2004a）と日常的な廃棄の場としてこれらの施設が大名藩邸内に設置されていたことが指摘されている。次に邸外に運び出すシステムの存在を鳥取藩、庄内藩、水戸藩、高田藩、彦根藩などの史料から明らかにしている。この二点は考古学的な調査から藩邸内の生活やシステム復元を指向する際には重要な指摘である。

4）坂町遺跡ではこれと同時に廃棄した推定世帯数の検討を行っている。それによると66世帯分の所有品に相当する報告がされているが、埋没期間が1年程度と推定している時間幅の中で所有品全てが廃棄されることは想定できない。この点については再考が必要であろうと思われる。

これらの文献の成果と加賀藩邸における実際とを対比してみたい。まず、これら絵図面上の掃溜などの年代、位置、規模、形態などについてであるが、氏が上げた絵図に描かれた掃溜などを７表にまとめてみた。形状は描かれている全ての捨て場が方形、長方形、「L」字状と規格性を有する。また、規模では最も大型のものは三春藩のもので４間×２間半（7.2×4.5m）で、小型のものは１間程度のものである。東大構内遺跡では方形や長方形の規格性を有する遺構から多量の遺物が出土する例も多く確認されているが、御殿下地点の532号、678号遺構など長辺が20mを超えるような遺構以外はそれほど大型のものはない。これまでに述べた工１地点SK01やINC地点SK01･SK63などは不定形の遺構で、これはこれまで確認された新宿区三栄町遺跡1-a号遺構、同坂町遺跡４号遺構、文京区本郷追分１号大型土坑などの遺物が多量に出土した巨大土坑はいずれも不定形である。筆者は、規模などが小さいものについては絵図に描かれた捨場が廃棄物の最終処分の場ではない、いわゆる仮置き場も含まれていると推定しているが、一方で、大型土坑の中で７表で記した規模をもつ方形や長方形などの木組みの上部構造を有していた可能性も否定できない。最終処理場ではないゴミ穴例が病棟地点から天和二（1682）年に消失した長屋跡において確認された（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）。ここからは長屋の端に木組みの痕跡を有する長方形の土坑が確認され、この中から碁石や炭化した残飯などが出土した。位置についてはおおむね屋敷の外塀付近や御殿の出口、長屋の脇付近など絵図の例との合致するようである。

屋敷			捨場					絵図年代
藩邸名	場所	地形	表記	個数	場所	形状	規模	
紀伊藩中屋敷	赤坂	台地上	塵芥捨場	3	門脇、外塀際	長方形２ 方形１	不明（長方形が大きめ、方形が小型）	文化８（1811）年以前
龍野藩上屋敷	西丸下	低地	芥溜	3	外塀際など	長方形	２間×１間が2、２間×２間半が１	天保７（1836）年
三春藩上屋敷	愛宕	低地	ゴミ捨場	1	外塀際	長方形	４間×２間半	宝永４（1707）年
小浜藩上屋敷	日比谷	低地	コミ捨場	１？	門脇	？	？	文政11～天保８年 （1828～1837）
庄内藩上屋敷	神田橋	低地	ボロ	1	外塀際	長方形	１間×１間半	明和３（1766）年
庄内藩中屋敷	下谷	低地	掃溜	1	長屋脇	「L」字状	１間～１間半×２間	享和元（1801）年
庄内藩下屋敷	柳原	低地	掃溜 ボロ 塊溜	3	掃溜-長局脇 ボロ-長局脇 塊溜-御殿脇	掃溜-方形 ボロ-長方形 塊溜-長方形	掃溜-１間×１間 ボロ-１間×半間 塊溜-１間半×１間半	享保３（1718）年以降

７表　絵図面に描かれた廃棄物処理場所

ただし、考古学的には調査された個別事例の様態あるいはそうしたシステムの成立時期などの問題など解決すべき問題は多い。例えばこの中で取り上げられた高田藩の例を挙げると、医学部附属病院給水設備棟地点は越後高田藩榊原家中屋敷の北西隅にあたっており、ここからはAJ33-1･AJ33-2･AJ34-1･AJ35-1など遺物を多量に含む廃棄土坑が複数検出されている。これらは若干の時期差を有しながら19世紀初頭～前半の遺物で構成されており、ほぼ同一場所で何回か廃棄場所を変えて最終廃棄場所が維持されていたとみることができる。この19世紀段階に藩邸内の廃棄物を集中的に処分する地域を設置する方法は加賀藩本郷邸のそれとほぼ共通しているが、同じ榊原家においても邸外に処理をしていた史料がある上屋敷とでは処理方法に違いを有することも考えられる。これら違いを醸成する要因は屋敷の広さ、屋敷の位置や地形、年代など様々なランクが想定でき、これは考古学的な検討課題であろう。

小　結

これまで東京大学本郷構内の遺跡のうち６地点の廃棄土坑をデータ化した。また、ここから推定される加賀藩邸内における塵芥処理について若干の考察を行ったが、これを整理すると次のようになろう。

Ⅶ～Ⅷ期初頭（18世紀末～19世紀初頭）前後から藩邸の一定の地域から集められる、当初掘削目的が廃棄物処理であり、かつ継続的な廃棄を意図している最終処分場所が成立した。この最終処分場所は一時期に複数の存在が想定でき、それぞれ近いエリアの廃棄物が集積された。それ以前には土取穴や地下室などを埋め戻す過程で土と共に廃棄物を処分していた。

これらから加賀藩本郷邸ではⅦ～Ⅷ期初期に廃棄に対するシステムの転換が推定される。しかし、今回取り扱えなかった資料も多く、また、未報告で数量的データを呈示することができなかったものもあり、今後、これらの地点の成果など加えて、江戸全体の動きを視野に入れつつ加賀藩あるいは大名屋敷における廃棄物処理の議論を深めていきたい。

参考･引用文献

井汲隆夫･成田涼子　1994「近世南町遺跡居住者の生活史」『東京都新宿区南町遺跡』
石神　裕之　2003「近世考古学における「ごみ」研究の位置－理想的循環型社会・江戸の幻影－」『史紋』1
石神　裕之　2004「近世遺物の個体推計に関する方法論的検討」『東京都新宿区 筑土八幡町遺跡Ⅲ』新宿区生涯学習財団
岩淵　令治　2000「近世都市のゴミ処理について　－大名屋敷のゴミ処理について－」『考古学へのアクセス』ケー･ユー出版
岩淵　令治　2004a「江戸のゴミ処理再考」『国立歴史民俗博物館研究報告』118
岩淵　令治　2004b『江戸武家地の研究』塙書房
小川祐司･阿部常樹　2002「第４号遺構内の“ごみ”の堆積過程およびその背景」『東京都新宿区 坂町遺跡』新宿区生涯学習財団
桜井　準也　1986「自然遺物」『郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会
東京大学遺跡調査室　1989『東京大学本郷構内の遺跡 理学部７号館地点』
東京大学遺跡調査室　1990a『東京大学本郷構内の遺跡 法学部４号館･文学部３号館建設地遺跡』
東京大学遺跡調査室　1990b『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
東京大学埋蔵文化財調査室　1990『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館･御殿下記念館地点』
東京大学埋蔵文化財調査室　1997『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
東京大学埋蔵文化財調査室　1999『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
東京大学埋蔵文化財調査室　2002『東京大学構内遺跡調査研究年報』3
東京大学埋蔵文化財調査室　2004『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
東京大学埋蔵文化財調査室　2005『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』（印刷中）
原　祐一　1992「細工町遺跡の景観復元」『東京都新宿区 細工町遺跡』新宿区厚生部遺跡調査会
堀内　秀樹　2004「廃棄する意識」『江戸遺跡研究会第17回大会発表要旨 続 遺跡からみた江戸のゴミ』江戸遺跡研究会
宮崎　勝美　1999「史料翻訳「江戸三屋敷新御作事記録」『一九九六～一九九八年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書　近世都市における巨大建設技術に関する総合的研究』
森本伊知郎　2003「出土した陶磁器をどのように数えるか」『江戸遺跡研究会第16回大会発表要旨 遺跡からみた江戸のゴミ』江戸遺跡研究会

加賀藩邸内における陶磁器消費の諸相

── SK01 出土の遺物からみた 19 世紀前葉の様相 ──

大貫　浩子

はじめに

東京大学本郷構内の遺跡工学部１号館地点SK01（以下「工１ SK01」と省略）は、19 世紀前葉の大型廃棄土坑であり、多量の陶磁器が一括で検出されている。遺構年代の確かな一括遺物としてよく非日常的な火災遺物などが取り上げられる。これらはその時期に使われていた定点的な資料としては大変有効であるが、日常的に使用、廃棄されていたものではない。本遺構はそのような意味において、日常的にどのような器種組成のものが使われ廃棄されていたかを知りうることができる貴重な資料である。しかし、数量は多いが、絶対年代に関する資料が墨書の紀年銘のみであり、火災などに伴う一括廃棄遺物ではないため、遺構の開口期間や年代については、より慎重に考えなければならない。この遺構を分析することにより、19 世紀前葉の武家屋敷における陶磁器の様相を、また、陶磁器から見える生活の一端を明らかにできればと考えている。

（1） 数量分析とその方法

本地点の性格を知るために、陶磁器･土器の数量分析を行い、産地組成や器種組成を客観的に数値化することから始めた。それにより、加賀藩上屋敷内における 18 世紀末から 19 世紀前葉における生活史の復元、陶磁器使用の様相や廃棄のあり方についても明らかにできればと考えている。陶磁器の数量分析を行うに際しては、『東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類（1）』（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）に基づき、次のような基準で行った。底部に糸切り痕のあるものはその中心の数、無いものは底部が１／２以上あるもの、土瓶などの注口のあるものは注口の数、など重複してカウントすることがないような基準を考えた。また、総数を出すことによって得られるデーターがなるべく客観的になることを考えて、100 個体以上の一括資料になるもののみを数えた。なお、初回のみは東大分類を呈示するが、それ以降は省略し慣用名を用いることとする。内訳は本論Ⅲ-12 表に呈示しているので、参照されたい。また、一部を１表に抜粋した。

本地点の遺構で 100 個体以上の遺構はSK01 のみであった。SK01 はすべての遺物が一括で取り上げられている。陶磁器、土器の総点数 5202 個体と非常に大量である。磁器 989 個体、陶器 3153 個体、土器 1060 個体で、比率は 19%： 61%： 20%であった。この内瀬戸･美濃系陶器灰釉徳利は 1045 個体で、これを除くと 24%： 50%： 26%であった。陶磁器全体の中で器種組成を見てみると碗が 37.98 %を占める。

磁器は 989 個体で、器種組成をみると碗が突出して多く 555 個体で 56 %を占める。次に皿が 217 個体 22 %と多く、碗皿だけで磁器全体の 78 %を占める。碗 555 個体のなかでは、肥前系小丸碗（JB-1-j）が 300 個体と多く 54.05%。肥前系筒形碗（JB-1-l）が 68 個体 12.25%、肥前系広東碗（JB-1-m）が 31 個体 5.59 %、瀬戸･美濃系広東碗（JC-1-c）が２個体 0.36 %、肥前系端反碗（JB-1-n）が６個体 1.09 %、瀬戸･美濃系端反碗（JC-1-d）60 個体 10.81 %、肥前系湯呑碗（JB-1-o）が２個体 0.36 %、瀬戸･美濃系湯呑碗（JC-1-e）が８個体 1.44 %であった。皿は肥前系蛇ノ目凹形高台で高台が低い皿

(JB-2-j) 81個体、肥前系扇面文などの粗雑な皿 (JB-2-g) は46個体、肥前系大皿 (JB-3) は1点のみであった。産地の組成比をみると、肥前系と瀬戸・美濃系の比率は897個体：83個体で、瀬戸・美濃系が全体の8％である。

陶器は瀬戸・美濃系灰釉徳利を除いた2108個体の内、器種組成はやはり碗が突出して多く964個体で47％、産地組成では京都・信楽系、瀬戸・美濃系でほとんどを占める。陶器碗の中でも京都・信楽系は小杉碗 (TD-1-d) が182個体で18.88%、端反形で器面に貫入の入る碗 (TD-1-g) が63個体6.54％、瀬戸・美濃系は灰釉薄掛け丸碗 (TC-1-c) が162個体16.80％、柳茶碗 (TC-1-g) 84個体8.71％とかなりの数を占める。また萩系陶器では、藁灰釉の碗 (TH-1-a) は検出されているが、ピラ掛けの碗 (TH-1-b) は検出されていない。土瓶は199個体で生産地不明陶器灰釉土瓶 (TZ-34-g) が105個体と多く、生産地不明陶器青土瓶 (TZ-34-a) は7個体ほどしか検出されていない。瀬戸・美濃系灰釉徳利は1045個体で、陶器の34％を占める。瀬戸・美濃系二合半灰釉徳利は406個体。瀬戸・美濃系五合灰釉徳利は226個体。瀬戸・美濃系一升灰釉徳利は413個体である。首の短い肩の張ったタイプの灰釉徳利が多い。鍋などの調理具は少ない。

	個体数	碗比率
磁器	989	
肥前系小丸碗（JB-1-j）	300	54.05%
肥前系筒形碗（JB-1-l）	68	12.25%
肥前系広東碗（JB-1-m）	31	5.59%
肥前系端反碗（JB-1-n）	6	1.08%
肥前系湯呑碗（JB-1-o）	2	0.36%
瀬戸・美濃系広東碗（JC-1-c）	2	0.36%
瀬戸・美濃系端反碗（JC-1-d）	60	10.81%
瀬戸・美濃系湯呑碗（JC-1-e）	8	1.44%
肥前系蛇ノ目凹形高台低い皿（JB-2-j）	81	
肥前系扇面文などの粗雑な皿（JB-2-g）	46	
肥前系大皿（JB-3）	1	
陶器	3153	
京都・信楽系小杉碗（TD-1-d）	182	18.88%
京都・信楽系端反形貫入碗（TD-1-g）	63	6.54%
瀬戸・美濃系灰釉薄掛け丸碗（TC-1-c）	162	16.80%
瀬戸・美濃系柳茶碗（TC-1-g）	84	8.71%
生産地不明陶器灰釉土瓶（TZ-34-g）	105	
生産地不明陶器青土瓶（TZ-34-a）	7	
瀬戸・美濃系灰釉徳利	1045	
土器	1060	
皿（DZ-2）	230	
灯明受け皿（DZ-40）	117	
火鉢（DZ-31）	220	
塩壺（DZ-51）	99	

1表　SK01出土遺物個体数

土器は1060個体で、器種組成は皿 (DZ-2) 230個体、灯明受け皿 (DZ-40) 117個体などの灯火具が多く、それ以外では火鉢 (DZ-31) 220個体、塩壺 (DZ-51) が99個体検出している。そして数量的には多くないが、施釉の厚手と薄手の土瓶 (DZ-34) 14個体が検出されている。厚手の土瓶は橙色の胎土で、在地系と言われている灯明皿などと同様の胎土である。薄手の土瓶は灰白色の胎土で、「武蔵野」と「吉見」の刻印があることから少なくとも2カ所の産地があったと思われる。多摩、埼玉方面は明治期には土器生産が盛んな地域であり、「吉見」が現在の地名のある埼玉方面だとすると、19世紀に入った頃にはすでに土器生産が盛んに行われていたと考えられるのではないか。

(2)　編年的位置付け

18世紀末から19世紀前葉の陶磁器の研究は陶磁器の一つの画期として研究がなされている。成瀬晃司・堀内秀樹は『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』(東京大学遺跡調査室 1990b) で東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点出土資料を基に遺物の器形的、組成的変化を、可能なものに関しては推定廃絶年代を加味しつつ区分を試み、Ⅰ期～Ⅸ期に区分し東大編年を構築している。18世紀末から19世紀前葉にかけて東大編年では、Ⅶ期 (概ね1780～1790年代)・Ⅷａ期 (概ね1800～1810年代)・Ⅷｂ期 (概ね1820～1830年代) に比定している (以下、「東大編年」を省略)。長佐古真也氏は『和泉伯太藩上屋敷跡』(地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会 1994) で1号遺構出土遺物を中心に他の一括遺物の組成を検討し、18世紀末から19世紀初頭の陶磁器様相を段階的に想定している。『東京都千代田区尾張藩麹町邸跡』(紀尾井町6-18遺跡調査会 1994) の中では「江戸遺跡における

18世紀後半の陶磁器組成」についてまとめている。『和田倉遺跡』（千代田区教育委員会 1994a）では、これまでの２遺跡での論考をふまえ19世紀初頭の陶磁器の様相を検証している。また、個々の細かい遺物の検証により細かい段階設定の必要性を述べ、そこから逆に大きな画期を設定すると言う観点が必要であると述べている。いずれも検証している遺物の点数は少ない。

これ以外にも多くの研究がなされており、それらを踏まえつつ工１ SK01について編年的位置付けを考えてみたい。18世紀初頭段階と思われる遺物が数点検出されているが、数多く検出されている遺物は、碗では肥前系磁器小丸碗、筒形碗、Ⅶ期の基準資料である広東碗、Ⅷａ期の基準資料である瀬戸･美濃系磁器端反碗、わずかにⅧｂ期の基準資料である湯呑碗も検出されている。皿では肥前系磁器蛇ノ目凹形高台で高台が低い皿、肥前系磁器扇面文の中皿が多く検出されている。わずかにⅧｂ期の基準資料である肥前系磁器蛇ノ目凹形高台で高台が高い皿も検出されている。この他、生産地不明陶器灰釉土瓶が105個体と多く、Ⅷｂ期以降多くみられるとされている生産地不明陶器青土瓶は7個体ほどしか検出されていない。また萩系陶器では、Ⅷａ期の藁灰釉の碗は検出されているが、その後出てくるビラ掛けの碗は検出されていない。出土陶磁器の多くが概ねⅦ期（概ね1780～1790年代）、Ⅷａ期（概ね1800～1810年代）に比定される。そして全体の中では少量であるが、Ⅷｂ期（概ね1820～1830年代）の陶磁器が検出されている。これらは、あくまでも陶磁器の購入された時期であり、この廃棄土坑が機能していた年代とはやや異なるであろう。

a 塩　　壺

比較的完形のままで廃棄されることの多い瀬戸･美濃系灰釉徳利や塩壺は使用期間が短く、遺構自体の年代に比較的近いと考えられている。ここではまず、塩壺を取り上げてみたい。工１ SK01から検出されているのは小型ロクロ成形、筒形、無印の塩壺（DZ-51-W）で総数は99点である。口唇部に貧弱な蓋受けを持つものも２点検出されているが、今回はこの分類表には加えなかった。その他の器高や径が計測可能な48点を形態から次のように３種類に分類した。

1図　SK01出土　小型･ロクロ成形･筒型･無印の塩壺

イ類　口縁部が平らで筒型である。口縁部内面が真直に立ち上がっており、蓋受けの名残のようなものを持つものもある。口縁部から底部にかけて直線的である。５点出土。

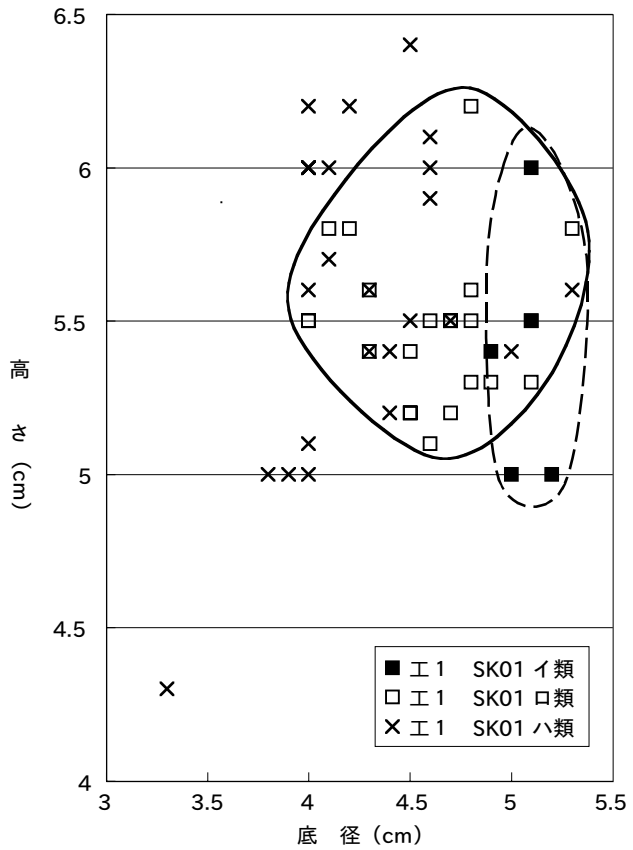
ロ類　口縁部が平らで底部がやや窄まっている。口縁部内面が真直に立ち上がっており、蓋受けの名残のようなものを持つものもある。16点出土。

ハ類　口縁部に鍔を持つもので口唇部がやや内傾しているものが多い。底部がやや窄まっている。口縁部内側のナデが強いものが多い。全体的に規格性に乏しく、個体差が大きい。27点出土。

工１ SK01から検出され、イ類～ハ類に分類した塩壺を、底径と高さで散布図を作成してみた（2

表)。イ類は少量で器高差は5cm～6cm、底径が4.9cm～5.2cmと一定で一群を形成している。ロ類は高さ5.2cm～6.2cm、底径4cm～5cmと線で囲んだようにある程度のまとまりをみせ一群を形成している。ハ類は高さ4.3cm～6.4cm、底径3.3cm～5.3cmと表全体に散らばって、かなり散漫に見受けられる。

先の研究で小川望氏も述べているように、板作り、刻印付きの塩壺から大量で安価な製品が求められた結果、考え出されたのが小型ロクロ成形、筒形、無印の塩壺であり、また、このような塩壺の出現により多様な形態の多系統の製品が爆発的に現れる時期である（小川 1991)。このイ類～ハ類はその一部分であり、ロ類、ハ類はこの中でも細分できる可能性がある。また、ハ類は工1 SK01において特徴的な器形である。個体差が大きくロ類と明瞭に区別しづらい個体もあり、系統的なものがみいだせるかどうかは、今後の課題としたい。



2表 工1 SK01 塩壺 高さ／底径散布図

次に、イ類･ロ類について系統的なものが追えるかどうかを、工1 SK01イ類･ロ類に東京大学本郷構内の遺跡の他地点やその他の遺構から検出されているイ類、ロ類を加え、底径と高さで散布図を作成してみた(3表)。今回はイ類、ロ類と認定したもの以外は計測しなかった。

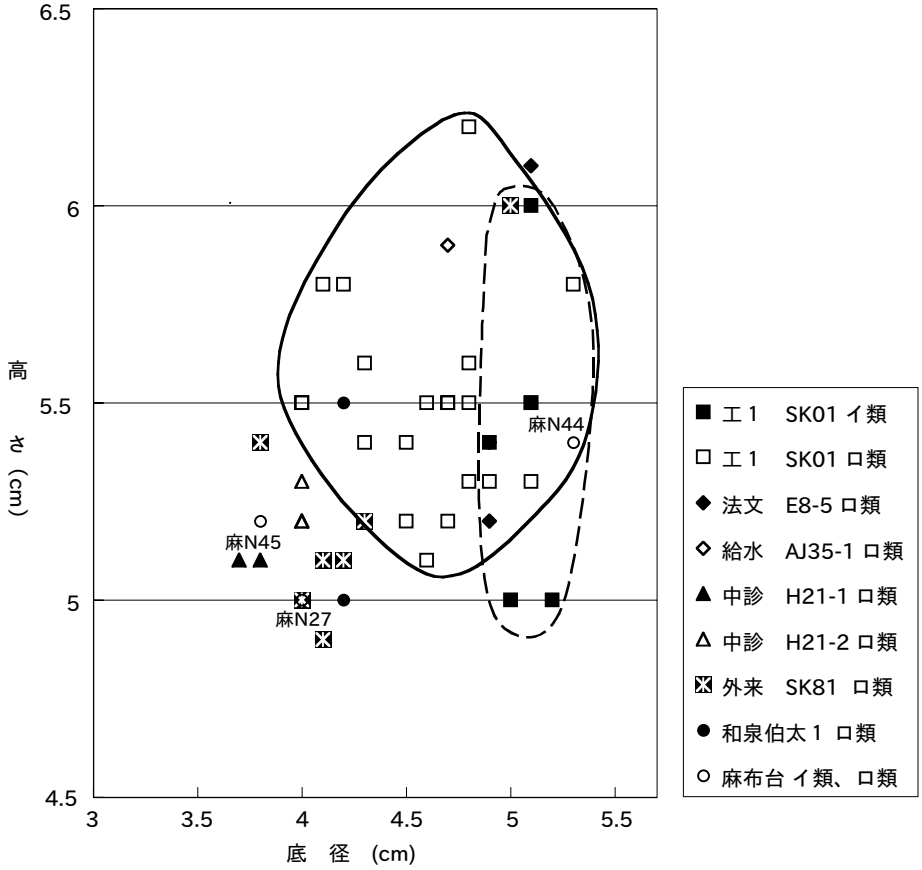
まず、東京大学本郷構内の遺跡の他地点と比較検証してみる。法学部４号館･文学部３号館地点E8-5土坑（以下、「法･文E8-5」と省略）は加賀藩上屋敷の詰人空間にある大型の廃棄土坑である（東京大学遺跡調査室 1990a)。ロ類が出土しており、3表を検証してみると工1 SK01の一群の中でも底径の大きいところに位置することがわかる。これは、ほとんどイ類の散布域に位置している。

医学部附属病院給水棟地点AJ35-1（以下、「給水AJ35-1」と省略）は大聖寺藩にある楕円形で大型の廃棄土坑である。ロ類が出土しており、3表を検証してみると工1 SK01の一群の中に位置することがわかる（東京大学埋蔵文化財調査室 1990b)。

医学部附属病院中央診療棟地点H21-1･H21-2（以下、「中診H21-1」･「中診H21-2」と省略）は加賀藩上屋敷の廃棄土坑、中診H21-1で２点、中診H21-2で３点、ロ類が確認された（東京大学埋蔵文化財調査室 1990b)。3表でみると、いずれも工1 SK01の一群よりも小型で、工1 SK01の一群の左下に集中し、一群を形成しているのがのがわかる。

医学部附属病院外来診療棟地点SK81（以下、「外来SK81」と省略）は大聖寺藩邸の大型の廃棄土坑である。ロ類が７点確認された（東京大学埋蔵文化財調査室 2005)。3表でみると１点はやや大型であるがその他は工1 SK01の一群よりも小型で、工1 SK01の一群の左下に集中し、一群を形成しているのがのがわかる。

次に他の遺跡と比較してみる。和泉伯太藩上屋敷跡１号土坑（以下、「和泉伯太1」と省略）は２点、



3表　イ類･ロ類　高さ／底径　散布図

ロ類が検出されている。1点は工1 SK01の一群の中でも底径の小さいところに位置し、もう1点は工1 SK01の一群より左下の一群に位置している。

今までの研究により、工1 SK01の一群の中でも底径の大きいところに位置する法･文　E8-5は、Ⅶ期に比定され、工1 SK01の一群より小型のものが検出されている中診H21-1･中診H21-2･外来SK81はⅧb期に比定されている。和泉伯太藩上屋敷跡の報告書の中で和泉伯太1は給水AJ35-1と中診H21-1の間に位置付けられている。3表をみると、和泉伯太1からは工1 SK01の一群の中でもやや小ぶりのものと、一群よりやや小型のものが検出しており、工1 SK01と中診H21-1の中間に位置しているようにもみえる。しかし、湯呑碗は検出されておらず、また、瀬戸･美濃系磁器碗の中にやや新しい時期のものも見受けられるなど、前後関係を簡単に述べることはできない。近い時期の遺構であることは確かであろう。

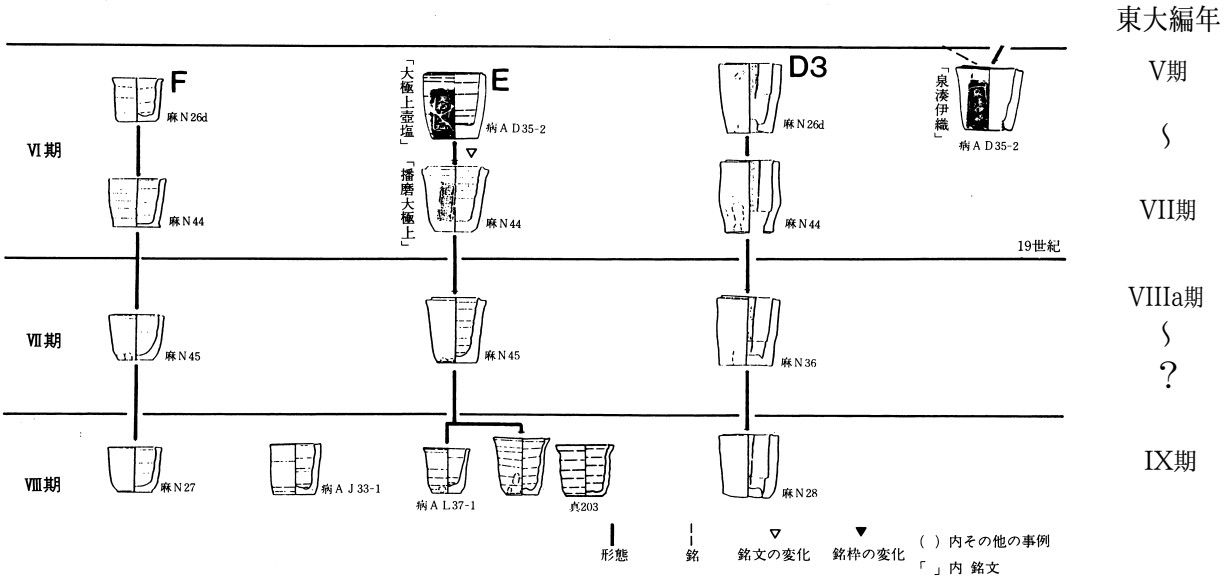
つまり、ロ類はある一定の規格性を持ちながら同一系統の中でわずかに小型化していったのではないか。その中間に位置する工1 SK01は同一系統上にあり、Ⅷa期を中心とする遺構と考えて良いであろう（4表）。しかし、これらの時期設定はあくまでも傾向を示すものであり、数値で区切られるものではないと考えている。

Ⅶ期	法･文　E8-5	大
Ⅷa期	給水AJ35-1･工1 SK01 和泉伯太1	
Ⅷb期	中診H21-1･中診H21-2 外来SK81	小

4表　ロ類の法量変化から見た編年

小林·両角両氏が「土師質塩壺類の時期設定」(Ⅵ期·Ⅶ期·Ⅷ期のみを抜粋　2図参照) を行っている (小林·両角 1992)。東京大学構内の遺跡から出土している遺物をもとに東大編年と対応させ一部加筆した。この段落で使用している各期は小林·両角両氏の表に書かれていたものを使用した。ロクロ成形の塩壺はⅥ期 (小林·両角編年表による　以下、「2図」と省略) 以降で形態F·Eの2系統が示されている。Fは麻布台遺跡の資料に基づいて寸胴な器形からやや底部の窄まる器形に移行し次第に小型化していくとされている。この系統図を工1 SK01から検出されているロクロ成形、筒形、無印の塩壺と比較検証してみる。形態FのⅥ期 (2図) に位置付けられている麻N44はイ類であり2表でもイの一群上に位置している。Ⅶ期 (2図) に位置付けられている麻N45とⅧ期 (2図) に位置付けられている麻N27はロ類で器高差は認められるがいずれも工1 SK01の一群から少し左下にずれた一群に属している。この一群は工1 SK01よりも新しい段階と考えられるⅧb期以降に属するものであり、麻N45の前に工1 SK01ロ類が1段階入ると考えられる。また、この工1 SK01より新しい一群の中でも分類ができるのかもしれない。

FはⅥ期 (2図) からⅦ期 (2図) の変化として、寸胴な器形とやや底部の窄まる器形を同一系統上で



E　筒形のロクロ成形で、口唇に貧弱な蓋受けを持つもの。
F　筒形のロクロ成形で、口唇に平坦面を持つもの。
D3　筒型の板組み棒巻成形で内面顕著な有段部を持つもので、作りの粗雑なもの。

2図　「土師式塩壺類の時期設定」 (小林·両角 1992より一部抜粋·加筆)

とらえている。これらは工1 SK01ではイ類とロ類に分類しているものである。口縁部の形態が同様であり、底部付近のわずかな成形の違いのみによる分類である。しかし、寸胴な器形が検出されているFのⅥ期 (2図) は法·文 E8-5と同時期と考えているが、法·文 E8-5からはロ類で工1 SK01よりやや大型のものが検出されている。つまり、寸胴な器形とやや底部の窄まる器形は別系統の可能性もある。今後他の類例と共に検討して行きたい。

D3は板作りである (2図)。実測図は未掲載であるが工1 SK01でも2点検出されている (工学部1号館CD-ROM¥遺物¥SK01¥土器¥FE-0001-TD-参考02 参照)。Eは工1 SK01では検出されていないが、外来SK81で検出されている。

E·F以外にも小型ロクロ成形、筒形、無印の塩壺の別系統のものが流通していたと考えられ、段階

設定も何段階かにわけられそうである。今回はイ類やハ類についてはあまりふれることができなかった。詳細は次稿にまわしたい。

小型ロクロ成形、筒形、無印の塩壺に伴うと思われる蓋であるが、工1 SK01からは断面逆台形の蓋（DZ-00-d）が29点、断面長方形の蓋（DZ-00-g）が67点で合計96点検出されており、身の合計99点に近い。蓋と身が同時に廃棄されていたことがわかる。また、蓋も、何種類かに分類できそうであるが、今の段階ではイ類～ハ類に対応させることは難しそうである。

b 陶 磁 器

陶磁器の器種組成から工1 SK01と東京大学本郷構内の遺跡の他地点の遺構とを比較検討し編年的位置付けを考えてみたい。

工1 SK01は文政元年（1818）の墨書を持つ碗が検出されている。肥前系磁器小丸碗、筒形碗、瀬戸･美濃系陶器灰釉丸碗が多く検出されている。肥前系及び瀬戸･美濃系端反碗が検出され、湯呑碗もわずかに検出されている。肥前系磁器蛇ノ目凹形高台で高台が低い皿が検出され、わずかに高台が高い皿も検出されている。瀬戸･美濃系陶器灰釉徳利は底部外面釉拭取り、つけ掛けの両方が検出されている。

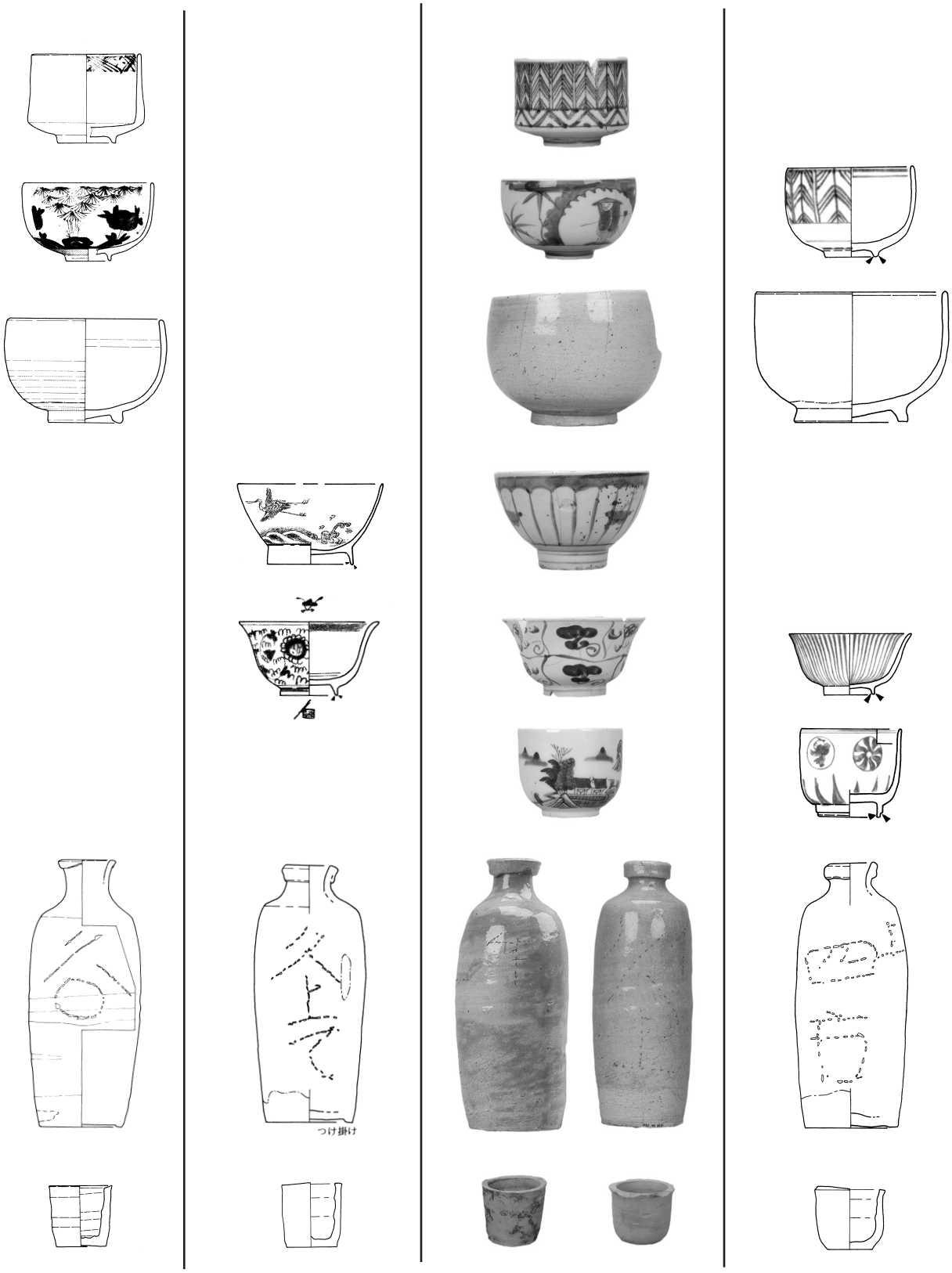
法･文E8-5は享保2年（1802）が下限。肥前系磁器小丸碗、筒形碗、瀬戸･美濃系陶器灰釉丸碗が多く検出されている。肥前系及び瀬戸･美濃系磁器端反碗がほとんど検出されていない。瀬戸･美濃系陶器灰釉徳利は底部外面釉拭取りのみである。

給水AJ35-1は大聖寺藩邸に位置し、肥前系磁器小丸碗、筒形碗、瀬戸･美濃系陶器灰釉丸碗がほとんど検出されていない。肥前系磁器広東碗、肥前系及び瀬戸･美濃系磁器端反碗が多く検出されている。皿では肥前系磁器蛇ノ目凹形高台で高台が低い皿が検出されている。瀬戸･美濃系陶器灰釉徳利は底部外面釉拭取り、つけ掛けの両方が検出されている。

外来SK81は大聖寺藩邸に位置し、肥前系筒形碗、広東碗、瀬戸･美濃系陶器灰釉丸碗は少量しか検出されていない。肥前系磁器小丸碗、肥前系及び瀬戸･美濃系磁器端反碗が多く検出されている。瀬戸･美濃系陶器灰釉徳利はほとんどがつけ掛けである。

これらの遺構の陶磁器の器種組成を比較してみると法･文 E8-5は工1 SK01から大量に検出されている肥前系磁器小丸碗、筒形碗、瀬戸･美濃系陶器灰釉丸碗が検出されており器種組成は工1 SK01に近いが、肥前系及び瀬戸･美濃系磁器端反碗がなく、瀬戸･美濃系陶器灰釉徳利は拭取りのみである。特に瀬戸･美濃系磁器端反碗の有無はこの時期の大きな画期の一つであり、他の遺構よりも古い段階に設定される。

工1 SK01と給水AJ35-1を比較してみる。工1 SK01からは肥前系磁器小丸碗、筒形碗、瀬戸･美濃系陶器灰釉丸碗が多く検出されている。給水AJ35-1からは肥前系磁器小丸碗、筒形碗、瀬戸･美濃系陶器灰釉丸碗は検出されていないが、肥前系磁器広東碗が多く検出している。この点では、それぞれが、異なる古い様相を残している。次に磁器碗における端反碗の比率をみてみる。工1 SK01は先に述べたように11.98％であるが、給水AJ35-1は磁器碗218個体、端反碗40個体で18.35％となった。この時期は端反碗が急激に浸透してくる時期であり、比率からみれば割合の高い給水AJ35-1の方が新しい時期であることになってしまう。しかし、工1 SK01からはわずかではあるが湯呑碗や肥前系磁器蛇ノ目凹形高台で高台が高い皿が検出されているが、給水AJ35-1からは検出されていない。工1 SK01は給水AJ35-1より一部分において、やや新しい様相の遺物を包含しているといえよう。つまり、遺構の廃絶年代においては工1 SK01の方がやや新しい時期であると考えられるが、



法・文　E8-5　　給水　AJ35-1　　工1　SK01　　外来　SK81

3図　18世紀末から19世紀前葉の陶磁器の様相

遺構がゴミ穴として有効に機能していた時期や開口期間の問題も考えなければならない。共にⅧａ期という一定の間隔の中に含まれる遺構であると考えることに問題はないであろう。

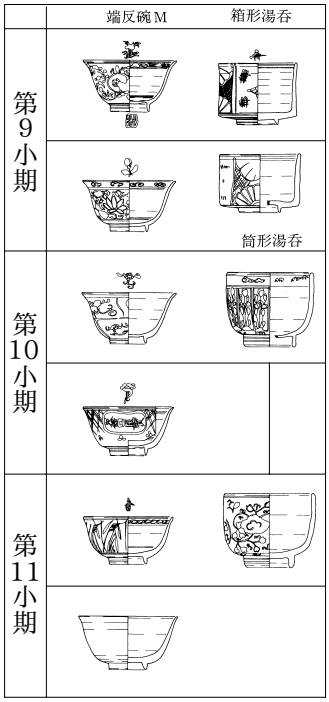
外来SK81はそれまでみられていた肥前系筒形碗が検出されておらず、肥前系及び瀬戸･美濃系磁器端反碗やⅧｂ期の基準資料である瀬戸･美濃系磁器湯呑碗が多く検出されている。これらは、明らかに工１SK01や給水AJ35-1よりも新しい様相を示している。

比較的使用期間が短いと考えらる瀬戸･美濃系灰釉徳利についてであるが、工１ SK01の二合半灰釉徳利をみてみるとやや首の長い底部釉拭取りの徳利が105本、首が詰まって肩の張るつけ掛けの徳利が301本であった。首が詰まって肩の張るつけ掛けの徳利はⅧａ期以降流通すると考えられており、それまでの、やや首の長い底部釉拭取りの徳利との過渡期の時期であると考えて良いであろう。給水AJ35-1も首が詰まって肩の張るつけ掛けの徳利のほうが多いが、やや首の長い底部釉拭取りの徳利も検出されている。外来SK81になると、やや首の長い底部釉拭取りの徳利が２本、首が詰まって肩の張るつけ掛けの徳利が54本で、Ⅷｂ期にはやや首の長い底部釉拭取りの徳利はほとんど流通しなくなることがわかる。

広東碗についてその他の遺構と比較検討してみる。工１ SK01は広東碗が少なく磁器碗の中での比率は5.99％である。一方で給水AJ35-1は広東碗が多く磁器碗の中での比率は非常に高く49.5％である。和田倉８号では９％で、和泉伯太藩上屋敷跡でも広東碗はあまり検出されていない。工１SK01の方が多くみられる様相のようである。工１ SK01からは漆器椀が飯椀13点、汁椀15点、平椀11点、椀26点が出土している。北野信彦氏は「東京大学本郷構内遺跡（工学部１号館地点）出土漆器資料の材質と製作技法」（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）で、これらの分析を試み、ほとんどが一般的で廉価な日常品としている。ハレの場では飯椀は漆器が主に使われていたのではないかと考えられているが、この時期になってもまだ一般的で廉価な日常品にまで漆器椀が使われていたことがわかる。広東碗は茶飲道具と考えられている小碗とは異なり飯碗と考えられることから広東碗の出土が少ないところは、漆器椀が使われ続けていたのではないか。また、他の陶磁器碗の中にも、飯碗として使用されたものもあるかもしれない。給水AJ35-1で広東碗が多いのは大聖寺藩の特性とも言えよう。

次に、Ⅷｃ期の基準資料とされている幅広高台を有する器種が工１SK01から検出されていることについて考えてみたい。『瀬戸市史陶磁史篇　六』「第九節　近世瀬戸村の窯業生産」のなかの窯資料を基にした編年では、第９小期では箱形湯呑碗、第10小期では箱形湯呑碗が筒形湯呑碗（JC-1-e）に移行すると考えられている（瀬戸市史編纂委員会 1998）。経塚山西窯跡の資料では箱形湯呑碗にも幅広高台を有するものが検出されている。箱形湯呑碗は、幅広高台が多くみられるようになるⅧｃ期以前に出現する筒形湯呑碗に取って代わられた器種であり、Ⅷｃ期以降に幅広高台の箱形湯呑碗が作成されたと考えるよりは、それぞれの器種と共に少量の幅広高台のものが作られたと考えた方がよいであろう（瀬戸市教育委員会･瀬戸市埋蔵文化財センター 1993）。そして、第11小期になると、幅広高台を有する筒形湯呑碗が多く作られるようになる。

工１ SK01からは、肥前系磁器で幅広高台を有する小広東碗（磁器



４図「近世瀬戸村産磁器変遷図」より一部抜粋
（瀬戸市史編纂委員会　1998）

10)、湯呑碗（磁器48）が検出されている。肥前系磁器でも小広東碗などはそれぞれの器種と共に少量の幅広高台のものが作られたのであろう。また、工1 SK01からは瀬戸･美濃系磁器で幅広高台を有する筒形湯呑碗は検出されていない。幅広高台を有する肥前系湯呑碗は瀬戸･美濃系磁器で幅広高台を有する筒形湯呑碗より先行している可能性がある。

磁器、陶器、土器の組成比を他の遺跡と比較、検討してみた。工1 SK01の陶磁器、土器の総点数5202個体、磁器989個体、陶器3153個体、土器1060個体であった。磁器、陶器、土器の比率は19%：61%：20%であった。瀬戸･美濃系陶器灰釉徳利は1082個体で、これを除くと、24%：50%：26%であった。同様の傾向を示したのが、尾張藩上屋敷遺跡で500個体以上の「主要遺構出土陶磁器、土器数量」の第５次御殿期（1786～1820年）で、磁器、陶器、土器の比率は12.0%：42.9%：45.1%であった（内野 2004)。尾張藩上屋敷遺跡の方が土器の比率が多いが、陶器と土器は陶器が磁器の3.6倍と大変近い比率であった。尾張藩は、尾張藩麹町邸跡の調査において、長佐古氏によって瀬戸･美濃産の陶磁器の組成は、他の江戸遺跡とやや異なった趣を持つことが指摘されおり、おそらく上屋敷も同様の傾向を示すのではないかと思われるが、磁器と陶器の大きな括りでみた場合に同じような傾向になった。一方で大聖寺藩邸の廃棄土坑である、給水AJ35-1では、磁器と瀬戸･美濃系陶器灰釉徳利を抜かした陶器の個体数は、438個体：332個体でやや磁器の方が多い。また、和泉伯太藩上屋敷跡でも、1715片：1308片と、同様の傾向を示す。旗本屋敷地とされている払方町538号遺構（払方町遺跡調査団 1999）は文化11年（1814）の線刻を持つ硯が検出している遺構で19世紀前～中期に廃絶されたとされている。磁器と陶器の推定個体数は89個体：164個体である。この内瀬戸･美濃系陶器の中瓶、大瓶の合計は87個体である。これを抜くと、89個体：77個体となり、やはり磁器の方が若干多くなる。Ⅶ期に比定されている東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点AE34-3は、磁器：陶器（徳利以外）の比率が26個体：49個体である。Ⅷb期に比定されている外来SK81は磁器と陶器の比率は275個体：287個体（内徳利118個体）であり、徳利を抜くとかなり磁器比率が高くなる。尾張藩を除くと、工1 SK01に近い時期と考えられる遺構ではみな磁器比率が高くなっている。Ⅷ期以降、磁器が増加するのは、瀬戸･美濃での磁器生産が盛んになったことによる物と考えられる。尾張藩上屋敷遺跡は国元に瀬戸･美濃の産地を控えており、他の地域の状況とは異なるであろう。Ⅷa期において陶器の比率が大変高いのは工1 SK01の大きな特徴の一つであろう。

（3）出土遺物からみた生活史の復元

a　陶磁器からみた様相

今までの結果から次のような器種組成の特徴をみて取ることができる。

1．碗、中皿、土瓶が多い。
2．磁器碗の中では小丸碗が多く、広東碗が少ない。
3．陶器碗の中では小杉碗が多い。
4．大皿が少ない。
5．徳利が多い。

また、他の特徴としては次のようなことが挙げられる。

6．墨書が多い。
7．セット物が見受けられる。

8．ある一定の器種で、完形品の廃棄が多くみられる。

これらのことを念頭に置いて、どのような様相が読み取れるのかを考えてみたい。

磁器は、陶器の３分の１の出土量であり、量産品がほとんどで高級磁器は検出されていない。陶器でも同様でわずかに、涼炉や急須など若干の嗜好性の高いものが検出されているが、ほとんどが実用に即した日常品で、量産品の瀬戸･美濃系がほとんどである。

上記に述べた陶磁器の器種組成の特徴を、数量が多く検出されているものから検証してみたい。器種別にみると碗や土瓶、中皿などが多い。碗は磁器碗555個体、陶器碗964個体。合計1519個体である。内訳をみてみると、京都･信楽系陶器小杉茶碗が182点、端反形で器面に貫入の入る碗が63個体、瀬戸･美濃系陶器灰釉薄掛け丸碗が162個体、瀬戸･美濃系陶器柳茶碗84個体と量産品がかなりの数を占める。そして、高台内には個人名と思われる墨書が多く書かれている。小法量の碗以外にも、大法量の碗もかなりの数検出されており、茶の飲み方が一様ではなく、様々な飲まれ方をしていた時期であることがわかる。土瓶は199個体で産地不明の灰釉土瓶が105個体と多く、胴部最大径25cmの大振り土瓶から胴部最大径16cmの土瓶まで、いろいろな大きさの灰釉土瓶が検出された。いずれも注口の内側の穴部分に茶こし状のものが付けられ底部にススが付着しており、おそらく煮出し茶が飲まれていたのであろう。青土瓶は７個体ほどしか検出されていない。いずれも量産品がかなりの数を占める。中皿は肥前系磁器蛇ノ目凹形高台92個体、扇面文46個体、見込み蛇ノ目釉剝ぎ23個体、腰張り輪花皿29個体その他27個体、計217個体である。やはりこれらも量産品と思われるものが多い。碗、土瓶などは喫茶に関わるものであるが、土瓶と中皿がほぼ同じ数検出されており、中皿もお茶を飲む時に使用されたのであろうか。大皿も検出されているが、馬ノ目皿や石皿で「□□小屋」などの墨書もみられ詰人空間で使用されていたことがわかる。

この時期になると、いろいろな地方窯が発展して出土陶磁器も多様化してくるが、ここでは、かなりの画一性が感じられるものが多い。この画一性は、江戸藩邸内において、物品が一括に大量購入されることから来るのではないかと考えられる。そして比較的安価で画一性の感じられる内容から、支給品のようなものと推定され、役所などで使用していたものなのではないかと考えられる。北野氏は先の論考の中で工１ SK01出土の漆器について「本漆器資料の性格自体は、日常生活什器の範疇に入るためか江戸市中で賄ったものが主流を占めたであろうことが同時に推察された。」（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）としており、陶磁器の購入にも同様のことが言えよう。つまり、江戸で一括大量購入されたものが役所で使われたり、詰人達に支給された後、廃棄されたものであろう。

今までに器種組成の特徴として、比較的多く検出されてきたものを取り上げたが、非常に少量しか検出されていないものについても取り上げてみたい。東京大学構内の遺跡における他地点の火災後の一括資料でみられる抹茶道具と思われる貿易陶磁や磁器の大皿のような高級品は検出されていない。基本的には火災などの一括廃棄ではない限り、高級陶磁器類が廃棄されることはほとんど無かったと考えている。しかし、日常的な破損はあったと思われるが、それらが見受けられない。つまり、御殿空間からの廃棄はあまり行われていなかったのではないだろうか。

ほとんどが量産品の中で煎茶を嗜んでいたと思われる良好な資料がある。涼炉１個体、京都系の水注１個体、陶器183の急須である。183の内面のみ釉がかけられており、表面は素焼きのままである。底部にはススが付着しており、おそらく、湯罐として使われたのであろう。碗も煎茶で使用されていたのではないかと想定されている、徳化窯の磁器端反碗などが検出されている。煎茶道は文人趣味ともいわれ、多くは下級武士の間で広まったものである。しかし、加賀藩は工１ SK01よりは後の時代になるが嘉永５年頃（1852）には13代斉泰が煎茶室三華亭を建てている。加賀藩は彦根藩など

と共に煎茶席を持っていた数少ない大名家の一つである。この時期に藩邸内でも煎茶を嗜んでいたことを物語るものであり、詰人空間からの廃棄であろう。

やや良質と思われる、胴部最大径12cmほどの小振りの土瓶も出土している。注口の内側の穴部分に茶濾しは付いていない。底部に漆が塗られており、直接火にかけることはしなかったと思われるが、わずかにススが付着しており、おき火の上に置くなどのことはしたのかもしれない（工学部1号館CD-ROM¥遺物¥SK01¥陶器¥FE-0001-TT-参考01 参照）。詳しい使用方法は不明であるが、煮出し茶をこの土瓶の中に入れ、銘々に注ぎ分けるような使い方をされたのではないだろうか。

また、女性が使用する鬢水入れ（TC-25･TD-25）や紅皿（JB-6-e･JB-6-f）、陶磁器以外では簪などもほとんど検出されていない。紅皿が1個体のみである。個人所有の嗜好品は日常的にほとんど廃棄されることはなかったであろうが、同様に嗜好品である煎茶道具と思われるものは検出されており、やはり女性が使用するものの比率はかなり低いようである。

御殿空間からは食物残滓や一部の陶磁器が廃棄されている可能性を考えているが、全体からみると極一部であったと考えている。御殿の南側に近接した地点にある、東京大学本郷構内の遺跡INC（インキュベーション施設）地点（未報告）、工1 SK01は18世紀末～19世紀前半（Ⅷ期）の遺物と共に多量の自然遺物が共伴して出土している。本遺構の遺物の時期とも近く、大型のアワビやサザエが多量に含まれていることから、近接した御殿の食物残滓が廃棄されたものと推定でき、この時期の御殿空間からの主な日常的廃棄の場所となっていた可能性が高いのではないか。

陶磁器の組成を考える場合、江戸市中に流通している陶磁器の器種組成でみた場合と、一遺構での器種組成は様々な要因が加味され個々の場合でかなり異なる。この時期に工1 SK01からは肥前系磁器小丸碗、筒形碗、が多く検出され、給水AJ35-1からは肥前系磁器広東碗が多く検出している。廃棄段階で何らかの要因により、江戸市中に流通している陶磁器の器種組成と異なる廃棄がなされる場合と、陶磁器などの購入段階に何らかの要因が加味された場合などが考えられる。加賀藩上屋敷の動向を考えた場合、いずれの場合もこの時期に納得できるような特別な出来事は、今のところみあたらない。また、被熱を受けていないことなどから、火災などの非日常的廃棄であった可能性は低い。一方で、京都･信楽系陶器小杉碗は購入時期に幅が感じられる。文様に変化が認められ、根の描かれているものから省略されているものまでが検出されている。これらは、大量購入されたと考えるよりも、ある程度購入時期に幅があったと考えられる。

完形で廃棄されているものについてはどうであろうか。数量分析によって、多量に検出されていることが確認されている、量産品の碗や皿の中にも、完形で廃棄されていたのではと思われるものが多く見受けられる。様々な二次的要因での破損も多いと思われ、実際どの程度完形のまま廃棄されていたのかを知ることは難しい。しかし、接合後の完形率は高いと思われ、かなり完形のまま廃棄されているものが含まれているのではないかと想定される。また、二次的要因に強そうな土製品の灯明皿や灯明受け皿は、完形のまま廃棄されているものが多い。役所の備品類や支給品のような量産品が完形のまま、国元に帰るときなどにまとめて廃棄された非日常的な廃棄が考えられる。しかし、このような非日常は、江戸藩邸においては、何度も繰り返される日常でもあるのだろう。

b　墨書からみた様相

陶磁器･土器に書かれた約400点の墨書資料が検出されている。瀬戸･美濃系陶器灰釉徳利を抜くと、約1割の器に墨書が書かれていたことになる。器種ごとにみてゆくと半数以上が碗に書かれたものであり、非常に偏りがみられる。碗は京都･信楽系陶器小杉碗は総数182個体･内墨書94個体、京

都･信楽系陶器端反形で器面に貫入の入る碗は総数62個体･内墨書40個体、瀬戸･美濃系陶器灰釉薄掛け丸碗は総数62個体･内墨書51個体と非常に多く書かれている。

反対に、数量的には非常に数の多い、土製品の灯明皿や火鉢には、個人名の墨書はみられない。同じ火鉢でも瀬戸･美濃系陶器火鉢には個人名と思われる墨書がみられるものが数点検出されている。灯明皿のような灯火具は、個人の所有ではなく一括管理されていたと考えられるが、土製品の火鉢のようなものも個人所有ではなく、部屋ごとに置かれ備品として管理されていたのであろう。

墨書を分類してみると大きく①人名、②年号、③役所名、役職名、④商店名の４種類にわけられる。

①　人　　名

人名と思われる墨書は上記のような小法量の量産品に付けられていることが多い。目印として個人の名前を書いて、それぞれが使用していたことが伺われる。

大鉢に「福［？］」と書かれているものが検出されている。東京大学本郷構内の遺跡　山上会館･御殿下記念館地点49号遺構から出土している練り鉢の底部に「梅御殿/福［印］/御」「梅殿/福印/膳所」の墨書が書かれている（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）。「梅御殿」「梅殿」は享和２年（1802）に12代当主斉広が先々代の夫人寿光院のために造てた梅之御殿のことで、福印はその寿光院のことであろうとしている。この大鉢の「福？」も、この「福」と同様のものである可能性がある。そうだとすれば、寿光院は梅の御殿に移ったすぐ後で亡なっているため、この墨書もこの年に書かれたものになり、御殿空間から出されたゴミである可能性もある。

また、京都･信楽系陶器の小杉碗に「寸崎/七ッ内」と書かれているものが、まとまって検出されている。破損による廃棄以外にセット物をそのまま廃棄した可能性もある。

②　年　　号

墨書の書かれている器種は小振りの器形が多い中で、年号は大皿、こね鉢等大振りの器形に書かれているものも多く、役所の備品として備え付けられているものが多いのではないか。墨書の年号をみるとⅦ期以前に属するものは、馬ノ目皿のような陶器の大皿、大型のこね鉢、柄杓、擂鉢等があり、これらのほとんどが役所の備品として破損しない限り長期間使用され続け、廃棄されることはなかったのであろう。また、Ⅷａ期に属するものには、合子や碗があるが、これらは個人所有の嗜好品や生活用品で日常生活における破損や嗜好の変化による廃棄なのではないだろうか。

安永７年（1778）～文政元年（1818）の年号が確認されている。工１ SK01からはⅦ期･Ⅷａ期の遺物が多く検出されており、この年号の幅とも合致する。

瀬戸･美濃系陶器馬ノ目皿	「安永［五ヵ］/［？］小屋」	（1776）
瀬戸･美濃系陶器こね鉢	「安永七年五月廿三日請取/漆細工所」	（1778）
京都･信楽系陶器柄杓	「栄/天明七年［？］月［？］天［？］」	（1787）
瀬戸･美濃系陶器摺鉢	「（寛政八ヵ）辰正月/山田左門/［？］小［？］」	（1796）
土製品瓦燈　底部	「寛政六年/野村」	（1794）
瀬戸･美濃系陶器馬ノ目皿	「享和二/岡部/小/山田/九月改」	（1802）
瀬戸･美濃系陶器合子	「文化/［？］［？］口/元年」	（1804）
瀬戸･美濃系陶器合子	「文化/子/［？］村田/両国二而［？］」	（1804）
瀬戸･美濃系陶器灰釉鉄釉流し碗	「文化二/［？］」	（1805）
瀬戸･美濃系陶器餌入れ	「文化三/二月/［？］鳥/八之内」	（1806）
瀬戸･美濃系陶器こね鉢	「御近所/文化四年正月/火消」	（1807）
瀬戸･美濃系陶器灰釉丸碗	「文化八年/忠（兵衛ヵ蔵ヵ）/［？･･･］」	（1811）

瀬戸･美濃系陶器刷毛目碗　「文政元/六月廿一日/二［？］印」　（1818）

③　役所名や役職名

●「安永七年五月廿三日請取/漆細工所」(1778) と、書かれているこね鉢には年号と役所名の両方が書かれていた。江戸上屋敷内では「漆細工所」の存在は確認されていないが、『加賀藩御細工所の研究（一)』(金沢美術工芸大学美術工芸研究所 1989) に江戸藩邸内では「御細工所」において様々な細工物が行われていたことが記載されている。しかし、江戸藩邸の絵図に書かれている「御細工所」は規模が小さく、一部屋に描かれている。一方、国元における「御細工所」は規模が大きく、この本中に載せられている宝暦９年 (1759)「金沢城全図」の絵図に描かれている「御細工所」は、一つの独立した建物になっており、その内の部屋の一つに「漆細工所」と記載されている。「漆細工所」のある国元から持ってこられた可能性もあるのではないか。

●「御近所/文化四年正月/火消」(1807)、と書かれている。「御近所火消」とは藩邸の周辺数町四方の一定の範囲の消化を命じられたもので、役名のようなものである。火消し組織については「加賀藩江戸藩邸の火消し組織について」吉田伸之氏の論考に詳しい (吉田 1994)。その中から、いくつかの記述を参考にさせていただく。

年代的には、工１ SK01 の年代よりはかなりさかのぼるが享保４年 (1719) の史料の記載には、藩邸内に南北二カ所の火消し役所があり、近所火消大少将が常駐している。寛政 11 年 (1799) には、寛政の改革の中で、近所火消しの領域外ではあるが湯島聖堂の火災時の消火を命じられ、その後にお抱鳶が倍増している。「19 世紀にいたり、数人の鳶頭 (小頭) と五〇人前後の平鳶によって構成されるに至った加賀藩抱鳶は、…。」とあり、かなりの人数がいたことがわかる。

また、『加越能』の中の「北之方鳶物小屋」という記載により追分口の手前周辺に類似の鳶小屋の存在を推定している。追分口は他の絵図にみられる、北火見の近くである。以前筆者は北の火消しの存在を不明であるとし、「江戸御上屋敷絵図」(1840～45) に「南火消詰所」の記載があるため、加賀藩邸内においては工１ SK01 からは一番離れた南西隅ではあるが、ここからの廃棄ではないかと想定していた (大貫 2003)。しかし、「北之方鳶物小屋」から廃棄されたと想定すると、工１ SK01 からは非常に近い場所になる。

●「御小人/六通/［？］右衛門」御小人の墨書。工１ SK01 の南側の長屋に御小人小屋があり、そこから廃棄された可能性が高い。工１ SK01 からは比較的近い場所である。

●「次」小杉碗３個体が検出されている。女中の呼称の一つである御次の可能性もある。御次とすれば御殿空間からの廃棄の可能性もある。

④　商　店　名

商店名の書かれている陶磁器には墨書以外にも釘書き、朱書きのものがある。工１ SK01 では類似の墨書資料でまとまって検出されているものがある。「のし/ならや/佐助」２点、「奈良屋/佐助」２点、「ならや/佐助」「奈良や/（佐助ヵ)」「のし/な［？］屋/［?］兵衛」「のし/奈ら屋/平三郎」「奈良屋/平三郎」である。いずれも片口の裏に「奈良屋 (ならや)」の文字が見られ、一部には「のし」と書かれている。「のし」と書かれていることから、何らかの祝いごとの折りに配られたものであろうことが推察される。片口に関係がありそうな酒屋や料理屋が配ったものか、または片口を全く使わない商店の粗品として配られたものだろうか。「奈良屋 (ならや)」と書かれている徳利やそれを類推する記号は見受けられない。また、正月に宣伝を兼ね祝儀として配られたものに下の項で取り上げる高崎屋の猪口があるが、年代的にはかなり下る。しかし、人名に何種類かあることや「のし」と書かれていることなど、正月に宣伝を兼ね祝儀として配られた可能性はあるであろう。

他に商店名の入っているものに料理屋の仕出し用に使われたのではないかと考えられる墨書、釘書き、朱書きの皿や瓶類が検出されている。加賀藩上屋敷の他の地域でも、料理屋の仕出し用に使われていたと思われる陶磁器が検出されている。外来SK81からは「俵次」、外来SU11からは「モモセン」等が検出されており、いずれも釘書きである。

「奈良屋（ならや）」と書かれている片口は、料理屋の仕出しとして使用された器とは性格が少し異なるものであろう。

c　徳利からみた様相

判別可能な釘書きを、線刻と点刻に分類してみた。線刻が35個体、釘書きが377個体であった。線刻の種類は17種類、点刻の種類は82種類であった。この中では、同一の酒屋のものも、含まれていると思われる。この内「□」が一番多く58個体、次が「高サキ」56個体、「久〇」53個体、「カメ」28個体であった。

「吉」「万とく」「久上」「カメ」などの釘書きは文京区内の他の遺跡からも検出されており、地域性を感じさせるが、「□」の釘書きは確認することができず、狭い範囲の流通を感じさせる。

徳利の胴部に刻まれているものには後から付けられた釘書きと、釉をかける前に線刻されたものがある。釘書きにも線刻と点刻があり、線刻による釘書きのあと次第にⅦ期以降点刻が主流になる。「□」、「久〇」とも線刻の時期から釘書きの時期まで購入されているが、「高さき」は釘書き線刻の時期にはみられず、釘書き点刻とへら書きで確認されており、やや遅く購入が始まり、後の時期まで購入され続けていたことがわかる。

高崎屋は今も現存している酒屋で、中山道と日光街道御成道の交差点に位置し加賀藩上屋敷の前に位置する。高崎屋については、『江戸の大店高崎屋』（文京ふるさと歴史館 1994）や岩淵令治氏の「江戸住大商人の肖像　場末の仲買高崎屋の成長」（岩淵 1996）に詳しく書かれている。18世紀以降商売を始めた可能性が強い。高崎屋を大きくしたのは三代目（～天保7年〈1836〉）とされ、文化文政期に発展期を迎えた。酒･醤油･酢等を扱っていた。いつ頃から支店を持つようになったかの記載はないが、安政3年（1856）には本店の他に本郷･根津･巣鴨などに支店を持つ大店であった。他店に比べて安く、1升につき下の酒は他店が440文、高崎屋が300文と100文近く低価格であり、繁盛した。販売には店先の小売りや、地域ごとに手代が得意客を受け持ち樽売りが行われていた。本郷店主は加賀邸から奉納金を受け取っていた記録が残っており、出入り関係を結んでいたことがわかる。また、加賀藩邸に出入りをしていて樽売りをしていたであろうことが記載されている。以上、記載の一部をまとめてみた。加賀藩邸に出入りをしていて樽売りをしていたのならば、樽売りや店先の小売り以外にも御用聞き等もなされていたであろう。一般的に藩邸内への出入りは通行証や定札を持つもののみが許され、一般の町人が勝手に商売することはできなかったと思われる。おそらく加賀藩もそうであったであろう。何軒かの酒屋が加賀藩邸の出入り業者になり、高崎屋もその一つであったのであろう。一方、大聖寺藩邸である外来SK81からは「高さき」の釘書きを持つ徳利はほとんど検出されていない。やはり、一定の出入りの業者があったのであろう。高崎屋が繁栄するのはⅧ期以降の文化文政期以降とされているので、釘書き線刻が無く、点刻以降であることに頷ける。また、駒込追分の本店と本郷店の間は1kmほどしか無く、酒屋がかなり密にあったことを裏付けるものであろう。

「久〇」は、ここでは3番目の多さであるが、加賀藩上屋敷全体においては一番多いのではないであろうか。「東京大学構内の遺跡　山上会館龍岡門別館地点」（東京大学埋蔵文化財調査室 2004）SK45からは釘書きで「久〇」と「御そんじ／たまりや」が描かれたものが検出されており、醤油も

扱っていたことがわかる。

次に検出された徳利の容量についてみてみる。二合半が406個体、五合が226個体、一升が413個体である。日持ちのしない当時の酒はほとんど買い置きをしなかったとされており、二合半は個人で呑むのにちょうど良い大きさであったのであろう。一方で五合、1升も大量に検出されている。長谷川孝徳氏は「大江戸単身赴任事情」(長谷川 2000)の中で、藩から「同役は職務に関する相談以外、みだりに集まってはならない」とお触れが出されているが、出土品に徳利が多く検出されていることを指摘している。つまり、御触書が出されるほどみだりに集まっており、五合、一升が大量に検出されていることは、仲間内での酒宴や宴会が頻繁に開かれていたことを裏付けるものであろう。

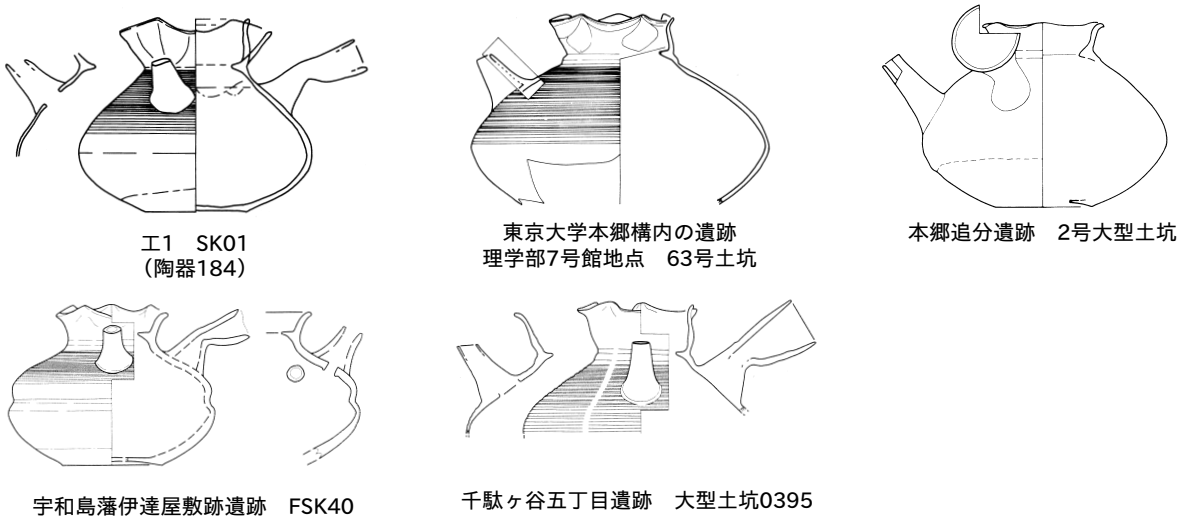
d　急須からみた様相

東大分類においては、急須と土瓶の差異を用途ではなく形態から分類している。急須は横手、後手等の把手の付くものであり、土瓶は上からつり下げる把手を持つものである。そのため、ここでは底部にススが付着しているものも含めて、急須に分類した。

陶器183～185と、これ以外にも5個体の急須が検出されている。いずれも横手の急須である。陶器183は先にも述べたように、ボウフラとして使用されたのではないかと想定している。 陶器185は、底部にススがみられず、茶器として使われたのではないかと思われる急須である。一般に淹茶が飲まれだしたとされる時期よりもやや早い時期であり、今回は急須が検出されていることの呈示のみにとどめておきたい。

次に陶器184である。この項では、陶器184について主に述べていきたい。この急須は、口縁部が五弁花状に開き、頸部が窄まっている。胴部径が大きく、やや扁平な形をしている。外面内面に灰釉が施され、胴部上半には糸目が付けられている。他の遺構から検出された中に胴部上半に糸目が付けられていないものも確認されている。同様の器形の急須を巾着型急須と命名したい。陶器184以外に巾着型急須は3個体検出されている。器形における大小の差異は見受けられ、陶器184よりかなり大型のものもある。陶器184を含めて底部が確認できるものが3個体、いずれもススが付着している。この巾着型急須で茶を煮出して飲んでいたのであろうか。いずれも、注口の内側の穴部分に茶こし状のものは付けられていない。

工1 SK01以外の遺跡でも、巾着型急須が検出されている(5図)。



工1　SK01
(陶器184)

東京大学本郷構内の遺跡
理学部7号館地点　63号土坑

本郷追分遺跡　2号大型土坑

宇和島藩伊達屋敷跡遺跡　FSK40

千駄ヶ谷五丁目遺跡　大型土坑0395

5図　江戸遺跡出土の巾着型急須

東京大学構内の遺跡理学部７号館地点63号土坑。加賀藩上屋敷内の八筋長屋と呼ばれている詰人空間の一角。藩主に謁見できる平士以上の藩士が利用していた。廃棄年代は幕末で19世紀代の遺物が廃棄されていた。磁器端反碗、瀬戸･美濃系灰釉徳利、燗徳利などと共伴。

本郷追分遺跡（東京大学構内雨水調整池遺跡調査会 1994）２号大型土坑。町人地。19世紀中葉の大型廃棄土坑。非常に大型で多種多様の遺物を含む。酒に関するものとしては、瀬戸･美濃系灰釉徳利、燗徳利、銚子などと共伴。巾着型急須の胴部上半には糸目が付けられていない。鉄釉。

宇和島藩伊達屋敷跡遺跡（東京都埋蔵文化財センター 2003）FSK40。15m×5m以上の大型土坑。廃絶年代19世紀中頃。巾着型急須の胴部には段が付されている。灰釉。

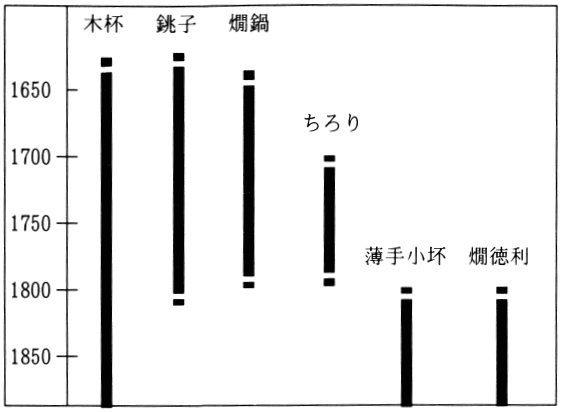
千駄ヶ谷五丁目遺跡（千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997）大型土坑0395。上野小幡藩松平家下屋敷。屋敷引き上げのための大量廃棄と思われる。1850～60年代に比定。瀬戸･美濃系灰釉徳利、燗徳利などと共伴。巾着型急須は、底部欠損。

滑稽本の挿絵の中に、この巾着型急須が描かれているものが幾つかあった（6図）。

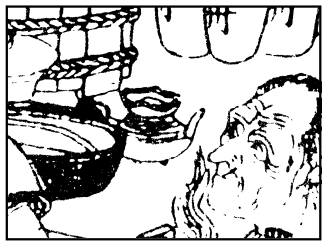
1.『四八癖』三編　文化14年（1817）に描かれている（新潮社 1982）。長屋の女房の話で棟割りの裏長屋が題材になっている。徳利の近くに描かれてはいるが、この絵では使用方法は不明であるが、鍋の横に無造作に置かれ、長屋で町人に使われていたことがわかる。
2.『酩酊気質（なまゑひかたぎ）』文化３年（1806）の中の「くどい上戸」では、酔うに従って同じことを繰り返して言う男が描かれており、膳の上には巾着型急須が描かれている（小学館 1973）。他に酒器らしきものは描かれておらず、この急須が酒の入れ物として使われていたのであろう。
3.『七くせ上戸』文化７年（1810）の中の「きたない宴（さかもり）」の中にも、巾着型急須が描かれている（国書刊行会 1992）。けちけち上戸が酒を飲んでいる図で、他に酒器らしきものは描かれておらず、やはり、酒の入れ物として使われていたのであろう。
4.『七くせ上戸』文化７年（1810）の「百飲図（ひゃくいんのず）」の中に、「寂莫迎酒（さびしいむかえざけ）」と書かれ、巾着型急須で酒を直接火にかけて燗をし、迎え酒をしていると思われるものがある。工１ SK01出土の巾着型急須はいずれも底部にススが付着しており、このように火に直接かけて燗をしていたことを想定させる。

長屋暮らしの人々などが酒器として使っていた様子がうかがえる。これらの年代をみてみると文化３年（1806）～文化14年（1817）で、遺構の推定年代に近い。

工１SK01からは、酒器と思われるものは、ちろりが１個体、燗鍋が１個体、銚子が１個体である。成瀬晃司は、「江戸遺跡における酒器の出土状況」（7図）をまとめているが、銚子、燗鍋、ちろりは18世紀代まで検出され、その後燗徳利が19世紀第２四半期より増加傾向が認められる（成瀬2000）。工１ SK01は銚子、燗鍋、ちろりと共伴し、その他の遺構は燗徳利と共伴している。今のところ確認されている巾着型急須の出土時期は19世紀前葉から19世紀中葉に集中している。また、滑稽本でも19世紀前葉に集中している。焼酎を直接火にかけて燗をする時に使われる扁平な土瓶（チョカ）と同様に、この巾着型急須も直接火にかけて燗をする酒器として銚子、燗鍋、ちろりから燗徳利に移行する過渡期に一時的に



7図　江戸遺跡における酒器の出土状況（成瀬 2000）



1　『四八癖』三編　文化14年（1817）

2　『酩酊（なまゑひかたぎ）』文化3年（1806）

3　『七くせ上戸』文化7年（1810）

4　『七くせ上戸』文化7年（1810）

6図　滑稽本に描かれた巾着型急須

流行した器種なのではないだろうか。

ま と め

廃棄土坑からの出土遺物は購入時と、廃棄時の様々な要因によって変化する。工1 SK01からはⅦ期、Ⅷａ期の遺物が多く検出されている。これまでにⅧａ期が中心の遺構であることは検証してきたが、実年代を当てはめると文政元年（1818）の紀年銘の碗が検出されており、これ以降に廃絶されたことがわかる。他の遺構などと比べ磁器碗の中の瀬戸･美濃系磁器端反碗の比率があまり高くなく、Ⅶ期の遺物も多く含まれることなどから、瀬戸･美濃系磁器端反碗の出現期に近いのではないかと考えた。しかし、Ⅷｂ期の様相と思われる瀬戸･美濃系磁器端反碗の中に小振りで、やや厚い器形のものが含まれ、また肥前系磁器蛇ノ目凹型高台で高台が高い皿、瀬戸･美濃系磁器湯呑碗も確認されており、遺構の廃絶期は、Ⅷａ期末からわずかにⅧｂ期にかかる頃であろう。碗、土瓶等の飲茶に関する器種が多く、陶器の比率が高い。また、磁器碗では端反碗以外の肥前系磁器小丸碗、筒形碗、瀬戸･美濃系陶器灰釉丸碗が大量に検出されているのが本遺構の特徴である。このような特徴から、開口期間は比較的長く、Ⅷａ期も今まで想定されている期間よりもやや短いかもしれない。そして、工1 SK01、給水AJ35-1、尾張藩上屋敷跡のように18世紀代の陶磁器の様相を強く残しているのが、19世紀前葉の江戸藩邸における、大型廃棄土坑の特性なのかもしれない。

本稿を草するに当たり、宮崎勝美氏はじめ多くの方にご教示いただきました。ここに感謝申し上げます。

参考･引用文献

岩淵　令治　1996「江戸住大商人の肖像　場末の仲買高崎屋の成長」『新しい近世史』
内野　正　2004「大名屋敷における廃棄遺構の検討」『江戸遺跡研究会第16回大会発表要旨 続･遺跡からみた江戸のゴミ』江戸遺跡研究会
大貫　浩子　2000「東大構内遺跡出土の貿易陶磁について」『加賀殿再訪』東京大学総合研究博物館
大貫　浩子　2003「東京大学本郷構内における19世紀前葉の廃棄土坑」『江戸遺跡研究会第16回大会発表要旨 遺跡からみた江戸のゴミ』江戸遺跡研究会
小川　望　1991「ロクロ成形の焼き塩壺に関する一考察」『江戸在地系土器の研究Ⅰ』江戸在地系土器研究会
小林・両角　1992「江戸における近世土師質塩壺類の研究」『東京考古10』
払方町遺跡調査団　1999『東京都新宿区 払方町遺跡』
瀬戸市教育委員会･瀬戸市埋蔵文化財センター　1993『経塚山西窯跡』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第5集
瀬戸市史編纂委員会　1998『瀬戸市史 陶磁史篇 六』
金沢美術工芸大学美術工芸研究所　1989『加賀藩御細工所の研究（一）』
国書刊行会　1992「七癖上戸」『式亭三馬集』叢書江戸文庫20
小 学 館　1973「酩酊気質」『洒落本 滑稽本 人情本』日本古典文学全集
新 潮 社　1982「四十八癖　三編」『浮世床 四十八癖』新潮日本古典集成
千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会　1997『千駄ヶ谷五丁目遺跡』
東京大学遺跡調査室　1989『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』
東京大学遺跡調査室　1990a『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館･文学部3号館建設地遺跡』
東京大学遺跡調査室　1990b『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　1990『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館･御殿下記念館地点』
東京大学埋蔵文化財調査室　1997『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
東京大学埋蔵文化財調査室　1999『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
東京大学埋蔵文化財調査室　2002『東京大学構内遺跡調査研究年報』3
東京大学埋蔵文化財調査室　2004『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
東京大学埋蔵文化財調査室　2005『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』(印刷中)
東京大学構内雨水調整池遺跡調査会　1994『本郷追分遺跡』
東京都埋蔵文化財センター　2003『宇和島藩伊達屋敷跡遺跡』
長佐古真也　1994a「8号遺構出土一括資料からみる19世紀初めの陶磁器の様相」『和田倉遺跡』千代田区教育委員会
長佐古真也　1994b「和泉伯太藩上屋敷跡出土の陶磁器の様相」『和泉伯太藩上屋敷跡』地下鉄7号線溜池･駒込間遺跡調査会
長佐古真也　1995「江戸遺跡における18世紀後半の陶磁器組成」『東京都千代田区尾張藩麹町邸跡』紀尾井町6-18遺跡調査会
成瀬　晃司　2000a「考古学からみた加賀藩本郷邸「詰人空間」」『加賀殿再訪』東京大学総合研究博物館
成瀬　晃司　2000b「江戸における日本酒流通と飲酒習慣の変遷」『江戸文化の考古学』江戸遺跡研究会編 吉川弘文館
長谷川孝徳　2000「大江戸単身赴任事情」『加賀殿再訪』東京大学総合研究博物館
堀内　秀樹　2004「廃棄する意識」『江戸遺跡研究会第17回大会発表要旨 続 遺跡からみた江戸のゴミ』江戸遺跡研究会
文京ふるさと歴史館　1994『江戸の大店高崎屋』
松崎亜砂子　2001「絵画資料にみる江戸の食事と茶」『江戸遺跡研究会第14回大会発表要旨 食器にみる江戸の食生活』江戸遺跡研究会
港区麻布台一丁目遺跡調査会　1986『郵政省飯倉分館構内遺跡』
吉田　伸之　1994「加賀藩江戸藩邸の火消し組織について」『武家屋敷』

工学部１号館地点出土の動物遺体

名古屋大学博物館　新美　倫子

工学部１号館地点では大型の土坑SK01からコンテナ（35cm×55cm×15cm）10箱分の動物遺体が出土した。この土坑には加賀藩邸内のあちこちからゴミが集められて捨てられていたと考えられ、動物遺体はいずれも19世紀前葉のものと思われる。資料はすべて発掘時に採集されたもので、その大部分は貝類とイヌであり、それ以外のものは少なかった。１表に出土した動物種名を示し、２～10表に出土内容を示した。

なお、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生には種同定に関して御教示をいただき、また東京大学埋蔵文化財調査室の堀内秀樹氏にはこの資料を分類する機会を与えていただいた。港区立港郷土資料館の山根洋子氏と東京大学埋蔵文化財調査室の大貫浩子氏には文献でお世話になった。ここに感謝いたします。

（1）　貝　　類（2表）

貝類は391点が出土した。最小個体数ではアワビ類が計87個体と多く見られた。その内訳はクロアワビ34個体、メガイアワビ30個体、マダカアワビ12個体、種不明アワビ類11個体で、種不明アワビ類としたものは破損のために種を確定できなかった資料である。他にはハマグリが82個体、アカガイ40個体、バイ22個体、サザエ21個体、アカニシ13個体、ヤマトシジミ12個体、ボウシュウボラ２個体、イガイ類１個体が出土している。

クロアワビは殻長12～16cmの個体が多く、メガイアワビは殻長15～18cmの個体が多い。マダカアワビは殻長15～20cmの個体がほとんどであった。ハマグリは殻長3cm程度の小さなものから8cm程度の大きなものまで、いろいろな大きさの個体が含まれており、左殻１点には内面にウルシが付着していた。アカガイは殻長10cm前後の個体がほとんどである。バイは殻高6cm程度の個体が多く、サザエは殻高10cm前後の資料が多かった。アカニシはほとんどの個体が殻高10～15cmであったが、19cmの巨大な個体も１点見られた。ヤマトシジミは大部分の資料が殻長２～3cmと小さい。ボウシュウボラは殻高12.6cmと15cm程度の個体であった。

アワビ類やアカガイ･サザエ･アカニシなどは大型の個体が多い。このような資料は他の江戸時代の武家屋敷でも出土例が知られており、主に儀礼的な用途に用いられたと考えられている。その一方で、小さなハマグリやヤマトシジミなど日常生活の食料と思われる資料も含まれており、当遺跡の資料には様々な活動の結果のゴミが混在していることをうかがわせる。

（2）　魚類･両生類

魚類はブリの左鰓蓋骨１点、クロダイの左上顎骨１点、マダラの右前上顎骨１点の３点のみが見られた。いずれの資料も大きな個体のものであるが、おそらく土坑SK01には本来はさらに多くの魚骨が捨てられていたと思われる。

両生類ではカエル類の脛腓骨１点が見られた。この資料は現生ウシガエルの半分程度の長さであった。

（3） 鳥　　類（3表）

カモ類９点とガン類４点、種不明６点の計19点が出土した。カモ類は頭蓋骨･下嘴･上腕骨･橈骨･尺骨･中手骨･烏口骨が見られ、すべてカルガモ程度の中型種のものであった。上腕骨は遠位端を切り落とされていた。ガン類は上腕骨･中手骨の２点がヒシクイより少し小さな中型種の資料であり、尺骨･中手骨の２点がヒシクイ？と思われる大型種のものであった。

（4） 哺　乳　類（4～10表）

1935点の資料が出土したが、このうち種を同定できた資料は1463点である。その大部分はイヌで1449点が見られた。イヌについては４表に骨体の計測可能な成獣の頭蓋骨について、５表には４表で示した資料以外の上顎骨について、６表には上顎骨のない頭蓋骨で破損のために計測できない成獣資料や幼獣･若獣資料の出土内容を示した。また、７表には骨体の計測可能な成獣の下顎骨、８表には７表で示した資料以外の下顎骨、９表に頭蓋骨･下顎骨以外の部位の出土内容を示した。4･7表には頭蓋骨･下顎骨の計測値と最大頭蓋長･下顎骨全長から推定した体高も示した。

これらの資料には埋葬された状態で検出されたものはなく、全て散乱状態で出土したとのことであるが、同一個体と思われるいくつかの部位がある程度まとまって出土したケースもあった。ここでは頭蓋骨･下顎骨については年齢や形質などによって個体識別を行い、同一個体に属すると考えられる資料は表中で同一の資料No.で示した。出土最小個体数は下顎骨で算出すると最も多くなり、幼獣４個体、若獣１個体、成獣31個体の計36個体となった。また、四肢骨で算出した場合には幼獣４個体、若獣８個体、成獣21個体の計33個体となった。当地点では成獣の出土量が多いものの、若獣や幼獣もかなり出土している。成獣には歯がかなり摩滅した老獣も含まれていた。

復元できたイヌの推定体高はすべて40cm台であり、45cm以上の個体が多い。最小の個体では42.7cmであり、50cmをこえるものはなかった。形質については、成獣で頭蓋骨全体の形がある程度わかるNo.1～8を見ると（4表）、No.4･8はやや小型であるが、No.1～3･5～7はよく似たタイプであり、いずれも吻部の幅がやや広く、頬骨弓がやや張り出し、ストップははっきりしており、全体形は中型犬の大きさである。また、歯は現生柴犬程度の大きさである。No.9やNo.10も後頭部は残っていないが、No.1～3･5～7と同様のタイプであると思われる。下顎骨を見ると、下顎底はやや丸い資料が多いが平らなものもあり、骨体の高さは平行に近い資料が多い。歯列の湾曲はいずれも少ない。その他の部位では上腕骨･橈骨･寛骨･大腿骨･脛骨に解体痕の残る資料が見られ、食用になった個体が含まれていると思われる。

イヌ以外で種を同定できたのはネコ12点、イノシシ類１点とウシまたはウマ１点である。ネコは12点とも筆者所蔵の現生標本と比べるとやや小さい資料であった。イノシシ類は大きな左寛骨であり、ウシまたはウマは切断された肋骨片である。種不明とした角芯＋頭蓋骨破片は、形態はウシに近い資料であるが左右不明である。他に種不明陸獣破片が464点見られたが、その多くはイヌであろう。

（5） 骨角貝製品と原材

骨角製品としては、陸獣の四肢骨の中間部分を長さ2.2cmほどの輪切りにしたもの１点と、シカの落角の角座部分を輪切りにして厚さ1cm程度の円盤状に加工したもの１点が出土している。鹿角の円盤状製品は断面形がレンズ状で、１カ所穿孔が見られる。角座骨側の面はほとんど未加工であるが、もう一方の面は表面がなめらかである。

貝製品は孔をあけたイタヤガイの右殻が３点出土しており、貝柄杓として利用されたと思われる。原材としては切断された鹿角片が７点出ており、そのうち１点は角座部分であった。

引用文献

斎藤　弘吉　　1963『犬科動物骨格計測法』
山内　忠平　　1958「犬における骨長より体高の推定法」鹿児島大学農学部学術報告７、125-131頁

Ⅰ.貝類
1　クロアワビ
2　マダカアワビ
3　メガイアワビ
4　サザエ
5　ボウシュウボラ
6　アカニシ
7　バイ
8　アカガイ
9　イガイ類
10　イタヤガイ
11　ヤマトシジミ
12　ハマグリ

Ⅱ.魚類
1　マダラ
2　ブリ
3　クロダイ

Ⅲ.両生類
1　カエル類

Ⅳ.鳥類
1　カモ類
2　ガン類

Ⅳ.哺乳類
1　イノシシ類
2　シカ
3　イヌ
4　ネコ
5　ウシまたはウマ

１表　出土動物種名

種	出土内容
カモ類（中型）	頭蓋骨１（上嘴なし）、下嘴右破片１、上腕骨右中間１、橈骨左１、尺骨左２、上１、中手骨左１、鳥口骨左下１
ガン類（中型）	上腕骨右中間１、中手骨左中間１
ガン類（大型）	尺骨左１、中手骨左１
種不明	上腕骨右中間１、四肢骨中間破片５
計	19

註　上：近位部、中間：中間部、下：遠位部、上･中間･下のないものは完存。

３表　鳥類出土内容

種		出土量
クロアワビ		34
メガイアワビ		30
マダカアワビ		12
種不明アワビ類		11
ハマグリ	左殻	69
	右殻	82
アカガイ	左殻	40
	右殻	28
バイ		22
サザエ		21
サザエのフタ		6
アカニシ		13
ヤマトシジミ	左殻	12
	右殻	6
	左右不明	1
ボウシュウボラ		2
イガイ類	左殻	1
	右殻	1
計		391

註　二枚貝は殻頂部の数を、巻貝は芯の数を数えた。

２表　貝類出土内容

	最大頭蓋長 I～P	基底頭蓋長 B～P	顔長 P～N	吻幅 7～7	前頭幅 Ect～Ect	最小眼窩幅 Ent～Ent	最小前頭幅 fs～fs	頬骨弓幅 Zy～Zy	頭蓋幅 au～au	頭蓋幅 eu～eu	後頭部長 I～Br	後頭部高 B～Br	脳頭蓋長 I～N	前頭部長 Br～P	P4長さ	資料の残存状況 上顎骨歯式、推定体高（cm）
1	189.6	165.0	91.2	37.3±	51.6	34.4	35.8	105.7±	66.8	63.9	56.8	64.4	104.6	148.6	17.1	ほぼ完存 L（×××××P234M12） R（I123CP1234M12）　49.8
2	182.3	157.5	88.6	35.3±	47.1	33.6	28.6	102.6±	63.0	59.6	59.1	71.8	100.9	137.4	16.7	左頬骨欠以外ほぼ完存、歯周病あり L（××××P1234M1×） R（××××××××P4M12）　48.3
3	182.7	160.2	82.9	37.8±	53.1	34.7	35.3	106.8	65.0	63.2	57.7	71.6	106.6	136.4	18.2	ほぼ完存だがゆがみあり、骨体に病変 L（×××C欠P234M12） R（××I3×P1234M12）　48.4
4	161.0	144.0	78.2	34.8	42.4	29.6	34.9	88.3	60.0	59.4	45.4	60.1	87.3	124.2	18.1	ほぼ完存 L（×××××P2欠P4×M2） R（×××C××P34M12）　43.3
5	181.0	161.3	87.3	35.5	52.1	33.4	36.8	－	63.5	63.1	59.3	72.9	100.7	134.7	17.5	右頬骨部分以外ほぼ完存 L（××××P1×P34M12） R（××P12×P4M12）　48.0
6	188.2	－	94.7	37.8±	49.2	34.8	34.1	103.0±	－	65.5±	52.6	－	100.1	146.3	17.5	後頭部下半分以外ほぼ完存、割れてゆがむ L（×××××P234M12）歯周病あり R（×××××P234M12）　49.5
7	175.0	154.1	81.5	36.8	51.7	35.6	36.1	－	64.8	63.0	56.8	73.0	99.7	132.3	17.3	左頬骨突起と左前頭骨の一部欠、他ほぼ完存 L（×××CP1234M12） R（I123CP1234M12）　46.7
8	165.0±	143.0±	74.9±	36.1	46.7	31.8	37.2	－	62.7	62.6±	51.8	68.8	96.5	128.5±	16.9	右頬骨・頬骨突起と切歯部分欠、他ほぼ完存 L（CP1234M1×）老、歯周病あり R（×CP1×P34×）　44.3
9	－	－	88.1	37.6	－	33.6±	－	－	－	－	－	－	－	－	17.3	前頭骨前半分より前のみ残存、右頬骨あり L（××I3×P1234M1×）老 R（×××××P234M1×）歯周病あり
10	－	－	84.6	38.0	－	31.5	－	102.9	－	－	－	－	－	－	17.3	後頭部なし、歯周病あり L（×××××P234M1×） R（×××CP1234M1×）
11	－	－	－	－	57.7	37.8±	44.6	－	72.0	63.4	65.5	81.3	108.9	－	－	右上顎骨～眼窩部分～後頭部残存 R（××I3×P1×××M12）骨体に病変
12	－	－	－	－	40.2±	29.1	33.4	－	65.4	61.2	50.1	68.5	98.8	－	18.3	右上顎骨～眼窩部分～後頭部残存 R（××××××××P4）
13	－	－	－	－	46.1	30.4	35.6	－	58.0	55.6	42.1	58.5	85.2	－	16.9	右上顎骨～眼窩部分～後頭部残存 R（×P4）

註　計測点は斎藤弘吉（1963）に従った。計測値の単位はmmで、体高の単位はcmである。±付きの数値は近似値を示す。
推定体高は山内の算出方法に従い（山内忠平1958）、最大頭蓋長の計測値から算出した。L：左側、R：右側、I：切歯、C：犬歯、
P：前臼歯、M：後臼歯、I·P·Mに伴う数字は歯の順番を示す。欠：欠歯。（　）は顎骨があることを示し、×は歯が脱落していることを示す。
幼：幼獣、若：若獣、幼·若のないものは成獣。老：老獣。

4表　イヌ頭蓋骨計測値

No.	歯式	P4長さ	備考
14	L（P4M12） R（×P4M12）	17.3	下顎骨14と同一
15	R（P34M12）	16.9	下顎骨15と同一
16	L（P4M1×） R（P34M1）	18.7	下顎骨16と同一
17	L（P34M12） R（×P4M12）	19.3	下顎骨17と同一
18	L（P3×M12） R（×P4M1×）	18.2	
19	L（m3×M1）M1未出、幼 R（m34M1）		
40	L（×I23×××m4M1）I23未出、M1萌出途中。未出C･P4あり、幼		下顎骨40と同一
41	L（××I3）		
42	L（××I3）		
43	L（I3）		
44	L（×）I3部分		
45	L（C××）Cは歯根のみ		
46	L（P12）		
47	L（××）P12部分		
48	L（×P2）		
49	L（××P3）		
50	L（×P4M1×）	18.3	
51	L（P4M12）	16.8	
52	R（××I3）		
53	R（×××）I1～3部分		
54	R（×××）I1～3部分		
55	R（×××）I1～3部分		
56	R（××）I23部分		
57	R（P1）		
58	R（×P2）		
59	R（××）P12部分		
60	R（P234M1×）	16.7	
61	R（×P4M12）	15.7±	
62	R（×P4M12）	17.4	
63	R（×P4M1×）	17.6	
64	R（×）P4部分		
65	R（m34）幼		

註　表4参照。m：乳臼歯。P4長さの単位はmm。

5表　イヌ上顎骨（表4以外）出土内容

	出土内容	点数
幼獣	前頭骨左＋頭頂骨左1、前頭骨左1、側頭骨頬骨突起左1 後頭顆左1、頭蓋骨破片5	9
若獣	前頭骨左右＋頭頂骨左右＋側頭骨左右＋後頭骨1 前頭骨左右＋頭頂骨左右＋後頭骨一部1 前頭骨左右1、前頭骨左右一部1 頭頂骨左右一部＋後頭骨一部1 頭頂骨左一部＋後頭骨一部1 頭頂骨左＋頭頂骨右一部＋後頭骨一部1 後頭顆左1、後頭骨左一部＋鼓骨左1 後頭骨右一部＋鼓骨右1	10
成獣	前頭骨左右一部＋頭頂骨左＋頭頂骨右一部1、前頭骨右2 頭頂骨左右＋側頭骨左一部＋後頭骨一部＋鼓骨左1 頭頂骨左＋頭頂骨右一部＋側頭骨左＋後頭骨一部＋鼓骨左1 頭頂骨左＋頭頂骨右一部＋後頭骨一部1 側頭骨右＋後頭顆右＋鼓骨右1 側頭骨頬骨突起左＋後頭骨左一部＋鼓骨左1 側頭骨頬骨突起右＋後頭顆左右1 側頭骨頬骨突起右＋後頭骨右一部＋鼓骨右1 側頭骨頬骨突起右＋鼓骨右1、側頭骨頬骨突起左2、右2 頬骨左3、破片1、右破片1、後頭顆左右＋脳下底部分4 後頭顆左2、右3、後頭骨左一部＋鼓骨左1 後頭骨右一部＋鼓骨右4、鼓骨左4、右1 頭蓋骨破片76、上顎骨破片7	122
計		141

6表　イヌ頭蓋骨（4･5表以外）出土量

	歯式	P2P3間の高さ	P3中央部での高さ	M1中央部での高さ	M1M2間での高さ	P3中央部での厚さ	M1中央部での厚さ	M2中央部での厚さ	M1長さ	下顎骨全長1	下顎骨全長2	備考 推定体高（cm）
1	L（I123CP1234M12×） R（I1×I3CP1234M123）	18.3	20.3	24.8	25.0	10.1	11.9	11.3	19.3	137.2	136.0	頭蓋骨1と同一 47.8
2	L（×××CP1234M12×） R（×××CP1234M12×）	19.2	21.2	25.6	25.6	10.7	10.8	9.8	18.8	130.9	130.7	頭蓋骨2と同一 歯周病あり、46.4
3	L（×××C×P234M12×） R（×××C×P234M12×）	21.8	22.8	25.7	24.8	10.0	11.4	10.8	20.3	136.2	138.8	頭蓋骨3と同一、遺体に病変あり 48.5
5	L（×××C×欠P34M123） R（×××C×欠P34M12×）	17.7	20.2	24.2	23.7	9.4	11.2	10.6	19.3	134.0	133.2	頭蓋骨5と同一 47.1
6	L（×××CP1234M12×） R（×××CP1234M123）	22.4	24.0	26.4	25.5	10.4	11.8	10.0	20.9	−	138.0±	頭蓋骨6と同一 48.3
8	L（×××C×P2×P4M12×）	−	−	25.9	24.1	11.3	13.4	11.3	18.3	122.7±	125.5	頭蓋骨8と同一、歯周病あり 骨体病変で変形、老、44.9
9	L（CP1234M12×） R（I3CP1234M123）	21.6	23.8	26.8	25.7	11.3	13.2	12.0	20.5	−	−	頭蓋骨9と同一 歯周病あり、老
13	L（×××C×P2××M1××） R（C×P234M1×3）	17.3	−	−	−	9.6	−	−	19.5	117.0±	118.6±	頭蓋骨13と同一、歯周病あり 骨体病変で変形、42.7
14	L（×××P34M123） R（×××CP1234M123）	19.2	20.3	24.0	22.8	10.3	11.2	10.4	20.0	−	126.7±	上顎骨14と同一 45.3
15	L（××I3C×P23×M12×） R（×××C×m2P34M12×）	18.4	20.6	23.1	22.9	9.6	11.6	10.8	20.7	−	131.5±	上顎骨15と同一 46.6
16	L（P1234M123）	22.4	22.7	23.8	23.1	10.6	12.0	11.5	19.3	−	−	上顎骨16と同一 歯周病あり
17	L（×P234M123） R（×P234M12×）	−	23.9	28.1	28.6	12.6	15.2	14.5	22.5	−	−	上顎骨17と同一
20	L（×I23CP1234M123） R（×I23CP1234M12×）	21.1	22.7	27.4	25.4	11.1	13.4	12.0	20.7	−	−	歯周病あり
21	L（×××××欠P34M123） R（××××P1234M123）	16.9	18.6	22.0	20.6	9.2	10.0	8.5	19.1+	−	−	歯周病あり
22	L（×××C×××P4×M2×） R（C×P234M12×）	17.6	19.0	21.7	20.9	8.4	10.3	9.4	18.0±	−	−	右骨体に病変あり
23	L（C×××P4M12×） R（×××C××P34M12×）	18.5	19.3	22.4	23.4	9.0	11.0	10.5	20.6	120.0±	121.0±	右骨体に病変あり 43.5
24	L（××I3CP1欠P34M12×） R（×I23CP1欠P34×M2×）	22.5	24.1	26.3	24.5	11.1	12.6	12.1	22.0	143.0±	145.0±	49.8
25	L（×I2×CP1234M12×） R（×I23CP1×P34M123）	20.7	23.3	27.2	25.6	12.8	14.2	12.7	20.2	138.0±	138.0±	48.3
26	L（×××C×××P4M12×） R（I3C×××××××）	16.7	19.0	22.0	23.2	8.7	10.5	9.8	20.0	122.7	122.8	44.1
29	L（×××C×P23×M123）	20.3	21.4	24.2	24.6	11.5	12.8	11.3	21.3	−	132.0±	46.8、歯周病あり
30	L（××××××P34M12×）	20.1	22.2	24.9	25.3	10.3	12.5	11.1	−	140.0±	140.5	48.8
31	L（×××××P2×P4M12×）	17.1	18.3	20.3	19.2	9.4	11.3	9.6	18.6	125.9	125.6	45.0
32	L（××P34M1××）	19.9	21.8	25.5	25.6±	11.1	12.6	11.1	19.4	−	−	
33	L（×C×××P4×M2×）	17.8	19.1	19.7	19.3	8.0	9.6	9.1	−	−	115.0±	骨体に病変あり、41.5
34	L（×C××P34×M2×）	20.9	22.6	−	−	10.0	−	−	−	138.0±	138.0±	48.3
35	L（××P3××××）	16.3	17.9	22.3	20.2	10.0	10.9	10.4	−	−	−	歯周病あり
36	R（××C×P234M12×）	18.9	21.4	24.4	24.1	9.8	11.7	10.3	19.4	131.0±	134.0±	47.3
37	R（C×P234M12×）	18.1	19.6	23.6	22.4	10.2	11.8	9.6	20.4	−	−	
38	R（×P1234M12×）	20.2	21.3	23.1	24.1	11.1	12.1	11.5	21.1	−	−	
39	R（×P2××M12×）	19.0	18.7	21.5	21.1	9.4	11.1	10.0	20.7	−	−	

註　表4参照。推定体高は下顎骨全長2の計測値から算出した。

7表　イヌ下顎骨計測値

		成獣	若獣	幼獣
環椎		10	3	
軸椎		7	1	
肩甲骨	左	9	2	
	右	7	1	1
上腕骨	左	11、上4、下6、中間4	3（上下なし）、上3（上なし） 下2（下なし）、下骨端のみ1 中間1	1（上下なし）
	右	10、上3、下2、中間5	2（上下なし）、1（上なし下つく） 上2（上なし）、中間1	2（上下なし）
橈骨	左	13、上4、下1、中間2		1（上下なし）、上1（上なし）
	右	8、上2、下1、中間3	2（上下なし）、1（上なし下あり） 下骨端のみ1	
尺骨	左	11、下1	2	
	右	20	3	
寛骨	左	8、腸＋坐1、腸＋恥1 腸2、坐1、恥1 腸破片1、坐破片2	腸1	腸1
	右	4、腸5、坐5 腸破片1、坐破片1	腸1、坐1	
大腿骨	左	12、上3、下3、中間2	1（上なし下つく）、上2（上なし）	3（上下なし）、下1（下なし）
	右	13、上4、下7	上1（上なし）、骨頭のみ1 下1（下あり）、下2（下なし）	上2（上なし）
	左右不明中間破片4			
脛骨	左	12、上3、下8、中間5	4（上下なし）、1（上なし下つく） 上1（上なし）	
	右	16、上5、下2、中間3	3（上下なし）、1（上なし下つく） 上4（上なし）、上骨端のみ1 下2（下なし）	上1（上なし）
距骨		左1、右1		
踵骨		左4、右7		
主要部位計		292	60	14
その他		腓骨5、上2、中手･中足骨63、12若、上8、上1若、基節骨10、中節骨4、末節骨4 ペニスボーン1、仙椎4、仙椎破片1、椎骨151、23若、椎骨破片28 肋骨破片336、胸骨5、四肢骨破片32、1幼		
総計		1057		

註　表3･4参照。腸：腸骨部分、坐：坐骨部分、恥：恥骨部分。（　）内の「あり」は骨端部がはずれてかつある場合、「なし」は骨端部がはずれてかつない場合、「つく」は骨端部が癒着している場合。

9表　イヌ出土量（頭蓋骨･下顎骨以外）

	No.	歯式･備考	M1長さ	点数
下顎骨	27	L（M1××）ad直後 R（×M1××）	20.2	16
	28	L（××××M1××）P34萌出途中、 R（××P34M1××）M1萌出完了直後、若	20.4	
	40	L（×××c×m234M1×）M1萌出はじめ、M2未出、幼 R（×m23×M12）未出左Cあり、上顎骨40と同一個体		
	41	L（M1）M1未出。幼		
	42	L（M12）M1萌出はじめ、M2未出で歯槽開く。幼		
	43	L（××××）C～P3部分		
	44	L（×P3）		
	45	L（××）P34部分		
	46	L（M2×）		
	47	L（××××m23×）幼		
	48	R（m234）M1萌出はじめ。幼		
	49	R（×欠欠P4M1××）	18.9±	
	50	R（P4M1）	20.6	
遊離歯 顎骨 破片		上第3切歯左6、右6、上犬歯左10、右9、上第4前臼歯左4 下第3切歯左1、右2、下犬歯左6、右10、下第1後臼歯左5、右2 下第2後臼歯左2、右1、下第3後臼歯1、第1･2切歯13 第1前臼歯7、第2･3･4前臼歯（下）18、乳犬歯3、乳臼歯4 歯破片15、下顎骨破片12、1幼		138

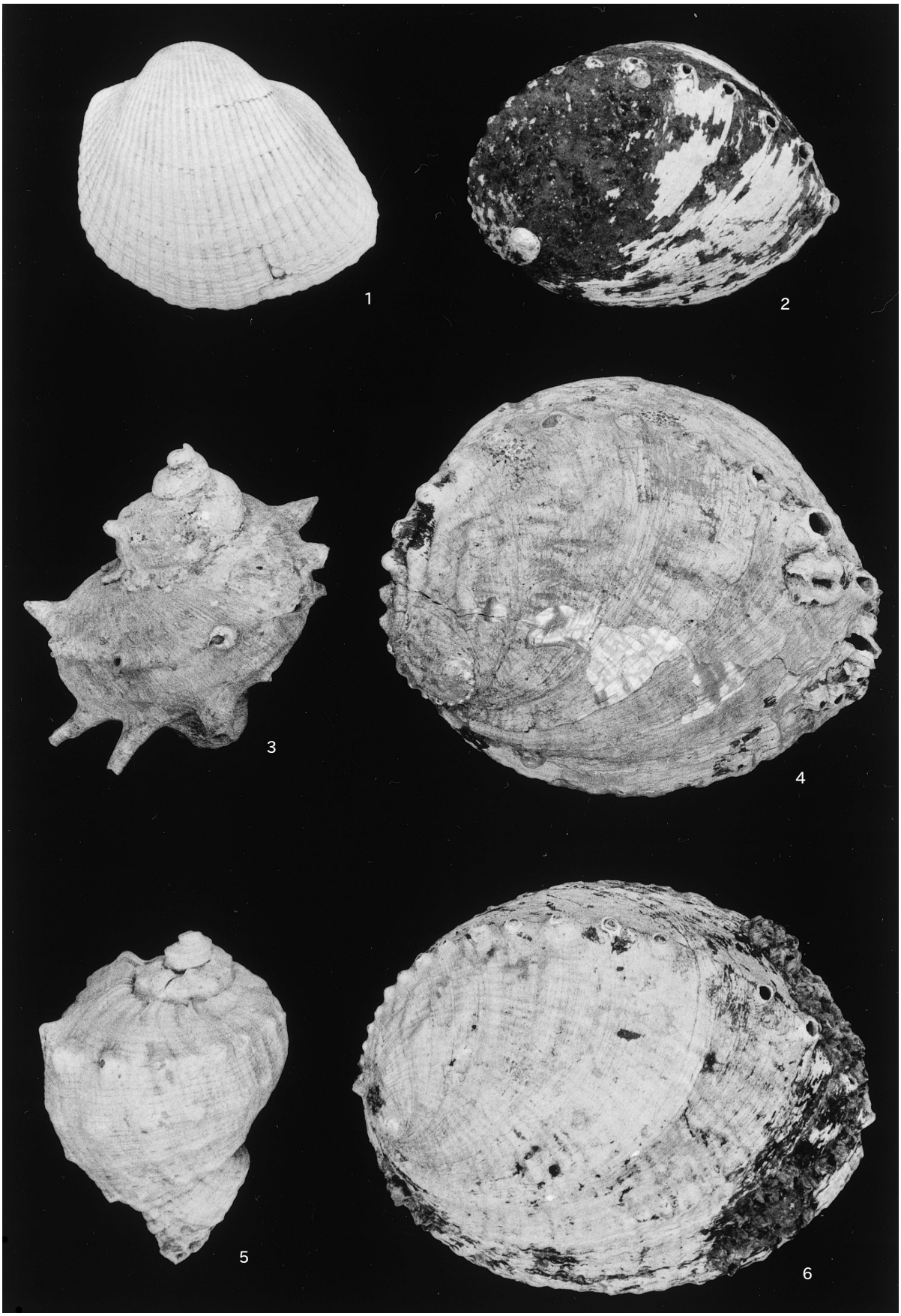
註　表4･5参照。M1長さの単位はmm。

8表　イヌ下顎骨（表7以外）･遊離歯出土内容

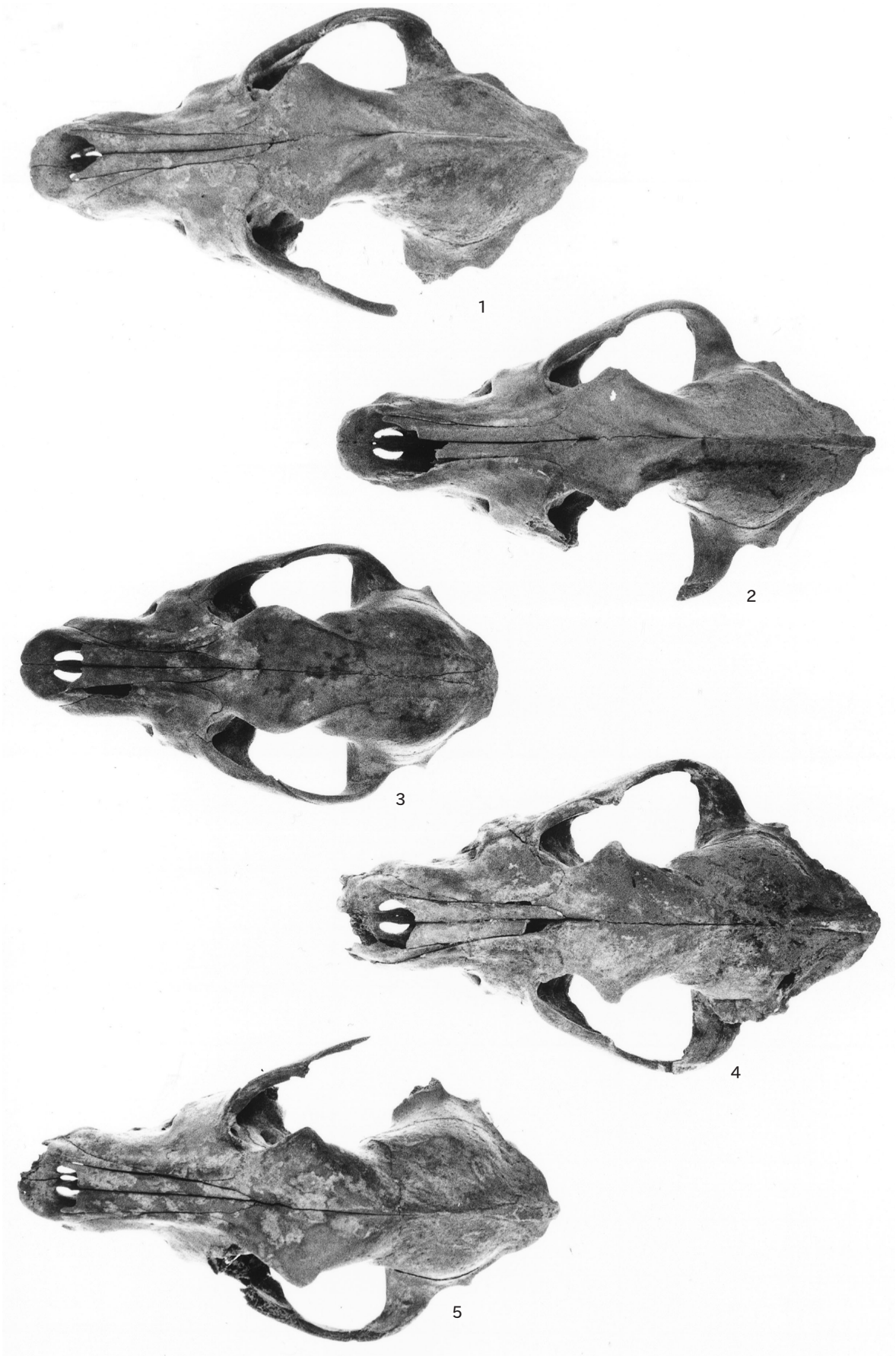
種	出土内容
ネ　コ	上腕骨左1若、右1若、尺骨左1、寛骨左1、右1、大腿骨左上1若、脛骨右1若、下1、中間1、中手･中足骨2、下1
イノシシ類	寛骨左1
ウシorウマ	肋骨破片1
種　不　明	角芯＋頭蓋骨破片1
陸　　獣	破片464
不　　明	破片7
計	486

註　表3･4参照。

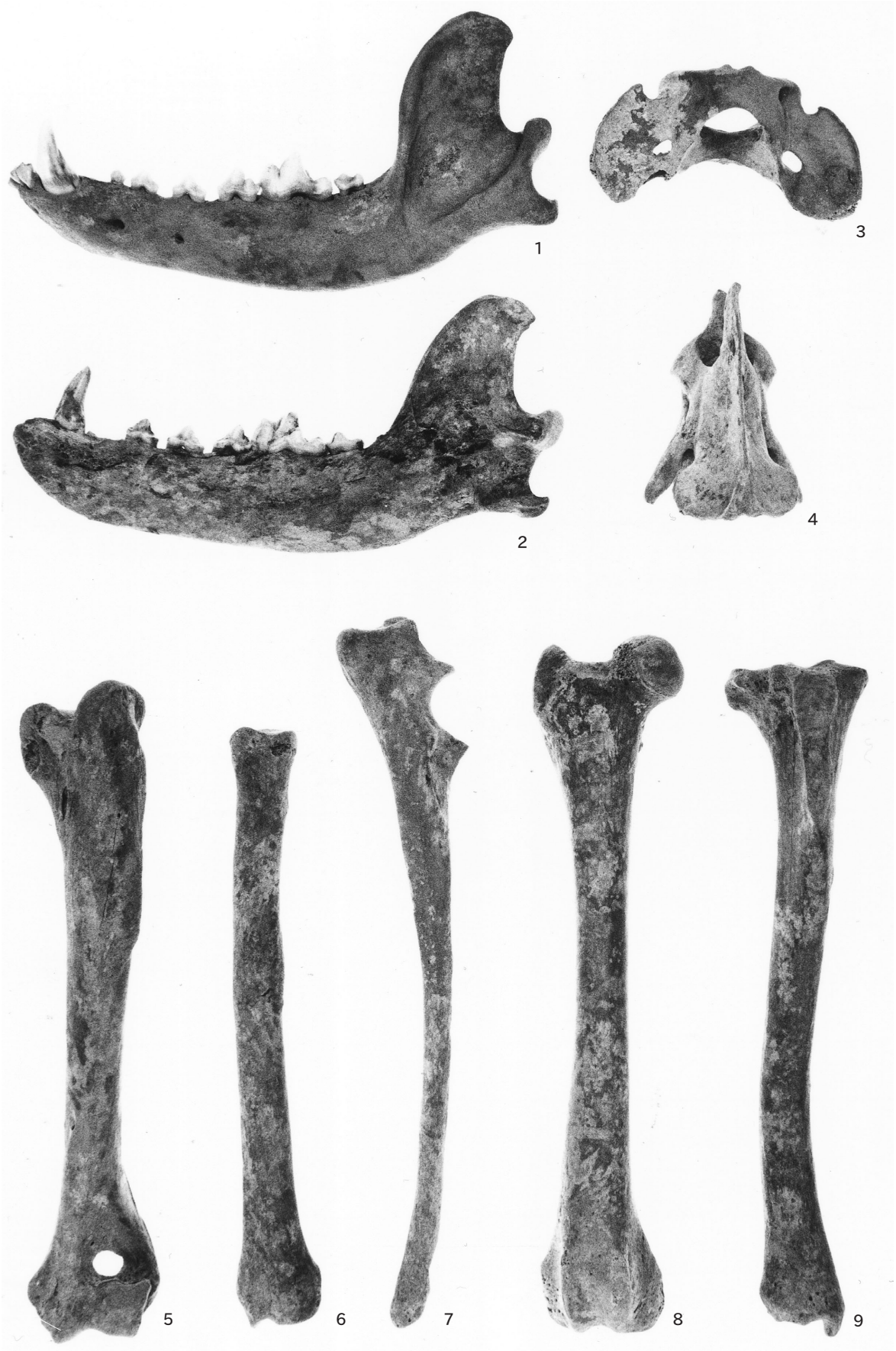
10表　その他の哺乳類出土内容



１図　動物遺体（1）　貝類（約1／2）
1．アカガイ（左殻）　2．クロアワビ　3．サザエ　4．マダカアワビ　5．アカニシ　6．メガイアワビ



2図　動物遺体（2）　イヌ１（約1／2）
1．頭蓋骨No.1　2．頭蓋骨No.2　3．頭蓋骨No.4　4．頭蓋骨No.3　5．頭蓋骨No.5



３図　動物遺体（3）　イヌ２（約2／3）
1．下顎骨No.1　2．下顎骨No.3　3．環椎　4．軸椎　5．上腕骨　6．橈骨　7．尺骨　8．大腿骨　9．頸骨
1･5･6は左側、2･7～9は右側

調査報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき　こうがくぶ 1 ごうかんちてんはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	東京大学本郷構内の遺跡　工学部 1 号館地点発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書
シリーズ番号	6
編集者名	安芸毬子　大貫浩子(編)　香取祐一　寺島孝一　原　祐一　堀内秀樹(編)　新美倫子
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所 在 地	〒 153-8904　東京都目黒区駒場 4 丁目 6 番 1 号　駒場リサーチキャンパス内
発行年月日	2005 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東京大学本郷構内の遺跡（本郷台遺跡群）工学部 1 号館地点	東京都文京区本郷 7-3-1	13105	47	35° 42′ 41″	139° 45′ 47″	1993 年 12月16日 ～ 1994 年 2月 10 日	616	東京大学工学部 1 号館改修工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東京大学本郷構内の遺跡（本郷台遺跡群）工学部 1 号館地点	武家屋敷（加賀藩）	近世	土坑、ピット	陶磁器、土器、金属製品、石製品	加賀藩上屋敷跡における 19 世紀前葉の大型廃棄土坑の調査

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 6

東京大学本郷構内の遺跡

工学部 1 号館地点

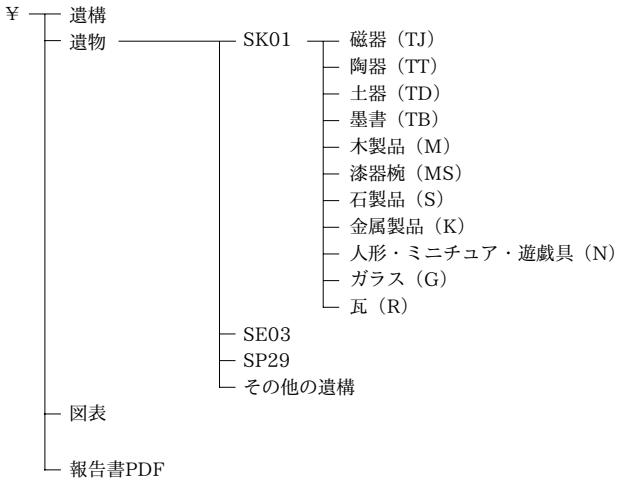
2005 年 3 月 31 日発行

編集・発行　東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4-6-1
印　　刷　株式会社セビアス
福島県いわき市平字作町 1-3-11

工学部１号館地点発掘調査報告書　付属CD-ROM　収録内容

１．本CD-ROMには工学部１号館地点の遺構、遺物写真データと図表データが収録されている。

２．写真データはJPEG形式、図表データはxls形式で収録されている。遺構写真データ、一部の遺物参考資料、陶磁器観察表などは報告編に掲載されていないものも含まれているので参考にされたい。

３．遺構写真ファイルの名称は、遺跡名＿遺構名（例：FE1_0001）、遺物写真ファイルの名称は、遺跡名_遺構名_胎質コード_実測図番号（例：FE1_0001_TJ_001）とした。

４．収録されているファイルのディレクトリー構造は以下の通りである。